
変な星で仮にツッコミ生活！？第二期編

神離人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変な星で仮にツツコミ生活！？第二期編

【Nコード】

N5309G

【作者名】

神離人

【あらすじ】

特星という変な星に住む主人公である悟が、問題事に巻き込まれるファンタジックコメディ風の小説です！変な星で仮にツツコミ生活！？の続編です！（第二期から楽しむ事も可能です）

○話 ゆっくり出来るのは最初だけ？

@悟視点@

どうも読者の皆さん。俺の名前は、雷之悟^{らいの げん}。誰もが認める主人公だ！アニメや漫画では、カメラマンやコマとかにツツコミをする場合があるが、出版してる小説では、結構少ないよな。だから主人公が俺みたいな出版小説は、全然見かけないぞ。

……よし、本題に入るか。俺は特星と言う変な星で生活しているんだ。こういう星かは、後に説明するがとにかく広い星だ。

俺は、特星のある都市に住んでたんだが、高校が納得できないような経済理由で廃校になったから引越したんだ。ちなみに俺は、高校二年生だからな。だからこれは、俺の引越し後の生活を描いた物語であつたりする。

先に注意しておく事は…この星では、モンスターや特殊能力や不老不死というファンタジックな内容が全開で含まれるので、完全な地球での日常的な生活を見たい方は、絶対に無理なのでご注意下さい。とりあえず今は、腹が減ったので朝飯にしよう。

「って、食材が見事に無いな」

冷蔵庫の中にあるのは、調味料とジュースのみ。これじゃあ朝食を作れないじゃないか。ついでに俺は、一般人が美味しく食べれる程度の料理なら作れるぞ。

「今日は、高校が休みだから、適当に食材でも買いに行くか」

ちなみに前の学校でもそうだったが、高校の休みの日は、校長の気分で決まるので普通よりも多い。夏休みが正月まで続いた事もあるからな。この星の殆どの学校は、杉野 すぎの まさやす 正安と言う人が校長をしている。三十代前半だけど校長に向かない性格で、前の高校で二番目に問題を起こす人だったぞ。今は、副都市と呼ばれる場所の高校に居るらしい。

「さて、それじゃあ出かけるか」

ちなみに俺の住んでところは、二階建ての普通の家に一人暮らしだ。寮も借りれたんだが、結構古くて狭いので諦めたんだ。家を買ったおかげで貯金が少ないけどな。

くスーパーく

途中に特星エリアを通過してスーパーに到着。道中は、春を示す桜が大量に咲いてたな。

特星エリアってのは、森や草原などがある場所でモンスターが出るのであまり人が居ないところだ。逆に俺達が居るようなところは、現代エリアって言われている。

面積は特星エリアの方が圧倒的に多いが、都市開発で少おくしずつ現代エリアが拡大している。

あと、モンスターに襲われてもこの星には、不老不死ベールによって包まれているので死ぬ事もないし怪我をする事も無い。ただし、常識外の攻撃だと貫通したりするけどな！

不老不死ベールは、俺が前に住んでた都市に有る不老不死の宝石の効果で作られている。

それにこの星の住人は、一人につき一種類の特殊能力という不思議な力が使えるんだ。特殊能力は、特星内に入ると何故か使えるようになってる。だから能力に自分の武器を合わせることが多い。俺が最近知った事は、炎や光や霊や時間や磁力を操れる特殊能力は、質系とよばれているらしい。他には、有利不利や危険安全や空間などを操る特殊能力を非質系、能力を上げたりなどは、助質系と呼ぶらしいな。非質系の特殊能力者は、普通よりも強くて人数が少ないぞ。ちなみに俺の能力は、魔法弾を作り出す能力で質系に分類されるんだ！

この星では、勇者や魔王や聖王や神様などが存在するが、あくまで職業として存在するだけである。だから、普通の人でも勇者などになれるぞ！ただし人数制限があって、勇者と魔王と聖王は、一人だけで神様だけは何人かが転職できるはずだ。

こういった職業は、年に一回だけ当選されるが同じ人が続けてなる場合が多い。

おっ、半額の刺身。しかも結構な量が入ってるな。

「ラッキーっと」

他にも割引き品の野菜と肉が欲しいな。

「あつ、悟だ」

「何だ、魅異か」

こいつは、神離魅異しんりみいと言う名の非科学的偽装生物だ。本人曰く普通の人間らしいが、コイツが普通なら宇宙がいくつあっても足りないから！

俺の幼馴染で特星が出来る前からの知り合いで、ある意味チート。認めたくないが確実に第一ヒロインである。星を作り出したりもする。

：正直な話、出来ない事がないと思う。でも常に全力を出さない主義で、勝負の勝敗も気にしないので、真剣勝負を絶対にしない。

勇者という名の職業をしていて、勇者社という特星一の大企業の社長でもある。

得意武器は、槍と素手で、神離槍という壊れない竹槍がお気に入り。だが槍以外にも当然扱える。でも武器を使うより素手の方が、威力が高いと思うぞ。

あと、本当の魅異の引越し先は副都市だったんだ。だが嫌がらせで、俺と同じ高校に引越して来たんだぞ！副都市には、分身した魅異が住んでるけどな。記憶も思考も共通らしい。

他にも魅異の事で説明不足な点があるが、時間の都合上省略する。

「で、どうしたんだ？」

「引越してから少し経つけど、此処での生活に慣れた」？

「ああ：というか、前とあまり変わらないんだよなあ」

「まあ、その内に何か起こるよ」

「それは、勘弁してほしいな…」

厄介ごとはゴメンだぜ。あつ、茶葉も無かったつけ。

「そういえば最近、特星での遠距離勝負が流行ってるらしいね」

「えっ、そうなのか？」

特星では、不老不死という特長をいかして、そこら辺で勝負を行っても良い事になってる。とは言っても、普段から勝負するほど暇な奴なんて居ないけどな。

ちなみに俺は、銃が得意武器だから遠距離勝負が流行れば、有利な勝負が出来るぞ。

「遠距離戦に自信があるなら、私が相手でもしてあげようか？」

「絶対に却下だ」

まず勝てないからな。

「そうそう、少し前に面白い世界を作ったんだけど、今度遊びに来る？」

「面白い世界？星じゃなくて？」

「そうだよ」

魅異は、過去に新しい星を作った事があるんだが、今度は新世界を作ったらしい。だから俺達の居る世界とは、別の世界が新しく増えたというわけだ。

「一つ聞きたいんだがお前に出来ない事ってあるのか？」

「この小説の漫画化やアニメ化は、私の能力でも不可能だね」

ですよねー。でも小説内であれば限界が無いかもしれない！

「新しい世界に行きたくなったら呼んでね。高校は、まだまだ休みが続くみたいだからね」

言いたい事を言っただけで何処かへ行ったな。

「新世界ねえ…まっ、気が向いたら行く事にするか。」

「あれ、そんなに遅くからで良いんですか？魅異さんに嫌われちゃいますよー。」

「…魍魎！？」

何処からか聞こえるこの声の主は、風上魍魎^{かざかみ ちみ}。俺のクラスメートで恐らく第二ヒロインである。非常に行動的で、とにかく速い。

非質系の特殊能力の使い手で善と悪を操る能力を使える。善と悪と言っても効果が微妙にずれており、相手が必ず善人や悪人になるわけではない。ちなみに魍魎は、悪状態になる事があり、悪状態になると性格が変化して戦闘能力が非常に強くなる。そこら辺の特殊部隊や能力者程度では、悪魍魎に敵う事はないだろう。

ちなみに魍魎には、転校してから数日で告白されたりする俺だ。も

しかして結構俺って人気者なのか？まあ、丁寧にお断りしたけどさ。

「新しい世界：面白そうな響きがするじゃないですか！早速二人で行きましょう！」

「とりあえず買い物優先だ」

「私との友情と買い物のどっちが大事なんですか！」

「買い物だ！」

とは言っても、もう値下げ品はないな。

「やっぱり、お前との友情だ」

「流石は悟さん。私の使い道の良さによくお気づきになられましたね！」

「使い道って自分で言うか？まあ、そこに気付いたわけじゃないけどな」

「照れなくても良いんです。自分に素直になってください」

一つ言わせてもらおうと、話を聞け。

「ところで荷物持ちとか出来るか？」

「はいっ！炭酸飲料があれば揺らさずに、卵があれば割らずに、何処でも即行でお届けいたします！悟さん専属で」

確かに使い道が良いな。

「じゃあ、会計が済んだら俺の家まで運んでくれ」

「いえ、会計も私が行きます。それではまた会いましょう！」

買おうと思ってたものを全部持っていく魑魅。

「流石に速いな」

噂では、残像が見える速度で走れるらしい。

「つか、鍵と代金を渡してないんだが……」

家を壊して侵入したなら、伝統深きハエ叩きで叩いてやろう。

「んっ？」

「いやあ、今日の収穫も大量ね」

ありゃ、この店で堂々と盗みをする奴とは珍しいな。

この星で盗みは、正式に許されているんだ。もちろん店員や周りの人が攻撃して取り返す場合も多いが。要するに、やられる覚悟があるなら、盗んでも良しと言う事に最近なったんだ。だが、店側が強力な特殊能力者を雇ってる場合が多いから、盗みをする奴は少ない。アイツは、かなりの実力者か情報不足のアホのどっちだ？

あれだけ堂々としていれば隠れても手遅れだろうし、大量の品を持つてるから逃げるのも無理だろう。やっぱり勝負が強いかアホかのどっちかな。

とりあえず止めてやるか。

「あー、その人」

「あつ、私の事？」

「そう。もしかして泥棒か？」

「もちろん！それ以外に何に見えるの？」

やっぱり泥棒でした。

「此処の店は、勇者社の経営店の内の一つだから、止めといった方がいいぞ」

勇者社は、魅異の経営する大会社だ。地球より大きいこの星のほとんどの大型店は、勇者社の経営している店なんだ。勇者社の経営する全ての店が、人材に優れているから盗みなど不可能なはずだ。でもまあ、主に優れているのは、魅異自身と一部の親しい者だけだな。俺も優れている者の内の一人である…と思う。

「別に大丈夫よ！普通の特異能力者程度なら倒せるから」

「基準が分からないが」

「一部を除くけど質系なら大丈夫よ」

「もしかしてアンタ、非質系か！？」

「あつ、ばれた？自慢じゃないけどそうなのよ。羨ましいでしょ！」
凄く羨ましい！今のところは、魑魅以外の非質系の特殊能力者を見たのは初めてだ。

「って、時間がないわ！じゃあまたね！」

そういつて急いで出口へ向かう泥棒。武装した店員を盗んだ物で倒してるし。

「結局は誰だったんだ？」

非質系の能力者は珍しいから、名前を聞いておくべきだった！

「まっ、気にするほどでもないな。それじゃあ帰るか」

〳家〵

「それで帰ってきたわけだが、何で家の中に居るんだ？」

「だって、悟さんから家に届けろと言われましたし」

家の中には、魑魅が昼食を作っていました。

俺が聞いているのは、理由じゃなくて侵入方法だ。

「その顔は、侵入方法を知りたいんですね！」

「何故分かった！？」

「何年仮で彼女をやっているとってるんですか？この位は、お見通しですよ」

「まだ会って数週間だ」

早く結論を言ってくれ。

「方法ですが、普通にドアから入りました」

「鍵は？」

まさか、閉め忘れてたか！？

「この家の鍵なら持ってますよ。壊したりはしてないので安心してください！」

「安心出来るか！」

慣れてるけど、人の家に不法侵入する時点で問題ありだ。

「特星だから仕方ありませんって！」

「まあ：特星だから仕方ないな」

そういえば特星内で問題が起きた時の言い訳では、特星だから仕方ないと言う人が多いらしい。これで納得する人も多いからな。

「あ、飲みかけのお茶でもどうですか？」

「飲みかけじゃないお茶をくれ」

「それなら、悟さんが飲んだ後にそのお茶を、飲みかけの状態で私に下さい！」

「絶対に却下！」

まあ、これが普通じゃないような普段の風景。だが、この先で様々な問題に巻き込まれるとは、今の俺には気付く才能も無かった。

いや冗談だ。この先で絶対に何か起ると予測しよう！そして気付く才能くらいは有る！ってか、普通の日常が続いたら逆に異常事態だ。とにかく、いろいろな事件に巻き込まれる覚悟をしておく事しよう。

というか、そういうこと分かる時点で人生が嫌になってきた。

もうやだこの物語。

一話 変態の代表

@悟視点@

ジメジメとした梅雨の季節。今日の天気は、梅雨らしき拔群の雨だ。ちなみにこれで一週間くらい連続で雨が続いた事になる。

「まったく、こう雨ばかりだと嫌になりますよね」

「その雨の日に、濡れてまで来るな」

「だって、こういう日しか、お風呂を貸してくれないじゃないですかぁー」

「何で風呂を借りる必要があるのか問い詰めたいんだが」

「どんどん問い詰めてください！」

「却下！」

まあ、風呂に入るついでに風呂掃除をしてくれるけどな。

「つてか、家に風呂くらい無いのか？」

「ありますよ！…あつ、今度入りに来ますか？」

「え…あー、断る！」

「一瞬だけ迷いませんでしたか？」

「気のせいだ！」

油断してたから一瞬動揺してしまった！こんな事じゃあ何処かの変態と同類じゃないか！まあ、遊びに行くだけなら行きたいかな。

「ピンポーン、ピピピピピンポーン」

「誰か来たみたいですわね」

「誰だ？」

「ってか、連打するなんて礼儀のなってない客だな。」

「今出ますよー」

こんな雨の日に来るなんて誰だ？

「誰ですか…って、あ！」

「あれ、誰の家かと思えば、宿敵の悟さんではありませんか！」

コイツは、特星一のロリコン男の雑魚ベー。本名は何とかサイドシヨットらしいが忘れた。何故か俺を宿敵扱いして勝負を挑んでくるが、ほとんど自滅する。

小学生以下の少女が大好きで、見つけては飛び掛って抱きついていてる。その度に凍えるような罰を受けていたりするが、喜んで受けるので逆効果だ。

特殊能力はやられる度に強くなる能力で、助質系だ。このように助質系は、能力補助の効果のものがほとんどである。

コイツについて説明不足なところは多いが、変態であるのは確かだ。

「で、何のようだ？」

「はっ、そうでした！アミュリーさんと雨双さんが、雨に濡れたので雨宿りをさせてもらいますよおっ！」

「邪魔するぞ」

「お邪魔するんだってば！」

この二人は、雨双とアミュリーといって雑魚ベーの…保護者だな。二人とも小学生だから雑魚ベーが保護者に見えるかもしれないが、雑魚ベーの保護者だ。何故なら雑魚ベーは、常に近くにこの二人が居ないと他の女子小学生などに抱きつきに行くからだ。とは言っても、この二人が居ても大して変わらないけどな。

アミュリーは、五重人格で人格によって瞳の色と口癖と知力と特殊能力が変わるんだ。今の状態は、一番基本の状態で尾語に『だってば』（疑問系の場合『だっけ？』）がつく。神様の職業をやっている、特星の重要会議に参加してる偉い奴だ。ただし、保育園児並に頭が悪い。

今のアミュリーは、一番基本の状態で磁力を操る能力と、一定の衣装を着ることにより様々な技を使える能力だ。ちなみに後者の技は、神様になって習得した技である。

雨双は、魅異の弟子の内の一人でもとも。これといった特徴が無いが雑魚ベーに対しては結構厳しく、よく注意や説教をしたり罰を与えている。基本的に呼び捨てで相手を呼ぶが魅異に対しては、さん付けをする事もある。そして結構頭が良かったりする。

冷静な性格…に見えるが、実際は冷静でもなんでもない。氷を操る能力が使える。ちなみに特星で二番目くらいの強さを持つ兄が居る。

「魑魅、タオルを三つ取ってくれ」

「分かりました！」

「三つも借りるわけにはいきませんねえ。一つで良いですよっ！」

「あ、分かりました！」

雑魚ベーの注文に答えて一つだけ持ってくる魑魅。恐らくアミュリ
ーと雨双に使わせた後に使うつもりなのだろう。

「レディファーストでお先にどうぞおっ！」

やっぱりか！

「お前にしては珍しい心遣いだな」

「ありがとうだってば」

二人とも気付いてないし！………意外に信用されてるんだな。

「さて、遂に私の番ですねえ！輝くこの二人が使ったタオルを私が
使う時が遂に来ましたよおっ！アハハハハハハハハハ！！」

「やっぱりそういう事か。特技、アイススイート！」

「ズガガガガガアッ!!」

「うはあぁん！」

雨双の巨大な冷凍光線で雑魚ベーは、見事に完全凍結した。あーあ、言葉に出さなければ普通にタオルを使えてたのに。

「ひええー、さっきの技のせいで室内気温が、一気に数十度下がりましたよ！」

魍魎の言ってるように室内が一気に寒くなった。

「全力のアイススイートだったからな」

「寒いんだってば…」

「そうだ悟さん！二人で抱き合って体を温めましょう！心も体も温まりますよ！」

「寒いけど却下！」

凄く賛成だったが却下してしまった。だって…少女に抱きついた場合の雑魚ベーと、魍魎に抱きつかれた場合の俺が重なって見える気がするから！

「うう……非常に残念ですが、仕方ありませんねえ」

俺も非常に残念だ。

「ところで何でこの町に居るんだ？」

この場所は、雑魚ベー達の住んでる瞑宰京から船で数時間かかる所だ。

「神社を作りに行くんだってば」

「神社？」

「アミユリーの神社を雑魚ベーが作ってるんだ。ある島の幽霊の住む寺の近くの土地を譲ってもらってからは、毎週雑魚ベーが建設に向かってるんだ」

幽霊が出る寺の近く…よくそんな所に作る気になったな。

「幽霊の出る寺の近くの神社ですか！悟さん、今度一緒に行きましよう！」

「何処でも行きたがるなあ」

まあ、暇があれば行きたい。

「そういえば今頃だけど、その人は誰なんだ？」

「そういえば知らない人だってば！」

「そういう貴方達こそ誰です！？私の悟さんの仲間ですか？」

あ、お互いに紹介をしてないのか。

〽三十分後〽

とりあえずお互いに自己紹介が完了。自己紹介だけで三十分も過ぎてしまった！

「要するに変態集団ですね！」

「変態は、その奴だけだ」

魑魅の意見に雨双は、凍り付いてる雑魚べーを指差す。確かにそいつだけだ。

「ところで何か起こらないんだっけ？」

「どういう意味だ、アミューリー」

俺の居るところに問題ありとでも言いたいのか？言っとくが俺は、できる限り問題を避けるようにしてるから何かが起こる事なんか無いぞ！毎日問題に巻き込まれてたまるか！

「とりあえず寒いから氷を溶かせ！」

「それなら良い方法がある」

雨双がそう言って凍った雑魚べーの前に行き、紙のような物を見せ付ける。

「シュウウウウ」

って、氷が溶け始めたぞ！

「一体何を見せたんだ！？」

「ああ、夏の水泳大会の時に取った写真だ」

確かに雑魚ベーには、それが一番効果的だな。

「恐るべき少女の力ですね」

「まったくだ」

魑魅の意見に同意する。

「ズゴオオオオオオオオオオオン！！！！」

「なんだあ！？」

急な爆発音のような音に皆が驚く。って、雑魚ベーの姿が見当たらないんですけど。

「あれ、何で皆さんは、そんなに小さいんですかねえ？」

「この声は、雑魚ベーか！一体何処に居るんだ！？」

「上を見れば分かりますよおっ！」

「上？」

少し上を見上げると、やけに大きな雑魚ベーの姿が。

「って、何故こんな展開になってるんだ!？」

「さあ？ 私に聞かれましたもねえ」

雑魚ベーの大きさは、家一つ分くらいの大きさだ。そして服は破れたらしく、上半身が裸である。

「というか、家の半分くらいが壊れたじゃないかコラ！」

「気の毒ですねえ」

「お前のせいだろ！」

まあ、次の話になったら復活するけどさ。

「ふう、酷い目に合ったな」

「助けてだってばあー」

「ふええ…」

雨双は、何とか瓦礫の中から出てくる。アミユリーは、大量の布団に潰されていて、魑魅は、無事なようだが気絶中である。

「雨双、あのアホは、何で巨大化したんだ？」

「少女の写真を見せた事で、細胞が活性化して突然異変を起こした

みたいだ」

「突然異変でもあの大きさは、普通ではありえないだろ」

「特星だから仕方ないだろ？」

「あー、確かに特星だから仕方ないな」

特星では、何が起こつても不思議じゃないからな。

「そうだ、この大きさなら夢の少女王国を作れそうですねえ！そうしたら私が、女の子と一生過ごす事も夢ではありませんよおっ！！」
なんか馬鹿な独り言を言い始めたぞ。

「どうすれば元の大きさに戻せると思う？」

「私もこんな状態にしたのは、初めてだから分からないな」

「全ての少女は、私の物になりますよおっ！」

早く止めた方がよさそうだけどな。

「その前に宿敵である悟さん！貴方との決着をつけておきますよおっ！」

「ええっ！？俺と勝負するのかよ！」

「そうか。じゃ、任せたぞ」

雨双にも見捨てられた!どうやってあの巨大な変態に勝てと?とりあえず時間稼ぎをしないと。

「今頃だが何でズボンは、破れてないんだ?」

「どういう事ですか?」

「服が破れたんだから、ズボンやパンツも破れるだろ」

案外不思議だったりする事実だ。

「ああ、パンツなら破れましたよおっ!」

「パンツだけ破れたのかよ!?」

何でズボンは、破れてないんだ!?いや、破れても困るけどさあ。

「ズボンは、どうして破れないんでしょうねえ?まあ、特星ですから仕方ないと思いますよおっ!」

「確かに特星だから仕方ないな」

小説の都合上、ズボンが破れませんでした……って事だな。

「それでは、覚悟してくださいよおっ!必殺、ジャンピングキイイック!」

「ドガアアアアアン!!」

ジャンピングキックは、家の二階くらいまでジャンプして、回転し

ながら蹴ってくる技だ。

大きいから威力も高いし！って、いつの間にか雨双やアミューリーや魑魅が居ないし！

「ハッハッハッハ！これが私の実力ですよっ！」

「地面に突っ込んで抜けないように見えるが」

「…またこのパターンですかああ！？」

「運と状況は、俺の方が有利になったな！」

暝宰京に居た頃も同じような感じに自滅してたからな。というか、学習能力が無いんじゃないか？頭の中が妄想だけで埋まってる可能性がある。

「さて、どうやって元に戻せば良いんだか」

「それならお前のポケ役を出したらどうだ？」

って、いつの間にか雨双だけ居るし。

ちなみにポケ役というのは、俺の中…とは少し違う場所に居る別の俺だ。俺と同一人物という噂があるが記憶や性格が違う。だから俺の姿をした別人が乗り移ってると考えてる。ってか、俺とポケ役が同一人物なんて認めるか！

魅異に好意を抱いてるようだが、思考が狂ってるとしか思えない。俺よりも丈夫で強いが、強い相手に挑んで負けることが多い。

特殊能力が不明でどんな武器でもバランスよく使える。普通じゃ出

来ないような攻撃方法が使えるが、威力が強いとは限らない。

「いつの間に戻ったんだ？　というか、残りの二人は？」

「氷で町の外に吹き飛ばしたから大丈夫だと思う」

「ちなみにポケ役は、しばらく登場してないから居ないと思うぞ」

気紛れで登場したりするからなあ。

「なら誰でも出来る最終手段を教えてやろう」

「それを先に言うべきだろ！」

というか、誰でも出来るなら雨双が実行しろよ！

「疲れさせれば小さくなる」

「理論を説明してみろ」

「…じゃ、私は避難するから」

「おおい!？」

理論なしの勘ですか！　まあ、大きくなった理論もない訳だが。

「どうやら元の大きさに戻そうとしてるようですが、そういう訳にはいきません！　こうなったら、こういう時の為の緊急兵器を使いますよおっ！」

「そんなの有るのかよ!？」

「ええ、そうです! 超巨大戦闘機、少女愛の哲学号の発進ですよっ!」

「……………俺が驚いたりアクションのまま固まるが、何も起こらない。」

「おい、表情を固定するのが疲れるんだが」

「あれ? おかしいですねえ」

「ってか、声で登場する仕組みなのか?」

「あっ、リモコン操作でした」

作っというて使い方を忘れたのか。

「って、リモコンは、ズボンのポケットに入れっぱなしですよおっ!」

「上半身近くまで埋まってるから出せないだろ」

せっかく真剣な場面の表情をしたのに損した!

「さて、そろそろ終わりにするか」

相手が大きいので俺は、巨大大砲で狙いを定める。何処から出したかの疑問を気にしたら、世界の神秘が崩れるので気にしないように。

「つて、何処から出したんですかぁ!？」

「だから気にするなって!」

「ドゴオオオオン!!」

「あばばおぼおっ!」

台詞を叫ばずに吹き飛んでいく雑魚ベー。吹き飛ぶ時の常識を知らない奴め!

【そのの悟さん!これで終わったと思ったら間違いですよおっ!!】

遠くから雑魚ベーの声がしたな。声の聞こえた方を見ると…錆の塊が浮いていた。

【これこそが私の緊急兵器、少女愛の哲学一号ですよおっ!ちなみに二号や三号などの続編もありますからねえ!】

「吹き飛ばしてから戻るまでの時間が早くないか?」

【吹き飛んでる途中に呼び寄せて、見事に空中で乗り込みましたからねえ」

巨大化した雑魚ベーを乗せるほどの超巨大兵器か。兵器の中でも武器系じゃなく乗り物系で、空中移動が出来るみたいだな。

「それにしても何でそんなに錆びてるんだ?」

【置いておく場所が無かったので海中に沈めておいたら、錆だらけ

になってたんですよっ!」

そりゃそうだ。ってか、沈めてたのによく動いたな。

【さあ、私の計画の第一歩として倒されて下さいねえ!】

「ドオン!ドオン!ドオン!」

三発のミサイルで攻撃か。威力が分からないから空中で爆破するか。大砲だと狙いにくいので、愛用の銃を取り出す。この銃は、俺の能力で作り出す魔法弾を撃てるショットガンみたいな銃だ。普段使う事が多い。

「風向きの問題は無いな。水圧圧縮砲!」

「ドドドゴオオオオオオオン!!」

水の塊を撃ち、ミサイルを空中で爆破する。水なのに爆破できる理由は、魔法弾だから。

ってか、ミサイルの威力高いな、オイ!建物数件の巻き添え程度じゃすまないぞ!

【ミサイルの値段は、高いんですから喰らって下さい!】

「高いなら買うなよ!ってか、威力高すぎるだろ!」

【地球のミサイルの方が威力は、数倍威力が高いですよっ!】

実戦用のミサイルと日常用のミサイルを同じにするな。まあ、日常用があるのもおかしい話だが。

【まだまだこれからですよっ！超熱い光を喰らいなさい！】

「キーン、ドゴオオッ！」

超巨大なビームを辺りに乱射してくる雑魚ベー。全体攻撃らしく、辺りの家や店などに直撃してるんだが。

「おおっと、危なっ！厄介な乗り物だな」

【ほちよちよちよちよおっ！】

「何語だよ！？」

【フッフッフ、私の実力を思い知りましたか！】

それはない。

「ちょっと調子に乗りすぎじゃないか？」

【そうかもしれませんねえ。しかし、私を倒す手段など無いでしょう？】

「甘いな雑魚ベー。まだ俺には、一つだけ方法が残ってるんだぜ」

【ま、まさか…あれを使う気ですか！？】

本当は一つ以上する方法があるが、展開的に一つと言っておく。とい

うか、雑魚ベーは方法を分かってないだろ。

「あれって何だ？」

【えっ、ほ、ほら、あれですよ…あれ！うーん…？】

やっぱり分かってないのか！

まあ、方法も決まっていけないけどな。どんな方法で倒そうか？

「よし、俺の使える最強の技で決めるか」

【あ、エクサバーストですねぇ！】

大正解！あ、エクサバーストというのは、俺の使える最強の技で、宇宙を消滅させる威力の技を圧縮した攻撃だ。だから威力が宇宙消滅級に高いが、圧縮されているので宇宙の消滅はない。この技を使える銃をエクサスターガンと言う。エクサスターガンの数は、世界に五個くらいしかないらしい。

【し、しかし私なんかはその技を使うなんてえ……】

「ああ、弾なら充電式だから大丈夫。エクサバースト」

「キーン！ドッゴオオオオン！！！！」

充電不足のせいで効果音に迫力がないが、威力は宇宙消滅級の様子だ。相手の乗り物が大きすぎて何処に当たったか分からないが、直撃はしただろう。

「ヒュウウ、ドガアアアアッ!!」

「あ、墜落した」

エンジン部分にでも直撃したんだな。まあ、俺の腕前は百発百中だからなあ。

「くっ…まさか少女愛の哲学一号が事故を起こすとはあ！安全面抜群のつもりだったんですけどねえ」

雑魚ベーが中から出てきた。

「事故じゃない。事件だ」

でも事件だったら俺が犯人？それはそれで納得できないな。

「墜落しましたが、ミサイルがまだ残ってますよおっ！しかもリモコンは私が持ってますからねえ」

って、要塞のミサイル発射砲が見事にこっちを向いてるし！

「喰らいなさあゝい！」

……………俺が驚いたりアクションのまま固まるが、何も起こらない。しかも二度目じゃないか？

「おい、同じネタを二度やっても面白くないぞ」

「間違えて自爆ボタンを押してしまっただけですよおっ！」

なんだ自爆ボタンを押したただけか。いやあ、たいしたミスじゃなくて良かった。

「……………って、良い訳あるかあ！」

ミサイルも困るけど自爆ボタンも困る！

【ピー、自爆してやるから面白い事を言え】

「……雑魚ベー、自爆はどうなったんだ？」

「確かAI機能が付いていて、面白い事を言えば爆発する筈ですよっ！」

無駄な機能だなあ。

「さて、どんな面白い事を言いますか？」

「そうだなあ……………って、爆発させてどうする！」

【ピー、一応合格】

一応！？

「バゴオオオオオオオオン！！」

「あのなあ、今の会話の何処に面白い要素があったんだよ！」

「全部だと思いますけどねえ」

「お前のギャグセンスが分からんわ！」

ちなみに爆発オチの常識とは違い、吹き飛んでないしアフロ頭でもない。……俺のギャグセンスがおかしい？ 気のせいだ気のせい。

「ふふふふ、やっと見つけました」

「げ…魑魅！」

何処からか現れたのは、他の誰でもなく魑魅…いや、兇悪な力の持ち主の悪魑魅だ。無駄だと思うけど一応警告しておくか。

「雑魚べー、悪い事は言わないから今日は諦めろ」

「そうはいきませんよおっ！ 貴方達が二人で向かってきた所で、巨大化した私に敵うはずがありませんからねえ！」

「あぁっ？ お前なんか私一人で十分ですよ？」

口調が敬語なのにお前とか言ってる所とか怖い。でも俺は悪魑魅って普段より性格が良い気がする。ワザと迷惑をかける事がないからな。

「ならば私の真の力を見せて…」

「悪技、不意潰し」

「ズゴオオオオオオオオン！！」

不意打ちの強化版のような技で、雑魚べーを空中から地面に向けて

殴る魑魅。半端じゃない威力で、巨大化した雑魚ベーが見えないくらいに地面に沈む。

「どうはあっ！殺す気ですか貴方は！」

おお、気絶せずに生きてた。

「何だ、まだ平気なんですか」

「あの程度の攻撃なら巨大化するまでもありませんねえ！」

後頭部に葉を塗りながら言っても、まったく説得力がないぞ。ってか、外傷より内部の骨折とかの方が多いだろ。

「まあ、雑魚相手によく使う速攻用ですから」

雑魚ベーは雑魚として見られている様子。まあ、名前的にも実際の実力でも雑魚だけどさ。

「私はそこまで弱くないですよっ！少女相手の場合以外は最強ですよっ！普段は手加減してるだけですからねえ！」

それはない。

「お前程度が強いんですか？なら私はお前達のレベルに比べたら、最強クラスじゃないですか。」

「だから私の方が強いですよっ！そうですよねえ？」

俺に聞くな。

「もういいや。悪魔、星となる悪役」

「キラーン」

いつの間にか雑魚ベーが吹き飛んでいった。

ちなみに魑魅の悪魔って言うのは、悪の魔法を略して悪魔と呼んでいるんだ。

「さて、帰りましょうか、悟？」

「そうだな」

俺の名前もさん付けじゃないな。

「オイ、今回の騒動で町が壊滅しましたよ」

「そうだな。まあ、次回には直るだろう」

アニメや漫画では定番だよな。

ちなみに別の町で巨人が発見されたらしい。上半身が裸でズボンを穿いていたが、パンツは穿いていなかったと、目撃者の数々が証言している。

もうやだあの状態。

二話 おやっと、事件発生

@悟視点@

今は何とかの秋とよく言う十月。今年の夏は何故か寒かった気がする。

まあ、過ぎた事はどうでも良い。

「それにしても絶対におかしい」

それより俺が気になるのは町の様子だ。最近町から近代的な物が無くなってる気がする。車やビルや日用品などがまったくない。しかも日が経つにつれて状況は悪化しているようだ。今日は道路が無くなって草だらけになってたし。

それに見て分かる変化なのに誰もこれが普通だと思っているらしい。

特星エリアが現代エリアを侵食してるとか？

「悟さん大変です！」

「ああ、魑魅か」

考え事で忙しいのに何の用だ？

「外の道路が無くなってるんです！」

「知ってるが」

「それどころか、少しくらい前から町からいろいろな物がなくなってます！」

「それも知ってる」

その位の事は気付いてる…って！

「何でそれが普通だと思ってないんだ！？」

「これが普通のはずないでしょう！」

それはそうだが…この事態に気付けるとは。

「私は悪い事件の影響は受けないんです」

そういえば善と悪を操る能力を持ってたな。

「悟さんはどうして影響を受けないんですか？」

「俺か？俺は主人公だからだな、多分」

これが主人公の力だ！

「とりあえず情報交換だ」

「分かりました」

「普通の墓場」

「本当に此処で良いのか？」

「ええ、間違いありません！此処の土の中から手が出てくるらしいですから、きつとその手が犯人です！」

ホラーな展開なんか望んでるわけじゃないんだ。だから手なんか出てくるな。ってか、犯人という根本的な理由が見つからん。

「秋に肝試しも新鮮ですね」

「腐った奴が出てこなければな」

「朝ですから大丈夫ですよ。あ、アレです！」

もう見つけたのおっ！？確かに手が出てるし。

「じゃ、掘り返しましょう」

「マジかよ……………」

「でもドリルがありませんね。スコップは当然ありませんし」

普通はドリルが無いのが当然じゃないか？

「ちょっとエクサスターガンで撃ってください」

「特星とはいえ、これで撃つたら貫通するから！」

「ならバスーカで」

「はいよ」

「ドガガアアアアアアアアアアン！」

バスーカで二発ほど撃ったら、見事に引っ張りやすいくらいに土が削れた。

「よいしょと！」

魑魅が埋まつてる奴を引っ張り出す。

「どうやら寝てるようだな」

「女の子ですか。犯人だったら雑魚ベーさんに送りつけましょう」

それはやめとけ。

「ふあああゝ騷がしいなあ」

「あ、起きましたね」

起こす手間が省けたな。

「アンタ達は誰だ？」

「泣く子も驚きの主人公だ！」

「泣く子も倒せるヒロインです！」

「いや………そういう事じゃなくて」

お前の言いたい事はよく分かるが、この自己紹介はしたかったんだ。

「俺は悟だ」

「私は魑魅です」

「私はレーレア、元幽霊で現在は人間だ」

「元幽霊ですか？」

元幽霊で現在は人間？変な奴だな。

「で、アンタ達は私に用でもあるのか？」

「その前に土に埋まって何してたんだ？」

「冬眠ですか？」

「魑魅、ちょっと黙れ」

「ああ、冬眠だ」

「そして冬眠かよ！」

冬眠って言っても秋だぞ今は！

「それにしても今年の春は涼しいな」

「秋だ！」

「何？ お前達が秋にしたのか！」

いやいや、何でそうなる？

「春は私の起床時間だ。返してもらうぞ！ 眠技、最後の休み！」

「しょうがないですね。善技、正しき事への導きです！」

「こうなったら強硬手段だな。水圧分裂砲！」

相手の出してくる技を魑魅が相殺して、動き回る相手を俺の全体的な攻撃で疲れさせる。

「冬眠、一時期の眠り！」

「水圧圧縮砲！」

相手が止まって技を使い始めたので、威力中心の水圧圧縮砲で攻撃する。魑魅の相殺で防ぎきれない分の技が時々飛んでくる。

「これで駄目なら…永眠、覚めない眠り！」

「って、危ないな！ 永遠の眠りなんかゴメンだ！」

「善術、選ばれた人の為の守りです!」

魑魅は自分だけを守る技を使って防ぐ。その魑魅を盾にして攻撃する俺。

「うああっ!」

「あ、気絶しましたね」

「話を聞こうかと思ったんだけどな」

これじゃあコイツが犯人か分からないな。

「外の景色が戻ってませんから恐らくハズレみたいです。眠りを操る能力みたいでしたし」

「そうか。じゃ、次に案内してくれ」

「はいはい! あ、雑魚ベーさんに教えておきますか」

く底なしの沼く

「到着しました! 底無しと有名な沼です! 古代の特星に住んでた魚が、一匹生き残ってるようです」

「で、底無し沼の何処に犯人がいるんだ?」

「沼の中です」

……もしかして犯人じゃなく犯魚？

「犯人は魚か？」

「魚とは失礼な……私には千華魚ちかうおという名前が有るのよ」

「それって名称ですよね」

「ってか、やっぱり魚じゃないのか？」

「女の子だけど人魚ではないみたいだし、半魚人っぽいな」

「千華魚って事は、十万歳くらいですね」

「その位ね。人間年齢では十歳だけど」

「寿命は何年だよ。ってか、特星は数十年前に出来たはずなんだが。」

「悟さん、新鮮な魚のようですから食べましょう」

「いや、雑魚べーに送りつけよう」

「此処で食べられる気はないわ。というか、他の仲間と同じ道を歩むものか！水技、渦巻く一万圧縮水！」

「相手を中心に回りに水が放たれる。」

「バギギギギッ!!」

って、水に当たった木が次々に倒れていくぞ!

「この水は水中一万メートルの水。当たればグチャよ!」

「ひええ! 善技、正義の雷!」

魑魅の電気が水を伝わり相手にダメージを与える。悪いが俺は今回避に集中する!

「水連、解き放つ十万圧縮波浪!」

波が来たので跳んで避ける。

「善技、連続跳びです! それと正技、クロスレーザーです!」

「設定完了。エクサショット!」

跳んで避けながら、十字のレーザーを撃つ魑魅。俺は走って避けながら、エクサスターガンの通常技で攻撃する。通常技だから威力はだいぶ落ちてるけどな。

でもエクサスターガンで使える技は、ほとんどが威力重視系だ。

「水連、引き寄せる十万圧縮波浪!」

「次は後ろからかよ!」

周りから相手に向かって波が寄せられる。

後ろを見ないと技を避けれないから、相手への攻撃が当てにくいんだが！魑魅は回避力が高いから大丈夫だろうけど。

「誘導弾だ！」

銃を変えて誘導弾を撃つ。これは俺の能力で作りに出してる弾だから、追尾弾に近いくらいの確率で相手に当たるんだ。

「水連、重なる五十万圧波浪！」

今度は挟み撃ちか！？

「奥義、正義の決め技です！」

魑魅の奥義が相手の技ごと相手に直撃する。とりあえず勝ったな。

「犯人じゃないみたいですし、食べましょうか？」

「絶滅種みたいだからやめとけ。あと、犯人じゃなくて犯魚な」

「でも、ほとんど人間ですよ？」

「そうだな。でも、この先こういう奴が多くなるだろうな」

（勇者社外部）

「おお、この町にも勇者社があるのか」

「悟さん、この町の名前を覚えてます？」

いきなりな質問だな。

「秋方しゅちらだろ？読み方が覚えにくいけど」

読者に紹介するのを忘れてたな。

「そうです。私は今回の問題が秋方以外で起こってるのか分かりません。しかし、秋方で起こってる事は分かります」

「そうだな」

「しかし、それだと目の前の勇者社の説明が出来なくなりませんか？」

「そうか？」

「そうなんですよ」

魑魅の言いたい事は分かる。ビルとかは消えた筈なのに勇者社のみがあるのは変だと言う事だな。

「つてことは、早くもクライマックスか？」

「ええ。恐らく」

今の状況だよ！こういうシリアスな展開を待ってたんだ俺は！

「ありがとう、魑魅！」

「えっ？ええっ！？」

嬉しさのあまりに魑魅に泣きながら抱きつく。悪気や変態的な心は無く、本当に嬉しさだけだ。生まれて初めてのシリアス展開だから良いんだよ！

でも、地球だったらこんな事出来ないな。読者の皆も誰かに抱きつくなんて出来ないだろ？それが出来る俺はやっぱり主人公だ！読者の前の皆も悔しかったら、実際にやってみるが良い！

………あ、言いすぎた。

「さ、悟さん？こ、此処…仮にも会社の前ですし……あの、後にしませんか？」

「あ、悪い。そして次は無い！」

抱きついてる間を無駄な思考で過ごした気がする。

（勇者社内部）

「誰も居ないな」

「誰も居ませんね」

勇者社の内部は人が誰も居ない。さっきのシーンを見られなくて良かった。

「誰か居ないんですかね？」

「居ますよ。目の前に侵入者が二名ほど」

あつ、几骨さんだ。この人は篠頼几骨ひさしらい きほねさんと言って、魅異の社長秘書をやってる人だ。働き者で各地の勇者社で仕事をしているらしい。特殊能力は相手の思考を読む事が出来る能力で、許可無しに思考を読む事も多い。本人曰く、読心術ではないらしい。

基本的には良い人で冷静で静かだが、悪口を言わせると右に出るものは少ない。というか、怒らせると思考を読んで脅してくる事もある。

二十歳で俺とよく会う女性の中で、今のところ最年長だ。結構な金持ちらしく自家用のヘリなどを持っていると聞いた事がある。

「おやつと、事件発生の事を知ってそうな几骨さんですね」

「何か用ですか？社長なら丁度社長室に居ますよ」

こういう時は社長室に居るのか。

「どうして勇者社は事件の影響を受けてないんだ？」

「社長の気分です」

やっぱりねー。そもそも、魅異なら特星全体への影響も防げるだろ。

「あと、何で社員が他に居ないんですか？」

魑魅、此処の会社だと夏のバカンスという可能性があるぞ。

「侵入者が困らない為です」

「それで良いのか!？」

「ええ。それに此処は墓に住んでる元人間や、底なしの沼に住んでる食材などの人が住めるようにする予定なんです」

「便利ですネー」

両方とも俺達が戦った相手じゃないか。

「まあ、それは置いといて…そろそろ私達を案内してもらいますよ
!」

「トイレなら此処から真っ直ぐ行って曲がった所です」

「そこに黒幕が居るんですね!では悟さん、先に向かっています!」

そう言ってトイレの方に向かう魑魅。

「トイレに用があるのか、本当に間違えてるのか、ワザとボケてるのか分からん。」

「恐らく、間違えてるのでしょう」

「って、トイレの場所を聞いたんじゃない!」

魑魅が即行で戻ってきて叫ぶ。ノリツツコミのつもりか? そうならツツコミのタイミングが遅いな。あ、でも涙目だ。

「もう許しません! 貴方も此処で成敗します!」

「それで良いのかなあ?」

「私は成敗されるつもりはありません。でも、勝負をするなら受けますよ」

「上等です! 善者の力を見せてあげますよ!」

「善者を装う悪人や一般人を偽善者と言いますが、善を勘違いして
る者で善者を名乗る人も偽善者と言うんですよ。思読、見通しの動
作」

「善魔、聖なる炎・輝炎です」

「本当に良いのか? 水圧圧縮砲!」

罪悪感を感じつつも攻撃する。

「無駄ですよ」

俺達の攻撃は軽々と避けられる。行動を読む技だな。

「そうですね、新しい技でも見せてあげましょう」

「というか、几骨さんと勝負する事自体が初めてだから、使う技全部が初めてだけだな」

「むむう……悟さん、どうして攻撃が当たらないのでしょうか？」

「行動が読まれてるからだ」

几骨さんって戦闘用の技とか使えるんだな。

「ワワ」

几骨さんがそう言うのと光のような矢が飛んでくる。

「おっと」

まあ、避けれたけどな。

「几骨さん……その技は？」

「雑魚ベーさんのカムを真似したら何故か出来ました」

俺の質問にそう答える。カムって言うのは、雑魚ベーの編み出したオリジナル技で高熱の気体の球を飛ばす技だ。確か大きさや形が変形可能と言ってたな。

「凄いです！私も使いたいです！」

「ってか、こういう原理で出せるんだアレ？」

あー、原理は知らないが俺の記憶が正しければ、あの方法で作りに出した技は大量に出す事も可能はず。

「連続、左右注意報」

変な名前だなあ。俺達から見て横側から大量の光の矢が飛んでくる。

「あれ、さっきもでしたが意外と遅いですね」

「あの技は一定の速さでしか飛ばないからな。小さいと少し速いらしいぞ」

とりあえず消すのは無理なので慎重に避ける。

「連続、前後の注意報」

あ、この次の技はどんな感じが分かる。さっきの技とこの技を合体させた技だな。

「おとと、危ないですね。悟さんは大丈夫ですか？」

「ああ」

「連合、前後左右の警報」

うん、大体予想通り。でも、どうにも出来ないのが事実なんだよ！しばらく避け続ける。

「あ、もう通って良いですよ」

「へ？」

どうして急に？

「遠距離技のネタ切れです。接近戦を含めてなら続けても良いですけど」

「なら、接近戦を含めて再戦です！」

「無駄な争いをしてる場合じゃないだろ。さあ、魅異のところへ向かうぞ」

「ふぁゝい」

（勇者社社長室前）

社長室は以外にも一階にあった。

「まったく、シリアス展開ぶち壊しですよ。ねえ、悟さん？」

「お前の発言も人の事言えないだろ」

さて、さっさと入るか。

「…って、鍵が掛かってる！」

「よく有りますよね、扉があるのに鍵が無くて探し回る経験。その度にゲームの主人公に扉を壊せと言いたくなりますよね」

「ああ、あるある」

ファンタジー世界の主人公が木製の扉一つ壊せないなんて、普通は有り得ないよな。

「あー、その人。もしかして扉の鍵が必要だったりする？」

「壊しますから要りませんよ」

「ええっ！じゃあ私の立場は！？」

「魑魅、話だけでも聞いてやれ」

「はい、分かりました」

魅異の作り出した壊れない扉の可能性があるからな。

「フフン、実は私が扉の鍵を持ってるの」

「体当たりでも破れませんね、普通の扉みたいなのに」

「エクサバーストでも無理じゃないのか？」

「無視するなー！」

無視してるわけじゃなくて、聞きながら破壊してるんだけどな。

「それで何ですか？」

「その扉を開ければ、この鍵を賭けて勝負よ！」

「うーん、開ける方法が一つもないなあ」

「どうでしょう？」

「二度も無視するなあー！」

お、何か面白い。

「と、とにかく鍵を賭けて勝負をすれば中に入れるの！」

「そんな方法があったんですか。…って、それを早く言って下さいよ！」

「さっきから言ってるよ！」

「言ってたか？」

「言ってたって！」

聴こえていたが、聞いてはいなかったな。

「ところで誰だ？」

「私は可美^{かみ} 夜沙^{やすな}。種族は元猫で、特殊能力は地を操る事だよ！」

「苗字と名前が逆じゃないですか？」

「逆じゃないよ！」

元幽霊と元非常食の魚と思考を読む人間の次は元猫か。

「ってか、猫の要素は何処に有るんだ？」

「え……ええっと、危険を察知してすぐ逃げる心！あと、爪が少し長めなんだよ！」

猫っぽいけど、人間率が高いな。

「猫耳とか尻尾は無いんですか？」

「本当は有るんだけど、今は出せないの」

「年齢は何歳だ？」

「八百数十歳で人間年齢で八歳くらい」

猫なのに人間より長生きなのか。

「猫さん、一つ覚えて置いてください」

「何を？」

「鍵を盗む泥棒猫は、とっ捕まえてペット屋に売りますから」

「にゃあぁっ！？地技、とんがり岩！」

針型の岩を大量に飛ばしてくる猫。

「水圧圧縮砲！」

「善技、正義の連続銭」

俺が岩を破壊して、魍魎が特星なのに日本円の小銭を投げつける。

「地技、地神の移動壁！」

棘付きの小さな壁が大量に迫ってくる。

「当たりませんよ、っと」

魍魎は素早い移動速度で全て避けていく。俺も水圧圧縮砲で壊せそうにないから、全てギリギリで避けていく。

「地念、土地の因縁」

相手を中心に床や瓦礫などが辺りに散乱して飛ばされる。

「こりゃあ、派手な技だな。ぐはあっ！」

これ避けるのは無理だろ！

「大丈夫ですか悟さん？」

「何故、避けれる！？」

「回避と素早さが特徴ですから！」

攻撃回避の耐久勝負なら優勝できるんじゃないか？

「危地区、幽閉地歴」

相手と俺達を囲む壁が出現する。そしてその壁から巨大な岩の針が大量に発射される。

「ぬおああああっ！」

本当にギリギリで四方からの針を回避する。もしかして、鬼畜と危地区を掛け合わせたんじゃないのか！？

「大丈夫ですか、悟さん？」

「だから何で簡単に避けれるんだよ！？」

「気分です。制裁、悪滅ぼし」

魑魅の攻撃が相手の攻撃を打ち消し、相手に直撃する。

「あわっ！」

「あ、猫耳と尻尾が出ましたよ」

「本当だな」

ダメージを受けたせいか、尻尾と猫耳が出てきた。

「うう……覚えてなよ！」

そう言って相手は四本足走行で逃げ出す。ちゃんと鍵を落としていた。

「まあ、明日までなら覚えておきましょう」

「短いな」

「悟さんとの記憶で精一杯ですから」

「消せ！」

とりあえず鍵を開けて社長室に入る。

「あ、来たんだね。それで何の用かな？」

「町を元に戻してもらおうと思ってな」

「そういう事です」

なるほど、といった感じに頷く魅異。

「確かに町どころか特星全体が悪影響を受けてるからね。私ならこの程度を直すのは簡単だし、元凶の可能性だって否定できないって訳でしょ？」

「ええ、その通りです！この会社が影響を受けてないのも、貴方が犯人だと思った理由の内の一つです」

「犯人じゃなくても、何か知ってそうだしな」

というか、魅異なら全て知ってるはずだ。テストは絶対〇点だが、頭は異常なほど良いはずだからな。

「仮に私が犯人だとして、本気の私に勝てる自信は？」

「ありませんよ」

「というか、絶対に無理」

百パーセントを信じない俺でも絶対と言えるぞ。一般人の俺達がチートに勝てる訳がない。

「結論から言うと私は犯人じゃないよ。まあ、犯人の場所なら教えてあげるよ。ただし、私に勝てただけどね」

「いや、手加減しろよ」

「二人の強さに合わせるから大丈夫だよ」

魅異には強さの段階があつて、今は第一形態なんだ。形態が変わっても見かけは変化しないが、強さが比較的に強くなる。第一形態でも宇宙消滅を軽々と出来る実力で、最終形態を見た者は居ないらしい。というか、最終形態なんか最初から無いのかもしれない。その場合は相手がどれだけ強くても、勝負に終わりが無いという事になるな……恐ろしい。

「勇者流技、勇者拳」

お、魅異でも技名を言う時はちゃんと喋るのか？

「つて、がふおあっ！！」

「あふおかつ！！」

俺と魍魎は魅異から放たれる技を避けきれずに直撃。

「つて、避けれるかあっ！」

「無理があります！」

「最初は避けれるように、通常攻撃を使おうかと思ったけど、戦闘シーンばかりだと読者が飽きるから辞めたんだよ」

「先に言え！」

ちなみに勇者拳は勇者流技と言う流技の一つなんだ。勇者流技は魅異の使える三大流技の一つで、勇者か元勇者しか使えないらしい。三大流技の残り二つの名前は、神離流技と魅異流技という名前で、神離流技は魅異及び魅異の超強力な弟子が使える技だ。魅異流技は三大流技の中の頂点に立つ技で、魅異しか使えない常識外れの技である。

「で、情報だけど、犯人は特星には居ないよ」

「そうなんですか？」

特星に居ないのなら、特星中を探した所で意味無いじゃないか。

「恐らく、非質系の特殊能力者が地球に居るんだと思うね」

「特殊能力者という事は、一度特星に来た事がある奴か？」

「そうだよ。しかも、戦う敵は結構な少人数だし、犯人自体は一人だよ」

人数は別に問題じゃないけどな。

「それで場所だけど、運良く巻津川市だね」

「って……ええっ!？」

ほ、本気で巻津川……なのだよ。

「悟さん、何か知ってるんですか？」

「あ…知ってると言ったら……知ってる」

「巻津川は悟が住んでた故郷だよ」

「そうなんですか？」

「ああ……うん」

嫌な予感がする。帰る時に余計な奴が着いてくる気がする。

「詳しい場所を言うと、巻津川市のテレビ局の会議室だね」

「なっ!」

俺に対する嫌がらせでこの場所か？誰かが俺への嫌がらせで仕組んでるのか？

「犯人達は密かに兵器を持ってるから、気をつけないと危ないよ？あと、銃刀法を守るなら銃は持ち込めないよ」

「ちょっと待って下さい。それだと勝ち目が無いに等しいですよ。私は武器が無くても大丈夫ですけど」

「悟にはこの武器を貸すから大丈夫だよ」

そういつて魅異が取り出したのは………水鉄砲？

「その銃は神離系武器の一つの神離銃だよ」

「本当か！？」

神離系武器とは魅異の作り出した凄い武器だ。俺の見たことのある神離系の武器は、神離槍という竹槍だけだ。一部の者か魅異が使えば、どの武器も恐ろしく強力な物になる。どの武器にも共通してる事は、壊れないという事だ。

「水鉄砲なら持ってて大丈夫だし、普通の銃とは違って魔法弾も撃てるよ」

「それは便利ですね」

「ああ」

「でも通常は水が普通に出るだけだから注意してね」

「分かった」

銃を預かって部屋を出る。もうすぐ夕方か。

「それでどうやって地球に行くんですか？」

「暝宰京にある装置を使わないと駄目だな。とりあえず、今日はもう時間が無いから明日に向かうぞ。今日のところは帰って休んでおけ」

「分かりました！じゃあ今日は悟さんの家に行きますね！」

「ああ……って、待ていっ！何でそうなる！？」

「さあ？」

「とりあえず自分の家に帰れ」

「はい」

返事をした魍魎だが結局夜に家に乗り込んできた。一応、夕食は作ってくれた。

でも、もうやだこのストーカー。

三話 急に妹が居ると言われたら、喜ぶより驚く

@悟視点@

次々と近代的な物が無くなる事件を昨日は解決できなかった。だが、今日こそは解決してみせる。魅異の情報で犯人は、俺の故郷の地球の巻津川市に居るらしい。

「地球へのワープ装置がある瞑宰京には、船で向かおうと思ったが……甘かったか」

「状況的に無理ですね」

まさか、船が木製になってるなんて思わなかった。

「この船で行けると思うか？」

「恐らく、数週間は掛かりますね」

それなら主人公の力で泳いで行くという方法も……って、船の方が早いだろ。

「おや、悟さんじゃありませんか」

「あ、羽双じゃないか！」

凄く良いタイミングで現れた和服のコイツは、神離しんり 羽双はそう。恐らく、特星で二番目の戦闘力を誇る奴だ。

魅異の一番弟子で雨双の兄でもある。特殊能力は時間を操る事で、

異常なほど強い。神離流技の使い手でもある。和風マニアで服装が和服なのもそれが原因。俺と同年齢だが言葉使いと礼儀正しさで見掛けによって、よく大学生か社会人と間違えられる。面倒な事はやらない主義なので、頼み事をするときは和食を用意しておくが良い。それでも断る時は断る奴だけだな。

「あ、コイツは魑魅と言って俺の知り合いだ」

「よろしくね」

「ええ、よろしく」

この二人……微妙に喋り方が被るなあ。

「そうだ。俺達は暎宰京に行きたいんだけど、船と俺達の時間を早めてくれないか？」

「嫌です」

「即答かよ!？」

「ええ、僕には関係ありませんから」

どうしよう……今のところは他に方法がないんだよなあ。

「でも、送るくらいなら良いですよ」

「良いんですか? その方が大変だと思いますよ?」

「技を使うわけじゃないですから良いですよ」

「なら、送ってくれ」

技を使わずに送ってくれるのか？それなら方法を知りたいから、やってもらいたいな。

「まず、二人とも手を繋いで絶対に離さないで下さい」

「こんな感じか？」

「そんな感じです。いきますよ」

そう言って振りかぶる羽双。…って、まさか！

「バゴオオツ！」

「ほげはああああっ！！」

「さて、朝食でも食べますか」

〈暝宰京の不思議海岸〉

「ふふふ、遂に完成したわ……小人が一人住めるほどの巨大な砂のお城が！アタイの力を持ってすれば二十時間も掛からなかったよ！犬小屋みたいな感じもするけど、気のせいだね」

「ヒュウウウウウウ…グシャアッ！」

「ぎゃああああっ！アタイのお城があっ！」

「あたたあ…大丈夫ですか、悟さん？」

「悟？どっかで聞いたよーな気がする」

「いてて…まさか蹴りで送られるとは」

あれ…こっちを見てる小人……もしかして！

「ロミヤか！」

「ああっ、アンタは！……悟ンジャーブラック！」

「確かにそうだったが、本名くらい覚えとけ！」

コイツは頭の悪い小人のロミヤ。変態生物の一人だが、発狂レベルは低いから安全。世界の人気者らしいが、そこまで人気があるわけでもない。

特殊能力はトラップを操る事だが、自分が引かかる事が多いので逆効果。

瞑宰京に居た頃に俺が、勉強を教えた事があるが、時間の無駄遣いだった。

「あの、何でガムテープを巻いてるんですか？」

「そういえばそうだな」

「見るな、変態！」

「それなら巻くな、変態が」

とりあえず、コイツを相手にしてる場合じゃない。

「とりあえず俺達は急ぐから」

「待った、アタイのお城を壊しといて、謝罪を一言で良いからしていきなさいよ！」

「悪い」

「一言で許されると思ってるの？アタイは怒ったよー！」

一言で良いって言ったじゃないか！

「此処は不思議海岸。不思議とは謎に包まれた存在、すなわち此処はアタイの為の場所よ！」

「悟さん……この子の言ってる事が分からないんですが」

「俺も何が言いたいのか、理解出来なかったところだ」

結局どうしろというんだ？

「ふふん、この海岸にはアタイ特製の地雷が一つだけ埋めてあるの。しかも超巨大サイズだから踏んだら宇宙の彼方まで吹き飛ぶよ！だから二人とも動けないし、アタイを攻撃する事だって出来ない！」

「これが有るんだが」

神離銃をロミヤに向ける。とは言っても、見かけはただの水鉄砲だから脅しにもならないな。

「じゅ、銃！わあああああつ！」

あ、効果あった。

「カチッ、ドゴオオオオオオン！！」

「ふぎゃあああああつ！」

「キラアーン」

「……………何だったんでしょうか？」

「ロミヤ流の爆発オチじゃないか？さて、急ぐか」

ちなみに地球へ行く為には、暝宰京の高校の地下にある機械が必要だ。アレがあれば地球の何処にでも移動できる。

（暝宰京の高校グラウンド）

「ふう、何とか到着だ」

「あれ、誰も居ませんね」

「此処は廃校になったからな」

それが原因で引っ越す事になったんだけどな。

「あ、でもダンボールがありますよ」

「ダンボール？」

「ほら、入り口の前」

確かに入り口の前にダンボールがある。あー、何となく分かった。

「アレの中身を知りたいか？」

「え？知りたいですけど…分かるんですか？」

「開けなくても分かる。絶対に中には人が入っている」

学校の前にダンボールと言ったら一人しか居ない。

「中に居る人は校長だ」

「ええっ!？」

「しかも、俺達の学校の校長でもある」

「えええええっ!？」

特星中のほとんどの学校の校長をやってるからな。ちなみに校長の特殊能力は波動を操る事だ。

「惜しいですね、私はダンボールから外出中でした」

「うわぁっ！」

「あ、校長」

背後から話しかけるから、魑魅が驚いたじゃないか。

「久しぶりですね悟君。あと、初めまして魑魅君」

「あれ、何で私の名前を知ってるんですか？」

「それは校長だから顔と名前くらいは分かりますよ」

「何気に凄いな」

「ちなみに地球へ波動で送る事も出来ます」

「それは別にいい」

さっきの羽双の時みたいに吹き飛ばされるかもしれない。それに装置までもう少しだからな。

「それでは気をつけてくださいよ」

「大丈夫だ」

「つてか、目的まで分かるんですか？」

「ええ。問題が起きた時は大抵、悟君が解決しますからね」

「他が解決しないからだ」

く巻津川市の街中く

そのあと、高校の地下にあった装置で地球まで来た俺達。

「ところで、どうやって帰るんですか？」

「右腕に時計が付いてるだろ？それについてるボタンを押すんだ」

「あ、これですね。でもいつの間に…」

「装置で送られてくる間じゃないか？」

それにしても懐かしいなあ。この辺はあまり来なかったけどな。

「それで何処へ行きますか？」

「そうだなあ……俺の家の鍵は知り合いに預けたから、まずはそいつの家に行くか」

「預けて大丈夫なんですか？」

「盗まれるようなものは無いから大丈夫だ。そいつが鍵をなくした可能性は高いけどな」

く知り合いの家く

「到着」

「どういう人なんですか？」

「言うならば馬鹿な奴だな。一回特星へ一緒に行ったんだが、何故だか地球に戻ったらいいんだ。居なくなった日から連絡が取れてないけどな」

「なら、どうして地球に戻ったと分かるんですか？」

「居なくなった日に校長に教えてもらったんだ」

旧友の名前は永崎^{ながさき} 納^{おさむ}。俺の一番古くからの友人で、特星へ行くまではずっと同じ学校や保育所に居た。

親とは中学生まで一緒に暮らしていたが、高校生になってから寮暮らしを始めて、特星へ行く数日前にこの家を建てた。俺は前から家があったけどな。運動はよく出来るが頭は馬鹿とアホで出来ている。根は良い奴だが人によく頼る。だが、嫌な奴には分類されないと思う。少なくとも俺の知り合いの中ではまともだ。

「ピンポーン。……ガチャ」

「はい、何か用ですかー？」

「よっ」

「あれ：悟じゃないか！こりゃあ、久しぶりだ！最後に会ったの数年前だろ！」

確かに数年ぶりだな。

「立ち話も疲れるから、とりあえず入っとけ。ほら、そっちの可愛い子も」

「あ、どうも」

とりあえずお邪魔する事にする。

「そっちの子は初めましてだな。俺は納って名前で悟との元クラスメートだ。」

「私は魑魅です」

お互いに自己紹介する二人。

「そうそう、悟に言っとかなきゃならない事があるんだ。是非、凄く驚いて聞いてくれ」

「何故に驚く必要がある」

まともだけどポケ体质だな。

「俺達が特星に行った後に俺は戻ってきただろ？理由はお前の家の鍵を忘れたからなんだが、俺は地球に戻ったあと特星に行けなくなっただ。知ってるだろ？」

「それは知ってるが……何で戻れなかったんだ？」

「小学の頃に居た校長を覚えてるか？よくダンボールに住んでた校長なんだが」

「さっきも会いましたね」

「その校長の波動の力で地球まで来たけど、波動で送ってもらったから帰れなかったんだ」

校長らしいミスだな。

「で、問題はその後なんだけどよ、お前の家の鍵を預かってたから、漫画を借りにそれで家に入ったんだ」

「お前なあ……」

「あれ、でもどうして悟さんは、納さんに鍵を渡したんですか？地球に戻ると分かった訳でもないのに」

「それは納がよく俺の家まで来てたからだ。頻繁に来るから一つ鍵を貸してやったんだ。ちなみにもう一つの鍵は訳あって封印されている」

「なくしたのか」

「何で分かった!？」

「特星へ行く時にお前が落としたから、俺が勝手に預かった」

勝手に人の鍵を預かるなんて何て奴だ!

「話を戻すぜ。その時にちょうど宅配便が来たんだ。俺は宅配物を覗こうと、お前のフリをして巨大なダンボールを預かったんだ」

本気でなんて奴だ。

「で、ダンボールがやけに動いてたから開けたら人が居たんだ」

なんで人が宅配されて来るんだよ!？

「どんな人だったんですか？」

「校長だった」

「何故に校長!？」

「悪い、冗談だ」

冗談かよ! 全力で信じたじゃないか!

「で、入ってたのは幼女四人だった」

「二度の冗談は面白くないな」

「悟さん……二度目に言われる事は真実と決まってるんですよ」

「ちなみに事実だ」

えー、何で俺の家に幼女四人が送られるんだよ？

「四人は俺が預かってるぜ。今では全員小学生だ」

一人で育てたのか？それはご苦労様。

「それと手紙もあったぞ。ほら」

「なんだ？結構古そうな手紙だな」

「数年前のだからな」

えー、なにに？

『おはよう！こんにちは！こんばんは！良い青春人生を送っているか悟？実はお前には親が居たらしく、それが私達という運命だ。で、お前に良い人生を送ってもらう為に、妹を四人ほど母さんが産んでくれたぞ、ワッハッハッハ！』

まあ、お前は私の子だからモテモテ確定だが、さらに恋人候補に妹四人を入れておいてくれ！小学生低学年の時に特星へ連れて行けば、年を取らなくなるから安心だ！これでロリコンとシスコンの両立ち状態になれるぞ。

ちなみに全員のキャラが被らないように保育園まで育てたから、全員が別々の性格になってるはずだ。しかも、悟の部屋の秘密の床下に隠してあった、未成年に相応しくないロリコンとシスコン向けの

ゲームが有ったから、妹全員に遊ばせて見たぞ。ちゃんと元の場所に帰しておいたから安心したまえ。

ではさらばっ！さよなら！お邪魔しました！』

って、うおおおいっ！俺でも良心が働き、オープニングまでしか見てないあのゲームをやらせたのおっ！？最低な親すぎるだろうおっ！！

ってか、元々あれはポケ役が買ったゲームなんだけど！俺が買ったんじゃないんだけど！誤解されちゃってるよ！

「ねえねえ、何を書いてあったんですか？」

「のああああっ！」

魍魎が話しかけてきたので驚き、手紙を丸めて飲み込む俺。って、食っちゃったよ！

「そうそう、そのゲームなら少し前に借りたぜ」

「借りるなよおっ！」

「大丈夫、そういうシーンは少なかったから。主にギャグメインってところだな」

「どんなゲームなんですか？」

「魍魎、お前には関係ない」

深い詮索をするんじゃない。俺が買ったと誤解するだろうからな。

ってか、ポケ役出て来い！

「おー、呼んだか？」

前に説明したがコイツは俺のポケ役だ。まあ、俺と別人と考えて良い。魅異に好意を抱いているが、無理だという事を知っている。だって、相手が魅異だから。

詳しくは知らないが、俺とは別の特殊能力が使えるんじゃないか？ちなみにポケ役と俺が入れ替わる事も出来る。今ポケ役の居るところは通称、待機場所と呼ばれる場所で小さな町があるが、場所が場所なので人が来る事は少ない。ポケ役は非現実的生物の一人だな。

「詳しい説明だな」

ってか、お前のせいで大変な事になってるぞ。

「まー、過ぎた事はしょうがないだろう？」

それはそうだ。

「まあ、面白い展開を作り出してるのは俺だ！感謝しろ！」

するかっ！

「いずれ多分戦うから、その時まで怒るなって」

ほう、いつかは問題を起こすのか。

「さあ？じゃ、また会おう！」

「悟さん？大丈夫ですかー？」

「ん、ああ…少し考え事してた」

「それで四人だが、今は学校に行ってる。しばらく帰らないぞ」

そうか、地球では休みじゃないんだな。

「それなら悟さん、町見学に行きませんか？」

「ああ、良いぞ。あ、その前に納」

「ん、どした？」

「最近で変わった事はなかったか？」

地球でも事件の影響があるのか聞いておかないとな。

「あったぞ。少し前からテレビで巻津川以外の場所の番組が映らないんだ。…何か知ってたりするのかな？」

「何か知ってたりするぞ。そしてその解決を目指してるんだ」

「おおおっ、いいなあ！まるで主人公みたいな扱いじゃないか！」

「主人公みたいじゃなくて、主人公だ！」

ときどき、自分でも忘れそうになるけどな。

「そうか？でも、主人公に重要なものがないな」

「重要なものって何だよ？」

「特別な特徴及び、変わったところ」

ほあっ！た、確かに。

「だ、大丈夫ですよ、悟さん。彼女候補が多いんですから！」

そういえばそうだな。まず、魑魅と有り得ないけど魅異の二人だろ。それに親の仕組んだ妹が四人ほど。それに暝宰京に居た時に狙った子とかも候補だよな。

「ま、気にする事もないさ。それに今の状態で主人公出来てるからな。それじゃあ出かけるぞ」

く伝統深き空き地く

「到着だ」

俺が連れてきたのは広めの空き地だ。

「空き地ですか？」

「確かに空き地だが、特星に関わる伝説が有るんだ」

巻津川は特星の発祥の地でもあるからな。特星に関する場所がいくつか有るんだ。

「どんな伝説ですか？」

「校長を初めとする数人の変態特殊能力者が、何度も失敗して特星を作り上げたらしい」

作ってる途中で悪気の無い妨害を受けて、特星は何度も壊されたらしい。悪気が無いとはいえ、酷い奴だよな。

「ほう、多少の知識はあるようだな」

「主人公だからさ。…で、誰だ？魑魅の知り合いか？」

「いいえ、この町のこと自体よく知りませんから」

いつの間にか後ろに立ってた謎の奴。もしかして、主人公を追うストーカーか？

「ふん、貴様等に名乗る名前など無い」

「名前が無いのか？それは可哀想だな」

「なっ！貴様、この俺に対する侮辱は一切許さん！」

「侮辱じゃなくて、単なる感想だ」

怒りっぽいのは体に毒だぞ。

「まあいいだろう」

「初対面の相手に向かっての言い方か？」

「貴様のような特徴のない主人公など、その辺の雑草に値するにも惜しいくらいだ」

言い方が特徴的で、何を言ってるのか分かりにくいだが、雑草以下って事か？

「ふう、意味も理解する頭も無いのか。哀れな主人公だな」

「何様だよ、お前」

もはや怒る気を通り越して呆る。

「ふん、何様かだと？俺は元貴族にして宇宙最強を目指す、神離^{しんり}東武^{とうぶ}だ！」

「……魑魅、雑魚ベーといい、こいつといい、何で貴族は変態しか居ないんだ？」

「人手不足じゃないですか？それか、資金さえあれば貴族だと思ひ込んでるとか」

貴族はナルシストの集まりだと思ってたが、このレベルまで来ると変質者だな。宇宙最強とか頭がおかしいと思う。

「雑魚ベー……ベータ・サイドショットの事か。奴とは顔見知りだが、あんな奴と一緒にするな、俺の名が汚れる。それに俺は元貴

族で、名前だって偽名だからな」

だから、日本流の名前なのか。神離の苗字って事は、魅異の弟子かその関係者だな。

「ちなみに俺は特星製作の協力者だ。だが、貴様達程度に変態扱いされる事が気に喰わん」

なら、ナルシストだな。

「どんな特殊能力なんですか？」

「貴様達に能力を教える気はない」

特星製作の関係者なら、実力はそれなりのはず。

「自分の能力に自信が無いんですか？」

「ふ、勝負して能力を確かめようというわけか」

「違うぞ」

「何いっ!？」

東武は俺の発言に非常に驚く。

「まあ、貴様等が俺に敵う道理はないがな」

「もう、悟さんが戦わないなら私が代わりでいきます!」

「そうか？じゃ、任せた」

戦闘力の面では魑魅の方が上だからな。

「貴様が相手か。言っておくが、女だろうと手加減はしないぞ」

「私だって手加減しませんよ。怪我しないように気をつけてくださいね」

さて：どっちが勝つか。地球では不死の効果が無効化されるからな。怪我をしなければ良いんだが。

「ふう、雑魚と俺の差を教えてやろう。白熱の炎！」

「善技、清らかな洪水！」

洪水が清らかなのか？二人の技がぶつかり合い水蒸気が起こる。

「変化する土！」

魑魅の周りの土が触手型になって魑魅に襲い掛かる。

「これは嫌です！善技、罪を裁く制裁！」

魑魅の周りの触手は光の刃で粉碎される。

「東武さんって非質系の人ですねー」

「仮にそうだと、何故そう言える？」

アイツのリアクションが毎回面白いんだが。ちなみに東武は悪魑魅の事を言いたいのだろうが、秘めているのではなく、怒らないと悪魑魅にならないだけだ。

「まあいい、俺は貴様を全力でカスにまで成り下がらせてやろう。俺の特殊能力は生と死を操る事だ。貴様も生命の一つである以上、俺に勝ち目などない！」

……………え？

「あのー、もう一度チャンスをあげますけど？」

「……………俺への勝ち目などない！」

確実に言い間違えたな。

「ふんっ、笑いを取る為にワザと間違えただけの事だ」

「言い訳は聞き苦しいですよ」

ってか、仮にそうだとしても笑えないし。

「俺の特殊能力は物質さえあれば、その物質に生命を宿らせる事が出来る！」

スルーして話を元に戻したな。

「じゃあ、さっきまでの技は？」

「アレは俺が居た世界で使えた魔法だ」

「あれ、別世界の人なんですか？」

「貴様には関係のない事だ」

何か話が大きくなってますよー。この調子だといつかは、異世界にも行かされるかもしれないな。

「そうなる前に逃走だ！」

「え？待って下さい、悟さぁーん！」

「ふっ、あまりの実力差に逃げ出したか！まあ、戦うよりは正しい選択だな！」

何とでも言いやがれ、異世界人！

＼納の家＼

「ただいまぁー」

「お邪魔しますよ」

「悟、お前の家じゃなくて俺の家だから、魑魅ちゃんの言ったようにお邪魔しますだろ」

奥から出てきたのは、納だった。

「家みたいなものだから良いだろ。で、例の四人は帰ってるのか？」

「あー、三人はついさっき帰ったぞ。残り一人は行方不明だ」

行方不明か。……って、一大事じゃないか！

「ああ、でも大丈夫だ。いつもの事だからな」

「問題児か！？」

「いつもの事と言ってますし、恐らく大丈夫でしょう」

まあ、あの親の子なら大丈夫だろう。……って、俺もあの親の子だった！顔も見たこと無いけど！

「三人は二階の部屋に居るはずだぜ。俺達は待ってるから、悟だけ行って来い」

「私も悟さん達の再会が終わったら行きますね。会って早々、手を出すなんてしないで下さいよ？」

「するかっ！」

俺がそんな奴に見えるかあ？ 仮にも主人公の自覚は有るんだから、そんな事になるはずがない。

なんて思ってる内に部屋の前まで着いたな。階段を上がってすぐ横

に部屋があるのか。

じゃ、入るか。

「こんにちはー……って！」

「あ！」

「きゃっ！」

「わあっ！」

三人の妹が運良く……いや、運悪く着替え中かよ！だが、このシーンがアニメや漫画であれば、良いサービスカットだ！放映禁止になる所は、当然といえば当然だが見えなかったしな。小説でも流石に、これが限度のようだ。

それにしても、こんな展開にめぐり会えるなんて、主人公とは何て得な役割なんだろう！

「失礼した」

冷静を装って、扉を閉める。ってか、全員が美少女級の可愛さだったんですけど！

……はっ！

駄目だ！こんな思考だと、雑魚ベーと同類にされてしまう！

「もう入って良いですよ」

一人の女の子の声がする。入るときも冷静を装うか。

「お邪魔します…って、うおはあっ！」

三人の衣装が普通じゃないので驚く。

一人は定番中の定番のメイド服だが、普通のタイプとは形状が違い、胸元が見えるようになっていてる。

もう一人は裾が長い水着……要するに、ボディースーツのような物を着ている。生地が結構薄いタイプのようで、全力で引っ張れば破れそうである。

最後の子は短パンまでは普通だけど、何故か胸の部分に布を巻いただけで服を着ていない。布はもちろん一重で巻いてあり、後ろの方できっちり結んである。

「こ、この服装のレベルの高さはかなり高い」

「っるっ！」

「のあっ！」

「ドガガガガガガ、ズガァン！」

足を滑らせて階段から落ちた。って、視界がぼやけてきた。

もうやだこの家族。

「何の音でしょう？って、大丈夫ですか、悟さん！？それに貴方達は何でそんな格好をしてるんです！？？」

「その事は俺が後で説明するから、とりあえず、悟の救護を！」

「は、はい！」

四話 子供っぽい奴が強い世の中

@悟視点@

「あー、酷い目に合った」

「ご愁傷様だな」

意味を分かってその言葉を使ってるのか？タイミングは間違えでは無いと思うが。

「ところで妹達は？」

「ああ、魑魅ちゃんと上に居たぞ」

どうでも良いけど、納がちゃん付けすると気持ち悪い。

「呼びましたか？」

魑魅が妹達と上の階から降りてくる。

「妹達に自己紹介をしてないから、簡単にしておこうと思ってな。俺は雷之 悟と言って、君らの兄らしいんだ。まあ、よろしくな」

軽く自己紹介をする。妹達には理解できないだろうから、主人公という事は黙っておく。

「私は雷之^{らいの} 沙美沙^{さみさ}です。よろしく、お願いします」

「私は雷之^{らいの} 姫笹^{ひめささ}っていうの。よろしくっ」

「私は雷之^{らいの} 純化^{じゅんか}だよ。よろしくね！」

なるほど、全員の性格は違うようだな。だが、仲が悪いわけではなさそうだ。

「名前は納が決めたのか？」

「いや、三人が入ってた箱に書いてあった。丁寧に読み仮名付きで細かい所には気を使う親だな。

「ちなみに本来は四つ子らしいが、生まれた日は全員が違うらしい」
「本来が四つ後の時点で既に驚きなのに、全員の誕生日が違うとはどういう事だね？」

「さあ……詳細書に書いてあったから真実だと思うが」

詳細書？ ああ、宅配されてきたんだっけ。

「詳細書は悟の家に置いてあるぞ。妹達の入ってたダンボールの中に置きっぱなしだ」

「じゃあ取りに行くか。その前にメンバー構成をしないとな」

「何でだ？」

「俺の家には未成年に相応しくないゲームが、いくつも隠してある

からだ。ところで妹達は戦闘とか出来るのか？」

聞いてはみたが、三人は特星に行った事が無いから、ほとんど無いに等しいだろうな。戦えるなら戦えるで少しショックだけどな。

「かなり強いぞ」

「強いのかよ！」

衝撃の事実にはショックで倒れそう！

「巻津川市は生徒の特星への移動を進めてるからな。包丁を持った強盗程度なら、怪我無く捕獲できるぞ」

「巻津川の学生は全員その位強いのか？」

「ああ、高校生や大学生なら、その辺の特殊能力者より強いぞ。あー、お前達よりは弱いと思うから安心しろ」

「ってか、妹達の学校も後で見たいな。」

「そんなことよりチーム分けだ。」

俺は絶対に出かける側のメンバーだ。妹達三人は留守番をさせておくべきだろう。問題は魑魅を連れていくか、納を連れていくかだ。魑魅を連れて行った場合は、いつも通りに事が進むから問題なし。納を連れて行った場合は、魑魅に戦闘力が劣るから、今までよりも苦戦する事になる。

「よし、納と俺で出発するぞ」

「今の思考で、何故その結果がでたんですか!？」

魑魅に思考部分の所にまでツツコミを入れられる。

「納の家が襲われた時に、納だと能力不足だからな。基本がアホだから」

「アホで悪かったな」

悪いと思うなら問答無用で謝れ。

「問答無用かよ!」

「思考読むなよ!」

「それはアレだ。アニメとかで空想にツツコミを入れるアレ」

「そんな高等技術を使えるのか」

俺もツツコミ役として負けてられないな。でも、どうやったら使えるんだよ。

「まあ、そういう事で行ってくる」

く悟の家く

いやあ、懐かしい。地球に住んでた頃に住んでた家だが、主に漫画とゲームが有るくらいだ。ちなみに俺は戦闘系より、平和な日常を描いた漫画の方が好きだ。ギャグ有りなら特に良し。

大体、人生は楽しさや笑いが有ってのものだろう？戦闘だけを描く漫画は、どうも好きになれない性分だ。まっ、好みなんて人それぞれな訳だが。

「鍵は持つてるだろうな？」

「あ、忘れた」

アホがあっ！

「冗談だ！ちゃんと此处に有るって！」

「お前が言っていると冗談に聞こえん」

鍵を開けて中に入ると壁があった。

「つて、これは何だ！？」

「よく見ろ、ダンボールの箱だ」

ん？確かに触り心地はダンボールだな。じゃなくて、大きすぎるだろ！天井まで数十センチしかないんじゃないか？

「で、どうやってダンボールを超えるんだ？」

「引き出せば良いんじゃないか？」

ってか、数年前にはどうやって家を出た？

「というか、重っ！中に何か入ってるだろ！」

「おかしいな。中身は空のはずだが」

天井からダンボールの中に大量の鼠が落ちて、出られなくなって餓死したか？

「ダンボールに穴を開けて入るか？」

「そうだな。納、道具は？」

「言われてないのに、有るわけないだろ！」

そうだよねー。

「という冗談は置いといて。ほら道具」

持ってるのかよ！

「しかも爪切り！」

「それしかないんだ、我慢しろ」

とりあえず、爪切りで切り目をつけてそこから破って、ダンボールの中に入る。

「あ、こんにちは」

「あ、校長。こんにちは……。って、校長!？」

「校長!？」

俺が驚いた後に納も驚く。

「どうかしましたか？」

「何で俺の家に? ってか、鍵は？」

「煙突から侵入しました」

この家の何処に煙突があるのか説明を要求する。

「悟の家には大した物は無いのに、どうしてこんな所に？」

大した物がなくて悪かったな。

「漫画を借りに来ただけです。あと、このダンボールも欲しいですけど」

「ダンボールは別に良いけど、その中に詳細書的な物とか有ったか？」

「ええ、ありましたよ」

校長に詳細書的な紙を渡される。

「本当だ、名前が書いてある。…雷之^{らいの}希求^{ききゅう}?」

「あー、希求は迷子になってる妹だ」

そういえば忘れてたな。

「やはり、あの四人は悟君の妹でしたか」

「校長、俺の家族構成の事で、何か知ってるのか!?!」

「そのダンボールを配達したのは私ですから」

まさかの新事実!?

「校長は保育園児が入っていると、知ってたんですか?」

納が敬語で尋ねる。まあ、相手が校長だから普通は当然か。

「ええ」

「なら、どうして配達を続行したんです?」

「百倍の給料を出すと言われたので、つつい。結局、給料を払う前に逃げられましたけどね」

おーい、誰かこのアホ校長を連れてってくれ。

「でも、依頼主の名前は分かりますよ。知り合いでしたから」

知り合いに給料泥棒されたのかよ。

「それなら、依頼者の名前と詳細を教えてくださいませんか？俺の親みただから」

「良いですよ。但し、条件があります」

やっぱり、こういう展開になるのか。シリアス展開でなければ良いんだが。

「百倍分の給料を払ってください」

シリアス展開の方がマシだあっ！

「いくらだ？」

「一兆八千億円です。特別に一兆八千億セルでも構いませんが」

「待った、その計算では、通常の配達料金が百八十億円になるぞ」

「延滞料込みだから、この値段なんです」

それでも高すぎる気がするが。

「今は払えないから、特星に戻った後で良いか？」

「ええ、構いませんよ」

納は話に入りこめないようで、勝手に漫画を読んでいる。

「まず、あの人達と初めて会ったのは、私が小学生の時でした。当

時からダンボール生活のプロだった私は、新しいダンボールを探していました」

でた、校長のダンボール生活の伝説！

「当時は保育園の頃からバイトをしてましたが、食事代を稼ぐのが限度でしたね」

昔からこういう生活だったのか。

「ってか、親は？」

「世界規模の金持ちだったんですが、私を船渡県ふなわたの山奥に隠して、札束滑り台で遊んでる最中に突っ込んで父親は死亡したそうです」

意味不明な死に方だな。ってか、何故に札束滑り台？

ちなみに船渡県ふなわたとは、日本の県の一部だ。場所は詳しく覚えてないが。今、俺が居る場所も船渡県の巻津川市なんだ。

「ちなみに母親は財産を独り占めしようとして、数兆円を担いで逃げる最中に坂で転んで、火葬場に転がり落ちて焼死したらしいです」

って事は、財産は燃え尽きたのか。

「話を戻しますと、ダンボールを数万枚提供してくれたのが、悟君の父親だったんです」

数万枚も提供したのか。

「名前は雷之^{らいの} 皇神^{おうしん}と言って、幸せながらも異常な生活を望む人でした」

要するに狂った異常者か。ってか、名前を考えた奴は出て来い。

「皇神君には同級生に彼女が居まして、当時は東員^{とういん} 天利^{あまり}と言う名前でした。この人は貴方の母親なんですが、やけに常識外れた人でしたね」

やっぱりな。四つ子なんて普通はないだろうし。

「私はダンボールの城を完成させました。そして、しばらくは普通に暮らしていたのですが、私が大学生の時に悟君が産まれたと、皇神君から連絡が入りました。その時、皇神君は高卒で会社を作っていました」

校長もだが、俺の父親も凄い人生だな。

「その数日後に二人が結婚して、その時に豪華な食事を食べました」
食事の事が一番印象に残ったのか？

「ってか、校長って今は三十歳だよな？」

「ええ。あ、年齢の矛盾については後で説明します」

「ああ、そう」

校長が三十歳で親が同年齢だと、俺の今の年齢は小学生だと言う事になってしまふ。校長が大学の時に俺が産まれたらしいからな。

「次の日、貴方の両親は貴方に家を与えて、変態性を強化する為に修行に出かけました」

「その思考を持ってるだけで、十分な変態性だと思うが」

「その後は、私に息子が異常者以外にならないようにと頼んできました」

息子まで変態にする気かあっ！

「あ、大丈夫ですよ。私的には悟君は十分な異常者ですから」

フォローのつもりだろうが、逆効果だ！ってか、校長の鮮やかな笑顔は気持ち悪い！

「数年後に予想外の展開が起きました。それが魅異君の降臨事件です」

「降臨と言うより、空中から落ちてきたんだけどな」

確か、保育園か小学校の時だったな。魅異との出会い、俺が外を歩いていた時だった。魅異が空から降ってきたんだ。まあ、それだけ。

「ちなみに昨日、何で魅異君が落ちてきたか分かりました」

「マジで!?!」

空から降ってきた理由は、今までずっと気になってたんだ！

「羽双君との戦闘で吹き飛ばされたようです」

「羽双か」

羽双なら、確かに魅異を吹き飛ばせる。というか、羽双以外ではワザと吹き飛んでいると言っても過言ではない。

でも、よく地球は無事だったな。二人が本気を出せば、地球が崩壊させるなど簡単に行えるであろう。って、本気じゃなくても出来るか。

……………それ以前に魅異が本気を出す筈がないが。

「で、その数日後に超巨大隕石が落下します」

ちなみにその隕石は、当時の魅異によって割られたぞ。

「そして、その数日後に特殊能力の元となる、秘伝の薬を見つけました」

開発したじゃなくて、見つけただけか。

「その数年後、秘伝の薬を友人数人に譲りました。そのお礼として、特星製作を手伝ってもらいましたけどね。貴方の親もその時に一度、この町に戻ってきました」

この時は既に俺は高校生だな。

「そして特星が完成した後、貴方の親は私に配達の依頼を頼みまし

た」

「しかし、納が俺の家に居たのか」

「そうです。私は一度特星に悟君を送った後に配達を頼まれたんですが、金額に目が眩み、その事を忘れてしまったんです。そして、配達したら納君が居たので、騙されたという事で納君に配達をしたんです」

確かに納は俺のフリをしてたそうだが、校長は正体に気付いてたのか！

「私の話はこれだけです。じゃ、一兆円か一兆セルは現金でお願いしますね」

校長はそれだけ言って、マンガ本を数冊持って消えた。恐らく、波動の技で消えたのだろう。

ちなみに正しくは一兆八千億だな。

「あー、話は終わった？…ぐげっ！」

漫画を読んで、楽をした納を踏みつけて家を出る。本題から外れてたが、そろそろ事件の解決を再開するか。

「納、この辺に最近立てられた建物はあるか？怪しい犯人が隠れそうな所とか」

だが、この事件が随分前から計画されていたならば、その為の隠れ家及び基地は前からある建物という事になる。

……俺、推理とかも結構良いんじゃないか？

「それなら駄菓子屋だ！最近建てられたんだぜ」

「普通じゃないか」

「それが、前に行った時に有り得ない光景を見たんだ！あの光景を見た時は驚いた！

ほお、納の言い方的に冗談ではなさそうだな。

「数日前にあの駄菓子屋で、なんと一万円で一種類のお菓子を、買い占めてる人が居たんだ！」

「いや、確かに凄いが今の時代なら有り得るだろ」

「しかも大学生！」

「それは凄い！」

勉強で忙しそうな大学生が、一万円もたった一種類のお菓子に使うなんて、今のところは実例を聞いた事がないぞ！……納、大学生に失礼な言い方は駄目だろ。

「あれ、責任転移をされたような」

「気のせいだろ」

勘の良い奴だな。

「それで他には？」

「怪しいのは特に無いな。俺の知ってる範囲で、建物などを言うと、スーパーマーケットが数店・中学校・小学校・変態の乗った通りすがりの浮遊要塞・それにビルが数件建ったくらいだ。あと、お前が子供の時に通ってた、テレビ局の子会社だな」

「それだっ！どう考えても、テレビ局の子会社が一番怪しい！」

一番怪しいというよりも、これ以外は怪しくない。

俺が通ってたテレビ局というのは、保育園児の時から射撃の腕前が良かった俺は、テレビ局の番組に出演していた時があるのだ。

エクサスターガンも射撃番組の商品で貰った物だ。

だが、よく考えてみる。

宇宙消滅の爆発を圧縮した威力の技を撃てる銃を、地球で五個も商品で出せるなんて、普通では銃の存在自体が有り得ない事だ。だが、あのテレビ局は商品として出した。

『まあ、特星ならば、その程度の芸当は可能じゃないか？』と、思う者も居ると思う。

確かに特星では、何とか作れる者が居るかもしれないが、かなりの実力者じゃないと不可能だ。

それ以前に俺が保育園の時だから、特星はまだ作られてないし！エクサスターガンを貰ったのも保育園だったからなあ。

「俺には浮遊要塞の方が怪しいと思えるんだが」

「それは素人の考えだ。あれに乗ってる奴は、事件を起こせるほど頭は良くない。というか、事件を起こす前に冷凍されるだろ」

人脈が広いと、いろんな予想ができるから便利だ。

「ふふふっ、早くも事件解決が可能かもしれない！さあ、行くぞ！」

「えっ、俺も？」

「もちろん。ちゃんと道案内しろよ」

く封印されしテレビ局の子会社の入り口く

「納、地球では有り得ない雰囲気か漂ってないか？」

「ああ、例えるならば、面接直前の学生のような気分だ」

テレビ局の周りだけは他の場所とは違い、上空の天候が曇りである。

これだけ不自然だと逆にハズレか？

「装備も完璧だし、いつでも突撃できるぞ」

「そうか。…って、水鉄砲とハエ叩きじゃないか！」

俺の装備を見て納が驚く。あまりの完璧さに驚いたんだな。

このハエ叩きは、特星の大会で手に入れた物で、大抵の事では壊れないんだ。

「家事で鍛えぬいた実力で、犯人など倒してやるぜ！」

「悟、俺は非常に不安だ」

不安な要素など何もないだろうが。

「先に聞いておくが、納の特殊能力はなんだ？あ、ちなみに俺は魔法弾を作り出す能力だ」

「お前にピッタリじゃないか。俺は電気を操る特殊能力で質系だ。言っとくが、強力な技とかは扱えないからな」

そりゃあ、地球では使わないだろうな。

「さて、お邪魔します！」

納が普通に入っていく。敵陣に突入する時の言葉じゃないがな。

「あれ、おかしいぞ」

「どうした、納？…って、人が居ないな」

今まで通り、黒幕が一人居るだけなのか？

「帰れ」

「ひええっ！さ、さっ、さささ、悟！今、な…何か聞こえなかったか！？」

「ちゃんと聞いてなかったのか？帰れって聞こえたぞ」

「やっぱりいっ！幽霊が居るんだ！」

高校生なのに幽霊に驚いてるのか？

「この会社は我々が呪い、乗っ取った」

「お、敵を倒す手間が省けたか？」

「呪われるー！呪われちまううっ！！」

落ち着け、納。

「貴様達も呪いを避けるならば、宝石か何かを置いて帰れえー」

「はいいっ！悟、宝石を出すんだ！」

「持っていない」

宝石を欲しがる幽霊はどうかと思う。

「ぷっ、くくく…：はははははははっ！ちょ、ちょっと待って！私みたいな幽霊でそこまで驚くなんて珍しいわね！」

「へ？」

幽霊は急に笑い出し、納は自分にピッタリな間抜けな声を出す。

「どうも、こんにちは」

壁をすり抜けて女性が出てくる。

「うぎゃ、出たあっ！」

「驚きすぎだ」

いや、俺が冷静すぎるのかもしれないが。

「私はキール。幽霊だけど驚くほどじゃないわよ？実体化とかも出来るわ」

恐らく、特星から来たのだろう。今までに日本で幽霊を見た事はないからな。

「で、さっき言ってた事は？呪いとか乗っ取りとか」

「嘘よ」

「目的は？」

「仕事をサボってる間の暇つぶしよ」

暇つぶしするくらいなら、仕事をしろよ。

「此処の会社には何故だか人が居ないわ。屋上に人じゃない奴が居たけど、只者じゃない雰囲気だったね」

「屋上か？分かった！」

「あ、待ってくれよ、悟！」

「悟って、あの有名な？…帰ろう」

「頂点の最上階」

「悟、何でテレビ局に屋上が有るんだ？」

「俺が知るか」

それにしても、手掛かりが無かったから、今までよりも無駄な行動が多かったな。ってか、変な地名が多かったぞ。

「ようやく来たか、待っていたぞ」

いつの間にか目の前に、小学生高学年くらいの女子が居た。ってか、小学生キャラが多い気がするのは俺だけか？

「俺達を待っててくれたのか？悟、この子は俺達のファンらしいぞ！」

何故、そういう結論が出る？

「私は衣宵^{いよう}。宇宙の放浪者だが、宇宙を見張る事が趣味だ」

また、凄い設定の奴が現れたなあ。たまには普通の人が問題を起こせば、俺も多少は楽なんだけどな。

見かけは小学生だが、口調とかが小学生を通り越してる。

「肌が綺麗だなー」

納、こんな時に言ってる場合か！だが、確かに肌が凄く綺麗だ。

「それで目的は？」

「少し前に特星に住み始めたんだが、問題を起こしても良いと聞いてな。ところで、何故、お前達は星の変化に気付けた？能力で気付けなくした筈だが」

「何故なら、俺は主人公だから！！」

「俺はその友人だからだ！」

ハッキリ言ってやる。ってか、俺の友人にも効かないものなのか？

「おー、お前達の実力は悪くはなさそうだな。面白い、私と勝負をしていくか？」

「全然良いぜ！その代わり、俺達が勝ったら年を教えてもらう！」

相手は宇宙の放浪者だから、もっと大きな事を頼めよ！

「悪いが、年は覚えてない。だが、数億年以上は生きていた筈だ」

おおー、凄く長生きだな。

「年は分らなかったが、他の頼み事は勝った後に言えば良い。喰らえ！」

「うおあっ！」

「おっと」

急にレーザーのような物を連射してくるが、ギリギリ回避する。

「私は特星に来る前から、未知を操る能力を持っていたからか、特星に来た時に新しい能力は覚えなかったな。まあ、使い慣れた能力が一番だな」

「電技、静かなる電撃！」

「パチッ」

「甘い。というか、電力が弱すぎるな」

静電気で相手が倒せるか！

「水圧圧縮砲！」

「ドゴオオオオン！」

「電気よりはマシな威力だが、まだまだ弱いな」

一般人が地球で受けたら、骨折する威力なんだけどな。

「未知、不思議な炎！」

衣宵の周辺に裂け目のようなものが現れ、そこから炎の玉が辺りに飛び散る。

「電気、渦巻く電撃！」

納が電気を回転させて、相手に放つ。

「空気圧圧縮砲！」

俺は空気の魔法弾を相手に撃つ。相手の炎も空気圧圧縮砲によって、相手の方へ飛んでいく。

「未知、見えない壁」

しかし、攻撃は相手に当たる前にかき消される。

「未知、分らずの不調子」

うっ…なんだ？急に気分が悪くなってきた。

「納、大丈夫か？…って！」

「おええええーっ！」

「吐くなあっ！」

「ベシベシッ！」

あまりにも汚かったので、ハエ叩きで納を二回叩く。

「汚い奴だ」

お前の技が原因だ。

「悟う、俺は気分が悪いので、早退させてもらう。…じゃ！」

走って非常口に向かう納。…って、待てえい！

「させるか。未知、繰り返す領域」

「技なんか喰らう前に逃げ切る！…って、のわあああっ！」

あれ、納の入った非常口のある方向とは、反対の方向から納の声が聞こえたぞ。

反対側を見ると、納がフェンスに掴まっていた。手を放したら下に落ちるな。

「この技は二つの領域を決める事で、一つの領域から外に出ようとすると、もう一つの領域に出る事が出来るんだ」

「要するに、ワープゾーンを作れるのか？」

「分かりやすく言うと、そういう事だな」

「ってか、俺が落ちそうなんですけどおっ！」

逃げようとしたから、天罰が下ったんじゃないか？

「ああ、上下の領域も決めたから、落ちても大丈夫だぞ」

「そうなのか？じゃあ落ちるぞ」

そして、納が手を離す。一瞬で下に落ちていって、上から降ってきた。また落ちていった。そして降ってきて落ちていくの繰り返しだ。

「おおっ、凄いぞ！無限ループとかが出来るんじゃないか!？」

楽しそうだが、衣宵が技を止めたら下に落ちるぞ。

「どんどんと速さが増してきたぞ！悟も来いよ！」

「断る。そしてチャンス！合体魔法弾、流れ星砲！」

説明しよう！合体魔法弾とは、俺の使える魔法弾二つを合体させて使う技だ！それによって、普段の二倍くらいの威力の技を使えるのだ！

「なっ！未知、別世界への幕開け！」

岩くらいの大きさの流れ星砲は、相手の作り出した別世界への幕に吸い込まれた。幕というより盾だな。

「お前もついでだ!」

「って、俺もかよ!？」

相手は俺にも幕を被せる。

く未知の破れ目く

何処だ此処？手や体は見えるのだが、背景や道が非常に暗い。……
……いや、暗いのではなく黒いのだろう。

「此処の場所が知りたいか？」

あ、衣宵。

「名前とかは別に興味がないが、地球か特星との距離は知りたいな」

「距離は私の楽しさだ。楽しければ短いし、楽しくなければ出られない」

「俺を玩具的な何かと勘違いしてないか？」

「それはない。単に全力で勝負して欲しいだけだ」

素直にそういえば良いだろうが。

「分かった、照れ屋なんだな！」

それは無い。ってか、出てくるなボケ役。

「お前も照れ屋か！」

「何故そうなる！？」

「何がだ？」

「あ…なんでもない」

お前の姿は見えないんだったな。

「ああ。この能力を応用して、入浴シーンを覗く事も可能だぜ！」

絶対やめろ！

「可能ってだけだ。実際には魅異にしか試してないからな」

あー、やっぱり。

「気付かれて身も心もボロボロにされたけどな」

あー、やっぱり。

「同じ返答を二回もするな」

ってか、早く待機場所に戻れ。

「はいはい。ちなみに思考内での会話って、時間が経つのが遅いよな」

そうだな。

「さて、脱出方法を考えるか」

「待て、勝負をすれば早いだろう」

「俺は無駄な争いを好まないんだ。その方が主人公らしいだろ」

本当に無駄な争いは嫌いだけどな。面倒な上に疲れるし。

「だが、私はその気にならなければ、此処から出る事は不可能だぞ？それに、外からは此処まで入る事も不可能！だから、助けも呼べないし、私と勝負する以外に出る方法はない！」

「こんにちは」

「何っ!？」

衣宵の発言を完全否定するように入ってきたのは魅異だった。ってか、明らかに狙って、このタイミングで来ただろ。

「魅異、こんな所に何の用だ？ついでに俺を出してくれ」

「ふっふっふ、単なる暇つぶしで侵入したんだよ。あと、出たかったら自分で戦えば？」

相変わらずだな。

「そうそう、現在特星の様々な所で、その子供みたいな強い子が、面白い事を計画してるみたいだね」

「その度に俺に解決させるのか？」

「あまりにも危険な場合は、私が何とかするけどね」

出来れば全部任せる。

「じゃ、私は帰るから」

言いたい事だけ言って帰りやがった。消えて帰ったから、追いかけるようにも方法がないな。

「さ、さて、さっきの奴は例外だが、此处に入ったり出来る奴は他には居ない。……多分な」

「あー、その人達、ちょっと良いかな？」

おー、見事に他にも居たな。だが、今度は俺の知らない少女だ。

衣宵より小さく、小学生の三年生くらいじゃないか？

「という訳で、次回に続くよ」

まだ居たのか、魅異！ってか、続くの？この小説がこの少女の正体を明かさないまま続くのか！？そんな展開はギャグ系では有り得ないだろ！というか、そういう展開があまり好きでない奴も居るんだぞ！

…なんて言っても無駄だから、最後に一言。

「はあ、やれやれ」

五話 事件はおまけ要素が重要

@悟視点@

えーっと、何故か普通は来れない未知の破れ目。そこに入ってきた少女の正体は何なのか？あと、魅異はもう帰ったぞ。

「一人どころか、二人に入られるとは」

微妙に悔しそうだなあ、衣宵。敵ながら同情するよ。

「それで此処は何処かな？」

「それ以前に、何処から何処に向かおうとしてたんだ？」

とりあえず尋ねてみる。これが分かれば俺も出られるかもしれない。

「その前に名前を教えてよー。知らない人は全員敵だって言われているから」

「極端だな！？…俺は雷之 悟で、こっちは衣宵だ」

「ってか、私との勝負は？」

そんなものは後回し。出来れば、雰囲気を変えて勝負をしないで脱出するか。

「あ、苗字が同じだねえ。私は雷之 希求って名前だよ」

希求か。…………お、妹発見！

「希求、お前は俺の妹だぞ」

「そうなの？それなら私の問題に答えられるかなあ？」

「一般的なレベルなら解けるが」

だが、凄い知識があるわけでもないからなあ。

「第一問、特星で一番弱そうな名前は何でしょう？」

いきなり大雑把な問題だな、オイ！

弱そうか強そうかは人それぞれだけど、普通に考えられるので良いか。

「それは当然スライムだろ」

「ハズレー！」

くっ、違ったか。

「衣宵、分かるか？」

「私も参加するのか？そうだな、今年の魔王の名前が弱そうだったぞ」

「正解っ！」

名前言っていないのに良いのかよ!？」

ちなみに前に思考内で話したが、特星の勇者や聖王や魔王は年に一回代わる事が有るぞ。まあ、よっぽど駄目な奴じゃない限りは、代わる事がないが。

「ってか、名前とか分かるか？スライム以下の名前って気になる」

「確か雑魚ベーとかいう名前だったな」

雑魚ベーかよ!？アイツ、魔王の職業になったなんて言ってなかったぞ！

「って、希求は雑魚ベーの事を知ってるのか？」

「うん、前に特星に迷い込んだ時に抱きつかれたよ」

相変わらずな奴だ。特星じゃなければセクハラだぞ。

「確か、宿敵に気付かれないように、ロリコン帝国を築きあげるって言ってたな。テレビでモザイクなしに」

その時点で気付かれるだろうがっ！

……いや、気付かなかったけどさ。

「それでは、第二問！さっきの話で特星に迷ったって言ったけど、何処に行こうとして迷い込んだでしょうか？」

もはや、勘でしか答えられないだろうがっ！

「えーっと、ダンボールの城？」

「惜しいけど、ハズレだねえ」

惜しいのか？それなら砂の城とかも有り得るな。

「これは簡単だ。答えはトイレだな」

「大正解〜！凄いな衣宵ちゃん！」

「衣宵……………ちゃん？」

衣宵がちゃん付けに戸惑ってるのは置いて、ダンボールの城で惜しくて、何でトイレが正解なんだ！？

「なあ、ダンボールの城のどの辺が惜しかったんだ？」

「存在価値が同じレベルだからだと思うぞ」

「うんうん、まったくその通りだよ」

明らかにトイレの方が重要だと思うが。

「何故なら、ダンボールのお城は子供の夢！その存在価値はトイレにも匹敵するのだよ！」

「嫌な子供の夢だな、オイ！ダンボールの城を夢見るくらいなら、普通の城を夢見た方が良いつて！」

「甘いぞ。普通の城には地震の耐久性が少なく、大地震と共に夢は崩れ去る。だから、地震で崩れないダンボールの城の方が良いだろう。無料で見つける事が出来るしな」

これは二人のポケなのか？それとも本気でそう思っているのだろうか。

本気で言っているのなら、子供に夢を持たせたい親は非常に複雑である。場合によっては、ダンボールの城を本気で作り出すかもしれない。

もしも、ダンボールの城が普通に作られるようになったら、恐ろしい時代の幕開けとなる事が予想される。

「では、第三問！私の能力は何だと思う？」

「何かが凄い能力だな」

衣宵が先に答える。だが、そんな答えで正解な筈がない！

「正解ー！」

「正解なのおっ！？」

意外な返答に俺の脳内ツツコミが炸裂中。容量が大きすぎるから思考には出さないが。

「何故なら、私はどんな能力か聞いたのじゃなく、どんな能力だと思うかを聞いたんだよ。だから、予想を言えばそれで正解なの」

酷いクイズだこれは。

「これは嫌がらせか？俺に対する嫌がらせなのか？」

「子供の遊びを本気にするとは、大人気ないぞ」

数億歳でイジメをする奴に言われたくないね。

「ってか、俺のほうが明らかに年下だ」

「残念だが、私は人間年齢では小学一年生だ。だから、悟のほうが年上だし、希求よりも年齢が下だ」

そうだったのか？見かけは小学四年くらいだけどな。

「ん？」

俺は不意にちょっとした事に気がつき、希求の方を見る。

「ん、どうしたの？」

「ってか、何処を見てるんだ」

「いや、何でもない。言ったら、俺の性格を誤解される可能性がある」

これは真面目にあってはならない。

「大丈夫だ。私達は悟程度の発言で誤解をする事はない」

「本当か？」

「何より、私が気になるからねえ」

それなら大丈夫か。というか、悪い事でもないからな。

「希求が貧乳だから珍しくてな。俺の女性の知り合いは、半数以上がまったく胸がないんだ。確か、無乳って言うんだっけ？だから、ちよつと気になったんだ」

言っておくが、俺は過去に納と胸の大きい女性探しをしていたんだ。だから、大抵の胸は服を着けていても見分けられる。

俺の場合は更に、将来的にどのくらい胸が大きくなるかどうかも分かる。まあ、普通に生活した場合の将来的な大きさだが。希求は多少は大きくなるだろうが、成長しても貧乳だな。

主人公には不向きなスキルだが、持っていて損は無いと思う。

………そういえば、納と特星の胸の大きい女性を探そうと約束してたな。今更だが、馬鹿らしく思えてきた。でも、良い暇つぶしにはなる。いや、悪い暇つぶしだな。

「むにゅー？よく分からないけど、むにゅーが多いんだ？あ、でも貧乳は知ってるよ」

「良く分からなくても良いが、この変態は罰するべきだと思う」

「むにゅー」

いや、悪い意味じゃなくて、褒める意味で言っただけなんだが。

ってか、その発音が気に入ったのか、希求？

「ってか、誤解してる！俺は単に大きさについて述べただけだ！…あ、衣宵は無乳か」

「悪いか。別に私は気にしてないがな。というか、私にはこの位がちょうど良いんだ」

確かに言っちゃ悪いが、少しでも胸があったら衣宵には合わないと思う。将来的にも大きくはならないだろうから、安心して生活して大丈夫だぞ。

「さて、そろそろ帰るか」

「あれ？衣宵、勝負はしなくて良いのか？」

「十分楽しめたから、勝負は無しで良い」

でも、暇つぶしで事件を起こすのは止めて欲しいな。

「そういえば、未知を操ることで、ビルとかを消せるのは予想外だったな」

「ああ、あれの方法か？あれはコンクリートなどの材料を未知の物質だった事にしたんだ。だから、そういう物質のない星にどんどん変わっていった。もちろん、人の記憶にも影響するようにしたがな。ちなみに影響範囲は、この町を除く地球全体と、特星全体に影響させた」

だが、主人公である俺には通じなかったと。その他にも魑魅や魅異、

それに雑魚ベ一の浮遊要塞には影響がなかったようだ。

〈納の家〉

事件を解決したお祝いに、納の家で勝手にパーティを開催した。

結構な人数が集まって、現在は凄く賑やかだ。元幽霊や元非常食や元猫など、擬人化した奴や思考を読む秘書や時間を操る和風好きや小人とかも居る。わざわざ特星から来なくても良いのに。

衣宵は迷子になったが、公園に行こうとして、家に迷い込んだところを納が保護した。

他にもダンボール伝説で有名な校長や、仕事をサボる幽霊が、無料で料理を食べる事を目的に来ていた。それと事件に関係のない変態と、その連れの女子二人が浮遊要塞で参加した。

それに加えて俺達や事件を起こした奴が居るから、家の中は非常に盛り上がっている。特に変態が少女に抱きついてる時が一番騒がしい。

「ねえねえ」

不意に実体化したキールに呼ばれる。

「どうした？」

「結局、屋上に居た人じゃない奴は倒しにいくの？」

「それって、衣宵じゃないのか？」

意外な質問に戸惑って答える。

「だってさあ、私が見たのは明らかに人じゃない生き物よ。しかも、現れるのは夜中のみだったし」

「そうなのか？」

「そうなの」

これは、裏ボスとの勝負？

「でも、あの生物を操る人間が居ると思うの。地球では存在しない生物だったからね。というか、生物じゃない物から、生み出されたような感じの生物だったし」

要するに、そこら辺の物から作られたとか？

「そうだな、気になるから行くか」

現在は丁度夜だから、その敵も居るだろう。

だが、一人だと厳しいし、誰か連れて行くでしょう。

この中で一番強いのは間違いなく羽双だが、面倒だから断るだろう。その次くらいに強いのは悪魑魅だが、悪状態になるとは限らないから却下。その次に強いのは、……几骨さんか？

「出かけるのでしたら、ついでに社長を探してきてください。途中で会う可能性が高いですから」

先に思考読まれたし、行く気ないなあ。

それでいろいろあった結果、連れていくことにしたのは雑魚ベーだった。何故なら、こいつ以外は行く気がなかったから。

「さあ、新たな少女との出会いを目指して、頑張りますよおっ！」

「はあ、やれやれ」

く元・頂点の最上階く

「やけに簡単に到着したな」

「途中に少女は居ませんでしたねえ」

暗くてよく見えないが、相手が居ないか辺りを見回す。

誰か居たのでよく見てみると、最悪の相手だった。

「こんばんは」

「おや、魅異さんじゃありませんか。久しぶりですねえ」

一応言っておくと、此処は地球だ。これがゲームで、魅異が裏ボスならば、チートを使っても倒す事が不可能だろう。というか、俺ならゲーム自体を破壊する。

とりあえず、勝負する事は避けたい！勝負になっても、本気を出されたら死ぬ。というか、全てが無くなる！

「残念ながら、此処に居た人は何処かへ出かけたよ」

良かったあっ！この場合は、魅異が裏ボスの場所を教えるだけの可能性が高い！

「それで何処に向かったんだ？」

「空の上から辺りを探し回ってるよ」

空の上？それじゃあ、追いかけられないじゃないか！

「相手が空だとなあ」

「どうしようかねえ？」

「私が二人を飛べるようにしてあげようか？」

本当か！？……いや、魅異の事だから、何かがあるはずだ。

「ただし、今から勝負して私に勝ったらね」

「いや、無理」

「ちゃんと実力を合わせるから大丈夫だよ。ついでに勝負の時の身体状態を、特星に居る状態にしておいてあげるね」

「要するに、不老不死という事ですネ」

「でも、この勝負と、この後の勝負だけだよ。しかも、空中浮遊も今回とこの後での勝負で使えるよ」

嬉しい効果だが、それだけで魅異を倒せるか？

「結果はやってみないと分からないよ。点滅、瞬きの玉」

魅異は光ってる玉を出すが、すぐに消えてしまう。

「消えてしまいましたねえ。それでは、私からいきますよおっ！」

「って、アホ！」

魅異に突進していく雑魚ベーの目の前に、消えてた玉が現れる。

「え？」

「ドカアッ！」

「ふげふうっ！」

玉が見事に雑魚ベーに直撃。恐らく玉は、金属か何かだろう。

「あのなあ、技名を聞けばあの位は予想できるだろ」

「ええ、でも、こういう展開は慣れてるから平気ですよっ！」

まあ、不老不死状態だから大丈夫か。

「最近の流行通り、遠距離攻撃でいくのが安全だ。って、うおっ！」

点滅する玉が真横を掠っていく。

会話で忘れてたが、点滅する玉が飛んでるんだったな。

「さて、水圧連射砲！」

「必殺、羽ばたきの女子小学生天使ですよっ！」

水圧連射砲は、水圧圧縮砲の水の弾を小さくして、連射で撃てるようにした技だ。

雑魚ベーの変な名前の技は、カムという高熱の気体の球を一度に大量に飛ばせる技だ。飛び方や形にバリエーションがある。ちなみに風などの抵抗を受けない。

「お、攻撃してきたね。十字、二重十字」

俺から見て前と横と両方の前斜めから、大量のレーザーが飛んでくる。

「おっと」

危なく当たり掛けるが、何とか回避。避けれる場所が少なすぎると
思う。

「あちゃちゃちゃっ！」

雑魚ベーが避けれてないが、大丈夫そうなので無視。

「どんどんいくよ。基本、強力な者の基本難関度」

魅異は大量の気体の球を撒き散らす。

「熱っ！水蒸気かこれ！？」

流石に避けきれず、何発かに当たってしまう。

「水蒸気の塊なら飲み込めば！……ほぶ熱うっ！」

だから、熱いって言っただろうが。

「そろそろ、疲れてきたかな？消去、白紙の書類」

魅異は大量の巨大な書類の厚紙が辺りに飛しまくる。

「何ですか、これ？」

雑魚ベーが書類に触った途端、雑魚ベーが消え去る。

「消えた！？まさかの心霊現象か！」

「私の技で消去したんだよ」

一撃必殺じゃないか？

「ふう、死ぬかと思いましたねえ」

「うおっ！急に現れた！」

「本来なら、小説や漫画でいう一話分で復活するんですが、調子が良いから早く復活しましたねえ」

分かりやすい例えだが、調子の良さは関係ない気がする。

「そんなに調子良いなら、私も派手な技でいくね。勇者流技、勇者光線」

レーザーのような技を連射してくるので、空中に逃げる。

おお、本当に浮けた！移動したい方を頭に浮かべれば、その方向に移動できてるぞ！これが魔法使いとかの気分か！

「あれ、光線なのに、この技は光属性ではありませんねえ」

「見かけが似てるから、技名に光線が付いてるだけだよ。普通に光や氷や土属性の勇者光線も出せるけど、属性の決まった攻撃は好きじゃないんだよね」

土で出来た光線ってどんなのだよ？

「ずっと同じ技ってのも面白くないですねえ」

攻撃を避けきれてないが雑魚ベーがそういう。俺も水圧連射砲で攻撃し続けているが、たいした効果がない。ってか、魅異に効果がある技なんて無いだろう。

「まあ、気分転換で技を変えての攻撃も良いか。合成魔法弾、暴風雷炎弾！」

「必殺、ジャンピングキックですよおっ！」

俺は合成魔法弾で、雑魚ベーは十八番の回転キックで攻撃する。だが、魅異は体を反らして回避する。

「隙有り。勇者流技、勇者魔法砲」

「ズガアアアアアッ！！」

直径数十メートルくらいの技を放つ。例えるならば、漫画とかの巨大戦艦の主砲から放たれる光線みたいな感じだ。

「見掛けが中心の技だけど、それなりに強力じゃなかった？」

「ゲホッ、見掛けは技の強さに比例すると思いますけどねえ。超強力でしたよ」

「ゴホ、ゴホッ、俺も同じく」

「まあ、漫画とかを見ればそう思うよね。さて、次の攻撃で最後にするよ」

俺達は見事に黒焦げ状態だ。だが、余裕万全の会話は出来る。

「次で最後ですか。なら悟さん、次の攻撃を協力して防ぎましょう！」

「ああ。この雑魚ベীগードで防げれば良いんだが」

「そうですねえ。…って、ええええええっ！」

「じゃ、避けないでね？ 魅異流技、ドラフル！」

「キラリン！」

魅異は建物の中に入り、情けない効果音に合わない非常に大きな技を放った。範囲は広すぎて分かりにくい、直径で数十キロくらいはあると思う。

「おがはふへいいっ！」

雑魚ベーを盾にしているが、俺達は技に飲み込まれているので意味がない。ってか、発射してから時間が長い！ 恐らく、ワザと長く続けて撃っているのだろう。ってか、雑魚ベーがうるさい。

数分後にその技は終わった。冷静に思考で考えれる俺を、流石は主人公と言って自分を褒めたい。

「さて、私は負けたからこの辺で帰るね。敵の居る場所は、生命の泉だよ」

それだけ言って魅異は飛んでいった。

「悟さん、どうして日本に、そんなファンタジックな場所が存在するのですか？」

「巻津川市には、変な地名の場所や建物が多いだけだ」

「生命の泉」

「生命の泉はまだですかー？」

「あー、もうすぐだ」

泉だけに町から外れた場所にあるらしく、空を飛んでも向かうのは時間が掛かる。……ん、なんか聞こえるな。

「変わった国のお姫様、不思議な力を使い、あらゆる人に挑んでいく、それでも勝つのはお姫様」

あそこで歌を歌ってる奴が勝負の相手だな。

「あの声と歌はもしかして、東武さんですかあっ!？」

「ほう、貴様達か」

「って、あの時のナルシスト貴族!」

歌を歌っていたのは、伝統深き空き地で会った東武だった。

「貴様達のような雑魚風情が何のようだ？」

「勝負に来てやったぜ！」

「退屈潰しですよっ！」

退屈ではないって。

「ほう、勝負か。一人ずつではハンデがありすぎるから、二人同時に相手をしてやろう！俺様の新の力を冥土の土産に見せてやろう！」

魅異の能力で地球でも不老不死だけどな。

さて、とりあえず此处だと動きにくいな。

「雑魚べー、空中に移動するぞ！」

「分かりましたよおっ！」

「お前達でも飛ぶ程度は出来るようだな」

東武も俺達を追って空中に来る。魔法を使えるだけあって、空も飛べるようだな。

「いくぞ、空気圧連射砲！」

「私は援護しますねえ」

「炎命、不死身鳥」

東武は鳥の形の炎を生み出す。おおー、凄いな！

「これが俺の能力で、魔法に生命を持たせることが出来る！もちろん、魔法で出来ているから死ぬ事はないし、予め命令しておけば、自分で判断して自分で戦う。いけ、不死身鳥！」

不死身鳥は炎を撒き散らしながら、辺りを飛び回る。

「あちゃちゃちゃっ！」

雑魚ベーは炎に当たるの早いし。

魔法生物は死ぬ事がないなら、東武に攻撃して疲れさせるのが先決だろう。

「実力の差を知れ！」

東武自身も攻撃をしてくるが、なんとか避ける。

不死身鳥は自分で動くから、東武も同時に攻撃出来るのか。

「なるほど、回避だけは一般人並という事か。命滅、炎々の炎」

不死身鳥自身が巨大な炎となり、分裂して俺達の元に降り注ぐ。

「うおっ、これは危ないな！」

服に火がついたが、高速浮遊で消す。

「光命、高熱人」

光で出来た人間を呼び出す。

高熱人はレーザーや光の球を連射してくる。しかも、光速の速さらしいので、雑魚ベアーを盾にして東武に攻撃する。

「目の前がキラキラしますよおっ！」

「我慢しろ！」

「目の前キラキラだと？……眩しいという事か！ならば、更なる眩しさを喰らうが良い！命滅、全方向光線！」

高熱人の体から、光線が辺りに乱射される。

だが、何故か光速ではなく、回避できる速さだ。

「どうして、光速の光線を撃たないんだ？」

「貴様達が回避できるように速さを抑えてある。要するに貴様達などこれで十分だからだ！」

簡単に言えば、俺達を甘く見てるという事か。

「合命、泥々花々」

辺りに泥で出来た花の形の巨大生物が現れる。

「おお、綺麗な花ですねえ」

「綺麗な花以前に泥だろ」

「ふん、花だからと油断していると、痛い目を見ることになる。あの花は泥の種を発射するが、毒性などはないから安心するが良い！」

別に教える必要は無いんじゃない？

泥の種は回避が楽だが、雑魚ベーは相変わらず回避が出来てない。

「命滅、地形を変える泥の竜巻」

泥の花が回転して大きな竜巻を発生させる。

「貴様達には最強に近い力を見せてやろう！現れろ、平面宇宙の翼竜、ゲニウス！」

「はいはい」

「普通に喋ってるし！」

竜が普通に喋っているの思わずツツコミを入れる。

「え、竜が喋るのは変なの？」

「俺はこの世界で竜と喋っていないから知らんが、恐らく変なのだろうな」

ああ、変だ！

「特星では普通でしたけどねえ」

雑魚ベー、特星に普通なところはないと思え。

「それにしても、普通に言葉を喋れるとは、驚きだ」

「ふっふふーん、宇宙の天才竜と呼ばれる私には、この程度は簡単だったけどね。漫画とアニメを一ヶ月見る事で完璧に日本語を覚えただよ！」

漫画とアニメだけで覚えるのも、ある意味凄いな。

「お喋りはそこまでだ！ゲニウス、この雑魚達を蹴散らせ！」

「はい！青銅、飛び散る青銅剣の息」

ゲニウスは銅の剣を口から飛ばしてくる。どういう仕組みだよ？

「どうせ避けられないだろうから盾になれ！必殺、雑魚ベーガード！」

「のぎゃふげえっ！」

痛そうに叫んでるが、不老不死だから大丈夫だ。

「ゲニウスは翼竜であると同時に魔法使いで、今、口から飛ばしてる剣も魔法で作られたものだ」

「東武様、敵に秘密を教えるのはどうかと思います」

「雑魚達への冥土の土産だ！」

「でも、私の個人情報でもあるんですけど」

「俺の知った事ではない！…だが、一応後で何か奢ってやろう」

個人情報というより個竜情報だな。

「時間が惜しい。ゲニウス、あの二人を吹き飛ばせ」

「任せてください！魔造、エクサバースト」

相手が技名を言い終わる前にエクサスターガンを取り出し技名を叫ぶ。

「エクサバースト！」

相手のエクサバーストを相殺する。密かにエクサスターガンを持ってきて良かったあ。

「同じ名前の技だと？ゲニウス、奴の銃の技はお前のエクサバーストと同じか？」

「威力的に同じだと思いますが。その人、どうなのか詳しく教えて」

俺達には敬語無しか。

「これはテレビ局の商品で貰った物だ。だから、それ以上の事は知

らないぞ」

「なるほど。東武様、テレビ局の商品で貰ったらしく、それ以上の事は知らないようです」

「言い直さなくても聞こえている」

そりゃそうだ。

「まあ良い。今日のところは帰るぞ」

「ちゃんと奢ってくださいよ」

「つて、待て！」

「断る」

即答しやがった！

東武はゲニウスに乗って飛んでいく。

「それでは私達も帰りましょうか」

「あれ、居たのか、雑魚べー？」

「さっきから居ましたよおっ！」

その後、家に帰った俺は予想してた事実を聞かされるのだった。そう、妹達と納が特星に引っ越してくる事を。

おっ、今回はシリアス的に終われそうだ！え、俺のせいで雰囲気ぶち壊し？主人公だから良いんだよ！

六話 祭りだ！デートだ！戦いだあっ！

@悟視点@

「祭りだ！デートだ！戦いだあっ！」

「いや、祭りで何と戦うんだ？あと、デートじゃないから」

祭りだと大騒ぎしているのは、姫笹。俺の妹の内の一人である。

ちなみに今の季節は見事に冬である。この季節に祭りをする人は、特星内の全学校を仕切っている校長以外に居ない。気紛れでやっているのだろうが、毎年、結構な人が集まるぞ。

他の三人の妹の内、二人は寒いからコタツに引きこもっている。そのまま大人になって働かないとか言い出したらニート決定である。三人のうちの一人は言うまでもなく、絶賛行方不明中だ。雪山で遭難とかしている可能性が冗談抜きであり得る。

姫笹だけは元気に祭り参加の意思を見せている。元々、俺は一人で行くつもりだったので、ついでに連れていくことにした。

そうそう、姫笹の特殊能力は水を操る能力で、同じ能力を持つ雨双の所に特訓に行くときがあるようだ。だが、その度に変態に気をつけろと言わなくてはならない。

ちなみに別の大陸なのに雨双の所へ行ける理由は、校長の波動によって一瞬で行き帰りができるからだ。

「よし、準備完了！早く行こう、お兄ちゃん！」

「ああ」

お兄ちゃんと呼ばれる事にはまだ慣れてない。だが、氣分的には結構嬉しい。普通に純粋な意味での嬉しさだ。

（特星大祭り会場）

校長に頼んで別の島に送ってもらった俺達は、祭り会場に到着した。その際に校長に一兆八千億の借金の事を言われたが、流石にまだ返済は無理なので断った。

「島でやってるとは知らなかったな」

「島としては小さいけど、祭りをやるには大きいね」

姫笹の言うとおり、島自体は他より小さい。だが、島全体が祭り会場らしい。

「あ、おい！」

屋台の店から声が聞こえる。

「お前は非常食じゃないか」

「千華魚よ！って、そっちの子は？もしかして、拉致してきたの？」

「何でそうなる！？俺の妹だ！」

「そうなの？兄に似ないで可愛いね」

兄が可愛かったら相当気持ち悪いぞ。

「ところで、金魚すくいでもやらない？」

「同じ魚に売られるとは、此処の金魚は救いようがないな」

「おっ、上手い事言うね、お兄ちゃん」

「現在は立派な人間よ！寿命は人間以上だけどね」

そういえば、どうやって人間になれたんだ？

「お兄ちゃん、金魚すくいをやって良い？」

そんな心配そうな目で見られたら、駄目と言えなくなる。

「別に良いぞ。一回何セルだ？」

「本当は百セルだけど、特別サービスで半額で良いよ」

お、結構気が利くな。

「でも、看板に五十セルって書いてあるから、元々の値段が五十セルじゃないの？」

「って、しまった！」

なるほど、普通よりも安いと思わせる作戦か。

「そうか。なら、半額の二十五セルで良いな？」

「ちょっと待って！その看板は前の金魚すくいの店のなの！」

明らかに嘘だ。だが、普通は百セル以上が金魚すくいの相場だし、五十セルで別に良いか。

「なら、千セルだ」

「毎度あり。金魚すくいの網を五十本ね」

水槽の中の金魚はかなり多い。

妹が金魚すくいをやってる間は千華魚と話をする。

「ところで、どうやって魚から人間になったんだ？」

「人間に捕獲されかけたところを魅異って人に助けってもらって、そのついでに人間にしてもらったの。魅異は擬人化のほうが目的だったみたいけどね」

魅異が原因か。しかし、何の目的で擬人化をしてるんだ？

「恐らく、他の生き物を擬人化させたのも魅異よ」

「だろうな。ってか、この会話も聞かれてるだろうし」

本気でもう少し人間らしくなればなあ。

「そうすれば魅異は俺の嫁になるのに」

いきなり出てくるな、ボケ役。

「魅異は俺の嫁だ！」

分かった分かった。お前以外に魅異を狙う馬鹿は居ないから、お前の嫁で決定で良い。

「当然だな。じゃ、また今度」

何で現れたんだ？出番が少なくて現れたか、魅異は嫁宣言をやりたくて現れたかだな。まあ、恐らく後者だろう。

「そういえば、金魚はどうやって集めたんだ？」

「他の屋台の金魚にばれないように交渉して、網ですくうフリをして金魚入れに入ってもらったの」

「酷いな、オイ」

じゃあ、金魚の仕入れは最初の金魚代だけか。って、よく金魚も冬まで無事だったな。俺が育てた時は一週間で全滅だったぞ。

「って、魚としての能力は残ってるのか？」

「うん。エラ呼吸はできないけど、水中や宇宙で息ができるよ」

魚って宇宙で息できたか？

「うー」

「あれ、姫笹、どうした？」

姫笹がしゃがんで落ち込んでいる。横には破れた網が積んである。

「一匹も取れなかった」

「そ、そうなのか？」

まさか網が食物繊維で出来てたとか？

「俺もやってみるか。千華魚、網をくれ」

「五十セル」

「抜け目ないな」

で、とりあえず挑戦したら七匹取れた。おお、俺の中では過去で最高記録だ。

「網自体は普通みたいだな」

「当然よ。網もさっき話した金魚屋からおまけで貰ったんだから」

それなら姫笹の実力不足か。

「凄いね、お兄ちゃん！」

「まあ、俺はこういう事は得意だからな！」

ちなみに過去の最高記録は二匹だ。

「とりあえず、この七匹は家で飼おう。もしかしたら擬人化するかもしれないし」

「あ、雨双ちゃんだ！おーい！」

カキ氷店に雨双が居るのを姫笹が発見して走っていく。って、変態に気をつける！

「ん？あー、姫笹と悟か」

「姫笹さん発見ですよっ！」

ほら、雑魚ベーが飛び出してきた。

「わわっ！氷技、流水の滝！」

姫笹が雑魚ベーの上に滝のように見える量の氷を降らす。雑魚ベー

は氷の重さと衝撃で、地面の中に氷と共に埋まっている。

「雑魚ベーの事は非常に残念だけど、ご冥福を祈るんだってば」

「あ、アミューリーちゃんも居たんだ」

奥からアミューリーが現れ、埋まった雑魚ベーに祈りを奉げる。でも、天国や地獄に少女が居たら、間違いなく雑魚ベーは追い出されるだろう。

「ありがとうございますねえ、アミューリーさん！」

「しつこい。特技、アイススイート」

氷の中からアミューリーに向かって雑魚ベーが飛び出すが、雨双の巨大冷凍光線により、雑魚ベーは何処かへ吹き飛ばされる。

「姫笹、さっきの反射神経は良かったが、もう少し強力な技で仕留めないとタフな奴は気絶しないぞ」

「なるほど！でも、私は雨双ちゃんのアイススイートみたいな技は使えないよ」

「それなら特訓して覚えれば良い。人が使ってる技より、自分に合った自己流の技の方が使いやすいからな。そうだな、少し練習してくるか。アミューリーに悟、悪いが店番を頼む」

店番を頼んで二人は何処かへ行く。

「カキ氷でも食べるんだっけ？」

「お、食べたい！味は何味がある？」

「特にないんだってば」

よく見ると、味なしカキ氷と小さな文字で書いてある。

「いや、売れないだろ」

「他にカキ氷店がないから、そうでもないんだってば」

「って、何で祭りには必需品のカキ氷店が一件なんだ？」

味なしカキ氷も結構美味かった。

「この会場に他の氷を使える特殊能力者が居ないからだってば」

雨双と姫笹以外に居ないのか？

「だが、後で来る可能性があるんじゃないか？」

「それはないんだってば。重要関係者で他に氷を操る能力の人は居ないんだってば」

重要関係者？

「もしかして、祭りに来れる人は決まってたのか？」

「そうだってば」

あー、その事は気付かなかったな。祭りの割には人と店がそこまで多くない事は気になってたけどな。

「例えるならば交流会だってば」

「何でわざわざ祭りだとカモフラージュしてるんだか。ってか、何でアミューリーが知ってる？」

「職業上の何とかだってば」

職業上の都合で情報が入るのか。

「はあはあ、おーい、都合の良いタイミングで練習は終わったぞ」

「ああ、楽しかったー」

いろいろと自覚した言い方の雨双と元気な様子の姫笹が戻ってくる。って、雨双がだいぶ疲れてるみたいなんだが。

「おかえりだってば」

「何をやってたんだ？」

「まず、基礎体力作りの為に寺を三周程走って、海岸で海に対しての技の練習をしてたんだ。ってか、教える側の私の方が疲れた。主に帰りの全力ダッシュが！」

海岸で技の練習をするなら、走るのも海岸ですれば良かったんじゃないか？

ってか、カキ氷を食べてる間にそんなに出来たのか。

「雨双ちゃんは運動苦手なんだね。私は小学校の運動会では毎回一位だったよ」

「私は特星中を歩き回った事はあるが、走った事はあまりないんだ」

「なら、私が技を習いに行ったときは一緒に走ろうね！あと、アミユリーちゃんも！」

「ええー、勘弁してくれ」

「同じくだってば」

三人だけで話が進んでいる為、話に入り込めない。

「失礼」

「ん？ああ、どうぞ」

通行人が居たので俺は横に退く。あれ、何処かで見た事があるような気がするな。

えーと、確かスーパーで大量の品物を持ってたな。

「あー、あの時の泥棒か！」

「あら、私の事を知ってるの？なら、長居は無用ね」

って、俺の財布が無くなってるし！泥棒からスリに転職したのか？

「つか、逃げるな！そして財布を返せえっ！」

「両方却下よ！」

以外に足の速い泥棒。それに対して、俺は疲れて速さが落ちてる。

「って、もう姿が見えないし」

「誰のですか？」

聞き覚えのある声が聞こえたので横に振り向く。

「羽双！」

「何ですか？あと、唾が飛ぶのでゆっくり喋ってください」

三色団子を食べてる羽双だった。

「実は財布を取られたんだ！だから、取り返すのを手伝ってくれ！」

「面倒なので嫌です」

やっぱり無理か。

「そんな事言わずに手伝ってくれよ」

「暑苦しいし、和服がずれるから纏わりつかないで下さい。殴りますよ？」

「スミマセン」

前に羽双に殴られた事があるが、痛すぎて気絶した程だ。全力だったら、特星でも骨が碎けるぞ。ってか、星を割る事が出来るんだっ
たな。

魅異の一番弟子だからって、極端に強いのはおかしいと思う。

「なら、見かけたら時間を止めてやってくれ！姿は覚えてないが、
二十歳くらいの女性だ」

「あの人ですか？」

「え？」

よく見たら、こっちに向かってさっきの泥棒が走ってきた。

「って、追いつかれた！？」

「あー、祭り会場を走り回ってたから、迷って戻ってきたのか」

「ああ、貴方ですか」

あれ、知り合いか、羽双？

「って、貴方は私の時間を止めた奴！ついに現れたのね」

「会った事あるのか？」

「ええ、勇者社に行った時に通行の邪魔だったので」

「あの日から三日三晩も動けなかったわ。そして、飲食店の割引券が期限切れで使えなかったのよ」

話は俺に関係ないから気にしないでおく。

胸は普通くらいで、将来的にもこれ以上になる事はないな。だが、几骨さんよりは大きめだな。使い道は少ないがこの主人公の能力は便利だ。

「あら、そっちの人からネタ的な危険性が出てるわ」

「って、俺？」

俺の能力に気付いたのか？ いや、この能力に気付ける者は少ないはず！

「とにかく、割引券の恨みは此処で晴らす！」

「その前に財布を返せ！」

「ふっ、世界中の物は全て私の物よ！」

うわー、なんて奴だ。

「さて、覚悟しなさい」

「グサァッ！」

「痛っ！」

なんの前触れもなく、羽双が爪楊枝を相手に投げつける。

「とりあえず、名乗る時間だけは与えてあげますよ、まったく」

凄く嫌そうに羽双が相手に名乗る時間を与える。

「私はセーナ」

「ドガアアアアッ!!」

相手が名前を言った瞬間に羽双の蹴りが直撃する。本気ではないだろうが、それでもセーナは近くの人の居ない屋台を突き抜けて、森の近くに突っ込んだ。

「容赦ないなあ」

「かなり手加減しましたよ」

それだけ言って、羽双は何処かへ行ってしまった。

「さて、財布を取り返さないとな」

気絶しているセーナから財布を取り返す。

「お、お兄ちゃん？」

その時に後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「あ、姫笹」

あー、そういえば途中から忘れてたな。

見たところ、さっき此処に到着した様である。

これは確実に勘違いを招くパターンだと、俺の主人公の勘が教えてくれる。

「お兄ちゃんが女の人を眠らせて、胸を覗いた挙句に財布を奪って
るよおっ！」

「だああああっ、誤解だ姫笹！ ってか、胸は覗いてないから！」

姫笹が大声で祭り会場を走り回って三十分。俺は祭りの参加者の一部の者によってテープで縛られていた。

「ってか、何故にテープ？ 縄とかで縛れば良いだろ」

「悟さんは縄で縛られる方が嬉しいですか？」

現在は祭りに遅れてきた、魑魅によって事情聴取中である。

ってか、その質問はいろいろと誤解を招きそうだ。むしろ誤解を招かせるための質問だろ。

「テープは粘着質があるから縄の方がマシだと思うが、どっちにし

でも縛られて嬉しい事はないな」

「まあ、人の胸を覗く時が一番嬉しい悟さんですからね」

「だから誤解だって！」

いつもは見方の魑魅だが、敵に回すと手強い。

ってか、なんで今回は俺の意見を信じないんだ？

「ですが、今回の問題は目撃者が居るんですよ。姫笹さん、目撃当時の事を話してください」

「うん。私が雨双ちゃんとアミユリーちゃんと話してる間に、お兄ちゃんが居なくなってたんだよ。しばらく話してからその事に気付いて、私はお兄ちゃんを探してたの。そして、凄い音がしたから音の方に向かったら、お兄ちゃんが女の人からお金を奪ってたんだよ」

「という訳で、悟さんの犯行は目撃されてたんです」

というか、目撃された事は知ってるし。

「って、胸の事は言ってなかったぞ！」

「私にはお兄ちゃんが胸を覗いてる様にも見えた」

姫笹、それは見間違えだ。

「さて、今からは皆さんに判決を出してもらいます。ちなみに財布は悟さんでしたが、胸を覗いた事を重点的に意見を出してください」

い」

結局、それが中心かよ！

「私は許すべきだと思うぞ。悟は雑魚ベーと同類だから仕方がない」

「よく分からないけど、許すべきだってばー」

雨双とアミューリーが許すべきだと主張する。

雑魚ベーと同類というのが気に触るが、許す側の主張なので文句は言わない。

「看板の秘密を見抜いたから罰を与えるべきよ！」

「私は借金を返してもらえませんでしたので、罰を与えるべきだと思います」

千華魚と校長が罰を与えるべきだと主張する。

どっちも私情で決めてるじゃないか！

次は雑魚ベーの番だが、相手が少女ではないから許すべきだと主張するだろう。それによって俺は許されるはず！

「少女以外の胸に興味を持つのは論外ですねえ。罰を与えた方が良いいと思いますよおっ！」

って、論外はお前だあっ！

「多数決により罰を与えるで決定です。…と、言いたいところがすが、私は悟さんを信じています。だから罰を与えない方が良いと思う派です!」

それなら、最初からテープで縛るな。

「意見は半分ずつなので、私と寺に肝試しに行くという事で決定です!」

「何故そうなる!?!」

「嫌なら縄で縛って罰を与えます」

選択権を与える気はないのか?

「どうでも良いが、冬に肝試しは合わないだろう?」

「どうでも良いなら問題ありません!」

く幽霊住居の記紀弥寺く

月が見事な夜、俺と魍魎は一つの寺の前に居た。

「おー、噂通りの大きな寺ですね!」

「名前はあるのか?」

「正式な名前は無いらしいですが、住んでる人の名前から記紀弥寺と呼ばれてるらしいですよ。他にも、勇者社の西にあるから西の寺とも言われてるそうです」

この島にも勇者社はあったのか。

「幽霊住居があだ名ですし、本物の幽霊が出ると思いますよ」

本物の幽霊なら前回の事件の時に見た気がする。

「……………お客さん？」

「つて、ひええっ！本当に幽霊が出ましたよ、悟さん！」

「落ち着け。どう見ても普通の人だろ」

寺の中から出て来たのは、ほんわかオーラが出ている少女。少女が特星で平和ボケしているのは危険だぞ。

「……………誰ですか？ちなみに今は閉店時間ですけど」

「寺に閉店時間という言い方は合いませんけどね」

「……………女の人の方は能力的な強さを秘めているんですね。男の人の方はいざという時にどうにかする、もしくはその後になんとかなる事が自動で起こるようです」

急に何を言い出すんだ？

「……女の人の強さは分かりませんが、男の人の方は極めてアニメや漫画の主人公に近い体質があります。この事を知っているだけで私の有利度は高くなるんですよ」

「主人公に近いのは当然。何故なら、俺は本物の主人公だからだあ
あっ！」

目の前の少女に指を向けて大声で宣言する。

「おー、悟さんの嬉しいメーターが増えていますね」

魑魅が言うとおり、俺の嬉しさメーターは上限を突き通す勢いで上昇中だ！

「……………なら、主人公には必要な決め言葉や口癖や名言はありますか？」

「そんな事は答えるまでもないな」

「確かありませんよね」

少女の質問を曖昧な回答で流そうとするが、魑魅が真実を告げる。

ああ、そうだよ。

俺には決め言葉や口癖や名言なんか無いんだよ！

「……大丈夫ですよ。大した特徴はありませんが、貴方の質には合わない大きな事件に巻き込まれる素質はあるみたいですから」

フォローにも聞こえるが、良く聞いてみると馬鹿にしているように聞こえる。

「私は少なくとも、誰かを命がけで守る状況は起きないと思います。悟さんより強い女子は多いですから」

落ち込んだる所に魑魅の現実的な発言。

俺を鬱の底に叩き落したいのか？

「……とにかく、中には入らせません。強制突破をする場合は戦闘で止めます」

相手はできれば戦いたくないようだ。

「ってか、良く考えたら、俺って恋愛フラグとかはあっても、イベントが無いんだよねあ」

「とりあえず、寺の中に侵入しましょう！善技、正しき事への導きです！」

落ち込む俺を無視して、魑魅は相手に攻撃をする。

「……有利、運良き状況」

相手が技名を言うと、急に風が吹き始めて魑魅の攻撃が外れる。そして寺の壁に当たった攻撃は跳ね返り、魑魅の方に向かってくる。

「ひえっ！」

しかし、魑魅は跳ね返った攻撃を直前で回避する。流石に回避能力が高いだけの事はある。

そして攻撃は魑魅の少し後ろに居る俺に向かってくる。

「主人公の力を見せてやるぜ！主人公の特権、どれだけやられても生き残る身体！」

俺は避けずにその場に立っている。

「げほふぁっ！」

そして技が直撃した。

「うっ、な、何とか生き残ったぞ。こ、これで俺が主人公であることが証明されたな」

「あのー、特星では主人公以外の人も死なないんですけど」

「……自殺する程の悩みがあるなら、人生相談所に行ってみてはどうですか？」

何故だか自殺志願者と思われてるし。

「……私は戻りますが、出直すことを考えてくださいね。幽霊でも寝不足になる事がありますから」

少女は寺の中に入っていく。

って、さっき幽霊だと認めたよな！

「幽霊は気になるが、今は主人公を辞めたい」

「なら、雑魚ベーさんや校長に代理を頼みますか？」

「ああ。……って、ふざけるなあああああっ！あの二人に頼んだらとんでもない事になるだろうが！」

例えば、物語の本筋が少女探しやお金探しになったりとか。

「嫌なら早く進みましょう。もしかしたら、私達の恋愛イベントがあるかもしれませんし！」

「それはない」

寺に侵入してからは慎重に行動をする俺達。理由は寺の中には本物の幽霊が寝ていたからだ。

「幽霊って早寝なんですね」

「そうらしいな」

現在の時刻は七時を過ぎたばかりだが、幽霊達は寝ているのだ。

幽霊らしく真夜中のみの活動なのか？

「早寝ではなく、祭りで遊び疲れて寝ているだけだ」

いきなり幽霊が現れたが、慣れたので驚かない。

幽霊は小学生ぐらいの女の子で、寺の入り口に居た少女と同年くらいだろう。

「あ、幽霊だな」

「幽霊ですね。ほら、よしよし」

「あっ！あー、以外に良い気分だ」

魑魅が幽霊少女の頭を撫でる。

「って、頭を撫でるな、頭を！」

「なら、胸を撫でて良いですか？」

それは無理だろう。

「断る。私の役目は侵入者の退治だ。さて、まずは目的を言ってもらおう」

「特に無いぞ」

「デートです！」

俺の言った言葉を完全封殺して、魑魅は大嘘を言う。

「で、デート？」

「そうです！ 私達は他人の敷地に問答無用で上がりこみ、そこでデートをして帰るんです！」

なんて迷惑で嫌味な行為なんだ！

「迷惑すぎる」

「まったくだ」

幽霊少女の意見に同意する。

「そうそう、私は千宮せんぐう 神酒みきだ」

「俺は完璧なツッコミ役的主人公、雷之 悟だ」

「さっきも言いましたが、悟さんとデートをしている神離 魍魎です。という訳で、邪魔するなら服を脱がせます！」

「どういう脅しだよ！」

魍魎の事だから本当にやるつもりだろう。

「無理だ。普通の人間は幽霊に触れない」

いやいや、頭撫でられてただろ！

「なら、遠慮しませんよ。正義、裸こそが正義」

超高速の光の球を撃つ魍魎。

ってか、嫌な正義だな、オイ！

〔変動、逆移動〕

〔スパアッ！〕

「つて、きゃあああっ！」

悲鳴を上げたのは魍魎の方だった。

光の球を神酒が跳ね返し、魍魎に当たったのだ。

〔私の能力は動きを変化させる能力だ〕

光の球の動きを逆にしたのか。

ちなみに後姿しか見えないが、魍魎の技は下着すらも破る事が出来たらしく、魍魎は素っ裸の状態である。

「ひ、人の服を破るなんて最低です、神酒さん！」

お前が言うな。

〔私は魍魎が撃った技を跳ね返したただけだ〕

神酒はもつともな意見を言う。

魍魎は胸を隠してしゃがみ込んで恥ずかしがってる。

「大声で叫んだから、他の幽霊が来るかもしれないぞ。だから、今日のところは帰る事をオススメするぞ」

そういつて歩いていく神酒。

流石の魍魎も今日は諦めるしかないだろう。

「魍魎、今日のところは諦めるしかないだろ」

「正義、裸こそが正義です！」

「スパアッ！」

「きゃあぁっ！何のマネだ！」

「って、後ろ向くな！」

「うぁっ！」

神酒が後ろを振り向きそうだったので、忠告してやる。

危なく、いろいろと見えてしまうところだった。

ちなみに俺は冷静に説明しているが、内心とても嬉しかったりする。これぞサービスシーンの極みだ！

「いやぁ、私だけ裸なのもアレですから、つい仲間を増やそうと思
って」

「私は着替えを取ってくる!」

そういつて神酒は走って何処かへ向かう。

「あ、私の分も貸して下さい!」

魑魅もそれを追いかける。

「……賑やかですね」

「って、入り口に居た少女の幽霊!」

「……私は毬いが 記紀弥ききよと言います」

「俺は主人公の雷之 悟だ」

名前を名乗ってきたので名乗り返す。

「……一つお願いがあるのですが」

「何だ?」

「……貴方の家の場所を教えてくださいますか?」

いきなりだな、オイ。

「そして、今度に神酒達と遊びに行って良いですか?」

「別に構わないぞ。その時、家に居るかは分からないけどな」

「……………ありがとうございます。私達は見ての通り幽霊なので、遊びに行ける場所が少ないんです。人間になってる間は問題ないんですけどね」

人間になったり幽霊になったりできるのか。

「…………でも、一度会っただけなのに家に行って良いんですか？」

「別に問題ないぞ。俺は大体の知り合いに一回会っただけで、家の場所を教えてるからな」

または、教えてもないのに来る場合もあるな。

「ところで、此処の幽霊は夜に活動するのか？」

「…………基本的には人間と同じ時間帯の生活です。今回は祭りがあつたから早寝だけです。でも、一人だけ仕事のあるときに寝る幽霊もいます」

それは見事な仕事放棄だな。

「……………ところで、夕食は食べましたか？」

「いや、まだ食べてない」

「それなら、今日は此処で夕食を食べますか？」

「良いのか？それなら是非食べたい！」

その後、記紀弥と神酒とバスタオルを巻いた魍魎と俺の四人で夕食を食べて、ついでに寺に泊まったのだった。

ちなみに魍魎がバスタオルを巻いてた理由は、寺には記紀弥と神酒の服しかなかったかららしい。他の幽霊はそれぞれ家から持ってきてるらしい。

七話 迷子の秘訣は周りを意識しないこと

@悟視点@

「あ、希求じゃないか」

「むにゅー、確かに私は希求だよ。お兄ちゃんと会うのは久しぶりだねえ」

クリスマスなので町を散歩していたら、数ヶ月くらい行方不明の希求に出会った。

希求は俺の妹の中では一番背が小さく、顔も他の三人よりは幼い顔をしている。特殊能力は物理学を無視する能力で非質系だ。質系の能力に対してはほとんど無敵という優れもの。

ちなみに希求を恋人にする場合は、一部を除きランダムイベントなので注意が必要だが、今回は定期イベントだろう。

「今まで何処にいたんだ？結構心配したんだぞ」

「あれ、心配しててくれたの？」

「当然だ」

「当然なんだ？とにかく、ありがとう！」

おお、久しぶりに礼を言われた気がする。

「まあ、俺が一緒の間は迷う事もないから安心しろ」

「既に迷ってる気がするけどねえ」

「あー、確かに迷ってるな」

町を歩いてたはずなのに何故か森に居る俺達。希求と会ってから数十秒しか経ってないから、全力で走っても森に入ることとは不可能だ。

「一体、どうやって迷ったんだ？時間的にも無理があるはずだが」

「迷子の秘訣は周りを意識しないことだよ。だから、周りを意識しながら歩いたら迷わないんだけど、会話に夢中で周りへの意識が薄れたみたい」

「なら、周りを常に気にしておけば良いのか？」

「うん」

確かに周りが見えてたら、迷子になるまでの間が瞬間移動みたいに見えるだろうからな。いや、急に周りが光って違う場所にいつの間にか居るとかもある。

「昔は地球内だけだったけど、特星に迷ってからは様々な場所に迷ってるんだよ」

なるほど。希求は昔に特星に迷ったのか。

「ん？待てよ。それはいつだ？」

「去年だけど」

なるほど、一度特星に行ったから他の妹よりも幼女体型なのか！

「ねえ、先に進もうよー」

「そうだな。森は危険が多いだろうし、特星エリアの可能性があるからな」

「むにゅー」

念の為に思考内で再説明するが、特星エリアとは特星に元々ある自然だらけの場所で、モンスターが出て大変危険なのである。

あと、希求の言っている『むにゅー』は、無乳の意味を知らずに言っているだけである。原因を作ったのは紛れもなく俺だが。

く神門王国く

「どうやらファンタジックな世界に迷い込んだようだな」

「綺麗な国だねえ」

希求の言ったようにこの国は見かけがとても良い。地面が芝生になっていて、家の壁が白い家がほとんどである。そして、此处を直線にいったところに城がある。

「あれ？」

希求が何かに気付いたような声を出す。

「どうした？」

「お城から人がこっちに吹き飛んでくるよ！」

人が吹き飛んでくる？そんなこと特星では当たり前だが、此処が特星じゃなければ大怪我だぞ！

「ふげふうっ！」

いろいろ考えてるうちに目の前に落ちてきた。上半身が裸で全体的に焦げたような跡がある。

「痛たたたっ、でも少女の攻撃だから嬉しいですねえ」

あれ、この男はもしかして雑魚ベーか！

「雑魚ベーかよ！」

「へ？って、悟さんじゃありませんか！何でこんな所に居るんですか？」

「迷子だ」

雑魚ベーは此処の事を知ってそうだな。

「雑魚ベー、此処は何処だ？」

「って、可愛い子発見ですよっ！」

希求が居たんだった！

「スラリ」

「って、のふあぁっ！」

雑魚ベーは希求に抱きつこうとしたが、すり抜けて地面に滑り込む形になった。

「すり抜けるのは予想外でしたねえ」

「大丈夫？ 全身が傷だらけだよ」

傷だらけ？

「って、此処は特星じゃないのか？」

「そうですねえ。此処は神門王国と言って、地球や特星のある世界とは別の世界にある国ですよっ！」

おー、俺達は異世界に迷子になったのか。

「って、何で雑魚ベーが居るんだ！」

「私は東武に暇つぶしで着いていたら、問題に巻き込まれただけですよっ！」

「東武も居るのか？」

「此処は東武さんの故郷ですからねえ。私も何回かきた事がありますよっ！」

そういえば、異世界から来たとか言ってた気がするな。

「どんな問題に巻き込まれたの？」

希求が地味に重要な事を聞く。

「って、そうでした！少し手伝ってくださいねえ」

「拒否権は？」

「断ったら、後々この世界の破壊に巻き込まれて死にますけどねえ」
重要問題すぎるだろ！

「分かったから案内しろ」

「任せて下さいよおっ！」

「むにゅー、私は話についていけないなあ」

はあ、問題に巻き込まれるんだろうな。これは主人公に多いイベントフラグのせいだ。

く神門城く

雑魚べーの話によると、非常に強い力を持ったお姫様が暴れているので大変らしい。

「あのお姫様は可愛いんですが、この世界を崩壊させる力を持っていますからねえ」

恐ろしい姫様だな。

「本当は心優しいけど、力を狙う人達に狙われ続けて世の中が嫌になったとか？」

希求、それは少しベタ過ぎると思うぞ。というか、そんなに真面目な理由である可能性は、俺の経験上でかなり低いぞ。

「結構合ってますけど、肝心な部分が抜けてますねえ」

肝心な部分ねえ。狙われたせいで好物のお菓子が粉々になったとか？

「狙われてるせいで恋愛ができないらしいですねえ」

「はい？」

意外な答えに俺は哑然となる。

「良い相手が探せないし、良いと思った相手がいても力が目的だっ

たりするらしいですねえ」

「俺的には微妙な理由だな。その姫の年齢は？」

「雨双さんやアミューリーさんと同じくらいですねえ」

十分に小学生じゃないか！

「明らかにまだ早いと思うぞ」

「ガスッ！」

「痛っ！何で蹴るんだ、希求！」

「いや、なんとなくだけどねえ」

仕打ちが酷い！

「この階段を上げれば姫が居ますよおっ！今は東武さんが止めてますけどねえ」

「世界崩壊レベルの敵だろ？魅異が居れば一撃で終わるんだけどな」

「私は長期戦の方が楽しいから、ワザと長引かせるけどね」

って、いつの間にか現れたよ。

「あ、魅異ちゃんだ！」

「もしかして、手伝ってくれるんですか？」

「まあ、死人が出そうな状況になったら、適度に手伝うよ」

実力がある奴に限って、こういう性格の奴が多いのは何でだろうか？

「恐らく、私とかが正義感が強かったりすると、すぐに敵が倒されるからだろうね」

「現実的な理由だな」

「それより、階段が長いよおー」

希求が流石に疲れてきたようだ。

「屋上までまだまだですけどねえ。良かったら私がお姫様抱っこで運びますよおっ！」

雑魚ベーが無茶を言ってるが、お姫様抱っこで体力持つか？

「良いの？」

希求が何故か俺に確認をとる。

「ああ、流石の雑魚ベーもこの状況だと何もできないだろうし、疲れたなら運んでもらって損はないだろ」

「お兄ちゃんは運べないの？」

「絶対に無理。そして疲れるから嫌だ」

「むにゅー、そうなんだ」

希求は少し落ち込んだ様子で雑魚ベーにお姫様抱っこをしてもらおう。

よし、なんとか恋愛フラグの回避に成功だ！

「なるほどね」

魅異がなんだか楽しそうな笑みを浮かべている。

言っておくが、魅異が俺の喜ぶことを一度もしたことはない。というか、俺が避けたい事をわざわざ実現させる嫌がらせをしてくる。

「おっと、足が滑ったよ」

「のふあっ！」

「うああっ！」

先頭の魅異が急に振り向き、雑魚ベーに見事なヘッドスライディングで突っ込む。魅異に突っ込まれた雑魚ベーはバランスを崩し、お姫様抱っこをしていた希求を後ろに飛ばしてしまう。

「って、危ない！」

俺はすぐに振り返り、飛んでる希求を落下の衝撃から守る為に飛び掛る。

言っておくが、此処は特星ではないので、この長い階段から転げ落ちたら大怪我をすることになる。

俺が気球の手を掴もうとした瞬間、希求が目の前から消えてしまった。そして俺は階段からヘッドスライディングのように落ちた。

「いやあ、私は能力で階段に戻ったんだよねえ」

今、俺が落ちた場所で魅異に治療をしてもらった。

俺は階段から落ちた後、魅異の能力で此処まで移動させてもらったらしい。希求は自分の能力で、階段から落ちる前に元の場所に戻ったようだ。

「魅異、さっきの技は？」

「魅異流技の休憩って名前の技だよ」

今はもう直してもらったが、落ちた後の俺の顔は傷だらけだったらしい。というか、脳にも明らかにダメージがあったな。

ちなみに魅異の魅異流技って変な名前の技が多い。

「魅異流技の種類ってどのくらいなんだ？」

「いくつかの例を挙げると、コンテニュー、物理学無視法、神離学無視法、魅異学完全法、勇者流技にも分類されるけど勇者連拳、後は魅異流技の通常攻撃技であるミネラルレーザーなどだね」

魅異学完全法？なんか変なのが増えてるんだが。

「魅異学完全法ってなんだ？」

「言うならば、完全無敵状態になれるだけだよ。気に入ってるけど、面白くないから使わないよ」

神離学無視法でも十分に無敵だが、それ以上もあるのかよ。

「でも、お兄ちゃんが飛びついてきたときは嬉しかったなあ。ありがとう、お兄ちゃん！」

あー、感謝の言葉は嬉しい。

「さて、話はそこまでにして先に急ぎますよおっ！あ、ちなみに希求さんのパンツの色は黄色でしたねえ」

普段なら殴ってやるが、特星ではないので今はやめておく。

く神門城の姫の部屋く

「東武、来てやったぜ！」

勢い良く扉を開けて叫ぶ俺。

「ほう、遅いと思ったら貴様達も居たのか」

そこに居たのはお姫様らしき小学生くらいの少女とティーを飲んでいる東武だった。

「って、凄く優雅に茶を飲んでる！」

あまりの予想外に思わず叫ぶ俺。

「ふん、疲れたから休戦中だ。少しそこで立っている」

そしてこの言い方。大急ぎで来て損した！

「あれー、貴方達は新しいお客さん？」

姫様らしき子供が興味深そうにこっちを向く。

「ああ。俺は偉大な主人公の悟だ！こっちが異世界にも迷って行く俺の妹の希求で、こっちは反則的な強さを持つ魅異だ。雑魚ベーのことはもう知ってるよな？」

自分の紹介のついでに希求と魅異を紹介する。

「私は神門^{みかど} 小巻^{こまき}。神門一族の血を引いてるんだけど、婚約相手を勝手に決められたから反抗してたの。でも、全力じゃないんだよ」

「流石に全力を出されたら、私でも敵いませんからねえ」

雑魚ベーが敵う相手って居るのか？

「そんなに暇なら全力で勝負してみる？」

「え、できるの？」

「この世界に影響が来ない場所で戦えば問題ないよ」

お、今回は魅異の戦闘が見れるのか？

「それは良いけど、相手はどうするの？」

「私と希求と悟の三人で良いよ」

「って、俺達もかよ！」

希求は能力でなんとかするが、俺は魔法弾を作れるだけだぞ！

「場所はこっちだよ」

魅異の後に続いてついていく。

「私達はどうするんですかねえ？」

「ふん、戦力外ということだろう」

く空中世界く

此処にどうやって来たんだ！

「わー、体が浮いてるよ！」

希求が驚きの声をあげる。

「此处では自分の動きたいと思った方向に自由に動けるよ」

東武と戦ったときのあれか！

「これは面白いわねえ。思考が途切れたらどうなるの？」

「脳が脚に命令を送れなくなるような状態だから、浮けずに下に落ちるね」

それは怖いな。

あ、本当に希求のパンツは黄色だ。

「じゃあいくよ。魔術、溶解のマグマ」

小巻の周りから大量のマグマが現れ、いろいろな方向に高速で流れていく。

「この程度なら防ぐ必要もないんだけどね。神離流技、天罰レベル」

「奥義、無効化」

魅異が強大な雷を相手に落としまくり、希求が相手のマグマをかき

消す。

おいおい、この二人は強すぎるだろ。

「俺も負けてられないな。水圧圧縮砲！」

岩でも碎ける水の弾が命中するが、大して効果がないようだ。

「本当に強いだね。なら、これからが私のターンよ！秘術、姫隠しの真相」

小巻を中心に辺りに光の刃が飛ばされる。

「勇者流技、勇者拳」

魅異の勇者拳が相手の攻撃をかき消し、そのまま相手に直撃する。だが、相手はまだ光の刃を飛ばし続けている。

「痛っ！」

希求にどうやら当たったようだ。すると希求の体が一瞬で消えてしまった。

「私の技は当たれば相手を死の世界に誘う。でも、貴方達はこの程度なら大丈夫よね」

「いやあ、さっき変な場所に迷っちゃったよ」

希求は死の世界から、此处に迷って戻ってきたようだ。

「お、恐ろしいな」

「むにゅー？何が恐ろしいの？」

お前の迷子の実力が恐ろしいんだ。

「秘術、岸に居る騎士」

見事なダジャレだ！

大量の鉄の剣が放たれる。

「何処にそんなに剣を持ってるんだ？」

「私の放ってる剣は魔法で作ってるのよ」

魔法で鉄の剣を作れるのかよ。

「むにゅー、武器屋さんを営業できそうだねえ。特技、金属反射」

「真剣白刃取り」

希求は鉄の剣を反射して、魅異は白刃取りで遊んでいる。俺の方には運良く剣が飛んできてない。

「ところで、いつになったら本気を出してくれるの？特に魅異が凄く手加減してると思うんだけど」

いや、魅異の場合は最初から本気を出す気なんてないぞ。

「それは小巻も同じだと思うけどね。ちなみに私は常にゆとりを持っての行動を心がけてるから、本気を出さないんだよ。弱体化の術がいくつか掛かってるけど、その程度なら軽く解除できるからね」

そういえば、魅異に掛かってる弱体化の術は特別なものらしい。だが、弱体化の術は掛かってるだけで魅異には効果がないので意味がない。

「ちなみに小巻が本気を出さない理由は？小巻なら自分の技を相手の体内に瞬間移動させて、一撃で悟と希求を倒せるはずだよ」

魅異が詳しく、怖い説明を付け足す。説明を聞く限り、その方法で魅異は倒せないようだ。

「確かにその方法で二人を殺せるけど、殺し合いなんか面白くないもん」

もし、殺し合いが楽しいと思う人は、精神科に行く事をオススメする。

「殺しはしないけど、全力で戦うのが一番良いと思うわー。まあ、そんな都合の良い状況になんかならないだろうけど」

いや、そんな都合の良い状況になる場所が有るぞ。

「なら、特星に来たらどうだ？」

「え？」

俺が誘いの言葉をかけると、小巻は少し驚いてこっちを見る。

「特星なら全力勝負しても人は死なないし、多少の出来事では壊れないぞ」

まあ、魅異は例外だけだな。

「でも、良いの？ 貴方達の世界を滅ぼすかもしれないよ」

よし、主人公らしい言葉で決めるか。

「ああ、それでも俺達は構わないさ。むしろ俺は来て欲しいくらいだからな」

というか、滅んでも次の話で復活するだろうし。

「そうなの？」

「ああ、その方がすぐに会えるだろう？」

問題発生時に会ったら、戦闘とかを任せておけそうだな。

「もし、私が危機に陥ったら助けてくれる？」

「ああ、絶対に助けてやる」

小巻が敵わないほどの相手なら、魅異が見方をする可能性が非常に高い。魅異さえ居れば、絶対に助け出せるぜ！

「うん、それなら私も特星に行く。この国に私の必要性はないから

ね」

力を狙われてるだけなら、特星に来た方が安全だしな。

「むにゅー、計算高いねえ」

「というか、思考が読めなかったら誤解を招く喋り方だったねー。
あ、もう小巻は影響を受けたみたいだけどねー」

「うん、顔が微妙に赤いからねえ。というか、貧乳が多いなー」

「貧乳よりも無乳が多いんだよー」

「むにゅー」

二人が何かを話してるけど気にしないでおく。

「あー、展開が早くて忘れてたが、姫様の胸は無乳で成長の見込みはほとんどないな」

最近はこの解析をすることが多く、その度に納や雑魚ベーに教えている。もちろん、雑魚ベーは少女のことしか聞いてこないが。

「ところで、前に魅異にこの解析技を使ったら、一応無乳って結果だったがどうしてだ？将来的な成長の見込みは気分によるって結果だし」

俺の判定で一応が出るのはこいつのみだ。

「ああ、私の場合は胸の大きさは変えられるからだよー。ちなみに私

は胸が無い方が好みだし、便利だから今の姿なんだよね」

「お、以外にまともな意見じゃないか」

ちなみに魅異は変身で男にも女にも人以外にもなれるので、男と女のどっちを好きになっても問題はないはずだ。

「さて、それじゃあ全員を特星に帰すね」

魅異がそういった瞬間にまぶしい光に包まれた。

「秋方高校」

おー、俺の通ってる秋方高校じゃないか。とは言っても、夏休みが未だに続いてるから最近は来た覚えはないわけだが。

「あれ、此処は？」

此処を知らない希求が俺にたずねる。

って、俺と希求しか居ないし！

「此処は秋方高等学校。俺が現在通い続けてる学校だ」

「結構新しいみたいだね」

む、妙に良いところに気が付いたな。

「この高校では数ヶ月に数回は崩壊するんだ。その度に直るから校舎は常に新しいって訳だ」

「でも、校舎の修復は間に合うの？」

「数十分くらいで直してるって噂だぞ。校舎だけでなく、校舎内にあった物とかまで完全に修復されてるんだとさ」

ちなみに崩壊の原因は俺と親しい者がほとんどだ。

「休みの日とかは校舎が壊れる事ありませんよ」

「あ、校長じゃないか」

「あ、校長さんだー！」

軽く手を振りながら話に加わってきたのは校長だった。

「二人とも久しぶりですねー。最近の調子はどうですか？」

「元気だよー！」

希求はそう答えるが、毎日迷って何で元気で居られるかが分からん。

「俺は日経つごとに疲れが溜まっています。校長は？」

「私ですか？ 私はいつも通りですよ」

まあ、校長がいつも通りじゃない事の方が珍しいけどな。

「いつも通り、餓死寸前の状態です」

「つて、やっぱり！」

大体の検討はついてたが、やっぱりそんな生活をしてるのか。

「ところで悟君、二兆セルの借金の返済はいつ頃ですか？」

「増えてるし！」

確か一兆八千億のはずだぞ！

「延滞料込みです。ちなみに延滞料は私が適当に決めてます」

「酷っ！」

放っておくと、俺が借金王になってしまうな。

「あれ、お兄ちゃんは借金があるの？」

ぎゃー、希求に気付かれかけた！

しかし、兄としての威厳を守らなければ！いや、既にボロボロだけどさあ。

「これは借金じゃない。単なる配達の代金だ」

違いは無いかも知れないが、これでなんとか通してみせる！

「おー、配達って二兆セルも必要なんだねえ」

よし、成功だ！

「そうそう、この高校の秘密とかは知りたいですか？」

「うん、知りたい！」

校長の急な質問に希求は即答する。

あー、良い予感はないな。

「では、納君を召還します！」

「召還されたぜ！あ、校長に希求じゃないか」

俺も居るぞー。

「むにゅー、納のお兄ちゃんだ！」

そういえば、希求は納の事もお兄ちゃんと呼ぶのか。

「久しぶりだなー。あ、悟ンジャーブラックはいつの間に居たんだ？」

「さっきからずっとだ！ってか、悟ンジャーと言うな！」

絶対に嫌がらせで言ってるだろ！

「悟ンジャーって何人居るの？」

希求、悟ンジャーは存在しないから！

「今はブラックと、レインボーの二人だったと思います」

誰だよ、レインボーは！

「あー、俺も入りたい！」

「お前なんかスクラップで十分だ」

謎の団体に納も入りたがるので、少し酷い言葉を言うておく。

「悟ンジャースクラップか。なかなか良いじゃないか！」

えええっ！どう考えても全然駄目だろ！

「えー、本題に戻りますよ。納君、この高校全体に電気を流してください」

「別に構わないけど、俺の電流は弱いですよ？」

確かに納は、数ヶ月前に特星に来たばかりなので、特殊能力の力がまだまだのはずだ。

「気にせずにどうぞ」

「そうですか。分かりました！」

久々にやる事があるからか、納が妙に元気だ。

「むにゅー、ただいま」

って、いつの間にか希求が何処かへ迷ってたようだ。

「何処に行ってたんだ？」

「深海に迷っちゃったんだよ。お宝があっただけど、潰れてたねえ」

生きて帰れたのは、能力のおかげだな。

凄く圧縮された金貨を希求に渡される。

「って、くれるのか？」

「うん」

おー、ありがとう！心の中で盛大に感謝するぞ！

「じゃ、いくぜ！誘電、集中する電気！」

変ではないが、ネーミングセンスが低いな。

「痛っ！」

手に電気による痛みが伝わる。

「納、もう少し威力を弱めろ！」

「あれ、かなり弱いはずなんだけどな」

「かなり痛い！って、ぎゃああっ！」

バチバチと目に見える電気が、俺の周辺だけ発生してるぞ！

「恐らく、金貨に電気が伝わっているのだと思います」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

校長が解説して、希求が心配してくれる。

あー、要するに金貨を手放せば良いのか！

「って、手から離れないし！」

「呪われた道具の一つですね」

校長はそういう事に詳しいんだな。

ってか、電気がやけに強くて手が麻痺してきた。

「ちなみに外す方法があります」

「早く言ってくれ！」

だが、呪いが簡単に解けるとは思えないな。

「確か、恋愛候補から一人を選び、その人とのイベントを進めて、面白いバッドエンドを迎えたら、呪いが解けるはずですよ」

「条件がおかしすぎるだろ！」

呪いのレベルの低さが分かった。

「ところで何が起るんですか？」

納が疲れてきたらしく、校長に今の行動の必要性を尋ねる。

「あー、もう電気は良いですよ。では、こちらに来てください」

質問には答えてないが、見たら分かるのだろうか？

〳秋方高校の校長室〵

「到着です」

着いた場所は校長室だった。

途中で一度、希求が宇宙の何処かへ迷ったが、無事に戻ってこれたらしい。

「わー、面白い所だね」

校長の部屋の様子に希求が感心する。

逆に俺と納は啞然としていた。

「納、部屋中が歪んで見えるのは気のせいかな？」

「気のせいじゃないと思うぜ」

「あー、部屋の歪みは飼い猫の仕業ですから、気にしないで下さい」

飼い猫という名の化け物じゃないのか？

「あれ、此処に変なりモコンが有るぞ」

納がリモコンらしき物を持ってくる。

「そのリモコンのボタンを押せば、私が見せたかったものが見れますよ」

まさか、自爆ボタン？

納は何の不審も抱かずにボタンを押す。

「バチチッ！バチチチチッ！」

電気の音に加え、外の景色が変わっていく。

「うにゅー、この学校が浮いてるよ！」

「ま、まさか墜落してバッドエンドかな？」

希求は非常に驚いている。

納は縁起でもない事を言ってるが、校長ならやりかねないな。

「そう、この高校は空中浮遊が可能だったのです。更に防御シールドや波動攻撃なども可能です。まあ、手動で可能なだけですけどね」

あー、校長が波動で防御や攻撃をするのか。

「あと、高校がこの形態になった時、学校内に恐ろしい呪いが多発します」

「楽しくなりそうだねえ」

校長の説明に希求は楽しそうに答える。

だが、俺と納はこの状況に溜息が出る。

「一つは、男子トイレと女子トイレのマークが入れ替わります」

相変わらず地味な呪いだが、状況によっては危険すぎる！

「あと、学校中の椅子に自爆スイッチ機能が備わります」

「余計な機能過ぎる！あー、今回は爆発オチの予感がある」

「同意だぜ」

「私も同意するよー」

「仕掛け人ですが、私も同意します」

俺の意見に納と希求と校長の全員が同意する。

「髪の毛が数本抜けます」

床を見てみると、既に何本かの髪の毛が落ちている。

「全員ではありませんが、サービスシーンを見れます」

「賛成だ！」

納が賛成しているので、納以外がサービスシーンを見れることを祈る。

それにしても良い呪いも有るんだな。あ、納や校長のサービスシーンは要らないけどな。罰ゲーム並みにおぞましい。

「あと、何らかのオチに巻き込まれるらしいですね。回避できる可能性はかなり低いようです」

うわー、嫌な呪い。

「うにゅー、どうする？」

「高校が落ちるような状態になったら、悟の家に落とそうぜ！」

「いやいや、何でそうなる！」

納は馬鹿だから人への迷惑を知らないのだろう。

「俺は馬鹿だから人への迷惑を知らないんだぜ！」

「あー、そうかい」

馬鹿が移るのでこれ以上近づかないでおこう。

「もしかしたら、行動が原因で爆発するんじゃないでしょうか？」

「どういう意味だ？」

校長の意味不明な発言に聞き返してしまう。

「例えば、爆発すると知ったら、それを回避しようとしていますよね。

しかし、回避しようとしたら、爆発が起こるイベントに繋がるとすれば、逆の行動を起こせば良いんじゃないでしょうか？」

「うにゅー、爆発させる気が無ければ爆発して、爆発させようとしたら爆発しないってこと？」

「その可能性もあります」

なるほど、椅子に座れば爆発しないのか。

「なら、校長の椅子に座るまでだ！」

「ポチッ」

これで爆発はしない！

「ドガアアアアアン！」

「悟のアホー！ 確実にそうなるとは校長は言ってなかっただろ！」

「確かにそうだけどさ！ でも、雰囲気的に押したくなるだろおっ！」

「言い争ってる間で申し訳ないんですが、希求さんが別方向に飛んでいってますよ」

「って、本当だ！」

「じゃ、俺は追いかけてくるから！」

「って、逃げるな悟ー！」

とりあえず、納の文句からは逃げられた。

「おーい、希求！」

反応がないという事は、能力発動前に飛ばされて気絶してるのか。

「しっかりしろ！ って…あ」

爆風のせいで気付かなかったが、よく見るとパンツ以外に穿いてなかった。恐らく、爆発によって燃え尽きたのだろう。

「起こさない方が良いよなあ」

しかし、どうやって運ぶべきだ？ 現在は空中でかなり高い位置だ。落ちたら誰かに見つかる事間違いないし！

こうなったら、家に直接落ちるしかないな。

「空気圧圧縮砲を撃てば、その反動で家の方に移動できる」

海がまだ見えないって事は、今は雲の中だな。

「よし、こういう時の為の自主規制モザイク眼鏡！」

これを装備すると辺りが、モザイクが掛かってるように見えるんだ！

これぞ自主規制！

「って、自主規制出来ても、家の位置が確認できないし！」

雲を抜けるまでは外しておくか。

「って、外した途端に雲を突破した！」

えーっと、あそこが秋方高校の跡地だから、俺の家はアレだ！」

家を見つけたので、自主規制モザイク眼鏡をかけて、家と逆の向きに空気圧圧縮砲を撃つ。

飛ばされないように希求をしっかりと抱えておく。

羨ましいと思ったらロリコン決定だ。

（悟の家）

「悟さん、クリスマスの散歩にしては遅すぎます！雑魚ベーさんに影響されて、少女に手を出してるのでしょうか？いや、悟さんに限ってそれはないですよね」

「ガシャアアアアン！」

「って、なんですか！」

「ふう、なんとか家に突っ込めた」

本当に見事に家に突っ込めるとは予想外だ。

「って、希求さんまで！」

あれ、魑魅が家の中に忍び込んでたようだ。

「あー、魑魅。何があったか最初から話すから、誤解だけはせずに聞いてくれ。実は散歩したら希求と有って、その後に道に迷ったら、雑魚ベーにあったんだ」

「雑魚ベーさんに？なるほど、そういうことですか！」

へ？まだ全部話してないんだが。

「悟さんがロリコンに目覚めるのは、私の不利に繋がるようにも見えますが、悟さんの趣味を知る事で、私が有利に動く事も出来ます！」

「あー、魑魅？」

とんでもない勘違いをしているのでは？

「しかし、そうだとすれば、元から改善しないと駄目ですね。改善は校長か魅異さんに頼んで、完璧度は雑魚ベーさんで試せば上手くいけそうです！」

「おーい」

「計画完了！それでは行ってきます！」

俺の言葉を聞かずに行ってしまった。

「希求はどうすれば良いんだ？」

自主規制モザイク眼鏡はいつの間にか壊れてるし。

結局、希求は自分で起きるまではそのままだった。

そして、高校の修理代で俺の借金が二兆二千億まで増えたのだった。

あと、今年のクリスマスは残念ながら中止になった。

八話 変態の住む神社

@雑魚ベー視点@

今日は新しい年の始まりである元旦。現在は午前四時なのですが、私は寝ずにある物を作っています。

ちなみに場所は、ある島に居ます。

この島は小さく、建築物は勇者社と一つの大きな寺しかありません。それに、他の島と繋がる道がないので、来る時は船でしか来れませんよおっ！ちなみに食料はこの島の勇者社で買えますけどねえ。

「そして、遂に完成しましたよおっ！」

そう、建設途中だったアミューリー神社が遂に完成したのですよおっ！

「朝から騒がしい！特技、アイススイート！」

「ズガガガガガアッ！」

「へびおぼけっ！」

雨双さんの、家一つを吹き飛ばせそうな冷凍光線で私は吹き飛びますが、私の為の攻撃ですから、ありがたく受け取りますよおっ！

「あ、ありがとうございますねえ」

「…何故、吹き飛ばされて礼を言っているんだ？」

ははは、そんなの決まっていますけどねえ。

「雨双さんの愛を感じれたからですよおっ！」

「要するに喰らい足りないのか。秘技、文明氷化！」

「ズドオオオッ！」

「ぬめりがふううっ！」

雨双さんを中心に、辺りが大波のような氷の嵐に飲み込まれていきますねえ。私は巻き込まれて死にそうですよおっ！

「あ、少しやりすぎた」

恐らく、島全体に氷の粒や氷柱が落ちてますからねえ。

「幽霊達にどう説明するべきだと思う？」

「そうですねえ、今年は異常気象で氷が降り注いだ。とか言えば何とかなりますよおっ！」

「そうなのか？なら、何か聞かれたら対応してくれ」

よし、これで雨双さんにあの役を頼みやすくなりましたよおっ！

「で、神社は完成したのか」

「ええ、もう完璧に完成しましたよおっ！特星で一番の神社を名乗っても良いくらいですよおっ！」

でも、特星に他の神社ってありましたかねえ？

「しかし、一番を名乗るほど大きくも無いと思うなあ。確かに一人で此処まで作ったのは賞賛に値するけど」

「一人作業ではこの大きさが限度ですからねえ」

この神社は本殿の近くに、賽銭箱を置いただけの簡単な神社ですよ。あと、石段と鳥居がありますけどねえ。

「私的には神社は本殿と、賽銭箱と、鳥居と、石段と、少女があれば十分ですけどねえ」

「待て、石段と少女は必要ないんじゃないか？」

「いえいえ、石段は鳥居を通った後に上りますし、少女には巫女服か神の衣装を着せるのが、神社では当たり前ですよっ！」

ちなみにアミューリー神社は、それらを全て備えていますからねえ。神社としては最高の場所ですよっ！

「最近の神社は巫女少女が少ないですからねえ。前から不満に思ってたんですよっ！」

「少ないというか、ほとんどの確率で無いと思うぞ」

だから、神社の必要最低限を取り入れたんですよっ！

「良く見ると、賽銭箱の前まで続く石の道があるな」

「しかも石段もちゃんとつけてますよおっ！」

「あれ、此処って石段を作れるほど高い場所だったか？」

お、流石は雨双さん、その事に気がつきましたか！

「実は特星中の公園の砂場から砂を運んだんですよおっ！」

「どうして砂場の砂なんだ？」

そんなの決まってるじゃないですか。

「砂場の砂を求めて少女達に、此処に来てもらう為ですよおっ！」

「あー、そう」

雨双さんが呆れたような表情をしますが、心の中では驚いてるんでしょうねえ。

「それにしても、賽銭箱や鳥居は買ったのか？それとも、手作りのか？」

「その二つは魅異さんからの貰い物ですよおっ！」

「魅異さんがお前に？」

雨双さんは何か考え込んでしまいましたねえ。私は少女にしか興味はないから大丈夫ですよおっ！

「その他の材料なども全て魅異さんから貰った筈ですけどねえ」

「何か企んでるのか？もしくは魅異さんの偽者？」

雨双さんは少々混乱中のようにですねえ。

「まあ、魅異さんの事ですから、面白い事が起こると予想してるんでしょうねえ」

「その可能性は十分にあるな」

なんて話してる間に五時になりましたねえ。

「……………あ、神社が完成したんですね」

おおっ、一人目の参拝少女は記紀弥さんですねえ！

この人はこの島の持ち主の人で、毬いが記紀弥ききやという人ですよおっ！
小学生ですが、飛び級で大学生の扱いらしいですねえ。

今の姿は人間ですが、幽霊になったり人間になったりする事ができるんですよ。これはこの島に住む幽霊の特性ですけどねえ。ちなみにこの島の寺に住んでるんですけど、その中でも一番偉い幽霊なんですよねえ。ちなみに此処の土地は記紀弥さんに譲ってもらったんですけどねえ。この島の勇者社以外の土地は記紀弥さんのものなんですよっ！

能力は有利と不利を操る能力で非質系ですよおっ！
会話での反応が少々遅いのが特徴ですねえ。

「記紀弥さあん！明けましておめでとうございます！」

今は幽霊状態じゃないから、抱きつきにダッシュで走りますよおっ！

「特技、アイススイート」

「ズガガガガガアッ！」

「しょうじょしょううつ！」

背後からの一撃でも私は避けませんよおっ！

「……どうも、明けましておめでとうございます、雨双さん」

「明けましておめでとう、記紀弥。しかし、年が明けるのはめでたい事なのか？」

「……さあ？　しかし、神社ができたのは、おめでたい事ですよ」

楽しそうな会話に私も混ぜてくださあい！

「そうだ、二人に良い物をあげますよおっ！」

「物で釣って誘拐するつもりか？」

雨双さん、私は物で釣るよりも、愛を語って誘拐する方が良いと思いますよおっ！

「これですよおっ！」

私を取り出したのはお年玉。やっぱり大人はこれをあげる義務がありますよねえ。

「はい、どうぞ」

「……ありがとうございます」

「一応、ありがとう」

少女にお礼を言われるのは良いですねえ！

「しかし、中身は一万セルしかありませんけどねえ」

「微妙に嬉しい金額だな」

「……ええ。あ、お賽銭を忘れてました」

記紀弥さんがお賽銭箱に五百セルも入れてくれましたよおっ！

「って、何で土下座をしてるんだ？」

「いえ、五百セルもお賽銭箱に入れてくれたので」

子供で五百セルもあれば、九十セルのおにぎりを五つも買えますよおっ！

「………大掃除をするので、私はそろそろ帰りますね」

記紀弥さんの家は寺ですから、掃除も大変でしょうねえ。

「あ、雨双さんに着てもらいたい衣装があるんですけどねえ」

「絶対に嫌だ」

あれ、服を見せる前に断られましたねえ。

「あのー、どんな服か見ないで断るのは、どうかと思いますけどねえ」

「どうせ巫女服か何かだろう」

「勝手に決め付けないで下さいよおっ！まあ、凶星ですけどねえ」

私の行動はお見通しなんですかねえ？

「どうして私が巫女服を着ないといけないんだ。私はお前の趣味に合わせる気はない」

悪趣味ですかねえ？

「でも、この服を着ると悪霊を追っ払えるらしいですよおっ！他にも見てはいけないわけではないが、見ない方が良いものが見えるらしいですよ」

「明らかにインチキ商品だ。ってか、いくらだ？」

値段はあまり覚えてないんですけどねえ。

「通販で三百万位でしたねえ」

「そうか、二度と戻ってくるな。奥義、アイスレック」

「ズドオオオオオオオオオオオン！」

「みこはくしゃくううっ！」

いやあ、いつもより強力な一撃ですねえ。豪華客船の一つや二つくらいなら吹き飛ばせそうですねえ。

「ところで何処まで飛んでいくのですかあっ！」

誰か止めてー。

このままではトラックに撥ねられて、雨双さんとアミューリーさんが悲しみますよおっ！あ、トラックは空を飛びませんでしたねえ。

「って、飛行機がこっちに向かって飛んできましたあ！」

「ガシヤアアアアアアン！」

ぶはっ、ガラスが目に入りましたよおっ！

それにしても、飛行機のガラスって割れやすいんですねえ。

「さて、パイロットも気絶していますし、このまま神社に直行ですよおっ！」

でも、神社を壊さない場所に着地しないといけませんねえ。

あの島の勇者社なら大丈夫ですかねえ。

「おい、そこのお前、今すぐ俺達の指示に従え！」

「へへへ、パイロットは既に気絶してるな」

おや、全身真っ黒な男が二人現れましたねえ。

「ちなみに乗客に助けを呼ぼうとしたって無駄だぜ。乗客に強力な能力者がいる事を考えて、予め全員がガスで眠ってるからなあ」

「仲間も何人が眠ったけどさ」

睡眠薬の量には気をつけましようね。

「貴方達は何者ですかねえ？その姿と黒さはもしかや、悟ンジャーブラックのファンですか？」

「違うわ！毎朝見てるけどファンじゃない！」

「見てるのかよ！」

この二人のコンビは強そうですね。ボケとツツコミが下手だけど成り立ってますから。

「見てるけどファンじゃないんだって！で、俺達はハイジャックだ！」

「あー、遂に人間に進化できたんですねえ、ジャック」

「誰がジャックだ！俺の名前はハイジャックだ！」

うおい、本当にそんな名前だったんですか！

「お前、今まで俺を騙してきたのか！俺と会ったときはジャックと名乗ってたじゃないか！」

「すまない、実は途中で進化したんだ。身長が二ミリ伸びてたんだが、気付いてなかったから言い辛かったんだ」

「気付けるわけないだろ！」

そりゃ、気付けないのが普通ですって。

「ちなみにハイジャックと言うのは、犯行そのものであって、犯人たちの事はハイジャックとは言わないんですよっ！」

「ええ、本当だよ！」

ハイジャックという名の、ボケてるほうの犯人は知らなかったようですねえ。ちなみに私は少し前に教師をやっていて、その時に知ったんですよっ！他にも魔王になる時の試験でこの問題は出されましたねえ。

皆さん忘れてるかもしれませんが、現在の魔王の職業は私がやりますからね！まあ、時給はジュース一本買える位ですけど、普段どおりの生活で貰えるから、文句はありませんよお！

「おい、それよりハイジャックの方を忘れるな！」

「だから、それは俺の名前だ！……さて、俺達の言う場所に操縦しろ！」

ツツコミの方の黒によって、ボケの方のハイジャックがやる事を思い出しましたねえ。

正直な話、操縦は勘でしかできないんですよえ。

「もし、断ったらどうします?」

「これを見ろ!」

ハイジャックが取り出したのは、危険と書かれたボタンです。

「これを押したら、乗客ごとまとめて、仕掛けた爆弾が大爆発を起こすんだ! 特星とはいえ、海の上に落ちたら帰ってこれない場合もあるんだぜ!」

ああっ! そんなボタンを私に見せたら駄目ですよおっ!

「ピッ」

だって、押したくなりますから。

「って、押したああああっ!」

流石はツツコミ、すぐに反応しますねえ。この人の反応のスイッチでしたか?

「いやあ、押しちゃいましたねえー。爆発ボタンとかを見ると押したくなるんですよ」

悪気は無いんですけどねえ。

「その気持ちは理解できる！」

「するなあ！」

ハイジャックさんは私の気持ちを分かってくれましたよおっ！それに比べてツツコミに頑固な黒は納得してませんねえ。

「まあいいさ。そのスイッチは二連続で押さないと作動しないからな」

「分かった」

「ピッピッ、ドゴオオオオオオオオオン！」

「お前もかあ、ハイジャック！」

「いやあ、悪気は無かったんだ。だから、反省もしてない」

私たちの他に、眠ったままのお客さんも海に落下中ですなえ。

「もう、お前達は一度死ね！凄く苦しくなる毒でも飲んで死ね！そして女装でもして皆に笑われろ！」

黒の方はかなり精神が不安定ですねえ。

「私は少女を愛し、少女に愛されながらなら死んでも構いませんよおっ！魅異さんか東武さんに生き返らせてもらいますから」

「俺は女装しながらなら未練はないなあ」

ハイジャックは悪趣味ですねえ。少女に男装させるのなら、それに気付かれないようにする姿や、見かけと中身のギャップの差が可愛いですけどねえ。あ、逆はもちろん論外ですけどねえ。

「さて、あなた達とはお別れですよおっ！必殺、変身！」

変身は私の衣装を変化させる技ですよおっ！実は気付かれない速度で着替えてるだけですけどねえ。

「おお、さっきの男が上半身裸のたくましい変態になった！」

「って、何で裸になるんだよ！」

今はパラシュートを取り出す事ができますよおっ！ちなみにデフォルトでは全裸なんです、自主規制で上半身だけを裸になるように、設定を変えたんですよおっ！

「ハイジャック、黒、あなた達に会った事は今日は忘れませんよおっ！」

「ああ！」

「って、俺の名前は黒じゃない！」

二人の言葉を聞かずにパラシュートを使います。

「黒が何か言ってたような気がしますねえ」

ま、気のせいですよね。

「パラシュートでフワフワしながら数時間。遂に島まで戻って来ましたよおっ！」

それにしても海の上の空に、鳥が居るのは予想外でしたねえ。

「鳥って電線に巣を作る生き物ですよねえ」

全ての鳥がそうではないそうですねえ！

「さて、到着ですよおっ！」

「うあっ、帰ってきたのか」

あれ、雨双さんが巫女服を着ていますよおっ！

「おおっ！まるで夢のようですよおっ！」

「あー、言つとくがこれは夢だ」

え、夢なんですか？

「夢だからこの事を忘れろ。忘れないと夢を見れないくらいの眠りに付くと思え」

「は、はい。分かりましたよおっ！」

これは夢ですねえ。雨双さんが夢と言ってますから違いありません！

「でも、夢なら犯罪行為をしても良いんですよええ！」

「奥義、圧縮冷凍」

「カキイイイン！」

効果音がホームランの音に近いんですけど！

ってか、冷凍度が高くて、やられる時の叫びが出来ませんでしたねえ。

「どうしたんだっけー？」

「神社は暴れる所じゃないんだよ」

「ほう、誰かと思えば雑魚ベーカ」

おお、アミユリーさんに小巻さんが来てますねえ！ついでに東武さんも。

ってか、助けて下さあーい！

「なんだ、出られんのか。ゲニウスのエクサバーストで出してやろうか？」

いやいやいやいや！エクサバーストだと出られても助かりませんか！ほぼ確実に体ごと消滅しますよおっ！

「返事がないという事は、溶かしても問題ないと言うことか。来い、ゲニウス」

「登場！」

全然問題ありですって！

「おー、強そうなんだってば」

「確かに特星の竜よりは強そうだな」

アミユリーさんも雨双さんも、感心してないで助けてくださいよおっ！

「いけ、ゲニウス！愚かな変態貴族を消滅させろ！」

「はい！魔造、エクサバースト！」

「ズガガガアアアアアアアン！」

その時によって、効果音が異なるエクサバーストを喰らいましたよおっ！

「東武、雑魚ベーが消滅したよ」

「場合によっては俺が生き返る。ゲニウスは先に帰ってろ」

「はいはい」

あー、現在お花畑が見えますよおっ！可愛い少女が数人歩いてますねえ。

「というか、死ぬかと思いましたたよおっ！」

「なんだ、復活したのか」

私がギャグ系のキャラじゃなかったら、即、あの世に逝ってましたよおっ！

「雑魚ベーみたいなキャラは、漫画でやられても次のコマで復活するんだってば」

「地球でも不老不死みたいな状態じゃないか」

「ある意味、怖いキャラね」

「ふん、まさしくその通りだ。俺は随分昔に雑魚ベーと戦った事があるんだが、特星でも通じるはずの攻撃を受けても、数秒くらいで復活していたからな」

あの時は本気で死ぬかと思いましたねえ。いや、実際は何回も死んでましたけど。

「でも、東武さんは特星の天敵と言える存在ですよおっ！不老不死の効果を無効化するのは反則的な効果ですからねえ」

「逆に宇宙などで不老不死にもなれるぞ」

「元の世界で私と戦う時も不老不死だったよね」

いや、少々本気の小巻さん相手なら仕方ないと思いますけどねえ。

「この後、どうしようかなあ。悟に会うか、魅異と戦うか」

小巻さん、その選択肢はどちらを選んでも、問題になると思うんですけどねえ。

「勇者社がこの島にあるらしい。だから、勝負を先決させるべきだろう」

「分かったわ。じゃあ三人とも、また会えたら会おうね」

とりあえず、頑張ってくださいねー。

「あ、そうだ！アミユリーさん、お年玉は貰いましたか？」

「あー、私が渡しておいた。当然、小巻にも渡しておいたぞ」

「一万セルもありがとうだつてば」

あははあん！アミユリーさんに感謝の言葉を言われましたよおっ！

「お、ようやく到着だ」

「神社を作ったと聞きましたが、本当に作ったんですか」

「あれ、珍しい組み合わせですねえ」

次に神社に来たのは悟さんと羽双さんでした。ちなみに二人とも私

の宿敵リストに入ってるんですよっ！

「一人で来るつもりだったんだが、船で羽双と会ったんだ。で、目的地が同じだから一緒に着た」

「そういうことです。あー、雨双さんも居たんですか。どうして、似合いもしない服を着てるんですか？」

「三流の和風愛好家の馬鹿兄に言われたくはない。というか、呼ぶときに馬鹿兄だと長いから、普通に呼び捨てで呼んで良いか？」

「貴方からの呼ばれ方に興味はありません。好きなように呼んで構いませんよ」

仲が良いのか悪いのか分からない兄妹ですなぁ。

「……雑魚べー、あの二人は仲が悪いのか？」

「仲が悪いのではなく、言いたい事を言い合ってるだけだと思えますねえ」

「でも、お互いに相手の言ってる事なんか、全然気にしてなさそうだったば」

でも、勝負はしないで下さいよおっ！

「お、盛り上がってるね」

「魅異だってば」

おや、さつき小卷さんが勝負に向かった筈なんですけどねえ。

「小卷さんと東武さんには会いました？」

「あの二人とは別空間で戦ってるよ。小卷は久々に全力が出せて嬉しいようだね」

あー、魅異さんは分身を使ってますねえ。まあ、常に使っているんでしょうけど。

「魅異、お前はどの位の力で戦ってるんだ？」

「あと、小卷の能力は何だっけー？」

「私は二人より、少し強いくらいの力で戦ってるよ。小卷の特殊能力は非質系の、限界を操る能力だね。あ、私の強さの限界が普通の人と同じにされたよ」

元々、洒落にならないほど強いのに、更に非質系になれるなんて凄いですねえ。

って、普通の人と同じ強さの魅異さんになら、小卷さんと東武さんでも勝てるんじゃないでしょうかねえ？

「魅異、ワザと喰らっただろ」

「まあ、喰らわないと面白くないからね。はい、私の勝ちが決まったよ」

貴方の目は何処まで見えるんですか？

「悟、妹達はどうか？」

「ん？あー、行方不明の一人を除けば全員元気だぞ」

行方不明になってるのは、間違いなく希求さんですねえ。

「四人の中でメインイベントを発生させるのは一人で、残りの三人のイベントはサブイベントだと思って良いよ」

「一人って誰だ？」

「自分で考えよう。じゃ、私はその辺を散歩してくるね」

散歩に行く前にお賽銭を入れていてほしいですねえ。

「あ、忘れてたね」

そう言い、魅異さんはお賽銭箱にお札を入れて去っていきましたねえ。

「ま、高校生ならお札くらいは当然ですよっ！」

「え、当然なのか？なら、俺も千セル入れるか」

悟さんも千セル入れてくれましたねえ。

「じゃ、俺も帰るかな」

おや、悟さんも帰るんですか？

「なら、このお年玉を妹さんたちに渡してください。私からだと言っておいて下さいねえ！」

「あー、分かった」

悟さんはお年玉袋の中身を確認しながら去りましたねえ。

ふふふ、これで少女界での私の評価が上がる事を期待しますよ。

「少女界万歳ですよっ！」

「なんだ、その物騒な世界は？」

あ、いつの間にか雨双さんが戻ってきましたねえ。

「羽双さんは？」

「ああ、馬鹿兄っじゃなくて、羽双は冷蔵庫の中の団子を持って帰ったぞ」

えええっ！冷蔵庫の団子って、アレは私のですよおっ！

「ちよっ、警察に通報してくださいよおっ！」

「忘れたか？去年の特星ルール改正により、盗みは犯罪じゃなくなってるんだ。それに伴い、特星の警察制度は人員不足で崩壊してるし」

そもそも、この島まで警察が来るとは思えませんがねえ。

「しかし、新特星ルールでは盗んだ相手に対して、誰が攻撃しても良い事になってますよおっ！」

「時間を操る奴に追いつけというのか？」

「あー、無理ですねえ。はい」

特星の実力者ランキングで、ベスト五以内には確実に入る人ですからねえ。

「あと、アミユリーさんも居ないようですけど」

「あー、アミユリーなら本殿の中に宝探しに行ったぞ」

って、それは大問題ですよおっ！

「本殿の宝箱に少女の写真を入れたままでしたあ！」

「お前なあ、ロリは合法だけにしておけと言っただろ。そうでもないと捕まるぞ」

それだけ言って、雨双さんが走り出すので私も走ります。

あれ、さっきの発言で雨双さんなら、アイススイート位は使ってくるかと思ったんですけどねえ。

「怒らないんですか？」

「ん？ ああ、お前は手遅れだろうし。参考程度に聞くが、健全なも

のなのか？」

「あー、十五歳未満はアウトなものもありますねえ。もちろん小学生ですけど」

「おー、よく入手できたな」

ま、私も人脈が広いですからねえ。

まあ、雨双さんとアミューリーさんの写真がほとんどですけど。もちろん、自分で取りましたよおっ！

くアミューリー神社の本殿く

「普通の家と同じ大きさの本殿なんか初めてだ」

「すみませんねえ。その分、地下にいろいろな部屋がありますけどねえ」

ま、地下部屋の大半が物置ですけどねえ。

「入り口は？」

「コタツの下の畳の下ですよおっ！」

雨双さんと二人でコタツと畳を退けて中に入りますよおっ！

「アミューリーさんはどうして中に入った後、コタツと畳を元に戻したんでしょうねえ？」

「磁力で全てを天井に貼り付けて、その後にもた磁力で、下に戻したんだと思う」

知識では頭が非常に悪いのに、行動中は頭が良いんですねえ。

ちなみに地下といっても、普通に電気や壁や床などは整備されてますよおっ！

「あと、さっきの話の続きだが」

「あ、写真の事ですか？」

もしかして、地下で氷付けにして永久保存とか！

「無理して写真を手に入れるくらいなら、過保護なお兄さんのフリをして、小学生と風呂にでも入ったらどうだ？」

って、ええええええっ！

「いやいや、そんなこと出きる訳無いですって！」

「だが、一度そうするべきだ。そして、自分が普段から、どれだけくだらない事に夢を抱いてるかを覚えろ」

いやー、あの一、無理ですって。

「それにお前が望んでいた事だろう。それとも、実行するほどの勇気がないのか？」

「はい」

「二択の選択肢みたいな答え方だな」

しかし、実行するほどの勇氣はありません。

「大丈夫だ。風呂に入って、普通の会話をするだけなら問題はない。ただし、それ以外の行動は一切禁止だ」

「大丈夫ですかねえ？ところで一緒に入ってくれる人は？」

「私やアミューリーは年齢的にそんな年じゃない。知ってる中で一番相応しいのは、悟の妹の希求だな」

四姉妹の中でも難関度と迷子度が高いですねえ。

「というか、姉妹なら誰でも同じじゃないですか？」

「いや、希求は他の妹よりも何年か早く特星に来てるはずだ」

なるほど。しかし、大きな問題が一つありますよおっ！

「悟さんが認めてくれると思いますか？」

「少々面倒だが、私が説得しておいてやる」

それで上手くいけばかなり良いんですが。

「でも、やっぱり自信ないですよっ！」

「うわっ！ちよっ、暑苦しいから抱きつくな！」

「失敗したら、世界中の少女が私を避けますって！」

その時は私は人生の楽しさの一部と青春がなくなりますよおっ！

あ、服の上から雨双さんの体温が伝わりますねえ。

「いや、そうなれば少女への興味も自然となくなるから、逆に良いと思うが。というか、早く離れろ！」

「嫌ですよー！リスクの方が大きい勝負は嫌ですよー！」

それに完全成功したら、少女への愛が無くなりますよおー！

「お前、子供か！というか、頼むから離れてくれ！」

「あと、失敗したら少女とお風呂の夢も叶える気がなくなりますよおっ！」

「分かったから！なら、失敗したら私が風呂に入ってやるから！」
少女とお風呂の夢が崩れます！

って、え？

「本当ですか？」

「本当だ！本当だから今すぐ離れろ！」

「もし、それで問題がなかったら、これからも入ってくれますか？」

「神に誓う！だから、抱きしめるんじゃない！」

おっと、手に力が入りすぎてました。

「し、死ぬかと思った」

「神であるアミューリーさんに誓うって事は、アミューリーさんも一緒ですよ？」

「ん？えっと、そうだな。同じ家の同居者として、アミューリーも一緒だ」

おお、これが神の奇跡ですか！

いやあ、神社を作って良かったあ！

「って、あれはアミューリーじゃないのか？」

「あ、雑魚ベーと雨双だってば」

アミューリーさんは道に迷って此処に来たみたいですねえ。

「宝箱が一つあったけど、既に開いてたんだってば」

「何ですってえ！」

く 悟の家 く

「あれ、帰ってたのか希求。ところで、右手に持ってる写真の束は何だ？」

「秘密だよー。むにゅー、あとは雑魚ベーさんと会うタイミングかあ」

九話 一緒にお風呂だけならセーフですよねえ

@雑魚ベー@

神社が完成した元旦の次の日、この日の朝が上りました。

「ふふふふふふ！遂に、遂に私の時代が来ましたよおっ！」

「朝から馬鹿がうるさいな。特技、アイススイート」

「ズガガガガアッ！」

「むはあーっ！」

朝から騒いでたので冷たい攻撃を受けちゃいました。

しかし、これは私に対する好感度みたいなものです！

あ、ちなみに何を騒い出たのかを説明すると、私の青春は続いています。

「悟の妹の一人と風呂に入れる嬉しさは分かったが、近所迷惑というか、家庭内に迷惑をかけるな」

雨双さんが説明しちゃいましたねえ。

ま、そういう事になったわけですよ！

「というか、私の今の嬉しさを分かってくれたんですねえ！」

「理解はできないけどな」

ううっ、どうして理解してもらえないんですかねえ。

「ちなみに私が帰ったら、貴方達ともお風呂に入りますからねっ！」

「あー、分かってる。だが、お前が変な気を起こさないか心配だ」

おや、私の精神状態や思考を信用していませんねえ。

「大丈夫ですよ。私には暴走や興奮の状態異常は効きませんからねえ。背中を流し合う時しか触れ合う機会はありませんよ」

「ついでに普段の発言や表現にも注意しろ」

小学生の雨双さんに発言や表現と言われましてもねえ。

「というか、雨双さんは特星に何年くらい住んでるんですか？」

「あー、数えてない。本格的に住み始めたのは数年前だ」

だから、高校生並の知識とかを持ってるんですねえ。

「数年前は羽双を探してたから、特星内の地理とかには強い方だ」

どうして羽双さんを探していたんですかねえ。

私は職を転々として各地を回った挙句、変な海賊を始めて破産しましたからねえ。一年程前は小学校の職員でしたが此処に引っ越した

ので、辞職届けを出さずに勝手に辞めましたよ。

それ以前の事は秘密ですが、私の気品さと上品さを考えれば、何をしていたか予想できますよねえ。

「あ、もう風呂にカメラを持ってくなよ」

「って、雨双さあん！こんなタイミングでそんな事を言ったら、皆に誤解されますよおっ！」

確かに数日前までは、雨双さんとアミューリーさんの写真を撮ってましたが、今日からは毎日普通に二人と入浴するつもりなので、そんな事はしませんよおっ！

「さて、そろそろアミューリーが起きるから、朝食を作ってくる」

雨双さんは朝食作りにいきましたねえ。

ちなみに我が家の朝食当番は、私と雨双さんの日替わりですよ。アミューリーさんは寝坊する事が多いので、昼食と夕食の手伝いのみです。

「あ、お賽銭の回収を忘れてました」

昨日は元旦だったから多くの人が来ましたねえ。

「おおおっ！合計で三万六円もありますねえ！」

まあ、少女にあげたお年玉の合計よりは少ないですが、案外儲かるんですねえ。

でも、元旦で三万って少ないのですかね？

「おはようだってばー」

おや、アミユリーさんが起きましたか。

「おはようございます、アミユリーさあーん！ああ、子供用パジャマを着てるからいつもより可愛らしいですよおっ！」

「子供パジャマは可愛いという発言は、駄目な大人の第三十一位が言う言葉だと、昨日の特星のテレビに出ている人が言ってたんだってば」

何ですってえ！

くう、昨日の新聞で番組を調べて、抗議の電話を掛けてやりますよおっ！

「違いますよ、アミユリーさん。本当の駄目な大人はテレビに出ている人なんです。その人は本当に駄目な大人だから、自分が駄目だと気付かず、自分以外の人の事を駄目な大人と言ってるんです」

あ、私も自分以外の人を駄目な大人と言っちゃった。

「それはお前だろ」

うおっ！いつの間にか雨双さんが！

「あ、雨双、おはようだってば」

「おはよう。あ、アミューリーはこの駄目な大人の話を真に受けるなよ」

雨双さんは再び調理に戻りましたね。

「ツツコミの為に戻ってきたんですかね？」

「ツツコミ魂だってば」

そういえば、前からアミューリーさんに聞きたい事があったんです。

「アミューリーさんの、だってば。や、だっけ？って、キャラを作ってるんですか？」

「うん。他の瞳の時と区別を付けやすいから。あ、雨双には秘密だよ！」

うおっ、アミューリーさんが普通に喋っちゃってるよ！

ちなみに忘れた人の為に説明しますが、アミューリーさんは瞳の色が変わると性格が変わります。いや、性格が変わると瞳の色が変わるんですかね？今の状態が元々の性格らしいです。

瞳の色の他に、口調や特殊能力が変わります。特殊能力を合計すると確実に五種類以上はありますねえ。

その他にもいろいろな設定が多い神様です。

「なら、元々の性格に近いほどバカって設定は？」

この設定もあったはず。

ま、悟さんは思考内でも説明不足ですからねえ。

「え、そんな性格は演じてないよ」

よかったあ。頭がバカなのは演じていたのではなく、元々バカだったんですねえ。

流石にそこまで演じられていたなら、少女の性格を見抜けなかった事になります。

ま、バカな事は既に分かってたんですよ？念の為にバカか確認しただけです。予想通り、根っからのバカだったようですけど。

「うう、なんだか凄くバカにされてる気がするよお」

「あ、バカでも勘は良いんですねえ」

って、つい、口に出しちゃいましたあ！

「あ、あの、気にしなくても大丈夫ですよおっ！ほら、前にバカの良さを何処かで習ったじゃないですか！」

「第二部では習ってないし、バカだから忘れた」

あー、第二部では習ってませんねえ。

「第二部といえば、私達の出番が増えたよね」

確かに私達の出番が急激に増えた気がしますねえ。

「そうですねえ。現に今は私達の生活を中心に話が進んでますからね」

「主役に近い存在なのかもしれないね」

まあ、実際に私は悟さんの宿敵ですし、このような状況が本当は当然なんですけどね。

「あー、平和ですねえ」

「うん。平和だねー」

これだけ平和だと、近い内に大事件が起こる気がします。

「そういう言葉は春に言うべきじゃないのか？あと、雑魚ベーが思考内でフラグを立てたな」

「わっ！う、雨双！」

「い、いつの間に居たんですか！」

いつの間にか後ろに居た雨双さんに私達は驚きます。

「えーっと、アミューリーがバカにされてた時だな。朝食ができたから呼びに来たんだが、話しかける隙がなかったんだ」

ツツコミ所は結構ありましたけどね。

「あの、私が標準語の事は？」

そういえば、アミューリーさんが標準語なのに平然としてますね。

「ああ、学校に通ってた時に聞いたぞ。クラスの何人かに語尾の事を聞かれて普通に答えてただろ。雑魚ベーは職員室に居たから知らないだろうけど」

「私が私が職員をやってた頃ですか」

いやあ、あの時は様々な少女が居ましたねー。

「そ、そうだったけ？」

今の、だったけ？は偶然ですね。

「ああ、私の記憶が正しければな」

アミューリーさんの記憶よりは信頼します。

「雑魚ベーは朝飯を食べたら朝風呂に入るんだろ？相手が来る前に早く食べておいた方が良さぞ」

あれ、どうして私が行くのではなく、相手が来ると知ってるんですかね？

「あー、その理由か。朝食を作ってる途中で希求から、こっちへ向かうと電話があったんだ」

「なるほど、もうこっちに向かっているんですか」

あれ、今の会話に変な違和感があったような。というか、会話が出来てます？

「雑魚ベー？どうかしたの？」

アミユリーさんが心配していますし、気にしないでおきましょう。

「いいえ、言葉が一瞬理解できなくなっただけですよおっ！」

それにしても、希求さんがちゃんと船に乗れてるか心配ですねえ。

「難破船を呼ぶ船着場」

えーっと、看板に難破船を呼ぶ船着場と書いてあるのですが、この店の名前ですかね？

「これだと明らかに客が逃げるでしょうが」

まあ、難破慣れした私なら大丈夫ですが、希求さんは難破慣れしてないでしょうからねえ。

「店の名前はアレですが、本当に難破はしないでしょうね。ハハハハハハ」

「あれ、お前は神社の変態じゃないか」

「おや、神酒さんじゃないですか！久しぶりですねえ」

私に話しかけてきたのは千宮^{せんぐう} 神酒^{みき}さん。この人は記紀弥さんの寺で働く幽霊です。寺では記紀弥さんの部下で、更に神酒さん部下にはキールさんという年上のサボリ専門の部下も居て、苦勞が絶えないらしいです。

他の記紀弥さんの所の幽霊と同様、幽霊になったり人間になったりできます。

特殊能力は本来は動きを操る能力なのですが、未熟で変化させるのが限度らしく、様々な動きを変化させる能力と本人は言ってるようです。非質系なので完全に使いこなせば凄い能力ですねえ。

「小学生に飛びつく癖は治したか？記紀弥様に飛びついたら、微塵切りにするぞ」

「まあ、今のところは大丈夫ですねえ」

最近は私の冷静ゲージが高いので大丈夫ですが、普段は少女に飛びついて抱きつくスキンシップを使用してます！案外、良い方法だと思ってます！

「神酒さんも実体化するときがあるんですねえ」

「寺以外では基本的に実体化するようにしているつもりだが」

まあ、実体化していれば普通の人と変わらないですからね。

「ところで見てくださいよ。ほら、この看板ですけど」

店の名らしきことが書いてある看板を見せる。

「変な名前だと思いませんか？」

「あー、それは記紀弥様が考えたんだ」

えええええっ！

いや、あの普通の人があんな名前を書くとは思えないんですが。

「私も最初は驚いたよ。だが、あの人は真面目にこの名前で笑いが取れると思ってるんだ」

「あお、そのギャグセンスはどうかと思いますけどねえ。いや、記紀弥さんがこの店の名前をギャグっぽく言ったら可愛いですねえ」

そういえば、この船着場をあわせて、この島のほとんどが記紀弥さんの物でしたね。

「ところで何をしているんだ？」

今頃な質問ですね。

「実は私と一緒にお風呂に入り、少女が来るから待ってるんです。神酒さんも私とお風呂に入りませんか？」

少々自慢げに言ってあげました。

「あー、なるほど。純粋な子供を騙したのか」

いやいや、私は純粋な子供を苛めるような真似はしませんよ！

「全力で必死に否定させてもらいます！で、神酒さんは何のよう
此処に？」

「記紀弥様が大きな事件が起こる事を感じ取ったんだ。正しく言え
ば、特星全体が不利な状況に陥る可能性がある」

おー、有利と不利を操れるだけでそこまで分かるんですか。

「既に特星の住人の何人かが影響下にある」

うわあ、それは物騒な話ですねえ。

「影響下って、まさか操られて少女があーんな動きをするんですか
！」

「どんな動きだか分からん。というか、操られる訳でもない」

あれ、こういう事件の大抵は見方が操られるはずですが。

「実際は本物が何処かへ拉致されて、記憶や能力や人格が同じの偽
者が本物のフリをして他人を拉致するんです」

なんだか、病氣並みに偽者が増える気がしますねえ。

「拉致の方法は渦巻のような別世界への扉を使うらしく、それに入
ったら戻る方法があまり無いらしい。言っておくが、お前や悟は特
に気をつけたほうが良いぞ。一応他の特徴も教えておこうか？」

んー、待ってる間は暇ですし、聞いておいて問題に巻き込まれる以外の損は無いですよ。

「じゃ、聞かせてください」

「まず、相手は表面は完全に本物と同じだが、中身は謎の物質が詰められている。これは本当に謎の物質で、記憶とか身体能力とかが人以上に成長するんだ」

偽者って機械化何かかと思ったんですが、謎の物質だったんですか。

「ちなみに能力が普通より高く、弱い相手は強制的に拉致するらしい。だが、普段はなんらかの形で人を騙すか、行動の分かる人の行き先に扉を仕掛けるかが多いな」

頭脳戦ですか、気に入りませんね。

ま、頭脳戦だろうと肉弾戦だろうと私に敵うはずがありませんけどねえ！

「他にも相手の考えを読み、友好を高めてから異世界に拉致の組み合わせになる場合もある。よほどバカな奴以外は気付くだろうが、酔っ払ってる時には要注意だ。ちなみにキールのバカは寄ってる最中にさらわれたらしい」

あー、やっぱり。

キールさんの場合は拉致しに来ましたと言われたら、拉致されたなら仕事ができなくても問題ないと言って、自らさらわれる気がし

ます。

「それにしても、キールさんが偽者だとよく分かりましたね」

「本物なら普通に寺には入れるんだが、偽者は結界で入れないからな。偽者が入ろうとしたら、結界で阻まれて、更に特別な場所に強制転換されるぞ。あとは適当に普段の恨みを込めて苛めたら、私がさっき説明したことを話した」

神酒さんの苛めに興味が沸くんですけど。

「こんなところだ。あ、ちなみに船は難破したから来ないぞ」

「え、何ですか？」

まさか、私と希求さんがお風呂に入るのが羨ましく、動きを操って何処かへぶつけたんですね！

「あの船に乗ってたのは全員が偽者の人間だったからだ。本物の人に乗ってたのなら、私が難破させる前に異世界に送られたんだろう」

そ、そんなあつ！

私と希求さんのお風呂タイムを邪魔されるなんて！

「希求さんとお風呂に入りたかったですよおっ！」

「とりあえず、大声で叫ぶな。人に迷惑は掛からないだろうが、隣に居る幽霊の耳への迷惑を考えろ」

でも、良く考えたら希求さんなら、此処に迷って戻ってくる可能性がありますよね。

「あ、やっと港に着いた！」

ナイスタイミングで来たのは希求さんでした。

「希求さん！」

「むにゅー、どうして雑魚ベーさんが居るの？あ、もしかして、私が迷って船に乗れないと思ったとか？」

いや、確かに乗れないと思いましたが、此処に居る理由とは違いますねえ。

「少し失礼するぞ」

いつの間にか幽霊状態になった神酒さんが、希求さんをすり抜ける。

「うん、中は普通の人間と同じだった。ついでに言うと、血色の良
い健康な体だな」

体内を除いて本物か見分けたみたいですな。

服だけをすり抜ければ、あの美しい体を見れるはずですよ！

「あ、神酒だ！」

「ん？って、お前は前に寺に迷い込んだ奴じゃないか」

いつの間にか人間状態に戻った神酒さん。

ってか、二人は知り合いだったようですね。

「むにゅー、神酒が寺以外に居るのは意外だねえ。今から神酒が働いてた寺がある島に行くんだよ！」

「希求さん、此処がその島の船着場なんですよ」

「あ、そうなんだ」

恐らく、迷って海を越えて来たんですねえ。

「迷子で海は越えないと思うが」

「むにゅー、それは素人の浅知恵だよ。能力が原因という意見もあるけど、特星に迷い込んでから特殊能力は覚えたからねえ」

って事は、過去に能力無しで他の星に迷い込んだんですか。

「さて、雑談はそこまでにしてください。そろそろストーリーを進めないとお風呂に入るのが次回になる可能性があります！」

過去の出来事を考えると、今回の事件に確実に巻き込まれますからねえ。

「なら、私はそろそろ寺に戻らせてもらおう。ま、今回の事件も主人公かチートが何とかするだろう」

って、人任せですか！

（風呂場）

という訳で、腰にタオルを巻いて私登場！

タオルと言っても、バスタオルなんですけどねえ。

「むにゅー、どうして雑魚ベーが腰に巻いてるタオルはバスタオルなの？普通は腰から膝が隠れる位のタオルだと思うけど」

おお、希求さんが胸より少し上にバスタオルを巻いて登場ですよ！

体が小さいので、バスタオルが床まで届いてますが、それが良いんですよねえ。

「ふっふっふ、確かにアニメや漫画などではそういうパターンが多いですねえ。しかし、それが原因でタオルが取れてしまう事も少なくありません。私はそこも配慮してバスタオルを使っているのですよおっ！」

バスタオルはタオルより取れにくそうですからねえ。

本当はプールとかで着替える時に使うタオルが良いんですが、季節が冬だから売ってませんでした。

「それにしても広いねー。シャワーが三つもあるよ」

ちなみにシャワーは三つとも並ぶ形で設置してあります。

って、希求さんが真ん中を使い始めましたよ！

「いやあ、お風呂場は三人用ですからねえ。ちなみにお風呂は皆で同時に使えるように大きいのが一つあります」

恐らく、今日の夜に三人で使いますよ。

私達はとりあえず体を洗います。

って、希求さんがバスタオルを取りましたよおっ！

「希求さん！私が背中を流しますよ！」

「そう？それじゃ頼むね」

真横に居たのでは気になってしまいますからねえ。

これは今度にシャワーの間に仕切りを作る必要がありますね。

「どんな時でも私は冷静ですねえ」

「むにゅー、その割には背中を洗う手が凄く震えてるよ」

希求さんが真ん中を使ったのが原因ですけどね。

「はい、終わりましたよ」

「ありがとー。今度は私が洗ってあげるよ」

ふふふ、此処までの展開は私の予想通りですよおっ！

私の予想ではこの後に私の事を詳しく知りたがる筈です！

「あの、雑魚ベーさんに聞きたい事が有るんだけど」

「ふむ、何でしょうか？」

ほら、予想通りでしょ！

ふふふ、どんな事を聞かれても私の評価が上がるように答えます！

「雑魚ベーさんは盗撮とかするよねえ？」

「ええ、その事ですか。って、ええっ！」

確信を持った言い方でそんな事を言わないで下さいっ！

それに、私が取ってたのはホームビデオの写真バージョンですよおっ！

「何故その事を？って、うおっと！」

つつい後ろに振り向きましたが、裸だと一瞬で理解し、そのまま元の向きに一回転しました。

「申し訳ありませんでした！私とした事が一瞬希求さんの裸が見えかけました！」

これは真剣に正直に謝ります。

しかし、これは私が罰を受ける必要がありますよ！

「むにゅー、それなら大丈夫だよ」

ううつ、希求さんは何て優しいのでしょうか。

ですが、気持ちだけ受け取っておきます。

「いえ、これは私が原因です！こうなったら、シャンプーを両目に入れて死にます！」

「ええっ！さっきのは大丈夫だし、シャンプーを目に入れると痛いよ！というか、シャンプーで死ぬるの？」

確かに弱酸性ですが、殺傷力としてはイマイチですね！

「それに、しっかりは見えなかったよね」

確かにしっかり見えませんでしたでしたが、罪状に変わりはありません。

「シャンプーでは物足りないので、シャワーの水を全開で口に突っ込んで溺死します！」

「むにゅー、人の話を聞いて！というか、私の体を一回よく見て！」

二度と少女が見れない私への褒美は嬉しいですが、同じ罪を繰り返す気はありません！

「私は先に旅立ちますが、褒美の必要はありません」

「褒美とかじゃなくって、無実の証明だよ！」

普通は死ぬ前に未練の言葉とか要りますよねえ。

「最後に私と雨双さんとアミューリーさんの三人で、お風呂に入りたかったですねえ」

「やっぱり最後まで少女の事だ！」

で、シャンプーとシャワーを使いましたが、結局生き残りました。

というか、目が凄く痛いんですけどおっ！

「というか、特星で普通は死ねないんだよねえ」

「というか、目が開けない位に痛いんですけどおっ！」

というか、というか合戦になってるんですけど！

「というか、飽きました！」

「むにゅー、私も」

あー、痛みが引いてきました。

って、お腹を触られてるんですけど！

「シャワーの水で結構お腹が膨らんだねー」

「あの一、希求さんは現在どの辺りを見えていますか？」

現在は仰向け状態なんですけどねえ。

「お腹辺りだよ」

おー、いろいろとギリギリセーフですね。

「そうですか。では、そこより下は絶対に見ないで下さいね。本気で自分を責めて、自殺を考える可能性が高いので」

「それは大丈夫だよ！」

そういえば、さっきも体を見られたことを大丈夫だと言っていましたね。

「希求さん、小学生でも兄弟でお風呂に入るんですか？」

「まだ入らないよっ！」

後々、入るつもりなんですね。

覚えてたら悟さんに教えておきましょう。

「むにゅー、一回私の体を見たら分かるよ」

「うーん、そう言われましてもねえ」

というか、いつまでお腹を触ってるんですかね？

「あー、背中にゾクゾク感が出てきました。冬にお湯に浸からないのは厳しいですね」

「というか、私の事を信じてないの？」

いや、信じてないのではありませんよ！

「信じてないというか、疑ってるに近いんですよー。ほらあ、信じにくいとかなんですけど」

「信じて……ないんだ」

あれ、ちょっと声が小さくなったんですけど！

「うう……少女……だけなら……ひつく……信じてる、うう……雑魚ベーさんに……ひつく、信じてもらえないんだ」

ちょっと、特星で人が本気で泣くなんてあり得ません！

ってか、完璧に私が泣かせたんですよ。

「あああ、あの！と、とりあえず、あの……お、落ち着いてください！」

自分で言った事ですが、私がまず落ち着くべきだと思います。

「ひっく……ひっく……じゃあ、ひっく……信じて……くれる？」

「そんなの当たり前ですよ！」

ここまで言われたら、流石に目を開けるしかありませんよねえ。

私は今から見る光景を覚えておくために、記憶の容量を調整します。

そして私は目を開けました。

「って、希求さんの体の数箇所にもザイクが見えるんですけど」

「むにゅー、だから大丈夫って言ってたんだよ」

平然とした顔で希求さんは笑っています。

「あれ、さっきまで泣いていませんでしたか？」

「あー、私の能力で声の聞こえ方を泣き声風にしたんだよ。私は普通に喋ってたんだけどねえ」

それって能力の無駄遣いですよねえ。

ってか、物理学と関係ないと思いますよ。

「ちなみに私から見たら、自分にモザイクがなくて、雑魚ベーにモザイクがついてるよ」

「自分にはモザイクが付いてないように見えるんですね」

第三者から見たら、モザイクの付いた、少女と良い男が居るように見えるんですね。

こんなことなら、もう少し早く見ておけば良かったと後悔しています。

「じゃあ、私は先に渦巻風呂に入ってるねー」

希求さんを見ると、既に体を洗った後のようです。私が目を傷めるうちに洗ったみたいです。

ところで、渦巻風呂なんて作った覚えはないんですが。

「そういえば、異世界への扉は渦巻みたいだと、神酒さんが言っていましたねえ。希求さん、そのお風呂に入ってはいけません！」

「むにゅー、むにゅー飛び込み！」

って、飛び込んじゃってますよおっ！

というか、むにゅー飛び込みって良い名前ですね！

「待ってくださいよおっ！必殺、ジャンピング飛び込み！」

希求さんを追って飛び込む私でした。

ああ、私って勇敢ですねえ。

く全速迷走の森く

「むにゅー、また迷っちゃったなあ」

「今のは希求さんが原因ではありませんよ」

渦巻によって送られた場所は森ですねえ。

「あ、此処の地図でも出そうか？」

「何で持ってるんですか!？」

「私の能力で簡単に出せるよ。はい」

何処かから地図を出す希求さん。

能力を言わずに出すなんて、どれだけ便利な能力なんですか？

確かに物理学を無視してますけどねえ。

「あと、すっぽんぽんで居るのは困るから、バスタオルも出したよ」

「おお、ありがとうございます!」

でも、それなら衣服を出した方が良くないでしょうか？

「ところで、何故私が盗撮してると思ったんですか？」

まさか、盗撮している私を更に盗撮して、二重盗撮のコンボを完成させる気ですね！

「あ、時間切れだから教えるのはまた今度ねー」

「え、答えは言わないんですか？　というか、次も私は登場しますよね？」

希求さんは少し考えているようです。

「まあ、少しなら出るかもねえ」

「そんなああっ！」

十話 主人公は大事にしよう

@悟視点@

あー、皆さんお久しぶりですね。

何が久しぶりかは知らないけど、何かが久しぶりだと思う。

ちなみに主人公は大事にするべきだと俺は考えている。だって、物語は主人公が居て成り立つんだし、登場回数と人気度とイベントが一番多くないと駄目だ！長髪のロリコン変態アハハ雑魚ベーなんてのは論外だと考えるべきだ！

「そう、主人公はアイドルだ！」

「あの、ランクが下がってますよ。というか、アイドルだと女性限定になっちゃいますよ」

ってか、何で魍魎がツツコミをやっているんだ。

今日は元旦の次の日である。更に言うと、この回はの話一つ前の回の話と途中まで同時進行である。

ちなみに希求は雑魚ベーの家に朝風呂に入りに行っている。雑魚ベーと一緒に入るらしいが、安全対策と問題対策は教えたから大丈夫だ。

「悟さん、新聞を見てください。特星が凄い事件に巻き込まれてるようですよ」

「どれどれ？」

魑魅に渡された新聞を読んでもみると、怪我をした人が載っていた。しかし、傷口から出ているのは血ではなく、なんか謎の物体的な黒い液体だった。

「おいおい、この謎の物体的な黒い液体は何だ？ つか、どうして特星で怪我をしているんだ？」

「その液体は見た目通り、謎の物体と特星内で騒がれてますね。人を別世界に送り、送った人の偽者が特星に住むんですよ」

「その偽者の正体が謎の物体ってわけか」

魑魅は自分は既に知っていたかのように話すが、全て新聞に書いてあることだ。

それにしても、これは感染みたいな広がり方だな。

「妹達は大丈夫か？」

「希求さん以外は小学校ですからね。偽者が一人でも学校に居たら駄目ですね」

いや、偽者を倒せる奴が居たら大丈夫だろ。

それにしても、記憶とかも本物と同じ偽者なんか居るのか？

「ま、悟さんは大丈夫ですよ。悟さんの知り合いは強い人ばかり

ですから」

魅異や羽双とかは確かに反則的だよな。

「って、それはどういう意味だ！俺は強くないとでも言いたいのか！」

「言いたいですけど、嫌われる可能性がありますから言いません。だから、安心してください」

「既に言ってるだろ！」

確かに自覚はしてたんだが、ハッキリ言われるとショックだ。

これでも普通の殺し屋とかより強いんだけどなあ。

「まあ、主人公よりヒロインが強いなんて良くありますよ」

魍魎、笑顔でそういう事を言っても、場合によっては相手を惨めな気持ちにするんだぞ。

「そんな事は気にせずに、お菓子でも食べて元気を出しましょう」

「そのお菓子は俺のなんだけど」

まあ、魍魎に買ってきてもらったお菓子だけどさ。

「そうだ！悟さんがこの事件を解決するのはどうですか？この事件で特星の人が全滅する可能性があるらしく、国から莫大な賞金も出されていますよ」

まあ、全滅よりは赤字の方がマシだよな。

「で、いくらだ？数億は軽くあるとは思うが」

「十兆ですね」

「って、十兆も出すのかよ！」

魑魅が平然と言う事にも驚いたが、金額にはもっと驚いた。

校長への借金が前回聞いた時は二兆二千億だったから、それに多少の利子が追加されていても払える！

「よし、多くの人を助ける為にこの事件を解決してやろう！」

「その前に悟さん、思ってもいない事を口にすると、嘘付けとか、この主人公最悪だとか、出番減らすぞとか、いろいろ思われますよ？」

最後のは特に困るんだが。

「じゃあ、借金返済の為に頑張るぞ！」

「私も全力でお手伝いします！」

さて、とりあえずは敵に関する情報集めだな。

「まずは謎の物体の性質が分かる奴が必要だ」

「ふふふ、それなら心当たりがあります！」

魑魅が自信満々に言う。

まあ、俺には心当たりがないから任せるか。

「すぐに呼んでくれるか？」

「もちろんです！では、数秒待っててください！」

そう言うと、凄い速さで家を出て行く魑魅。

「おまたせしましたあっ！」

「うおっ！」

何も無いところから急に魑魅が出てくる。

「邪魔するぞ」

魑魅の後に出てきたのは衣宵だった。

「衣宵じゃないか。十月の事件以来だな」

「真っ先に言っておくが、今回の事件は私が起こしたわけじゃないぞ。もちろん、偽者でもない」

別に疑ってるわけじゃないんだが。

「では、衣宵博士の研究材料を集めてまいります！」

「ああ、できる限り無傷で頼む」

魑魅は偽者を捕獲しに出ていく。

「何で私が博士なんだ？」

「まあ、そういうなよ衣宵博士。ところで、今回の事件の謎の物体の性質とか分かるのか？」

衣宵は未知を操る能力だから、逆に性質が分からなくなる気がするんだが。

「分からない。だが、謎の物体があればなんとかなるぞ」

「どういう理論だ？」

「私が謎の物体の未知の部分を見破る」

要するに、能力を使えば分からない事が分かるのか。

テストの時にどうにかして使えると便利だけどな。

「そういえば、偽者退治の会議を記紀弥の所で今日するらしい。私も参加するつもりだが、悟はどうする？」

「あ、そうなのか。それなら俺も参加するか」

だが、賞金が山分けになる可能性があるな。

「というか、記紀弥達の事を知ってるのか？」

「当然だ。お前の知り合いは私の知り合いだと思え」

ま、数ヶ月も経てば知り合いも増えるのは当然か。

というか、待ってる間が暇だな！。

こういう時には怪しげなボタンとかがあればなあ。

「悟、その怪しげなボタンは何だ？」

「あるのかよ！」

うわっ、本当に壁に黒々しさを放ってるボタンがあるし！

ってか、勝手に俺の家にこんなものをつけたのは誰だ！

「で、このボタンは？」

「俺は知らないぞ」

これは俺に対する試練か何かか？

「衣宵、ボタンを押したい衝動が体中を駆け回らないか？」

「全然駆け回らないな。むしろ、押すなという感覚のほうが大きい」

俺も同意見だが、俺が押さなくても誰かが押す展開になると思う。

「だからボタンを押す！」

「ピッ」

あれ、足元の感覚がなくなった？

下を見ると真っ暗な大穴がある。

「あー、やっぱりこうなるのか。まあ、どこに落ちても大丈夫だろう」

いろいろと慣れているんだよ。

く謎の世界的な場所く

「お、明るくなってきたあ！」

「ドガッ！」

「のはあっ！」

「ったあー、この展開の速さは何なんだ？」

というか、此処はいったい何処なんだ？

「あ、起きた？」

誰かの声が聞こえたから再び眠りの体制に入る。

「って、起きろー！」

「ぶはあっ！」

額を何かで突かれた。

寝かせてくれそうにないので起きることにする。

「って、子供？」

目の前にいたのは少女らしき子供だった。

「うわ、近寄るなあ！」

いや、起き上がったただけなんですけど。

なぜだか知らないが警戒心的なものを感じる。

「あのさ、どうしてそんなに構えてるんだ？」

「うう、あなたは銃を持ってたけど強盗なの？」

え、銃なんか持ってきてたっけ？

「少なくとも強盗じゃないから安心してくれ。それで君は？」

「え、あつ、私は天川 あまかわ 美矢 みや です」

「あ、普段から敬語じゃないなら、わざわざ敬語を使わなくてもいいぞ」

「あ、うん」

年上にちゃんと敬語を使う子供を久しぶりに見た気がする。

「あの、あなたの名前は？」

……あー、何だったっけ？

これは展開的にはよくある記憶喪失！？

「あー、覚えてない」

「えええっ！」

当然だが驚かれる。

ってか、俺は本気で記憶喪失みたいだ！

「ど、どうするべきだ？」

「え！いや、私に聞かれても困るんだけどなあ」

まあ、知らない人が記憶喪失じゃあ困るのは当然か。

うーん、身分証明的な免許証とかはないのか？

「なら、警察に相談したら？」

「いや、俺って銃を持ってたんだよな？確実に捕まるだろ」

というか、銃を持ってる人を助ける子も珍しいなー。

ってか、銃を持ってた俺は殺し屋的な職業じゃないだろうな？

「でも、本物みたいな銃の他に水鉄砲とかもあったよ」

「な、なぜに水鉄砲？」

「いや、私に聞かれても困るけど」

という事は、劇の役者みたいな仕事してたのか！

「あ、この紙にお兄さんのことが載ってるよ」

「え？」

持ち物を適当に出しまくっていると、美矢がその中から何かの紙を見つけ出す。

「おー、本当だ」

紙には悟ンジャーブラックという文字と一人の男の絵が載っていた。

ただし、服装は真っ黒なようだが。

「鏡ならあるよ」

「ん、ありがとう」

確かに紙に載ってる絵の男と同じ顔のようだ。

「なるほど、俺の名前は悟ンジャーブラックらしい」

「いや、違うでしょ。どうみても戦隊の内の一人の名前だよ」

意外にに呆れたようにつつこまれると悲しいな。

悟ンジャーブラックか。：略して黒悟ってのでしょうか？

「よし、名前がわからない間は戦隊せんたい 黒悟くろいと名乗ろう」

「凄く適当だし！」

でも、苗字が戦隊というのは判りやすすくないか？

「ところで此処は何処だ？」

「赤野県の赤野町だよ」

赤野県なんて聞いたことはないが、日本であることは確かなようだ。

「あ、私、公園で友達と会う予定があるんだけど、黒悟さんも来る？」

「そうだな、ついて行っても良いなら是非行きたいな」

とりあえず、町の事を知る必要があるからなあ。

「着いたよ」

「早っ！」

公園は美矢の家の隣にあったようだ。

家が数件分くらいの大きさで、駐車場的な場所は見当たらない。

「というか、人がまったく居ないな」

「まあ、大抵の子供は勉強でもしてるんでしょ。寒いし」

確かに外は結構寒い。

「今は冬か？」

「うん。今日は元旦の次の日だよ」

昨日が元旦だったのか。

「おーい！美矢ちゃん！」

あれ、俺と美矢以外の誰かの声が聞こえたぞ。

「ああ、やっときた。黒悟さん、周りじゃなくてあの家のベランダだよ」

「ベランダ？」

美矢の言う家のベランダを見ると、一人の少女が手を振っていた。

「あー、あれか」

そしてその少女はベランダから飛び降りた。

「って、飛び降りた!？」

「あー、アイツなら大丈夫だよ」

少女は塀の上に見事に着地して、さらに回転して地面に着地した。

……よし、後でできれば挑戦してみよう。

「あれ、美矢ちゃん、この人は誰? 新しい漫才の相方？」

「あのさ、私がいつ漫才師になったの？」

「ついに私とのコンビも解散かあ」

「コンビなんか組んでないよ! それ以前に漫才師でもないから!」

おお、この二人はもしかして漫才師なのか？コンビネーションかはかなり良さそうだ。

美矢のツツコミを俺も見習わないとな。

あー、でも、俺って相方とかはいたのかな？

「この人は記憶喪失なんだって。今のところは戦隊 黒悟さんって名前で名乗ってるよ」

「おー、かっこいい名前！」

美矢の友人らしき子が羨ましそうな目で見てくるが、この名前は本名の可能性があるからやらないぞ。

「えっと、こっちは私の知り合いの真理しんり 美異みいちゃんだよ」

「むっ、美矢ちゃん、知り合いじゃなくて相方！」

「いや、相方じゃないって」

美矢がツツコミで美異がボケのようだ。

とりあえず、これまでに気になった事は特にないな。

あ、でも、美異ちゃんの名前と苗字が、特星の社長の名前と苗字の読み方と同じだ。ま、そんなのは偶然だろうが。

……こういう事を偶然と考えると、偶然じゃないという事が多いんだよねあ。

「それじゃあ遊ぼう！」

「えー、宿題はしなくて良いの？」

「宿題の問題用紙と同じ問題用紙を買ったから大丈夫！買った問題用紙には解答用紙もついてるから！」

うわー、ある意味賢い考えだが反則だろ。

「判ったよ、もう」

美矢は呆れているようだ。

「遊ぶ前に二人に面白い話をしてあげよう！」

「ええー」

美矢は美異の話を聞くのが嫌なようだ。

というか、俺も正直気が乗らないんだが。

「あ、嫌なら断ってもいいよ」

「私は嫌だ」

「あ、俺も」

「じゃ、話すね!」

さっきの質問の意味は!?

「今日見た夢の話なんだけどね」

夢の話なら夢オチにすれば良いんじゃないか?

「記憶を操る人が、自分の事に関する記憶を消す技を使ったんだけど、それで自分の名前まで忘れちゃってさー! 朝起きたら私、少し漏らしてたんだよ」

「……………美異ちゃん、その後に下着は替えたの?」

「あ!……………夢に出た技が原因で覚えてないよー」

「じゃ、何で夢のことや朝のことを覚えてるのさ?」

美矢の的確な指摘で美異は声が出ないようだ。

というか、結局何がしたかったんだ?

「じゃ、遊ぼうか!」

「変えてないんだよね!? なら、今から変えてくれば良いじゃん!」

「もー、美矢ちゃんは細かいなあ。小学生の少女に汚いところはな
いから大丈夫だよ!」

誰の理論だよ！

「そんな訳ないし、自分で言う言葉じゃないよそれ！」

「いやあ、昨日の夕方に森に居た人が言ってたから真似しちゃった」

実際の小学生にそれを言うか？

というか、この二人は小学生なのか？

「え、森に人が居たの？」

「うん。長髪のコスプレした大人の人なんだけど、私と同年くらいの子も一緒だったから誘拐犯だと思うよ」

「いやいや、普通に考えて親子でしょ！」

……俺の予想では変態だと思う。

「ところで、この辺に森なんかあるのか？」

「あ、うん。美異ちゃんの知り合いの土地なんだけど、神聖な場所がたくさんある場所だよ」

神聖な場所って事は宝物とかもあるのか？

あー、あっても持ってたたら駄目か。

「どんなやつだ？」

「神出鬼没のお姉さんで、確か名前と苗字の読み方が美異ちゃんと同じだったよね」

「私、難しい漢字は苦手だわ。だから、どんな字だったかは覚えてないねー」

「どれだけ記憶力悪いのよ」

それって例の勇者社の社長じゃないか？

「自由に使っていいって言ってたから、少し前に秘密基地を作ったんだよ！」

「また、美異ちゃんは勉強せずにそんな事してたの？」

「もちろん！」

「威張れることじゃないでしょうが」

それにしてもこの二人は息がピッタリだなー。

でも、美矢はツツコミで疲れてるようだ。

「あ、そうだ」

いろいろと大変そうな美矢にはツツコミ役の秘宝を上げよう。

「美矢、ツツコミは大変だろうからこれを受け取れ」

「これって、ハエ叩きじゃん！ツツコミ苦勞と何も関係ないよ！」

おお、ナイスツツコミ。

だが、俺は意味のないものを渡すわけないだろう。

「それはツツコミ用のハエ叩きだ。だから、虫を叩かずにボケた人を叩け！」

「でも、危ない気がするなあ。というか、普通ハエ叩きを持ち歩かな？」

「必要以上に安全なハエ叩きだから大丈夫だ。全力で叩いても衝撃はあるが、痛さはないし跡もつかないぞ」

でも、何処で入手したのかは覚えてないんだよなあ。

「あ！美矢ちゃんだけズルイ！ねえ、私には何をくれるの？」

いや、ツツコミ用の物しかないんだが。

というか、俺はツツコミ役だったのか？

「今はそれしか持っていないから後でな」

「絶対だよ！」

絶対かどうかはわからん。

く全速迷走の森く

ということで、俺達は森に遊びに来た。

この森の名前は全速迷走の森だと、この森の持ち主が言っていたらしい。

「記憶がない者がこの森に入った時、野性の本能に目覚める！そして、欲望に素直になり近くの少女を襲うのであった！」

「…俺が？」

まず、その話が本当なら、実況してる暇はないと思うんだが。

「美異ちゃん、黒悟さんにかなり失礼だよ」

「おおっと！美矢ちゃんも黒悟の手に落ちてしまったあっ！そう、美矢ちゃんは単純思考だからすぐに敵に利用されるのだった。いやー、その単純さを分けてほしいねえ」

「それは私の台詞だっ！」

まあ、子供なんて皆こんなものだろ。

それにしても平和そうな雰囲気の漂う森だな。

「この森に入って出られた者はいない！」

「じゃあ、美異ちゃんは森で人を発見した後、どうやって家に戻ったのよ？」

「え？あ、えーと、夢オチ！」

それは実際に発見したことにならないだろ！

「とりあえず、秘密基地に案内するね」

というか、美異の行動が男の子勝ちだと思う。

今時の子供は秘密基地とかは作らないだろ。……ある意味、美矢や美異みたいな子供のほうが良い生活だと思うけどな。

……過去を思い出す的なシリアスな気分になってきた。いや、記憶はないけどさ。

（神秘と重なる秘密基地）

「とうちゃーく！」

到着した場所にあったのは基地というより小屋だった。

…これを一人で作ったのはある意味すごいと思うけどな。

多くが薄い木の板で出来ているようだ。

「お、来たね」

ん、秘密基地の中に誰かが居るようだ。

「あ、神離さん！」

「私？」

「美異ちゃんのことじゃないよ！」

どうやら、この森の持ち主の人らしい。

年は俺と同じくらいの女の子で、結構可愛い子だ。

「悪いけど、その男に用があるから二人は外に居てくれる？」

「えー、私の秘密基地だよー！」

「ケーキをあげるよ」

「じゃ、外で待ってるね！」

うわぁ、恐ろしく物でつられてるなぁ。

あ、この人に聞きたいことがあったんだ。

「この場所は平和だけど、私達には合わないと思わない？」

「へ？」

まあ、平和そのものは確かだが、合わないことはないだろう。

というか、この子は何を言ってるんだ？

「旅行で来るには良いと思うけど、この世界には非科学的な能力は存在しないんだよね。まあ、出来る限り人に知られないようにした方が良いと思うよ」

「いや、何を？　というか、誰？」

「ふふふん、記憶喪失者にそんなことを教えたら面白くなるよ」

こっちは面白いとか関係なく真剣なんだけどなあ。

「今回の特星の問題も遊び程度のことだけど、遊びの範囲が常識外だと後が大変になるんだよ。捕まった人の待機場所が別世界だと帰れなかったりとかね」

「んん？」

「まあ、そんな遊びがないと面白くないね。それに負けた場合でも別のストーリーがあるなんて珍しい事だよ」

何を言ってるか全然判らんが、俺のことを言ってるのか？

「ちなみに負けの条件は？」

「特星から追い出された時点で負けだね。ただし、特星に帰還した場合は負けではないよ」

「どうやら俺は特星から来たらしい。」

「俺が特星に戻る方法は？」

「無理だね。別世界を移動できる人なんかほとんど居ないよ。まあ、移動したメンバーも居たから、黒幕はそっちが倒すだろうね」

「とりあえず、どうすればいいんだろうか？」

「俺にどうしろと？」

「別にどうしろとも言わないけど、負けを認めて黒幕じゃない犯人を倒すのが普通だね。……記憶を操れる人物なら場所を知ってるよ」

「明らかにそいつが真犯人じゃないか！」

「場所は此処の真上の雲辺りだね。でも、敵には味方も居るようだし、場所的に空中戦になるだろうね」

「おおっ、かっこいいシーンが頭に浮かぶぞ！」

「まあ、相手の居る場所の性質は特星と似てるから、全力で安全な勝負が出来るね」

「全力勝負が安全なんておかしくないか？」

「そうそう、この世界の人にハッキリ気づかれない時なら、いつでも空を飛べるようにしておいたよ。夜中にでも試しておいてね」

えっ、本当に飛べるのか？

「あと、これはおまけ的な事だけど、美異は私の家族なんだよ」

「いや、どうでもいい」

「ふふふ、なら、記憶が戻った後も同じ事を言ってね」

それは約束できないかもしれないな。

とりあえず、この場所の持ち主は外へ出て行く。

「ふう、やっと入れたー」

「美異ちゃんは短気すぎだよ。ところで何の話をしてたの？」

「あー、なんかいろいろと話してた」

ありえない話が混じってたけど、今日の夜に空を飛べたら真実ってことにしておこう。

「よし、それじゃあ遊ぼう！」

あー、これからが一番大変そうだ。

「美矢の家」

あ後は暗くなるまでずっと三人で遊んでいた。

運動不足なのか、腰と背中が妙に痛い気がする。

「明日は筋肉痛だろうなあ」

一晩寝たら筋肉痛になるのなら、ずっと寝なければ大丈夫か？

「精神が持たないな」

「さっきから何を考え込んでるの？」

俺の独り言が聞こえたらしく、美矢が何を考えてるか聞いてくる。

「筋肉痛の回避方法なんだが、どうすれば良いと思う？」

「我慢すれば？」

まあ、徹夜するよりは良い考えだな。

ちなみに俺と美矢は美異が来るのを待っている。美異は親に美矢の家で朝食を食べると伝えに行っている。

「ところで、美矢の親は？」

「あー、泊まりこみで遠くの県に出かけてるんだよ。だから、普段は美異ちゃんの家でご飯を食べるんだけど、今日は人数が無駄に一人多いから私が作ったの」

本人は言っただけで気づいてないみたいだけど、無駄って言われた。

「やあ！つまみ食いしていて遅れたよー」

「普通食事前につまみ食いしてくるかなあ？あ、鍵は閉めた？」

「ドアを開けた状態で鍵を閉めたよ」

「……閉めてくるね」

美矢はドアの鍵を閉めに行く。

…美異がその間に美矢の分の唐揚げを食べている。

「んー、普通の唐揚げだね」

普通の以外にどんな唐揚げがあるんだ？

ちなみに唐揚げは一人数個なので、ドアを閉めに行く前に数を数えていけば気づくだろう。

「まったく、変な人が来たらどうするのさ」

「美矢ちゃんが脱いでる間に私が助けを呼びに行く！」

「誰が脱いでたまるか！」

というか、よっぽどの少女好きにしか通じないだろう。

ちなみに俺が犯人なら驚いて逃げ出すな。

「あれ？」

お、美矢が唐揚げを見て固まったぞ。

「：美異ちゃん、唐揚げの味はどうだった？」

「え、まだ食べてないよ」

いや、食べてただろ。

「私の唐揚げが減ってる気がするんだけど」

「やばいっ！」

「あ、待てー！」

美異が逃げたので美矢がそれを追いかける。

二人の唐揚げを一つずつ頂いておくか。

「いやー、結構満腹だ」

だが、二人の分の唐揚げを食べたことは気づかれてしまった。

ちなみに二人は一緒にお風呂に入っている。

まあ、子供らしいと言えば子供らしくていいけどな。

「さて、どうするかなー」

そういえば俺の持ってきた物って何処にあるんだろう？

確か二階の部屋で目が覚めたんだったな。

「ちょっと見てくるか」

それにしても、銃なんて危険物を持ち歩くなんて、本気で役者であることを祈る。

「偽者でありますように」

と言うわけで二階の部屋に入る。

「あれ、看病してもらった部屋と違うな」

やけに木くずや瓦などが落ちていて、天井には穴が開いている。

「…落ちてきたのか？」

落ちたとしても、よく瓦とかを突き破って無事だったな。

俺の体って結構丈夫なんじゃないか？

「まあ、役者なら怪我に備えて体を鍛えてもおかしくないな」
少々、鍛えすぎだとも思うが。

「お、銃とかが落ちてる」

うーん、偽者の可能性もあるが、分解して外に捨てておこう。

「何か、水鉄砲やら玩具の銃みたいなのも混じってるぞ」

玩具の方にはエクサスターガンと彫られている。

銃の名前だろうか？

「何してるのー？」

「うおっ！」

後ろを見ると美異がいつの間にか居た。

「おおっ、やけに良い形の銃だね！ちよつかして！」

「えっ？あー、駄目だ」

「えー、なんでさ？」

非常に危険な気がするからだ。

「外でも見てろ。星が綺麗だぞ」

実際は星が見えるかは知らないが。

「あ、何か変なのが浮いてるよ」

「変なの？」

外を見ると確かに変わった生物が空を飛びまわっていた。

結構遠いが、どうやら竜のような生き物のようだ。

「映画の撮影の様子だな。視力が落ちるから気にしたら駄目だ」

「お、詳しいね」

いや、嘘だけどさ。

「そうそう、美矢に出かけてくると伝えといてくれ」

「わかった！」

さて、あの竜が見方だといいいんだけどな。

というか、敵だったら勝てないだろう！

というわけで、俺は竜の飛んでた場所へ向かうのであった。なんとなくこの台詞は言ってみたかった。

十一話 えっと、何だっけ？

@悟視点@

飛んでいる竜の場所を目指していたら、全速迷走の森に迷い込んでしまった。

ってか、全速迷走の森って名前が長くて覚えにくい気がする。

「さて、この上を竜が飛んでいるんだな」

「ふう、ようやく来たか」

「うおおう！」

気づかなかったが、誰かが俺の後ろに立っていた。

「誰だ！」

「ふむ、やはり記憶を失っているようだな。まあ、俺の知ったことではないが」

自分のこと意外関係ないなんて酷いなー。

「ゲニウス、もう戻れ」

「わかりましたっ！また用があったら呼んでくださいねー」

うおうっ！空中の竜が喋っただと！？

「竜って喋るのか!？」

「知りたければ自分で調べることだな」

そんなこと言っても、俺は竜の存在すら知らなかったんだぞー。

うーん、この事が解明できれば俺は有名人になれるかもしれない。

「とりあえず、俺は東武だ。俺に二度も名乗らせたその度胸と、俺の前に現れる出現率の高さは褒めてやろう」

度胸や出現率以外にも褒めてほしいなあ。例えば主人公らしさとか、記憶力の良さとか、超人的な能力とかさあ。

「だが、貴様程度が俺の前で立っていられることは二度とないと思え!」

「はい」

二度とこいつの前に立ちたくないの、素直な返事しておく。

「では、魅異からの伝言を判りやすく教えてやろう。小巻が秘密基地にいるから、協力して空中の敵を二人倒せ」

小巻って誰なんだ？

「さて、俺は用事があるので帰らせてもらう」

「って、待った!」

「断る」

いや、戸惑いもなく断ることはないだろ。

「美異の秘密基地のことだよなあ」

しょうがないから行ってみるかな。

く神秘と重なる秘密基地く

さあさあ、ついに到着してしまったぞー。

「あ、やつと来た」

「ん？君が小巻ちゃんか？」

予想では高校生くらいかと思ってたが、小学生か中学生くらいの子だった。

「え、あ、そうだけど。……あー、記憶が無くなってたんだっけ？」

「その通りだ」

気分でちゃん付けしたけど、普段はどんな感じで呼んでたのだろう

か？

というか、服が微妙に高そうな服だ。

「東武から名前は聞いたと思うけど、私の名前は小巻。とある一族のお姫様なんだけど、訳有りで特星に住んでいるの」

おいおい、竜使いの次はお姫様かよ。

俺はとてつもない出来事に全力で巻き込まれているようだ。

「特星の人ってことは能力的なのを使えるのか？」

「うん、特星に入って新しい能力を習得したからね。その能力は意味を操る能力なんだけど、結構面白いの」

あまり強くなさそうな能力だと思っけな。

「相手は空中に居るけど空は飛べるよね？」

「ああ」

試してないが、飛べるって魅異ってやつが言ってた。

「じゃあ、空の上に向かいましょう」

く遙か上空の空中く

おー、本当に飛ぶことが出来たぞ！

「おっと、此処まで来れる人が居たとは驚いた」

お、ついに相手が登場したぞ。

だが、相手もやっぱり小学生か中学生くらいの女の子だった。

「私の名前は古居家^{ふるいけ} 西華^{せいか}。貴方達を記憶喪失にしたのは私よ」

小巻は記憶喪失ではないけどな。

「私に何か用？」

「用事のついでに倒しにきたの」

用事のついでだったのかよ！

「そう？なら、ついでで倒してみればいい！記憶、風を切る風」

「悟はもう一人の敵をお願い！魔術、球型防御魔法」

あ、俺の本当の名前が悟だと判明した。

「おお、西華が久々にやる気だ」

「誰だ？」

いつの間にかもう一人の少女が近くに居た。

この世界には小学生くらいの少女しか居ないんじゃないか？

「私は晴天道^{せいてんどう} 春夏^{はるか}。絶対の強さを誇る力を操る能力の使い手だよ！」

能力がすごく強そうなんだけど。

「私の能力を使えば、普通の力の他にも財力や権力や知力や迫力などを操れるのよ」

おー、財力とかも操れるのか。

「一つだけ言わせてもらう。主人公を相手に力勝負で勝つのは不可能だ！」

記憶はないが俺は主人公であることは間違いない！

「なら、主人公に私になるまで！火力、丸焼き用の特大強火！」

「何か展開が早くて俺の脳内が追いつかないが、主人公は俺だった気がするんだ！戦隊技、悟ンジャー連続撃ち！」

相手の巨大な炎の玉を水鉄砲でかき消していく。

割合的に普通はかき消せないだろうが、俺が戦隊だったから消せるのだろう。

「そんな銃じゃあすぐに壊れるよ！魔力、十八番の魔法式衝撃波」

「空中で衝撃波なんて出すなあ！」

理不尽で常識的ではない攻撃をかわしつつ、玩具の銃の追尾弾で攻撃する。

ちなみに俺は技とかは覚えてないから、新たに考えてるところだ。

「戦隊技、単体で撃つ悟ンジャー砲！」

技名を叫べば何故か予想通りの技が使えることに気づいた！

あ、俺も特殊能力とかが使えるかもしれない！

「ちょっと待った！」

「ええ！？」

勝負中に試して失敗したら恥ずかしいから、少し練習しておくか。

「戦隊技、飛び散る悟ンジャー水圧弾！」

待ったと言っておいた春夏に当ててはいけないので、別の方向に向かって技名を叫ぶ。

銃から威力が高そうな水の玉が放たれ、離れた場所で戦っている西華に当たる。あー、正直なことを言うと、小巻と西華の存在に全然気づかなかった。

まあ、ちゃんと撃っているようだ。

「うん、問題はないな」

「そうね」

え、味方に弾を当てたのに何も言わないのか？

うわぁ、外道過ぎるよまったく。

「うーん、自分の中の何かが悪くなっていく気がする」

なんか、名前の部分とかが悪くなってるような気分だ。

「隙あり！武力、とにかく集中砲火！」

隙ありって俺に教えている時点で、俺の隙はすでに無くなっている！

相手は何処からか爆弾や砲弾などを撃ってくる。

「数は多いな。だが、戦隊に覚醒した俺の回避力は半端じゃない！」

「変態に覚醒？」

戦隊に覚醒だったの！

俺は相手の攻撃を全て避けるのは無理なので、逃げ回りながら攻撃する。

「戦隊技、飛び散る悟ンジャー水圧弾！」

さつき練習した技を使うが水圧弾は春夏に回避されて、離れたところで戦っている西華にだけ当たってしまう。：まあ、敵だから問題ないな。

「火力、緩やかな三重の炎集率！」

俺と春夏を囲むように炎が集まってくる。

お、凄く熱いけど火傷などの怪我はまったくくないな。神離の社長が言ってた事は本当だったなあ。

「ってか、熱っ！戦隊技、力を合わせた悟ンジャー砲！」

この技は単体の悟ンジャー砲の二倍の威力がある。まあ、二つの銃で悟ンジャー砲を撃ってるから当然なのだが。

「おー、凄い」

さつきから春夏に攻撃を当てているのに痛くもなさそうだ。まあ、小学生くらいの子が元気なのはいいことだが、俺の攻撃が無効化されてる気がするなあ。

「さつきから攻撃を受けてるが、攻撃を防いでいるのか？」

「あ、気づかれたね。そう、私の力を操る能力は相手の攻撃を無力化できるの」

相手の攻撃を無力化なんてありかよ！

というか、力が関係すれば何でも出来そうだな。

「これで私に勝てる方法などないー！魔力、自動式の真っ黒砲」

「って、本当に黒い！」

見かけにツツコミをしていたら、避けなかった。

あー、俺の全身が真っ黒になってしまったじゃないか。

「……………はっ！」

今、とてつもなく重要なことに気づいてしまった！

「春夏、確かにお前には、さっきまでの状態では敵わないな」

「さっきの状態では？」

ふふふ、やはり気になるようだな。

「そうだ。だが、お前は俺を全身黒にしてしまった。すなわち、悟ンジャーブラックの本当の実力を出せるということだ！」

まあ、実力は無力化できるだろうけどさー。

「しゅ、主人公なのに第二形態！？」

お、見事に全然気づいてないみたいだ。

このままなら、必殺技を使えるかもしれないぞ！

「主人公には最終手段は必要だからな！常に爆破オチの準備も万全だぜ！」

「で、でも、私の能力に敵うわけないもん！」

ふう、主人公の行動に間違いがあるとしても？

「黒悟の真の力を喰らえ！黒悟奥義、黒悟らしさへの第一歩！」

「私に力技は通用しないからね！」

俺は春夏に向かってまっすぐ飛んで行き、正面で止まって自分の手を春夏に擦りつける。

「って、何するのさ！ちよっ……やめ！」

先に説明しておく、この技は相手を黒くした後、俺のように黒いから俺と同じような人間だと言う技である。こうする事により、相手は主人公に一步近づいたことを喜んで、感謝の印に降参するとう作戦だ。

「よし、こんなものだろ」

春夏の顔は今の俺並に真っ黒になっていた。

「春夏、お前の顔は俺のように真っ黒だ。よって、お前は主人公の俺と同じような人間だ！」

「ええ！そ、そ、それだけは嫌あー！」

春夏は何かを叫びながら飛んで逃げようとするが、戦ってる途中の西華と激しく衝突して、二人とも下に落ちていった。だが、急に二人とも消えてしまった。

「何だ?…って、ああああっ!」

ついさっき、記憶を思い出したぞ!

「なんか、すっきりしない勝ち方だったね」

「そうか?俺は勝ててよかったと思うが」

「実は私もそう思ってた」

おいおい、どっちなんだよ?

というか、これからどうやって特星に戻るんだ?

俺は此処が別世界だと考えているのだが。

「そんなに暇なら、面白いゲームをやっていないか?」

「げっ、魅異!」

「面白いゲーム?私はやりたい!」

小巻、魅異の提示するゲームに、体験者にとって楽しい要素などない。

「じゃ、送ってあげるね」

小巻が急に消える。

恐らく、ゲームの場所に移動させられたのであろう。

「俺は特星の問題を解決するから、特星に送ってくれ！」

「いやいや、特星の問題はすでに解決寸前だよ」

いや、解決寸前だとしても向かった方が良いでしょう！

「どうしても事件中に特星に復帰したいなら、今から私の出すゲームを攻略出来たらね」

あー、やっぱりそういう展開なのかよ。

「受けてやろうじゃないか」

「ルールはこれを読んでね」

魅異に渡されたのは説明書だった。

「じゃ、送るね」

変な場所のゲーム用ステージ

ほうほう、なるほどなあー。

今回は五面構成のステージで、罠や敵に触れると最初のステージに戻されるらしい。一つの面の最後には必ずボスが居る。

制限時間は無限だが、早く抜けないと罠が作動する場所もあるんだとき。

装備などは一切なしだが、身体能力は自動で補正されてるらしく、一定以上のジャンプが出来ない。まあ、普段よりは高く飛べるようだが。

敵や罠に当たっても実際に痛かったりしない。

「降参がしたくなったら私に言ってね」

魅異は様々な場所で俺がやられたとき、原因やヒントを与えてくれるらしい。というか、やられる前に教えてくれよ！

「ちなみにセーブは出来ないから、どの面でやられても此処からだよ」

内容が厳しすぎる気がするのだが。

「よし、いくぞ！って、うおっ！」

一歩踏み出したと途端に落とし穴に落ちる。

「ちくしょー、出オチだったとは！……あれ、スタート地点に戻ってるな」

「序盤には落とし穴が多いから気をつけてね」

よく見ると、地面の色が微妙に違う部分がある。

「なるほど、色がおかしい部分が落とし穴か。なら、そこを踏まないようにすればよし！ つぎやあああっ！」

再び同じ場所の落とし穴に落ちてしまう。

「ちょっと待て。その色の部分が落とし穴なら、ほとんどが落とし穴だろ！」

「序盤には落とし穴が多いっていったはずだよ」

多いてレベルじゃないだろ。

五つくらいの落とし穴がつながってるぞ。

「というか、通路でこの落とし穴は反則だろ」

走って飛べばなんとかいけるか？

「とりゃあああ！」

穴ではない色の床に向かって全力で飛ぶ！

「って、剣が！」

前から剣が飛んできて当たってしまふ。

そしてスタート地点へ戻された。

「…こんなの行ける訳ないだろー!」

「剣は高い位置に飛んでくるから、低く飛んでいくことが重要だね」

仮に足場に着地しても、足場が崩れたりする気がする。

「一つのステージの広さはどのくらいなんだ?」

ちなみに俺は数メートルも進んでいないのだが。

「体育館くらいの大きさで、五階まであるね」

「広すぎだろ!それをセーブなしでクリアしろというのか!」

「当然だよ」

普通に一年間続けても無理な気がする。

というか、これの攻略中に事件が終わるだろ!

「まあ、本来の主人公なら、このゲームを攻略するくらいの苦労はすると思うけどね」

能力の制限がなければエクサバーストでいけるんだけどなー。

とにかく、頑張っていくぜ!

「……おい、今気づいたんだが、ボス戦以外で止まっていられる場所がないぞ」

「お、今頃だね」

このゲームでボス戦以外では、動きっぱなしでないと罠に当たると気づいた。つまり、立ち止まれる場所がボス戦以外で存在しないのだ。

「まあ、ボス戦でも攻撃を避けるから立ち止まれないが」

それにしても理不尽なほどに難しいゲームだ。

「というか、一面クリアすらしてないのに、戻された回数 of 桁が凄い事になってるよ」

「物語とかで、そして長い年月が流れたとかよくいうが、まさに今の俺のことだと言っておきたい」

あー、もう嫌になってきた。

「あー、この際だから降参する。もう同じ場面を何度も見る人生は嫌だ！」

「ゲームで人生を語る主人公って面白いね」

いや、本気で凄く精神的に疲れた。

「じゃ、戻すね」

〽悟の家〽

「おお、戻ってこれた」

「他の住人も家に戻したよ」

という事は、事件が解決した後ってことか。

「ところで、東武や小巻は別世界で記憶が普通だったよな？ あれはどうしてだったんだ？」

「ああ、私が貴族と女子小学生の記憶は継続するようにしておいたんだよ」

お前が西華の特殊能力の影響の対象を制限してたのか。

「まあ、能力を使ってる方は気づいてなかったけどね」

どんな事件が起こっても魅異が関係してくるのは何故だろう。

ところで、美矢や美異はどうしているのだろうか？ 上空で大バトル

をしたから、町に被害が出ている可能性がある。

あと、美異に関することで凄いことを魅異から聞いた気がする。

……………あああああああっ！

「お、思い出したっ！魅異が美異と家族って言ってただろ！」

「確かに言ったね〜」

これは魅異の秘密に近づける重要な手掛かりだ！

「ごほっ、あー、どういう関係だ？」

「知りたければさっきのゲームのクリアーを要求するよ〜」

「それは無理！」

すでにトラウマ気味なのに、これ以上やられたら恐怖症になるだろ！

「なら、無料で教えてあげるよ〜。美異の存在を簡単に言うて私の母だよ〜」

「親としての母と婚約者としての母のどっちだ？」

「前者の方だね〜」

なんとなく分かっていたけど、魅異の場合はどちらもありえるからなあ。

「いくら私が本物の男子になれるからって、結婚とかの話はまだ早いからね」

「いや、そういう問題でもないのだが」

「というか、本題から外れていつてるって！」

「美異が母親ねえ。というか、お前の方が年上じゃないか？」

「頼まれたから小学生にしてあげたんだだよ。記憶も忘れさせるように言われたから、子供になった美異は私のことを最初は知らなかったんだよね」

母親の状態の美異も見てみたい気がする。

「他にも家族とかのことを聞きたいんだが」

「そういう秘密は少しずつ教えていくから面白いんだよ。じゃ、またね」

そういつて普通に家から出ていく魅異。

「んー、お茶でも飲むか」

今は魍魎も居ないみたいだから静かな日を過ごせそうだ。

「あっはっは！退屈そうですねえ！」

「ぶはっ、雑魚べー！」

くっ、俺の平和な時間を壊す気か！

「というか、何のようだ？」

「ふふふ、仕事の後の暇つぶしですよおっ！」

あー、今日はやけに機嫌が良さそうだなあ。

「久々に私の素晴らしい動きを見せましょう！ほら、回転ダンスですよおっ！」

「おー、それは凄いなあ。って、回ってるだけかよ！」

回るだけでダンスをしてるつもりなんだろうな。

「ノリが悪いですねえ」

「いや、今のノリツツコミはかなり良かっただろ！」

というか、叫んでつつこむのは久しぶりな気がする。

「ってか、お前が単体で現れるのは珍しいな」

いつもは八割近く少女と居るのに珍しい光景だ。

「ほら、いつも傍に居る人が居なくなると寂しくなるでしょう？私
がもしも急に居なくなっても悲しくならないように、今のうちに練
習しておこうと思うんですよおっ！いやあ、小学生にも少しは自立
心は必要ですからねえ」

「ふーん、俺は魍魎や魅異が居なくなっても寂しくはならないけどなあ」

というか、自立心が必要なのは雑魚ベーだろ。

「それに帰った時に、雨双さんやアミューさんが抱きついてくれるでしょうからねえ」

それが目的だろうが、それはまずないと思う。

「というわけで、今日は悟さんの家に泊めさせてもらいますよおっ！」

「なっ！」

特に騒がしさ以外の問題はないが、雑魚ベーを泊めるのはなんか嫌だなあ。

「寝室にお邪魔しますよおっ！」

うーん、やっぱり諦めてもらうかな。

「布団はこの辺でいいですかねえ？」

「って、何で勝手に寝室に布団敷こうとしてるの!？」

仮に泊まる気で敷くとしても、まだ寝るには明るすぎるだろ。

ちなみに別世界に居たときは夜だったが、ゲームが終わって特星に戻ったら明るかったな。

「今は何時だ？」

「あー、昼過ぎですねえ」

昼飯でも食べておきたいところだな。

「あ、冷蔵庫の中に食材がありませんよおっ！」

人の家の冷蔵庫を勝手に空けるんじゃない。

「ちなみに財布の中は空だ」

「私もです」

…まあ、昼飯抜きなんてのは事件中はよくあることだから大丈夫か。

「夜はどうするんですかねえ？」

「あ！」

…考えてなかった。

流石の主人公でも、昼飯と夜飯の両方がないのは大問題だ！

お、良い事を思いついた！

「雑魚べー、家に泊まりたければ宿泊料金を払うんだ！ついでに飯が欲しければ別料金な！」

「今は十数セルしか持ってませんよ。神社に行けば結構保管してるんですけどねえ」

そんな調子でよく此処まで来れたなあ。

というか、雑魚ベ一って持ち金も多くなかったっけ？

「なあ、お前って結構な金持ちじゃなかったか？」

「そうですねえ、最近が決まった職に就いてませんが、神社のお賽銭を除いても一日に何十万の収入がありますねえ」

それは多すぎるだろ！

「何でお前なんかが！」

「私は大きく儲けるのは得意なんですよおっ！」

そういえば、雑魚ベ一が元貴族とか聞いたことがあるぞ。

「ところで、どうして貴族を辞めたんだ？少女を追いかけてクビになったか？」

まあ、雑魚ベ一ならこれが原因だろう。

「惜しいですねえ。少女と会える機会が少ないから辞めたが正解ですよおっ！ちなみに私には姉が居るのですが、姉は貴族と泥棒を両立してましたねえ」

貴族と泥棒を両立できる人ってどんな人だよ！

「そうだ、姉の結婚式があったら悟さんも来て下さい。美味しい料理が沢山出るので、どっちが多く食べれるか勝負ですよっ！」

「お、望むところだ！」

雑魚ベーと決闘以外の方法で勝負した覚えがないから、こういう勝負もいいだろう。

さて、学生でも出来る仕事を探すか。

く特星公式営業会社く

「入社希望というのは貴方達ですね？」

「はい、そうです。ってか、校長がなぜ会社の面接をしている」

俺と雑魚ベーは資金集めの為にバイトに来たのだが、バイト先の面接の人が校長だった。

「校長さんとは久しぶりに会いましたねえ」

雑魚ベーも校長とは知り合いの様子。そういえば、雑魚ベーは小学生の職員をしたことがあったんだっけ。

「というか、校長が会社に居て良いのか？」

「あー、社長と知り合いですから。特星では校長が仕事をして大丈夫ですから」

え、特星って日本を基本に作ったとか、聞いた気がするんだが。

ついでに今頃だけど、校長への借金のことを思い出してしまった。

「この会社に勤める大抵の人は、貴方達の知り合いの筈です。という事は、面接に受からないと、その辺のキャラより駄目人間ってことですから、合格を目指して頑張ってください」

ところで、どうしてバイト先に普通の会社的な場所を選んだのだろうか？

「ま、頑張るか」

「面接でも容赦はいりませんよおっ！」

今日の食事を食べる為に！

「さて、この当たりしかないくじ引きを引いてください」

……いきなりやる気がなくなった。

くじ引きで俺と雑魚ベーは同じ場所を引き当てた。

ただし、雑魚ベーは大当たりを当てたらしく、俺より一つ上の階級らしい。

……………どういう会社だよ！

「どうもー」

適当な挨拶で中に入る俺。

「皆さん、私と少女にひれ伏しなさいよおっ！」

階級が一つ高いから、調子に乗って入る雑魚ベー。

「善技、聖なる裁き！」

と、聞き覚えのある声が聞こえると同時に、雑魚ベーが廊下まで吹き飛ばされる。

「私の悟さん以上に威張ることは、私が断じて許しません！」

ちなみに俺自身は俺のものであり、お前のものではないと言っておこう。

「くっ、私は階級が高いんですよおっ！ほら、階級の証明の証です！」

「残念ながら、私は雑魚ベーさんより二つも階級が上です！ほら、階級の証明の証を三つ持ってます！」

「なんですってえ！」

どうやら雑魚ベーは、この仕事場の中で自分が一番高い階級だと、思い込んでいたらしい。

「というわけで、悟さんより大きな態度な場合、雑魚ベーさんであつてもクビに出来るんです！」

「じゃ、仕事でもしますねえ」

雑魚ベーはどうでもよさそうに仕事に取り掛かる。

取り掛かるといっても、少し豪華な席で寝始めたただけだが。

「ちよっ！リアクション薄いです！」

薄いどころか完全にスルーされている魑魅。

この仕事場所での社員は全員が知り合いで、羽双と納と東武と神酒とキールと俺が無印階級。雑魚ベーが無印より一つ上で、魑魅が無印より三つ上の階級だ。

全員のことを覚えてた俺は偉い！

誰か褒めてくれー。

「ん、あ、悟に雑魚ベーじゃないか！」

さっきまで寝ていた様子の納が話しかけてくる。

「って、俺の隣は納かよ」

俺の席は端なので、もう片方には人は居ない。

「嫌そうな顔するなって。働きに来たってことは、持ち金が果てしなく無に等しいんだな」

なぜ分かった！

「ところでどんな仕事をすればいいんだ？どんな内容だろうと、飽きる人は飽きるぞ」

第一、会社に来てたら、学生の設定の意味がないだろうが。

「仕事は適当に寝てるか、適当に行動するかのどっちかだ。此処まで飽きずに見れた人なら飽きないし、休暇中のバイトだから、設定はだいたいあってるはずだ」

思考の中の質問にまで答えるな。

「よく見たら、みんな仕事してないな」

納とキールは寝てたし、神酒はキールを叱ってるし、羽双は団子を食べてるし、東武は高笑いをしてるし、雑魚ベーと魍魎は内容は違うだろうが妄想中だし。

はあ、やれやれ。

「…誰か仕事しろよ」

一人でそう呟いていた。

だって、俺だけ仲間外れになりそうだったし。

というか、食費分の給料がもらえるかが非常に気になる。

それ以前に、此処はいったい何の会社だろうか？

「会社の終了の時間ですね」

羽双がそう言うと、皆が一斉に帰っていく。

「まあ、仕事が楽だから良いか」

「ところで、此処はバイトも月給みたいですけど、今日の夜飯はどうするんですかねえ？」

あ、忘れてた！

ということ、給料日までは魑魅に奢ってもらうことにした。ただし、特別な条件付きで奢ってもらうことになった。

もうやだこの生活！

十二話 謎

@雑魚ベ―視点@

渦巻きお風呂に入ったら森に出てきたんですが、此処は一体何処で
しょうかねえ？

「むにゅー、誰かが能力を使ってるみたいだよ」

今頃ですが、希求さんのむにゅーという鳴き声が非常に可愛いです
ね！

「聞ってる？」

「ええ、可愛いですよっ！」

ああ、いつまでも少女達に愛されていたですよっ！

「聞いてよー」

「あははははははははは。私はあなたの言う事であれば何でも聞
きますよっ！」

久々に調子がいつも通りになってきましたねえ。

私の愛が徐々に大きくなっていくのを感じます！

「世界中の可愛い少女を愛しますよっ！」

「むにゅー、間違った愛と選択肢は変なフラグが立つけどね」

もしくはバッドエンドかなんらかのオチで終わるでしょうねえ。

「というか、希求さんはそういう単語は何処で覚えたんですか？」

「お兄ちゃんの家にあるゲームで見たんだよ」

ゲームをする希求さんもかなり可愛いでしょうねえ。

「というか、悟さんって結構ゲームとかやってたんですね。今度借りに行ってみるのも良いかもしれません。」

「それで能力を使ってる人というのは、主犯的な人ですかね？」

「うーん、恐らく此処は別世界だし、きっと主犯じゃないよ。でも、この世界全体に影響してるのかも」

希求さんはどうしてそこまで分かるんですかねえ？

まあ、能力でしょう。

「というか、雨双さんとアミューさんが心配です！」

「そういえば、お風呂の事に二人は気づかなかったんですかねえ？」

「むにゅー、二人って雨双とアミューのこと？」

「ええ」

あの渦巻きには気がつくと思いますけど。

「はっ！もしかして、お風呂代わりに二人一緒に洗濯機に入ろうとしたけど入りきれず、代わりにお風呂に渦を発生させ、二人で回り続けるつもりだったんですねっ！」

ちなみに私は洗濯機に入った事がありますが、回転力はそこまで良くないですし、肌に悪影響ができました。

「いや、どうやったらそんな展開になるの？」

ふふふ、悟さんの家で育った希求さんは、この展開への成り行きが分からないようですねえ。

「まず、洗濯機で体を洗いたくなったらしましょう」

「最初からあり得ない展開だから、やっぱり聞くのはやめておくね」
ふふっ、希求さんもまだまだ未熟ですね！

「このくらいは普通にあり得る展開です」

だって、私が体験したんですから、他のみんなも同じように洗濯機に入るはずですよっ！

「むにゅー、話を戻すけど、変な渦に気づかないことはないと思うよ」

確かに毎朝お風呂掃除を交代でしますからねえ。

「そこで一つのことを思い出してみよう。朝に神酒が事件的なことを言ってたよね？」

「そうでしたっけ？」

お風呂の事ばかり考えていたので覚えてません！

「確か今回の事件も主人公かチートが何とかするって言ってたよ」

まあ、悟さんか魅異さんなら何とかできるでしょうねえ。

「でも、お兄ちゃんは普通くらいの強さだから、この世界に来てしまったら主犯は倒せないと思うよ」

そういえば、この世界は何らかの能力の影響を受けているのでしたねえ。

「あ、小屋があるよー！」

希求さんが指差す方を見ると確かに小屋がありました。

お、看板を発見ですよっ！

「神秘と重なる秘密基地？変わった名前の基地ですねえ」

基地というより小屋に近いですけどねえ。

「あれ、誰？」

おや、可愛い女の子が来ました！

それにしても、森に一人で何しに来たんですかねえ？

「むにゅー、私は雷之 希求。それでこっちは雑魚ベーだよ」

「うーん、難しい名前だね！」

いや、かなり覚えやすいと思いますけど。

というか、私の名前は本名で紹介してください！

「私は真理 美異！この秘密基地を作っていて、今日は完成日なの！」

ええ、この小屋を美異さんが一人で作ったんですか！？

よくみると、裏の方が少しだけ完成していませんねえ。

「むにゅー、名前に聞き覚えがあるんだけど」

「あ、特星の魅異さんと同じ名前ですね！」

特星に居る魅異さんは偽者で、この美異さんが本体とかそんな設定ですかね？そして、美異さんは偽者の魅異さんを使い、特星に自分と年の近い女子小学生を集め、少女達だけの夢の楽園を築き上げるつもりだった！

しかし、それだけでは面白くないので、悟さんを中心とした別世界や別の星の人々を集めて、その中の男性陣から特星に相応しい男の存在を見つけ出す為に現在のような事件を起こしたのです！
そして特星に相応しい男になる条件はただ一つ。

それは魅異さんの本当の正体が美異さんだと気づき、それを何らかの方法で偽者である魅異さんに報告すること！そうすることで偽者の魅異さんに設定された機能が作動し、本体の美異さんが特星に現れて条件達成の褒め言葉とキスが捧げられ、私以外の男性陣はこの星から追い出されます。

その数年後、純粋で健全な生活をしていると一通の手紙が届きます。手紙は美異さんから送られたもので、手紙の内容は驚くべきものなものでした。

特星を追い出された事を逆恨みした一人の男が、星に不法侵入したというのです！

早速、美異さんに話を聞きに行くと、面白いことになりそうだからという理由で、侵入者の退治と正体を見破る事を依頼されます。

数時間後、私の前にとある男が立ちふさがったのです！その男こそが主人公であった悟さんでした。しかし、私はすぐに普段の悟さんではなく、ボケ役の方の悟さんだと気づいたのです！

そして激闘の末にボケ役の悟さんは私に破れ、美異さんの力によって永久封印され、私は健全で純粋な生活を取り戻したのでした！

「良い展開ですねえ」

よし、特星に戻ったら魅異さんにさっきの話を伝えますよおっ！

「むにゅー、それで手伝ってあげるの？」

「えっ、何をですか？」

いろいろ予想しているうちに話が進んでますねえ。

「小屋の裏の方の製作だよ。美矢ちゃんって言う私の相方に自慢するの！」

なるほど、確かに美異さん一人では大変でしょうし、私も手伝うとしますか！

「喜んで手伝いますよおっ！」

こう見えても、神社を作った事がありますからねえ！

私が手伝った事により、数十分で小屋が完成しました！

「薄い板でも小屋作りは大変ですねえ」

どうでもいいのですが、バスタオル姿なことを完全にスルーされてませんか？

もしかして、私がいろいろ予想している間に希求さんが説明してくれたのですかね？

「いやあ、お陰で助かったよ。二人ともありがとう！」

「いえいえ、気にしないでください。あと、私達が行った事は秘密に置いてください」

「うん、わかった」

理由は特にありませんが、美異さん一人でも恐らく完成していたで

しょうからね。

ちなみに美異さんは滑って水溜りに突っ込んでましたねえ。

「むにゅー、服は家で変えたほうが良いよ」

「うん！」

いやあ、非常に元気な子ですねえ。

「おや、膝に傷がありますね」

美異さんの膝には擦り傷があります。恐らく、水溜りに突っ込んだときに傷ができたのでしょう。泥で汚れて気づきませんでした。

「希求さん、包帯とか傷薬とかを貸してください」

「はい、これだよ」

希求さんから借りた道具を使い、美異さんの怪我を手当てします。

「あ、泥がついて汚いよー！」

「いいえ、それは泥が汚いのであり、美異さんが汚いわけではありません！例えば汚れている少女がいたとしましょう。そのときに汚いという人が居ますが、実際は少女そのものが汚いのではなく、その場の環境や周りの物が汚いんです！そう、少女に汚い部分などはないのですよおっ！」

少女は綺麗説を激しく説明しながら、丁寧な手当てをする私は凄い

技術の持ち主ですねえ。

「むにゅー、確かに一理あると思う」

ふむ、希求さんも私の意見が正しいと思うのですね！

「はい、これで明日には跡形もなく治ると思いますよ」

「うん、ありがとう！」

特星では傷薬を使う機会はありませんが、普通のものより治療効果が高いんですねえ。

「さて、それでは私たちは行きますが、美異さんはどうしますか？」

「小屋の最終点検をしておくー」

私たちは秘密基地を後にして、森を出る道を探すのでした。

「ところで、美異さんに私のことをどのように説明したんですか？」

「むにゅー、誘拐犯の劣化版って言うておいたよ」

わ、私は誘拐犯じゃありません！

「うう、美異さんの評価が下がったら、特星に相応しい男になれなくなってしまうですよー」

そうだ、私自身が少女になれば良いじゃないですか！

「あ、そうだ」

おや、希求さんが何かを思い出したようですねえ。

「盗撮になんて気づいたか話してなかったよね？」

「かなり話を戻しましたね。というか、気づいてたんですか!？」

ああ、あの頃の私の心は歪んでいたんですよっ！

「前に何処かに迷ったときにこれを見つけたんだよ」

希求さんが私に見せつけたのは、いつだったかに私が撮った写真でした。雨双さんとアミューリーさんが写っています。

希求さんの能力でモザイクが掛けられているので、安心して見ることができますけどねえ。

しかし、あれを見つけられてしまうとは参りましたね。

「それを撮ったときの私は心が歪んでいたのです！現在の健全な私には不要なものです！というわけで、その写真は希求さんに差し上げましょう！」

「え？あ、うん」

私の台詞が予想外だったのか、希求さんが困った顔をしていますねえ。

「あ、もしかして、その写真を餌に私に頼みごとでもするつもりで

したか？」

「むにゅー、実はそのつもりだったんだけど」

ふふふふ、私は最初から分かってましたよー。

「まあ、今は事件中なので日を改めて相談してください。あと、私は少女の頼みに要求などは出しませんから安心してください」

「うん」

く瞑宰京く

あれ、いろいろ話してるうちに見覚えのある場所に来ましたね。

「むにゅー、此処は？」

「此処は特星の瞑宰京という都市ですねえ。悟さんが前に通ってた高校もこの近くにありますよおっ！」

「前にお兄ちゃんが通ってた高校かあ」

そういえば、いつも人が多いはずですが、まったく見当たりませんねえ。

「此処も敵に占領されたんですかねえ。…っとおっ！」

私は何かの気配を感じてその場を飛び退く。

そしたら、私が飛び退いたときにできた砂煙が固まっていました。

これは時間を操る能力！

「おっと、今度は貴方達の偽者ですか」

私の前に現れたのは羽双さんでした。

うわぁ、勘違いフラグの予感が全開ですねえ。

「むにゅー、私達は本物だよ」

希求さんは自分の能力のお陰で無事だったみたいですね。

「貴方達は別世界に飛ばされたと聞いたんですが」

「ですから、こうやって戻ってきたんじゃないですか！」

「残念ながら、偽者のついでに本物も退治している僕には関係ありません」

何で偽者まで退治しちゃってるんですか！

「まあまあ、お互いに落ち着こうよ」

希求さんが適当にこの場を落ち着かせようとする。

「ああ、よく考えたら本物ですね」

希求さんの言葉で落ち着いたのか、羽双さんは私達が本物だと納得する。

「バスタオルだけで街中を歩くほどのバカは、滅多に存在しませんから」

バカは褒め言葉だと割り切っているので、どんどん言ってくれて構いませんよ！

「そうだ、貴方達に指令を出します」

私たちに許可をもらってからにして欲しいですねえ。

「あそこの高校に敵の親玉が居るので、さっさと倒してきてください。謎の何かによって僕は入れませんでした。貴方達なら迷い込めるでしょうし」

謎の何かってのが気になるので行きましょう！

「むにゅー、既に着いてるよ」

「って、いつの間に!？」

いつの間にか高校の前に来たわけですが、辺りが黒い何かに覆われていますねえ。

というか、早く服を着たいです。

「もう進入できたと考えて問題ありませんか？」

「黒い何かの中には入れたから、進入は成功だね」

なんか、私の存在価値が下がってる気がします。

「しかし、敵は何処に居るんでしょうね？」

「校長室とか？なら、こっちかな」

「あ、校長室はそこですよ！」

希求さんが道に迷いそうですねえ。

「むにゅー、失礼しまーす」

「可愛い少女に会いに来ましたよおっ！」

礼儀正しく挨拶をして入る私達は、良い見本ですねえ！

「ふふふ、残念ですね。少女は此処には居ませんよ」

校長室に居たのは少女でも校長でもなく、やけに偉そうな女性でした。

「とりあえず、自己紹介をさせていただきます。私は夜使^{やし}という名前で、特星では神様をやっています」

おお、神様の人数が減少してから会った神様の中で、二人目に追加しておきましたよおっ！一人目は当然アミューリーさんですけどねえ！

「それにしても変わった名前ですねえ」

「むにゅー、夜使は特星で伝説になってる生き物だよ」

え、それは知りませんでしたねえ。

「あら、物知りですね。ふふふ」

どうでも良いんですが、笑ってるのが気になりますね。

「夜使は謎に包まれている生物で、朝に寝て夜に行動するから夜の使いとして恐れられたらしいよ」

「何で恐れられてるんですか？」

「むにゅー、何だか分からない生き物が夜に居たらじゃない？」

私なら少女かどうかの方が気になりますけどね。

「素晴らしい推理です。何故そこまで分かるのでしょうか？」

「むにゅー、この本に書いてあるよ」

希求さんが取り出したのは特星の伝説の生物図鑑という本でした。校長が作った説明文だけの本みたいですけどねえ。

「ふふ、前言を撤去しますね」

前言というのは素晴らしい推理と言った部分だろう。

「しかし、写真とかはないんですかね？」

「写真を撮ろうとしても、何だか分からないものが写りますよ」

それは恐ろしい出来事ですなぁ。

「それで何か用ですか？」

「あつ、そうだった。特星中の偽者を退却させてもらおうよ！」

「ついでに迷惑を掛けたので気絶決定ですよおっ！」

これだけの事件だと、解決側もやりがいがあつて良いですねえ。

「ふふふふ、特星のルールを知らないのですか？」

「いーえつ、特星のルールくらいは知ってます！」

特星のルールで問題は発生させて良い事になってますが、犯人に対しての損害賠償の請求や仕返しも正式に問題はありませんからねえ。

「良いでしょう。しかし、人数が違えば勝負が公平ではありませんよ」

「主犯者側の主張など私には関係ありませんねえ」

「ふふふふ、そうですか。では、校舎を壊すわけにもいきませんか
ら、外での勝負にしましょう」

く皇帝の校庭く

「むにゅー、この校庭は駄洒落的な名前だね」

「まあ、校長の性格にあってますけどねえ」

黒い何かに包まれていて良く分かりませんが、恐らく今は夜なのでしょう。秘密基地を去るときには夕方でしたからねえ。

「私の能力は謎が謎を呼ぶという謎を操る能力です。真実から小説のサブタイトルまでいろいろと謎にする事ができます」

おおー、凄く羨ましい能力！

「ふっふっふ、私の本物が居るようですねえ」

「うおっ、私にそっくりな人が居ますよおっ！」

急に現れると驚くじゃないですか！

「ふふふ、これで二対二です」

「むにゅー、偽雑魚べーの相手は私がするよ」

確か本物より強く作られてるんでしたよねえ。

なら、偽者の私は希求さんに任せましょう！

「私の相手はあなたですね」

「ふっふっふ、偽者の私が相手でも私の勝ちは決定ですけどねえ」

私は少女以外なら何度でも立ち向かいますからねえ！

「必殺、ジャンピングキックですよっ！」

「謎解き、全ての謎の解決」

技の名前に面白みがありませんねえ。

しかし、私のジャンピングキックは避けられました！

「あ、足が抜けなくなりましたよおっ！」

「私はその技の謎を解決しました。威力は半端ないけど、避けられたときの隙は恐ろしく大きいそうですね。謎落とし、謎の高さから降る大岩」

上から沢山の大岩が振ってきましたが、足が抜けないので避けられません！

「謎招き、謎の行方不明者」

あれ、岩で何も見えませんが、何かに飲み込まれていく気がしますよおっ！

「ふふふ、後は誰かに見つかるまで、ずっと行方不明になっていてくださいね」

「はい、貴方の前に現れたので、私は行方不明ではありませんよおっ！」

ふっふっふ、私の行方不明期間は一日以内で十分です！

それにしても、謎を操る能力って未知を操る能力と類似してますよね。

「超必殺、超ジャンピングキックですよおっ！」

「ふふ、謎の道具、謎の弾力性がある物体」

ジャンピングキックの目標の上に謎の物体が現れ、その物体により私は跳ね返ってしまいました！

「ちよつと、止まりませんよおっ！」

空中に飛んでいく事になるとは予想外でした！

「そろそろ終わりですか？」

「甘いですよおっ！超必殺、宇宙からのジャンピングキックです！」

宇宙に行くまでの時間と特星に戻るまでの時間を、羽双さんが場外から短縮してくれました！

「その程度なら良く見て避けます。…って、どうして全裸なんで

すか!?!」

あー、宇宙に飛ばされてる時に、バスタオルが飛んでいったようです。

とりあえず、夜使さんはよく見て避けるつもりだったのですが、モザイクに気づかず全裸の私のジャンピングキックを喰らいます。

「げほう!」

「ふっ、普段からそのような喋りだと、やられる時が普通以上に惨めに思われますよおっ!」

まあ、少女は別なわけですが。

そういえば、この人ってどう見ても、人間年齢で二十の後半くらいの年ですよねえ。

「おお、私の知り合いの女性で一番年上かもしれません!」

あとで悟さんに報告しておきましょう。

「あれ、そういえば希求さんが見当たりませんねえ」

「希求なら何処かへ迷って行っちゃったよ」

「うおおっ、魅異さんじゃありませんか!」

いきなり人が現れると心臓に悪いですねえ。

「とりあえず、事件の解決おめでとう。今回は悟よりも良い結果だったね」

「まあ、私と悟さんは宿敵ですからねえ。悟さんが事件解決するところがあれば、私だってたまには事件の解決くらいはしますよ!」

そういうば、最近悟さんと勝負をした覚えがありませんねえ。

「忘れてると思うけど、この先数年は魔王でもあるんだから頑張るといいよ」

あー、忘れてましたが、今年の魔王選択では私が見事に選ばれましたよおっ!

「あ、ちなみにモザイクの効果は既に切れてるからね」

「あー、そうなんですか? 普通の人がこの辺に居たら大変な事になってましたねえ」

ちなみに私は全裸で人前に出ても平気ですよ。

まあ、周りは平気じゃないから、普段から服とかはちゃんと着てますよおっ!

「というか、魅異さん。裸の男性が目の前に居るんですから、恥じらい的なものは持つべきですよおっ!」

「裸の男がそれを言うのもどうかと思うけどね」

いや、貴方は男に变身とかできるのでしょうが!

「ふふふ、私は能力を面白いことに利用するから良いんだよ。と
いうか、そのことで雑魚ベーに二つのプレゼントをあげるつもりな
んだよ」

うわあ、嫌な予感がしますねえ。

そのことだということは、能力的なものですよねえ。

「まあ、特殊能力とは違う能力だけだね」

「どのような能力ですか？」

「まず、雑魚ベーが小学生少女になれる能力で、体が小学生の少女
になるんだよ。ちなみに年齢は雨双やアミューと同じ五年生だ
けどね」

おおおおっ！これは少女の気持ち分かるし、少女としての生活
もできるじゃないですか！

魅異さんの割には良い能力をくれましたねえ！

「もう一つは少女になっている間、自分の分身を作り出す能力だね
。この二つを併合する事で、人に気づかれないように少女の生活
を過ごせるんだよ」

うおおおおっ！完璧なコンビネーションですねえ！

「分身の行動は実際に雑魚ベーが居た場合に行なう行動と同じ行動
をするよ。ちなみに分身の行なった行動や記憶は、寝たときに全

て本物の雑魚ベーも記憶するからね」

いやあ、非常に嬉しいプレゼントですねえ。

でも、まだまだ油断はできません！

「リスクや違反行動などは？」

「リスクは特にないけど、違反行動はあったほうが面白いね。なら、少女になれることや雑魚ベーが変身していると、一部のもの以外に気づかれてはいけない。あと、健全で純粋な心を忘れない事。それに違反したときのリスクは、理由の無いくすぐったい症状だよ」

あれ、途中の説明で口調がなくなりましたねえ。

「まあ、毎回同じ口調なのも面白くないからね。時々、普通の喋り方に戻すんだよ」

そういえば、アミューリーさんも同じような感じでしたね。

「それで理由の無いくすぐったい症状とは何ですか？」

「何故だか体中が微妙にくすぐったくなる状態だね。お腹から胸くらいまでが主な効果範囲だよ。ちなみに一部の者以外に気づかれた場合は、その度に私が忘れさせておくからね」

なるほど、罰が非常に恐ろしいですねえ。

「欲張って悪いのですが、設定の追加要求が二つありますよおっ！」

「はい、どんな要求？」

言わなくても分かっているのに言わせるつもりですか。

「まず、私から見た場合の私と他の少女達に対するモザイク効果の追加！理由は言うまでもありませんよねえ？」

「はい、認めるよ」

というか、魅異さんのことです。ですから最初からモザイク効果をつけてるでしょうねえ。

「あと、少女時の特殊能力の追加！理由は現在の私と同じ能力だと気づかれる可能性があるからですよっ！」

「変身中は元的能力が使えないという条件をつけるなら問題ないよ」

「それで構いませんよおっ！」

とりあえず、魅異さんとの交渉は成立しましたねえ。

「私は雑魚ベーの少女に対する想いが、健全で純粋なものなのを見込んで、能力をプレゼントするんだからね」

あれ、よく私が純粋で健全な人と分かりましたねえ。他の人は信じてくれないんですよっ！

「とりあえず、盗撮とかしてたことと普段の発言が原因だろうね」

というか、いい加減に寒くなってきましたねえ。

「そういえば、変身したときの服はどうするんですか？」

モザイクがあったとしても、私から見た場合ですし、神社に迎えませんよおっ！

「そうだねー、パンツと服とかなり長いタオルを貸してあげるよ。あとは自分で買うとかでなんとかするように」

何故、ズボンやスカートではなく、かなり長いタオルなんですかねえ？

「追加要求でズボンかスカートをください！」

「却下するよ」

あー、やっぱり無理でしたねえ。

「というか、早く変身したら？」

「あ、もう変身できるんですか？」

とは言っても、変身の方法が分かりませんねえ。

「少女になりたいと強く念じてみて」

「ええ！」

少女になりたいですよっ！

「…おお、視点が低い！あと、声も凄く少女になってますよっ！」
変身時の効果音とかはまったくありませんねえ。

「服とかもちゃんと着てるしね」

「おー、服もパンツもタオルも真っ白ですねえ」

自分の声が可愛すぎて死にそうですよっ！

「そうそう、少女になってるときに分身と会うことはないよ。あと、少女状態の時の特殊能力は魔法を使える能力だよ」

おー、普通ですねえ。

魔法って言ってもいろいろありますが、どんな感じなんでしょうか？

「魔法を使う能力の中でも、本人の能力に影響されやすい種類の能力だね。確かその時に使える技に応じた魔法が使えるはずだよ」

「へえ、魔法を操ると言ってもいろいろなんですねえ」

そのときに使える技というと、ジャンピングキックとかですね！

「あと、カムとかも特殊能力じゃないから、少女状態でも使う事ができるよ」

「おお、カムも使えますか！」

カムというのは私の使える技で、高熱の球を飛ばす事ができる技です。大きさはそれなりに調節可能で、大きくなるほど飛ぶ速さもゆっくり飛ぶんですよおっ！ちなみに空気抵抗などは受けません。実体はありませんが、色はついているので見えやすいです。色は変更可能ですが、私はオレンジ色を主に使用します。

ちなみに几骨さんに、これと同じ原理のワワという技を教えましたねえ。

「じゃ、神社に送るね」

「ちょっと待ってください！その前に私の名前を決めさせてください！」

私の本名がベータ サイドショットですから、発音を似せてエエナはどうでしょうか！漢字で絵恵那とかで完璧でしょう！

苗字は主人公らしくライノショットにしました！

ちなみに私の本名はベータ サイドショットですからね！

「決定しましたよー」

「決め方が凄まじく適当だったね。あと、もう到着したよ」

凄まじい速さで到着しましたね。

そういえば、移動時間が短いときは場所表示がされませんねえ。

此処はアミューリー神社ですよー。

「あれ、魅異さん？」

お、雨双さんがこちらに気づきましたねえ。

「こんな時間にどうしたんですか？」

どうして、魅異さんには敬語なんでしょうねえ？

「今からこの子を預かってくれない？」

「はい！？」

いきなりの発言に雨双さんは困ってるようですねえ。

「私やアミューリーは構いませんし、雑魚ベーも恐らく喜ぶでしょうが、その子が雑魚ベーの行動とかに耐えられないかもしれませんよ？」

いやいや、私は純粋な愛を表現しているだけですから！

「ふふふ、私がそんなところを見落とすと思うの？この子は昔に雑魚ベーと過ごしてて、雑魚ベーをが困らせることができるほどの女の子なんだよ」

そういえば、喋り方とか考えてませんでした！

普段通りでは気づかれてしまいますから、普通に敬語を使う子みたいな感じでいきます！

「あの、私は雑魚ベーさんとは仲が良かったので大丈夫ですよ」

「そういうことだよ。あと、雑魚ベーの技とかを引き継いでいるし、喋り方とかも似てるけど、しょうがないことだから気にしないであげてね。あと、雑魚ベーはこの子が苦手だから、この子が居る間は神社に来ないかもね」

それだけ言うと、魅異さんは消えて居なくなりましたねえ。

「とりあえず、家の中で話そう。あと、私は魅異さん以外にはこの話し方だが、あまり気にするな」

「ええ、わかりましたよ」

口癖が出そうでドキドキしますよおっ！

「雨双、食器の片づけが終わったんだってば。あれ、その子は誰だっけ？」

「この子の名前は後で聞くんもりだ。あー、この変な喋り方の子はアミユリーだ」

細かい説明をしないあたり、後でまとめて話すようですねえ！

その後、部屋に集まって説明会をしたのですが、何とか自然に誤魔化せました！そして、次の日の朝に分身を出しておきましたよおっ！

あと、美異さんと魅異さんの関係説を話すのを忘れてました！

十三話 会社も学校も特星では同じようなもの

@悟視点@

会社に入ってから数ヶ月が経ったが、仕事という仕事はなく、学校でやるような問題を解くだけが会社での日常となっている。

この会社は仕事の中に遊んでたり、何処かへ行っても問題ないらしい。というか、会社とは言えないよなあ。

ちなみに今日は給料日なのだが、昨日まではずっと魑魅の奢りで生活していたのだ。その分は問題のない範囲で、魑魅の出す要望にこたえるという約束だ。

「さて、悟さん！給料日である今日も私の要望にこたえて下さいね！」

「あー、問題のない範囲でな」

普通は立場が逆であるべきじゃないか？

ちなみに俺が魑魅に要望を出す側なら、必要のないときは近寄るなと言うだろう。

「なあなあ、悟。どうやったら女子に人気が出るんだ？」

納が急な質問をしてくる。

というか、質問してる暇があったら今までサボった分の書類を書け。

書類というよりテストに近い部分もあるが、会社っぽく書類と言っておく。

「そんなの相手の好みによるんじゃないか？まあ、人気ってのは多くの人からの信頼みたいなものだから、多くの人と馴染みやすい性格なら人気が出ると思うぞ」

納は頭が悪いが、人に恨まれる性格ではないだろ。人に注意されることは結構多いが。

「俺の性格はどうなんだ？」

いや、ついさっき人によると言っただけだろ。

「憎めないような性格だが、場の雰囲気合わない時が多い。ついでに言うと、俺の中でお前の評価が高いのはその性格のお陰だけだな」

今の時代には納のような奴が増えるべきだ。

でも、最近の場の雰囲気に合わない行動をするやつは、問題児とかの割合が多い気がするんだよ。なんというか、世の中は天然さが欠けている気がするんだよなあ。

「なあ、悟が彼女にするなら誰を選ぶ？」

いきなりでどうでも良いような質問だな。

…だが、はっきりとした答えは見つからないな。

「もちろん私ですよね！」

うお、魑魅が話に加わってきた！納のやつ、面倒な話題を出しやがって！

ちなみに魑魅という答えはまずない。

「うおあつ、大変ですよっ！」

急に雑魚ベーが大声で叫ぶ。

よし、今の悪い状況から抜けることができそうだ！…とか思うと、更に状況が悪くなるんだよなあ。

「どうしたんだ？」

とりあえず何が大変なのかを聞いておく。

「私の分の給料をもってこうかと思ってたのですが、全員の分の給料が無くなってるんですよ！」

「はあ！？」

その場に居る全員がそれを聞き、雑魚ベーの場所に集まる。

給料が無くなっただと？

それは俺に犯人を捜せということか！

「とりあえず、校長さんに連絡します！」

魑魅が校長に電話で用件を伝える。

校長に連絡して数分後、校長がやってきた。

「遅れてすみません！年が増えると動きが悪くて駄目ですね」

「校長はまだまだ若いし、波動の渦みたいなので移動してるから楽でしょうが」

ツツコミの仕事を納に取られた！

「で、結論から言います。貴方達で犯人を見つけ出してください」

「証拠もなしで犯人を見つけろだど？俺には簡単すぎるが、こいつらには荷が重過ぎるだろう」

東武がそんな事を言ってるが、本音はヒントくれってことだろ。

「東武さんの言うとおりです。だから私は給料に関する情報を提供します」

「確かにそれなら私達でも何とかできそうだ」

神酒もやる気は結構あるようだ。

だが、此処で他のやつに解決を任せるわけには行かない！

「此処は超推理主人公の称号を持つ俺が解決してやる！」

この称号はさっき考えたんだが、なかなか雰囲気合ってるだろ。

「おっと、この場で推理をしたいなら、悟が犯人じゃない事を証明してもらうぜ！」

おー、納が結構俺のノリに合わせてくれてる。

「いいだろ！まずは校長の情報を聞かせてくれ！」

「ええ。まず、給料はそこにある給料用の引き出しに入ってたはずです」

雑魚ベーの立っている場所の引き出しを指差す校長。

「給料の確認は管理員が毎朝していて、昨日の朝には給料はまだあったみたいです」

おお、なんだか本格的になってきた。

「待て！毎朝の確認ならば、なぜ今日の朝の給料の存在が分からない？」

そこは俺も気になったのに、東武に先に言われてしまった。

「あー、管理人は週に数回サボるんですよ」

「お、私と気が合いそうね」

キールが余計な事を言う。そして神酒に叩かれた。

「昨日の夜といえば、給料日前日を祝う会をしましたよね」

羽双が昨日の出来事を話してくれる。

そう、此処に居る俺たち全員は給料日前日を祝う会を開き、店を貸してもらっていたのだ。

「校長があこの企画を考えたんだよな」

俺は正直なところ面倒だったが、魍魎に奢ってもらう量を減らそうと参加したんだ。

「本当に感謝します。お店を一つ貸しきるなんて高かったのでは？」

「いえいえ、知り合いの店でしたから」

校長って特星中に知り合いが居るんじゃないのか？

おっと、話がそれてるな。

「さて、俺が犯人じゃない理由は犯行が無理だからだ。昨日は朝から、前日の会に校長と魍魎と雑魚ベーと向かったし、昨日貸し切りだった店を出た後は、魍魎と雑魚ベーと俺で朝までゲームをしたんだ」

それが原因で、今日の俺は会社に着いたら寝てしまったんだ。

「ああ、だから珍しく朝に寝ていたんですか。寝ている時に後ろに何か憑いてましたよ」

羽双が俺に何か憑いていたと言う。

別に幽霊とかは慣れているんだけどな。

「羽双、俺がその程度の脅しで驚くとも？」

これでも主人公としてのレベルは格段に上がっているのだ。その程度の脅しに驚く俺ではないっ！

「第一、俺に影響を与えられる霊など、例がないからな！」

今のは霊と例の洒落を入れてみたぞ。

「なんというか、死んでほしいです」

羽双に死んでほしいとか言われた！

人に死ねとか言っちゃ駄目だと習わなかったのか！

「ちなみに憑いてたのは霊ではなく、貧乏神の親玉でしたよ」

「ええええっ！」

羽双が貧乏神を見えたのも驚きだが、俺には貧乏神の親分なんかか憑いてるのかよ！

「悟さん、話がまたずれてます！」

「はっ、そうだった！」

魑魅のお陰で本来の目的を思い出した。

「とりあえず、俺の無罪が証明されたから俺は推理側だな！」

「私と雑魚ベーさんも推理側です！」

「そういうことですよおっ！」

さて、とにかく昨日の行動の様子を聞こう。

「なるほど、分かってきたぞ」

全然分かってないのだが、雰囲気作りの為に言ってみる。

昨日の給料日前日の会までは、誰もが盗む暇などなかったようだ。

だが、前日の会の後ならば可能性はある！

「とりあえず、船の問題で神酒に犯行は無理だ。東武も竜的なのに乗ってるところを、目撃されていたらしいから不可能」

この二人の免除は決定だ。

「って、神酒は大丈夫なのにどうして私は駄目なのよ！」

「お前は事件発生前から、前日会に行くまでの間はずっとそこで寝てただろ」

そう、事件の事件発生時間にキールは、事件の発生場所ですっと寝ていたらしいのだ。というか、永眠という状態でさっさと成仏しろ。ちなみに島に帰らなかった理由は、朝の船に乗る時間に起きれないかららしい。

「というわけで、羽双とキールと納と校長と第三者の誰かだな」

うーん、俺は仲間を信じているが、第三者だと探すのが面倒だから、俺たちの中の誰かの犯行であって欲しいなあ。

「羽双はその時間は勇者社に居たんだろ」

「ええ。社長室を借りてました」

勇者社に聞けば分かるかと思ったが、無断で使用していたらしい。几骨さんが途中で部屋に来たらしいが、几骨さんは何処に居るのか分からない状況だ。

「で、校長は会社に住たと」

「私は前日会の予約をして、ダンボールの地下秘密基地を作っていました」

言っちゃった時点で秘密基地になってないし、前日会の金があるな

ら生活に使えば良いだろ。

「納は？」

「妹たちの面倒を見て、その後は食事の材料を買いに勇者社に行ったんだ。勇者社の人がちゃんと見ていてくれたしな！」

まあ、この時間帯にはスーパーは閉店中だし、コンビニは試食品売り場がないからなあ。

ちなみに本来は俺が妹達を引き取る予定なのだが、俺の親の陰謀を阻止する為に、妹達を納の家に強制的に送りつけたのだ。ってか、資金不足でしばらく食事抜きよりは良いだろ。

恐らく、納が此処に働きに来てる理由がそれである。

「キールはさっき聞いたとおりか」

俺の予想では、この会社に居た校長とキールが怪しいと思う。

だが、羽双なら時間を止めて盗めるのだ。

「うーん、納は除外か？」

「当然だ！」

資金難という点では動機になるが、家から勇者社まで行ってたからなあ。更にちゃんと勇者社で目撃されているわけだし。

…いや、待てよ！

説明したかは覚えてないが、納は特星の俺の居る高校に入り、寮での生活をしている。そして、その寮から勇者社に行くまでの道に、この特星公式営業会社があるのだ！

「まいったな」

この際、全員が共犯ってことで良いんじゃないか？

俺の中の問題のあるキャラリストに全員載ってるし、全員が捕まってもいい気がする。

でも、真実を見つけるほうが評価が上がるし、やっぱり真犯人を探すか。

「そういえば、校長のヒントって途中じゃなかったか？」

納が重要なことを思い出す。

確かにヒントの途中で話が脱線してたなあ。

「あー、そういえばそうですね。次の情報は入り口の警備員が言っていたことで、事件があつた前後の時間は、誰も入り口を通らなかったそうです」

かなり重要な証拠じゃないか！

ということは、校長かサボリやのどちらかだな。

そして、犯人は資金不足の校長の方だっ！もしくは、サボリやのキ

ールの方だっ！

「とりあえず、私の持つてる情報はこれだけです」

校長の情報も全て使い切ったか。

会社内の他の誰かの可能性も考えられるが、話の展開的にそれは流石になあ。

くっ、何とか犯人が分かる方法を考えなければ。

「とりあえず、校長とキール以外で帰りたい奴は帰っていいぞ」

正直、人数が多いとやりにくいんだよなあ。

で、ほとんどの人が帰ってしまい、残っているのは俺と校長とキールと魑魅だけになった。

「さあて、まずはどうやって犯人を見つけるかだが、これは自主的に残った魑魅が考えてくれ」

「思いつきました！」

「予想以上に早っ！」

もしかして、方法を考えているから残ってくれたのか？

「両方から犯人を捜すのじゃなく、片方が犯人かどうかを確かめればいいんです！」

「え、そんな方法があるのか!？」

「はい、少し待っててください!」

魑魅は凄い速さで会社から出て行く。

というか、善と悪を操る能力で犯人を見破れないのか？

「魑魅君の方法とは何ですかね？」

「さあ？校長が女子にも君付けする理由の方が気になるけどな」

さっき俺が言ったように、校長は女子に君付けで呼ぶときがある。

まあ、逆に男子をさん付けすることもあるんだけどな。

ちなみにキールはこっそりゲームをしている。

「お待たせしましたあ!」

お、魑魅が到着したな。

「眠い」

魑魅の後ろには見覚えのある声の子供が居た。

えーっと、かなり前に会った気がするんだけど、いったい誰だっけ？

「あれ、何処かで見たような」

意外にもキールの知り合いらしい。

「この子はレーレアさんと言う名前で、眠りを操る人なんですよ。悟さんは前に戦いましたよね」

……あー、衣宵が起こした事件に向かう途中、一番最初に戦った相手か。

「で、用って何？」

「そのキールという人が、昨日の夜に寝ていたかどうかを調べてください！」

なるほど、その時間帯に本当に寝ていたのなら、犯人は自動的に校長になるというわけか。

「え！ ちょ、ちょっと待った！ そういう能力はやめた方が良いわよ！」

おや、キールが急に慌て始めたぞ。

こういう時に焦ってる奴は、大抵犯人じゃないんだよなあ。

「うんうん、大体分かった。どうやら昨日の夜は眠っていないようだ。じゃ、私は眠いからそろそろ寝るよ」

レーレアが診断結果を言い、そのまま寝てしまう。

「いやあー、実は私起きてたのよ」

「さっきレーレアから聞いたが」

「それでね、実は起きてるときに犯人を見たの！」

おお、それなら事件が簡単に解決するじゃないか！

「で、誰なんだ！？」

「あー、誰かは見えなかったけど、私じゃないことは確かよ！そのときに部屋は真っ暗だったんだけど、急に現れて給料を持って消えていったの！あの時は給料の管理人が幽霊だと思って気にしなかったけど、よく考えたら犯人に違いないわ！」

犯人が幽霊なら、壁から盗めそうだからなあ。

「真っ暗なのに犯人に気づいたんですか？」

魑魅が鋭い質問でキールを攻める。

「私は幽霊だから、真っ暗でもある程度は辺りが見えるの。犯人が誰かまでは分からなかったけどねー」

あー、俺も幽霊とかになってみたいなあ。

というか、飽きてきたからキールが犯人ってことで終わろう。そういうことを考えると、実際は犯人じゃなかったりするけど、別に問題ないか。

「管理人が幽霊に思えたのなら、それは本物の幽霊だろう。そして、幽霊というのはキールにも言えるだろ！」

「ななあっ！な、何が言いたいの！？」

此処までくれば言いたい事は分かるだろう？

「すなわち、給料を盗んだ犯人は幽霊であるキールだ！」

「くっ、これは言いがかりよ！あ、やられた！」

ってか、ゲームは後にしろよ。

「言い分は連行者に聞いてもらう事だ。魑魅、キールから適当に話を聞いておいてくれ」

「お任せください！」

キールは魑魅に連行されていった。

今の特星に警察とかの制度はないので、俺の家で取調べをするんだろうなあ。

「ふう、何とか終わった」

面白半分で推理とかやるんじゃないかった。

「あ、そうだ。悟君にこれを渡しておきますね」

校長から数百セルのお金を渡される。

「これは？」

「給料日前日を祝う会のお釣りですよ。ちゃんと皆で分けてくださいね」

「お釣り？誰かが代金を払ったんですか？」

…あ、オチが読めたかもしれない！

「もちろん、参加者の給料で払いましたよ。ちなみに私は所持金がないので払いませんでした」

あー、やっぱりそういうことだったのか。

給料は昨日が皆でやった前日会で使われた。キールが見たのは波動で移動する校長だろう。

「使っちゃったんだから、見つかるはずがないわけだ」

「はい？もしかして、今回の給料強奪と関係あるのですか？」

校長は気づいてないし、文句も言えないよなあ。

「とりあえず、このお釣りだけでも皆に渡すか。…あれ？」

さっきまで持ってたはずのお釣りが無い！

「ふふふっ、この給料のお釣りは貰ったわ！」

いつの間にか窓の近くに給料を持った女性が立っていた。

あれ、あの人って何処かで見た気がするな。

「…あ、祭りの時の泥棒女か！」

「あれ、スーパーと祭りで見た顔ね」

相手のほうが詳しく覚えていたようだ。

「私は場違いのようなので、そろそろ帰りますね」

校長は発言の機会がないと考えたらしく、波動の扉で何処かへ行ってしまった。

「で、何か用？」

「給料返せ！」

「嫌よ！」

やっぱり断られてしまった。

「とりあえず、会うのは三回目だし、自己紹介をしておくわ」

まあ、これからも遭遇しそうだからな。

「俺は主人公の悟だ」

「私はセーナ。…タイミングが悪いから、苗字はまだ教えられないけどね。ちなみに貴族なんだけど、私の弟はこの星で少し有名なの」

それは自慢か何かか？

「というか、その弟の名前を覚えてくれなきゃ有名かどうかも分からない。」

「つてか、給料を返してくれないか？それがないと生活が危なくなるんだが」

「魑魅に奢ってもらい続けるのは気がのらないからな。後でいろいろ要求される可能性があるし。」

「大丈夫、私に渡せば安全よー」

「いや、危険な予感しかしないし」

「つてか、渡すもなにも既に盗った後じゃないか。」

「うう、実は私も金欠で数年近くなにも食べてないの」

「スーパーで大量の食料を盗んでたけどな。」

「なら、両腕につけてる高級そうな腕時計や、高級そうな上着を売ればいいだろ」

「というか、俺と知り合う貴族は変なのしか居ないよなあ。」

「あ、ああ、私が身に着けてるものは全て形見なの！両腕の腕時計が両親の形見で、高級な服は弟の形見！その他の物は息子や孫や子孫の形見よ！」

「ところで何歳？」

「え、二十六だけど。…って、なに言わせるのよ!」

二十七歳で孫の形見ってどんなのだよ。

あと、予想以上に年齢が高いな。二十歳くらいかと思った。

「…あ、俺が特星で会った印象深い女性の中で、人間年齢が一番年上じゃないか!」

ちなみに人間年齢というのは、寿命が違う者の年齢を人の年齢で表したものである。例えば、衣宵の年齢は数億歳くらいだが、人間年齢は十歳であることとか。

「確かに年は二十七歳だけど、身体測定では十代後半の体と頭って結果よ。流星は私ね」

頭が成長してないのはどうかと思う。

「さて、話を戻すね。私の姿を見たからには貴方を無事には帰らせないわ!」

「全然戻ってない!そしてお前こそ無事に帰らせないぞ!」

俺はエクサスターガンを取り出し即座に撃つ。

「エクサバースト!」

「必殺、安全無敵防御」

「キーン！」

…あれ、弾かれた？

俺の放ったエクサバーストは見えない壁に弾かれ、そのまま消滅してしまった。

この特星内でさえ、相手を消滅させる威力の技なのだが、こうも簡単に防がれるのは心外だ。

「いや、いくらなんでも無敵防御ってどうかと思う」

「あー、技名は無敵っぽいけど本当に無敵なわけじゃないよ。炎的な技名で氷を使うのと同じようなものよ」

それは全然違うと思う。

「暇があったらいつでも挑んで構わないわ。まあ、これから二度と会うことはないだろうけどねー」

そういうことを言うから次も会うんだよ。

とりあえず、給料を盗んでセーナは窓から飛んでいった。

落ちろ、そして泥にでも沈め。

「さて、俺も帰るかな」

あ、俺の特徴が思いついた！それは無駄話をして、相手が逃げるのと話の進行を遅らせる事だ！

セーナに給料を取られてから数週間が経った。

会社は自由出勤なので今日は勝手に休む事にした。ちなみに食事は雑魚ベーに奢ってもらっている。

「くっ、軽い屈辱だ」

第一、皆はどんな風に資金を調達しているのだろうか？

とりあえず、今日はアミューリー神社にでも行ってみるか。あの島への船の料金は無料らしいからな。

（船）

「見事に他の客は居ないようだな」

船は自動操縦らしいのだが、盗まれたりとかの心配はないのだろうか？

船自体は豪華客船くらいの大きさだが、どんな理由でこんなに豪華なんだ？

「誰か居ないのか？」

「あれ、悟か？」

お、雨双が居た。

「あ、悟だってば」

アミユリーも居た。

二人ともあの島に向かう船に居るってことは、旅行かなんかの帰りか？

「ってか、神社に居なくて大丈夫なのか？賽銭とかが泥棒に盗まれるぞー」

ちなみに俺は数週間前に給料を盗まれたばかりだし。

「留守番が一人居るから大丈夫だってば」

「留守番？雑魚べーでも帰ってるのか？」

「エエナが居るんだってばー」

誰だよ！

雨双、詳しい説明を頼む！

「魅異さんの紹介だったし、悟も一度は会ったんじゃないのか？苗

字的にも悟の知り合いかと思ったが」

「いや、全然知らん」

ってか、俺との関係性のありそうな苗字はそうないだろ。

「あー、苗字を教えてもいいが、ショックを受けるかもしれないぞ？」

「ふふふ、主人公が苗字を聞くだけでショックを受けるわけがないだろ！」

主人公はとっても凄いからな！

「名前はエエナ ライノショック」

「…予想以上にショックだ」

いやさ、そこまで単純だと逆になあ。

俺の雷之という苗字への嫌がらせか？

「雑魚ベーと昔住んでて、雑魚ベーに逃げられると言ってたな」

「私たちと同年だってば！」

雑魚ベーが逃げるほどの女子小学生？俺には全然想像できないなあ。

「一応普通の子なんだが、なぜかズボンの代わりにタオルを腰に巻いてたな」

「その時点で既に普通じゃないだろ！」

「あと、鏡で自分の顔を見ながら、可愛いつて叫んでたんだってば」
なんか、神社に行きたくなってきたなあ。

「ところで、お前達は買い物かなにかの帰りか？」

「買い物なら勇者社で十分だ。今日はアミューリーが神族会議をするんだが、今回は保護者同席らしく、私がついていくことになったんだ。で、忘れ物をしたから戻ってる」

まあ、アミューリーは難しい話が分からないだろうからな。

「今から磁力で船の速さを上げるから、何処かを掴んでたほうが良いんだってば」

こういう時に便利な能力だな。

くアミューリー神社く

おお、かなり早く到着したな。

ちなみに二人は荷物を取りにいき、船で戻っていった。

「そういえば、エエナとかいう子が居るんだっけ。神社に来たついでに会っておくか」

「というか、俺は何のために神社に来たんだ？」

「あれ、貴方は悟さんじゃないですか」

「ん？知らない小学生に声をかけられたぞ。」

「えーっと、誰だ？」

「えっ？ああ、私はエエナ ライノショックでしたねえ。あ、悟さんの名前を知ってる理由は、貴方が主人公として有名だからですよっ！」

自分の名前を忘れてたみたいな言い方だな。

あと、やっぱり主人公の素晴らしさが分かる人はいたのか！

「まあ、俺は主人公だから当然だな」

それにしても、やけに雑魚ベーと似たような喋り方だな。

「やけに特徴のある喋り方だが、雑魚ベーの真似なのか？」

「えっ！あー、これは雑魚ベーさんと前に住んでたときに覚えたんです」

へー、雑魚ベーと昔住んでたのか。

近いうちに雑魚ベーから詳しい話でも聞こうかな？

「雑魚ベーって昔はどんな様子だったんだ？」

「今と変わらずに優しそうな心と愛を待っていましたねえ。雑魚ベーさんはとっても純粋で健全で完全なんですよ！」

完全ってなにがだ。

というか、雑魚ベーのイメージと全然重ならないんだが。

「そんなにまともな人物じゃないと思うが」

「いえいえ、少女界の中心に等しい人物です！少女の思いと重なる雑魚ベー砲を、雑魚ベーさんと撃った私が保証しますよおっ！」

技名が長くて言いにくいだろ。

俺なら、少女の思い出し雑魚ベーエクサバースト砲にするけどな。

「…はっ、長くなってるじゃないか」

エクサバーストをつけて短くするにはどうするべきだろうか？

「どうしたんですか？」

「その技名は短縮しようとするとか長くなるぞ！」

「え？少女と重なる思い出の雑魚ベー砲とかなら短くなるのでは？あ、確かに長くなってますねえ！」

合体技の名前なのが原因か？

俺のネーミングセンスには問題はないし、エクサバーストはつけた方がよいよなあ。

「ところで、悟さんは何の用があったんですか？」

「…あー、特に用はない。気分的に来ただけだ」

暇つぶしにはなったし、そろそろ帰ろうかな。

「…あああっ！」

「うあっ、脅かさないでくださいよおっ！」

た、大変な事を思い出してしまった。

「帰る船がない」

「えええっ!？」

そう、船は神様と保護者様が乗っていったのだった。

それで結局夕方近くになるまで二人は帰ってこなかった。

十四話 問題があるから楽しい世の中

@悟視点@

「大変ですよ、悟さーんっ！」

「ん、魑魅？」

少々寒さが残る三月の朝。魑魅が叫びながら家に入ってくる。

朝から大騒ぎというのは、事件的な何かの発生だろう。

「朝からなんだ？あと、家の鍵を持っくな」

「あ、これは私の自作ですから大丈夫です！それより大変なんです
！」

大変なのは俺の睡眠時間が短縮されたことだ。

「外の空を見てください！」

少々寒いが、外に出て空を見上げてみる。

凄く近くに星が見える。

「星だな」

「星です」

「で？」

「で？じゃなくて、星があんな近くにあるんですよ！」

いまさらそんなことを言われてもなあ。

「誰かが作ったんだろ？俺の知ってる限りでは校長か魅異なら星を作った事があるぞ」

「二人に聞いてみたんですが、星を作ったのは特星の人物ではないそうです！」

へー、特星以外にも星を作れる奴が居たのかあー。

「別に良いんじゃないか？洗濯物を乾かすのは大変そうだけど」

「悟さんはこの状況を主人公として受け入れられないんですか？」

主人公として？

ふふふ、それならば話は別だ！

「よし、準備も出来たし、勇者社にでも出向いてみるか！」

「最初から準備はできてたんですね」

（勇者社）

「おかしいな」

「どうかしましたか？」

「いつもなら、勇者社に来るまでに数回は勝負があるのに今日はなにもない」

今回はいつもの事件と何かが違う気がするな。

「あっという間に社長室だな」

罨がないかと気をつけながら、社長室に入る。

「おっと、貴方たちでしたか」

中には几骨さんがいたが、他には誰も居ないようだった。

「あれ、魅異さんは居ないんですか？」

「社長は状況を面白くするために消えています」

魅異らしいけどなあ。

「で、あの星はなんなんだ？」

「私が聞いた話では、特星の人以外が作ったとかでしたけど！」

「恐らくそうでしょう。今の状況について私から簡単に説明します」

うわー、真剣な話みたいだな。

「まず、特星はあの新星から戦いを挑まれています」

「ええええっ!？」

魑魅が驚くが、俺は朝なのでそこまで驚かない。

「朝は関係ないのでは?…とにかく、あの星を作った人物を倒す事が重要です」

星の製作者が黒幕のようだな。

「でも、出来たばかりの星なら戦力は弱いだろう?」

「いえ、特星の特別な人達は既に敵側にいます。それだけなら良いんですが、特星での特殊能力使用率が非常に低いため、普通の人では相手にならないようです」

ってことは、敵側には特殊能力をよく使うやつがいるのか。

俺たちは結構特殊能力を使うけどな。

「だからこそ、貴方たちがあの星に行くべきじゃないですか?ちなみにあの星は瞑宰星という名前らしいですよ」

瞑宰京から名前をとってつけたのだろうか?

「それで私たちは何をすればいいんですか?」

「今回は瞑宰星を五つの場所から攻め落とすのですが、そのうちの二つの場所を貴方たちにやっていただきます」

一人で一つの場所を攻めないといけないのか。

「ああ、相手は一つの場所に一人しかいませんよ」

「そうなんですか？ 敵の人数は少ないですね」

「大将を含めて五人か六人じゃないか」

本当に特星に勝負を挑んできたのか？

「ええ、戦いを挑まれたのは本当のようです。ですが、相手は勇者社に報告しているんですよ」

普通は特星本部とかそんな場所に言うんじゃないのか？

「本来ならそうでしょう。しかし、勇者社に報告しているという事は、特星全体を攻撃するのは場合によるということだと思います」

「相手の目的は何なんですかね？ 私には本気でやってるように思えないんですが」

俺も魑魅と同じく、相手が本気で特星に戦いを挑んでるとは思えないな。

でも、遊びや悪戯で星を作るやつなんているか？ 魅異を除いたら誰も思いつかないな。

「詳しい事は明日説明しますので、明日の昼頃に勇者社に来てください」

「断ったらどうなるんだ？」

「出番がありません」

よし、明日は頑張らないとなあ！

く特星公式営業会社く

朝からいろいろあったが、今日も会社に到着した。

まあ、仕事のものはないわけだが。

今日は納と寝ているキールしかない。ちなみに魑魅は明日に向けて休暇をとったらしい。

「なあ、空のあれはなんだと思う？」

納が暇そうに話しかけてきた。

「星だろ」

「やっぱりか！俺もあれは星かと思ってたんだよ！」

それは当たり前だと思う。

「そうだ、納は誰の仕業だと思う？」

「そうだなー、一番可能性が高いのはやっぱり魅異だろ」

確かに普通はそう思うが、実際は違うんだよなあ。

「でも、同じくらいにアキステってやつも怪しいぞ」

「え、魅異や校長以外に候補者がいるのか！？」

「ん？ああ、この特星の重要な人物図鑑に載ってるぞ。何ヶ月前に校長から貰ったんだが、俺的には特星の伝説の生物図鑑ってのが欲しかったなあ」

どうやら、校長が作った非売品の本のようだ。

「その本は何処にあるんだ！」

「此処にあるけど、かなり珍しい本らしいから見せないぞ！」

く、見ないと詳しい事が分からないだろ！

「あ、説明文なら読んでやろうか？」

「ああ、頼む」

しかし、どうして納はこの本をもらえたんだ？

「アキステ アールティ デラックスプラスという名前で、デラックスプラスは称号みたいなものらしい。異世界から来た人物で、自称チートだと書いてあるぞ」

そういえば、魅異は他称がチートだったよな。

「自称ってことは弱いのか？」

「いや、実力も反則的で星も簡単に作るらしい」

うわぁ、魅異くらいの實力じゃないか？

「これだけしか書いてないし、写真とかも載ってないぞ」

「そうか、ありがとう」

うーん、いったい何の目的があるんだ？

「悟は魅異とアキステならどっちが強いと思う？」

「いや、アキステには会ったことがないから分かん」

名前の雰囲気的にはアキステだと思うんだけどなぁ。

「悟、女性と付き合うなら年上と年下のどっちにする？」

「んー、同じ年くらいで少し年下だな」

まぁ、見かけや性格にもよるけどな。

「なら、魍魎ちゃんはどうなんだ？」

「あー、性格が少しなあ」

永遠の親友にならなれるのだが、恋人には向かないと思う。

「あ、ところでその本に俺の名はあるか？」

「悟も載ってるぞ。主人公だがそこまで凄くないって書いてある」

「俺が凄くない？ 実際とは違うことが書いてあるのか」

「かなり真実に近いだろ」

うーん、妙に納得できないなあ。

「相手が相手だから大変かもしれないが、必ず帰ってこいよ！」

「…ああ！」

言われるまでもなくそのつもりだ。

「というか、俺がそいつを倒しに行くってよく分かったな」

「それが主人公であるお前の役目だろ。親友である俺はそんなことは分かりきってるんだぜ」

おお、こいつは本当に良い親友だ！

ついにこの時が来た。

そう、今日こそが暝宰星を吹っ飛ばす日だ！

「さて、準備をしないとな」

普通は前日とかに準備をするものだが、主人公らしく勝負の日である今日から準備を始める。

そうだ、記念に自作の巨大コップでも持っていこう。これは自由工
作の時に作ったコップで、人が数人寝転べるくらいの大きさはある
んだ。錆びない金属で出来ていて、人が乗っても水に浮くぞ。名前
は春来はるらいと名づけよう。

「地面に莫塵を敷いて、春来を逆さにして中に入れば、雨を凌ぐの
に使うことも可能だな」

よし、莫塵も持っていくことに決定。

武器は神離銃とエクサスターガンだな。

「来春と莫塵と武器か。完璧な準備だな」

さて、そろそろ行くか。

（勇者社）

「おや、来ましたね」

勇者社の入り口で校長が出迎えてくれた。

：勇者社の三階くらいの壁に張り付きながら。

「とう！」

そこから見事に一回転して飛び降りる。

「ぐげふっ！」

あ、顔面から落ちた。

「本当に何をやってるんだ？」

「いえいえ、今回のバイトの練習をやっていたんです」

前から思うのだが、よく校長をクビにならないな。特星の製作者とはいえ、辞職するべきだと思う。

「ちなみに他の皆さんは先に行きました」

皆は早起きなんだな。

「では、作戦の説明をします。これで説明は五回目なので適当にま

とめてですけどね」

説明役ってのは非常に面白くないんだろうなあ。

「私が敵のいる場所の前まで飛ばしもので、飛ばされた場所にいる敵を倒してください。ちなみに特星の効果はないので、攻撃を受ければ重傷ですし、銃で撃ったら死にます」

「いきなり戦えないし!」

ま、まあ、魔法弾で何とかなるだろう。

「悟君、みんなの希望は貴方にあり、皆は貴方の無事を祈ってます。まあ、嘘ですが」

嘘かよ!

「とりあえず、頑張って相手を道連れにしてくださいね!」

「それだと俺まで死ぬだろ!」

普通に勝利を願ってくれよ!

「では、送ります!最後にこんな事を言うのはなんですけど、現在の借金は七兆九千億です」

「旅立つ前に言う事じゃないだろ!」

（暝宰星）

「ふう、到着したか」

校長のあの態度は和ませるためにやってるんだよな。うん、そういうことにしておこう。

「よく来たわね、悟！」

ん、この懐かしいような元気な声は！

「印納さん！」

「会うのは久々ねー」

この人は岩捌いわはき 印納いんなさん。俺が前に通っていた高校の先輩で、凄く元気で超自由な女性だ。ちなみに高三なのに酒を飲むが、特星での生活を含めたら、二十歳を超えてるから問題ないと言っている。

槍魔術という槍がある時に使える能力と、高等槍術部という部活で鍛えた槍捌きはかなり有名。高等槍術部のリーダーをやっていた。

有休で兵が少ない時に帝国に攻め込み、仮に一度奪い取った経験がある。その後、正式に帝国を実力で乗っ取り、自由気ままに生活していると聞いている。

ちなみに魅異も高等槍術部に入っていたが、ほとんど行ってなかったらしい。

「あの、帝国の仕事は？」

「ああ、あれなら友人に任せてあるわ。さて、全力で勝負よ！」

ええー、印納さんに勝負で勝てる自信はないなあ。

「というか、どうしてこんな仕事を？」

「面白そうだから。成り行きは面倒だから省略ね」

本当に何処までも自由な人だなあ。

というか、校長も印納さんも春来を完全スルーしてるな。

「此処は特星じゃないから怪我しますよ？」

「私は丈夫だから大丈夫。貴方は主人公だから大丈夫なはず！」

確かに俺は主人公だから大丈夫だな！

「ちなみに瞑宰星の味方してるのは面白そうだからなの」

本当に何を考えているんだろう？

「さあさあ、覚悟はいい？ 槍魔術、古の竜巻精神！」

「空気圧竜巻砲！」

竜巻を放ってきたので竜巻で相殺する。

「まだまだだよー」

更に連続で竜巻を発生させてくる。

なので、それよりも多い竜巻の魔法弾を撃つ。

「きゃ、数で負けちゃった」

印納さんは竜巻の魔法弾を全て受けるが、全然余裕なようす。

此処は特星じゃないのに丈夫な人だ。

「というか、竜巻を受けて動かないとは。印納さんって体重増えましたか？」

「数日前の身体測定で三十くらいだったわよ」

いや、高校生で三十は軽すぎるだろう！

「って、女性に体重を聞くなあ！ 槍魔術、半分くらいの異次元授業！」

異次元につながってそうな空間が現れ、そこから大量の文房具が飛んでくる。

「今こそこれの出番だ！」

盾に使っていた春来を投げつける。飛ばされた春来は文房具を弾き、印納さんの方に飛んでいく。

「まだまだ甘い。槍魔術、二段印納蹴り！」

印納さんは春来を蹴り上げ、そのままこっちに蹴り返してきた！

「ふがふう！」

俺の顔面に春来が直撃。

「あたたた、鼻血が出てるし」

数秒で鼻血は止まったが、顔面が結構痛い。

というか、槍魔術と最初につければ何でもありみたいになってるな。

そうだ、此処は知能戦でいこう！

特殊能力が槍魔術なら槍を槍を封じれば俺が勝てる！印納さんに魔法弾が効けばの話だけど。

「印納さんの持ってる槍って良い品ですよね」

「お、良い目をしてるね。これって私の自作なの」

お、見事に話題に食いついてきたな。

というか、槍なんか普通は自作で作らないだろ。

「他に槍は持ってるんですか？」

「それがねー、今日はこれだけなのよ」

よし、槍があれだけだと分かれば、あの槍を封じるのみだ！

「印納さん、その素晴らしい槍を見せて欲しいんですけど」

「ええ、眼が焼けるまで見て良いわよ！」

冗談抜きで遠慮する。

とにかく、槍を投げてもらって受け取る。

「印納さん、槍魔術って槍がないと使えないんですよね？」

「槍魔術なんだから当然！…あ、まさか貴方の狙いは！」

今更気づいたようだがもう遅い。

「空気圧圧縮砲！」

「きゃあっ！」

いつものお得意技で攻撃が印納さんに直撃する。

普通なら骨折はするだろうが、印納さんだし余裕で大丈夫だろう。

「あー、驚いて悲鳴をあげちゃった」

うわ、本当に余裕で大丈夫じゃないか！

「あー、印納さん？今のは岩くらいなら碎けるほどの威力なんですけど」

「あ、そうなの？まあ、私に悲鳴を出させただけでも上出来なものよ」

これからが勝負みたいな顔をしてるが、槍は俺が持ってるから大丈夫なはず！

「さて、私を誤魔化したからには、面白い勝負を期待してるわよ」

印納さんは格闘も強そうだなあ。

「適度に覚悟してね。槍魔術、降り注ぐ金属の雨」

槍が無いはずなのに槍魔術！？

とにかく、名前的に危なそうな技なので、春来を傘のようにして隠れる。

どうやら、針くらいの金属が降り注いでいるようだ。

「印納さん！どうして槍がないのに槍魔術が使えるんですか！？」

「あら、槍なら私の心の中にいつでもあるわよ」

「は？」

この人が言っていることが分からない。

「だから、心の中にある槍でも槍魔術は使えるの」

うわぁー、本人同様になんて自由な特殊能力なんだ。

「さあ、面白くなってきたわ！ 槍魔術、敗者封陣！」

俺の足元が光りだすのでその場を飛びのく。

すると、さっきまで立っていた場所が明るい光に包まれている。

「その光の檻は何かで負けたことのある人を封印できるのよ。人生が負けの人とかも封印可能ね」

ほとんどの人は封印できるじゃないか。

「さあて、封印されなさい」

「嫌だー！」

走って回避をしながら空気圧圧縮砲で撃っていく。

「これならどう？ 槍魔術、巨大な巨大なお菓子のお城」

俺と印納さんの間に巨大なお菓子の城が出現する。

「つてか、必要以上に大きいな」

「まだまだこれからよ。連携槍魔術、夢の如く崩れるお城」

印納さんが技名を言い終わると同時に、お菓子の城が俺のほうに崩れてくる。

「この大きさだと避けるのは無理っ！」

「ふふふ、流石に苦戦しているようだね」

はっ、この声は魅異か！

「あー、うん。で、城は川のように崩れてきているよね」

ん？まあ、見れば分かる。

というか、時間が止まってないか？

「いや、○秒会話をしているだけだよ。それでこれを避けるには前後左右は不可能だよね」

まあ、間に合わないだろうな。

「なら、上下のどちらか。でも、下は穴を掘る暇はないし、春来でもながされるから防げないよね」

それなら残る道は上だけだが、俺の跳躍力は普通だぞ。

「そこで神離銃を持って、普段浮く時と同じようにすればいいよ」

お、辺りが動き始めたぞ。

現在は右手にエクサスターガンを装備しているので、左手に神離銃を装備して空中戦を思い出してみる。

あの時のような感覚だな！

「よし、浮けた！」

「あ、悟も浮けるんだ」

よく見ると印納さんも浮いていた。

おい、これも魅異が教えたのか？

「いや、印納さんは槍魔術の能力で浮いてるんだよ」

というか、印納さんの強さはどのくらいなんだ？

「うーん、確か前に羽双と戦って引き分けだったね。槍魔術は希求の能力と同じようなものと考えて問題ないね」

ああ、聞くんじゃないかったあー！

「面白そうになってきたわね。槍魔術、心底ちよつと飽きた時の攻撃」

「うおおっ！」

大量の光る球で集中攻撃をしてくるが、なんとか春来で防御する。

というか、発言と技名が矛盾している！

「次々行くわよ。槍魔術、完全から不完全への移り変わり」

次は燃えた本を飛ばしてくる。

「なんの、水圧分裂砲！」

広範囲の水攻撃で本を撃ち落としていく。

「水圧圧縮砲！」

更に水圧圧縮砲で攻撃する。

両方の銃で交互に撃つので、呼吸をする隙がなくなるはず。それにより気絶してくれればいいんだが。

「んー！んんんー！」

確かに攻撃は命中しているのだが、苦しがる様子はない。

というか、凄い勢いで顔に飛んでくる水を、普通に飲んでるし！

うーん、かなり長い時間撃ち続けてるが余裕そうだ。

「これも駄目か」

もう、辺りは非常に暗くなっていた。

「ああ、もうこんな時間？私はそろそろ寝たいんだけど」

寝たいって、まだ日が沈んで少ししか経ってないぞ。

「勝負はどうするんですか？」

「引き分けが不満なら続けるわよ」

「いえ、引き分けで十分です！」

これ以上やったら本当に終わらなくなる気がする。

「あー、そうそう。アキステのいる場所なら、明日にならないと開かないわよ」

「え、そうなんですか？」

なら、今日は春来と莫塵を使って野宿だな。

「あ、私も一緒に寝るー」

「え？ いや、帰ったらどうですか？」

「いやいや、面白そうな展開は逃さない主義なの。もしかしたら、魅異が本気を出すかもしれないのよ」

いや、確かに面白そうだけどさあ。

「なら、俺は外で寝るんですか？」

「ん？ あー、別に私は寝相とかは悪くないから大丈夫よ」

印納さん、問題点はそこじゃないです。

「男女が一緒の部屋で寝る時点で問題あるでしょうが」

「まあまあ、小学生の修学旅行のつもりで良いじゃない」

世間的に高校生だと問題あるし、そもそも小学生でも男女共有は無い気がする。第一、最近は小学生でさえ危ないっていうのに。

「あ、小雨が降ってきたわね」

「ええ、最悪の状況で降るなよ」

これは地面が泥になるほどではないが、外で寝たら風邪をひく気がする。

「分かりました、同室で良いです」

「よし、決定ね！私の各地を旅した話を聞かせてあげるわよ！」

要するに自慢話がしたいだけなんだろう。

濡れそうなので莫座を敷いて、それを囲む大きさの春来を逆にして置く。

「それじゃあ中に行くわよー」

中は結構広く、立っても頭はぶつからなかった。

「というか、これだと空気の入れ替えが出来ないんですけど」

「二酸化炭素で我慢すれば問題ないわ」

この人なら宇宙空間でも生きていけそうだなあ。

「まずは私が正式に帝国を乗っ取った後のことを話すわ」

確か様子見で一度攻め込んだんだっけ。

「私は友人二人と共に帝国に居たんだけど、面白いことが何もないから私一人で探しに出かけたの」

面白いことを求める部分は魅異に似てるな。

「それで懐かしの暝宰京に行ったら高校がつぶれててね」

ああ、それが原因で俺も引越したんだっけ。

「で、高等槍術部も無くなってたから殴りこみに行ったのよ」

「何処に？」

「特星本部」

って、特星の偉い人が集まる場所じゃないか！

「け、結果は？」

「本部内で勝負した相手には全勝。校長もついでに倒しておいたわ」

校長でさえ勝てないのか。

「帰り際に魅異の一番弟子を見つけて、勝負をしたんだけど引き分けだったわ」

そもそもその時点で星を壊せるレベルだろ。

「その時に印納さんは怒ってたんですか？」

「いやいや、本部に勝負を挑む理由ができて上機嫌だったわ。私は常識的だから理由なしで勝負はしないの」

どこがどう常識的なのか詳しい説明を聞きたい。

「あ、ちょっとトイレ行ってくるわね」

「ああ、分かりました」

そういえば、後半はにずっと水を飲んだもんなあ。

ってか、その時に浴びた水で服が濡れていたせいか、印納さんの寝転んでいた場所が凄く濡れている。

まあ、あの人は風邪に逃げられるから大丈夫だろう。

ところでこの辺にトイレってあったか？

「ただいまー」

あ、戻ってきた。

「先に言っとくけどおしっこの方よ」

「わざわざ言わなくて結構です。ところでトイレなんてありましたか？」

少なくともこの辺りにはなかったと思う。

「あー、外だけ酔っ払いっぽくしてたから大丈夫よ」

そういう問題じゃないんだが。

「星や世界が違えば文化も違うものよ」

「此処も特星とあまり変わらない気がする」

印納さんなら何処に行っても順応しそうな気がする。

「酔っ払いオヤジだと思わせる為に立った状態だったのよ」

「あの、報告は本当に結構です」

恐らく、性格も含めたら羽双より強いのだろう。

「んー、質問ある？」

「あ、それなら印納さんが魅異と戦って勝てる自身は？」

恐らく結果は魅異が勝つだろうが、この人の意見も聞いておきたい。

「魅異が手加減して私が勝つ！」

「それって実質的には勝てないんじゃないですか？」

「勝ちば勝ちよ」

そのいい加減な性格を一割でも良いから分けて欲しい。

「さて、そろそろ寝ようかしら」

「あ、寝てる最中に俺に近づいたら魔法弾を撃ちますから」

「ええー、これ以上濡れると風邪をひいちゃうわ」

明日はアキステとかいうやつに勝てるのか？

まあ、最低でも生きて帰ることは必須だな。

十五話 姿が同じだと紛らわしい

@魑魅視点@

謎がたくさんのお眼星。私はその星の敵が居るという場所にいます！

「来る前に悟さんを起こしてきたほうが良かったですかね？でも、ぐっすり寝てましたし、起こしたら悟さんに嫌われるかもしれません！」

それにしても、見える範囲が全て土なんて珍しいですね。急いで作ったら手抜きになったとか？

「あー、お前は確か魑魅じゃないか」

はっ、この聞き覚えのある声は！

「悟さん！何故こんなところにいるんですか？」

目の前に現れたのは悟さんでした。

「それは俺をツッコミ役と勘違いして言ってるのか？それとも俺に言ってるのか？」

むむ、このツッコミが上手そうな雰囲気は覚えがあります！

「ポケ役の悟さんですね！」

「正解！というか、持ち物で気づかなかったのか？」

よく見ると、ポケこの人は両手に風船を持っています！

「…悟さんファンの私が気づかないはずがありませんよー」

「嘘にしか聞こえないぞ」

間違いは誰にでもあります！

「それで旅行でもしてるんですか？」

「お前なあ、この場所に居る俺の役目くらい分かるだろ？」

深く考えてみましたが分かりません。

「宇宙旅行？」

「違うわっ！アキステの場所へ行くのを防ぎに来たんだよ！」

「あ、バイトですか」

「何故そうなる！？」

アキステさんにバイトで雇われたとかじゃないんですか？

あと、今頃ですけど、本物よりポケ役さんのほうがツツコミが上手です！

「でも、それって魅異さんを敵にまわす事と同じですよ」

「ふふふ、魅異が危なくなったら俺が助ける作戦だ！」

お、それってかなり良い方法じゃないですか！

よし、私も危なくなったら悟さんを助ける作戦でいきます！

「さて、その前に俺の名前でも決めておくか」

「あれ、本物の悟さんと同じ名前にしないんですか？」

「紛らわしいからな」

まあ、この人に悟さんの名を名乗らせるわけにはいきませんしね！

「そうだ、ツツコミ役が記憶をなくしたときの名前でいいか。俺の名前は戦隊 黒悟だ！」

おお、聞くからに敵役っぽい名前です！

「元々この名前は、悟ンジャーブラックの本名という設定で作ったしな」

適当な本名だと思いますよ。

というか、悟ンジャーは黒悟さんではなく、悟さんがやってると思っ
てました！

「うう、黒悟さんは子供の夢を壊しすぎです！私に謝ってください
！」

「え、何で？」

む、まだ自分の罪に気づいていないようですね。

「黒悟さんは悪です！」

「だから何で！？」

黒悟さんも悟さんと同じようなものだと考えていた私が愚かでした。

「あー、勝負の前に俺の特殊能力を言っとくよ。俺の使う能力は非質系の能力で、想像を操る能力なんだが、想像を実体化することができるんだ」

想像を実体化することが出来る能力ですか？

「はっ！なら、私に忠実な悟さんを想像して実体化してください！」

「いや、気持ち悪いし、想像したくないから却下な」

確かに誰だか分からなくなりますね。

「さて、勝負するか。凄い風船飛ばし」

黒悟さんが技名を言った途端、その辺一帯に風船が出現して、こっちに飛んできます！

「おとと、危なく当たるところでした！」

風船は岩などに当たりますが、割れる様子はありません。

「善技、正しき事への導きです！」

とりあえず、正義の力を集めた球を飛ばして攻撃します。

「おっと、危ないな」

連続で飛ばしますが避けられます。

「奥義、最終大ダメージ拳！」

「奥義、正義の決め技です！」

裏悟さんの拳と私の拳がぶつかり合いますが、私のほうが吹っ飛びました！

しかし、普通に着地できました。

「俺の方が強いみたいだな？」

「いえ、体重差です」

「体重差！？いや、どう考えても威力差だろ」

いーえ、私の体重が軽いせいで吹き飛んだんです！

「まあ、悪魍魎になれないお前に負ける俺じゃないがな」

そういえば、今日は何故だか私の悪意が無しに等しいですね。

恐らく相手が悟さんの一部と同じようなものだからですね。

「そういうわけだから帰れ」

「ふふん、黒悟さんの予想以上に私は強いんですよ」

それでも私も非質系の特殊能力使いですからね。

「完善、完全完善状態です」

この技は私が完全な善者になるための技で、完全な善者の状態が善魑魅と言われることを祈ってます。

「あー、悪魑魅の逆もあるのか。というか、口調が変わってないし」

「その通り！そしてこの状態の私はとても善人なんです！」

さて、黒悟さんは丈夫なので倒す気で頑張ります！

「善技、平和主義者の実力行使」

黒悟さんの前まで高速で移動して、水筒位の大きさの正義の棒を十連続で放ちます。

「あたたっ！どこが平和主義だよ！」

「まだまだです！」

攻撃を当てて逃げるの繰り返しで疲労を溜めさせます。

「しょうがない、本気でやるしかないようだな。空想寒冷大変動!」
黒悟さんが技を叫ぶと同時に、辺りの景色が青っぽくなりました。
そして非常に寒いです!

「あー、ちなみに俺の想像で作ってあるから、俺には全然影響しないぞ」

なんというご都合主義!

というか、青い背景に混じって、青い巨大な氷が降り注いでいます!

「奥義、強制悪人成敗です!」

周辺に数千本もの正義の剣を出現させ、黒悟さんに放ちます! ちなみに正義の剣なので殺傷力はありません。

「って、数が多すぎだぞ!」

私への影響はないので安心してください。

「次いくぞ。空想温暖大変動」

今度は辺りの光景が赤くなり、非常に暑くなりました。赤い背景に混じって赤い火の玉が降ってます。

火だと燃えるので、さっきより状況が悪いです!

「善技、形見の超耐性傘です!」

私の上方に善人の力が込められた強大な傘を作り、降り注ぐ火の玉を防ぎます。

「…なるほど、多少は強いみたいだな」

ふふん、私に掛ければ黒悟さんなんて楽勝です。

「魅異が望むのは面白いことだ。主人公側の敵である俺が勝つのは、予想外の面白い展開のはず！」

まあ、私に勝てればの話ですけどね。

「まだ、時間を稼がせてもらう。空中浮遊者と銃使いの対立！」

「へ？ うわわあっ！」

私の体が勝手に空中に浮いてます！

はっ、これが超能力というやつですね！

「発射！」

黒悟さんの周りにいくつもの白い球が現れ、黒悟さんの合図と共に飛んできます！

「ひえええっ！」

空中で身動きが取れないのに避けられませんよ！

白い球が私に当たると破裂して凄く痛いです！

「まだまだ！」

殺傷能力が低めなのですが、連続で破裂するので威力が高めです。

「ううっ！」

「よし、効いてるな」

あ、急に体が動くようになりました！

「雨の国の密接集中豪雨！」

しかし、体が動くようになった途端に滝のような雨に飲み込まれます。

「あたっ！」

空中から地面に雨で叩きつけられました。

「さて、俺の溜め技の威力も上がってきた」

ああ、さっきから技を溜めてたんですか。

くっ、今の状態で技を受けるのは危険ですが、ここは私もやられる気でいくしかないですね。

「どれだけ貴方の技が強かったとしても、威力だけで私を倒すことは出来ませんよ」

「ふん、俺には魅異に対する思いもある！お前こそ俺の技に耐えられる可能性は微妙だ！」

「もっと根本的な問題です。本当の善者の力を思い知ってください！」

黒悟さんは威力や思い以上に大切なことが分からないようです。

とりあえず、私も力を溜めて攻撃の態勢をとります。

「秘技、真の最終超ダメージ拳！」

「奥義、正義の決め技！」

少し前と同じように、黒悟さんと私の拳がぶつかり合う！このような予測していたのでしょうけどそうはさせません！

黒悟さんの拳とぶつかる前に、私は黒悟さんの後方へ自慢の速さで移動します。

「え？」

「善行、現実的善人の不意打ち！」

そのまま黒悟さんの頭を地面に向かってぶん殴ります！

「ぐぎゃっ！」

私に殴られた黒悟さんは、地面に顔から突っ込むと同時に消えていきます。

「あれ、消滅しましたね」

消滅するということは、黒悟さんはモンスターだったんですね！

「それは見当違いかもね」

「あれ、この声は魅異さん！」

いったい今まで何処に居たんですか！？

「特星だよ。それで言うておくことがあるんだけど」

え、お土産はありませんよ。

「相手の親玉が居る場所は明日にならないと開かないから、今日はその辺に野宿しておいてね」

別に良いですけど、相手の居る場所なんて見えませんよ。

「明日になれば見えると思うけどね」

そういえば、魅異さんって口調を控えましたか？

「少しだけだよ」

とりあえず、全身濡れた服を技で変えましょう。

「でも、全身が雨で濡れてるのって魅力的な格好なような」

うーん、これは凄く迷います。

@エエナ視点@

「ふふふふ、ついに私の番が回ってきましたよおっ！」

「というか、折角のエエナ状態なのに自ら来るとはね〜」

あれ、もう魅異さんに話しかけられましたね。

「問題でもあった？」

いえ、ボス戦終了後かと思ってたので。

あと、エエナ様と呼んで欲しいですよっ！エエナさんの設定は私に仕えてはいるものの、他の私に仕える従者のリーダーという設定ですの！

「まずは自分でやってみることだね〜」

「あ、ちなみに偽者の私は今は消してあります」

「知ってるよ〜」

まあ、そんなのは予想通りですけどねえ。

「私が相手なんて貴方も運がないわね！」

おっと、いつの間にか少女を待たせていたようですねえ。

「えっと、貴方は晴天道 春夏でしたね」

「おおっ、私の名を知ってるなんて貴方は強者ね」

ええ、私は本物の少女になれるくらい凄いですからねえ！

ちなみに春夏さんは悟さんと勝負した事があるので、私が持つてる特星の可愛いな女子小学生図鑑に記録されてますよおっ！

「知っての通り私の実力や知力や戦力は最強レベル！そう、私は力を操る非質系の特殊能力者だから！」

悟さんには敗れたらしいですけど、力を操る能力は本当に厄介ですねえ。

まあ、少女が使うから許しますけどね！

「私はエエナ ライノショックです、通称はエエナ様と呼ばれていきますよおっ！」

主に私しか呼んでいませんけどね。

「ふ、ふーん、私の通称はエクサ春夏様と呼ばれてるもん！」

エクサをつければ良いというものではないんですけどねえ。

「あ、そうだ。春夏さんに言っておきたいことがありました」

「え、何？」

「今は春と夏の間ではなく、冬と春の間なので場違いですよ」

「私の名前は季節と関係ないっ！」

あー、関係なかったとは予想外でした。

「ちなみに今日は曇りで小雨が降りそうですけど」

「苗字と天気も関係ない！」

なんだ、出現する時とか決まってるんですか。

「なら、大したことはありませんね」

特定の時にしか出ない少女ほど凄い予感がするんですけどねえ。

「くー、私をバカにしてるなー！」

あ、変な誤解をされちゃいましたね。

「貴方なんか絶対に倒してやる！火力、丸焼き用の特大強火！」

「きゃああっ！」

いきなりの不意打ちだったので可愛い声で叫んじやいました。

「あ、此処は地球だった！水力、水害専用の滝！」

燃えている部分を水で消してるようですが、そこにはもう私の姿はありません。

「あ、ど、どうしよう」

「勝負を続けるべきだと思いますけどねえ」

「なっ！い、いつの間に抜け出したの？」

とりあえず、後ろから話しかけて脅かしちゃいました。

春夏さんは私が抜け出したと思ってるようですが、実際は一度消滅して復活しただけですよ。

あ、ところでエエナ様状態の能力はなんですかねえ？

「開封を操る能力で非質系だよ」

うーん、最近は非質系の人が増えてる気がします。

「抜け出したのではなく復活しただけですよ。あ、ちなみに私は強いので手加減の必要はありませんよおっ！」

「ま、まあ、どんなに強くても私の力に敵うわけがない！」

はあ、その自信は何処から湧いてくるんでしょうかねえ？

ま、どんな人が相手でも私に敵うはずがないに決まっていますよお

っ！

「魔力、晴天防ぎの雨雲副作用」

「封印、威力封印の防御膜ですよっ！」

春夏さんが技を使ってきたので、様子見する為に攻撃の威力を封じる膜で私を囲みます。

春夏さんの技によって雨雲が発生し、私の場所に集中して雷が降り注ぎます。

「うわぁ、普通なら黒焦げになりますねえ」

まぁ、復活できますけどね。

お、雷は落ちなくなりましたが、雨が降り始めましたねえ。

「次はこちらの番ですよっ！必殺、封印カムの散乱！」

この技は私が元々使えるカムという技と、封印の特殊能力を合体させた凄い技ですよっ！触れた相手をカムの中に封印できるんですよっ！

ちなみにカムは熱い気体なので注意しましょう！

「反射力、何でも返す義理深さ！」

って、全て返されてしまいましたよっ！

「わとととおっ！」

自分の技を何とか回避します！

別に封印されても能力で開放したり、自爆して外に復活したりできるんですけどねえ。

「私の力を操る能力を攻略できる方法など無い！」

確かに凄く強いといっても過言ではないですけど、悟さんに攻略されたはずなんですよねえ。

あ、悟さんと同じ方法で攻略するのはどうでしょう？

「ふふふふ、私の真の正体を明かすしかないようですねえ！」

「し、真の正体？」

エエナさん状態と普段の私の両方でも問題の無い色といえばあれですネ！

「私は悟ンジャー小少女色ですよおっ！」

小少女色とは小学生少女色の略です。小学生少女色とは私の純粋で健全で完全な心を表す色です！

「要するに白ですねえ」

「う、出たわね！最低最悪の諸悪の根源悟ンジャー！」

あ、微妙にトラウマ気味のようですねえ。

「というか、色に関するツツコミはなしですか？」

「あるわけないよ！破壊力、最初から最後まで完全崩壊！」

「ひえええっ！」

辺りが眩しい光に包まれて、私は消滅してしまいました！

「か、勝っちゃった？」

「それを言ったら復活されますよ」

「うわっ！攻撃力、最大攻撃力の通常攻撃！」

光の球を全方向に大量に連射してきましたねえ。

「封鎖、私への通行禁止！」

とりあえず、見えない壁で防いでおきます。

ところで悟ンジャーの技ってどんなのがあるんですかね？

ま、適当で大丈夫ですよね！

「戦隊技、避けられない不意打ち！」

ふふふ、この不意打ちは避けられないでしょう！

「あれ、何も起こらないよ？」

不意打ちの極意は相手が隙を作ることなのです！

「後ろの要塞を見てもそんなことが言えますか？」

「要塞？」

春夏さんが後ろを振り向きました！

「今ですよっ！それえい！」

その隙について春夏さんに飛びつきます！

「うあっ！」

そのまま春夏さんが下で倒れそうになったので、なんとかして私が下になるように倒れます。

「あいたあっ！」

うう、背中が非常に痛いです。

「ちょっ！離してよー！」

「嫌ですよー」

普段の私だと単なる変態に見えるかもしれませんが、エエナさん状態の私ならば問題ありません！

「確かに純粋で健全な行動だから問題ないね」

ええ、この程度はじゃれ合いに過ぎません！

「とりあえず、少女状態では胸タッチくらいが限度かな」

偶然胸タッチならしたことがありますけど、問題なかったんですねえ。

「うう、なんのつもり？」

「まあまあ、子供同士なんですから仲良くしましょうよ」

というか、このまま寝てしまいたいんですけどねえ。

「わ、わかったから開放してよー」

うーん、もう少しこのままで居たいのですが、用事もあるので渋々開放します。

「ふう、それで何か聞きたいことはある？」

「え？そうですねー、この星で一番強い人は何処ですか？」

「あ、私！」

おっと、そうでしたね。

「なら、この星の製作者の場所は分かりますか？」

「うん。私が最初に居た場所の近くなんだけど、明日になったら出

現するんだって」

ということは、今日はこの星に泊まれということですね！

「こんなこともあろうかと、食事とかを二人分用意してあります！」

「二人分かあ」

おや、春夏さんがこっちを見つめてますねえ。

「もちろん、春夏さんも食べますよね？」

「え、良いの？」

「ええ、その為に用意してきたんですから！」

少女と出会えることは大体把握してましたからねえ。

「なら、どうして子供用ベッドを一つしか用意してないのかな？」

ほら、二つだと重たいからですよ。

ついでに密接状態で寝れるからというのもありますけど。

「後者が目的なのは言うまでもないね。しかも抱きついて寝ようと考えてるとは」

問題外でしたか？

「いや、全然問題ないよ」

あー、小雨が降ってきましたねえ。

折りたたみ式の小屋を持ってきて正解でした。

@東武視点@

此処が瞑宰星とか言う星か。

今回のことで一つ言わせてもらうと、俺の力がどうしても必要というのなら来てやってもいい。

「だが、この俺が代理とはどういうことだあっ！」

「まあ、東武が代理なのは実力的な問題じゃなく、第二部からの登場だからって理由だからしょうがないよ」

ああ、貴様か。

「それに代理でも一度選ばれたからには、悟ンジャーのレギュラーキャラになれるからね」

俺はそんなことの為に来たわけではない。

「この俺という人物の存在を無視して、この星で最強を名乗る愚か者を塵にする為に来たんだ！さあ、俺に対抗する輩は何処のどいつ

だ!？」

「まあ、悟ンジャーには羽双よりも東武の方が向いてるかもね。主に性格的な意味で」

羽双? ああ、俺という偉大なる存在を無視して、本来呼ばれていた時計男だな。奴とは勝負した事があるが、時間を止められて引き分けになったな。

「ある意味負けだと思うけど」

奴に今度会った時には貴様の餌にしてやる。

「私は食事無しでも大丈夫だけどね」

貴様が食事有りならば、俺はそれ以上の食事を食しているだろう!

「あー、お前が相手ですか」

ほう、この俺に対してお前とは威勢の良い敵だな。

「つて、貴様は魍魎!」

どういふことだ! こいつは悟ンジャー本部のメンバーの一人だったはず!

「相手は悪状態の魍魎で、悪魍魎って言うんだよ」

「悪魍魎か。ゴミのような名前だ」

「はあ、狂った発言は死んでから言ってください」

悪だけに悪口も得意分野ということか。

「本来なら一撃で仕留めるところだが、今回はゆっくりと俺の実力を体に叩き込んでやろう！」

「それはこっちの台詞です。悪技、暗黙の毒矢」

俺の辺りが暗くなり、周囲から雨のような毒矢が降り注ぐ。

「この程度の矢が俺に当たるわけがない！炎命、不死身鳥！」

炎の鳥を五匹ほど作り出し、辺りの矢を焼き払う。

「毒の矢など当たる前に消し去れば問題ない！」

「まあ、その程度でしょうね。悪技、裏切りの生命体」

俺の不死身鳥が勝手に地身の回りに集まりだしただと！？

「この技は生き物を操ることができるんですよ。所詮貴方の能力も私の前では屑当然！さあ、東武を攻撃してください！」

「貴様程度が俺の能力を利用する事などできない！命滅、炎々の炎！」

魑魅の周辺の不死身鳥を炎に戻す！

「きゃああっ！」

その炎の影響で奴に少しのダメージを与えたようだ。

「もう一度言う！貴様程度が俺に勝つなど絶対不可能！諦めてその辺の草でもかじっていることだな！」

「くうっ、貴方が何を言おうと私が従うわけがないでしょう！」

「ほう、その割には口の悪さがなくなっているようだが？」

さっきまでお前と言っていたのが貴方になっている。

「あ！…お前だけは許しません！」

「貴様が許さなろうが俺の知ったことではない。貴様こそ俺を敵にまわさないうちに降参することを推奨する」

まあ、一度の技で降参という惨めな結果になるがな。

「お断りします！悪魔、悪夢の中の炎！」

奴を中心に辺りに炎が飛び散る。

「俺の所持品一つにでも被害があればただでは済まさん！水命、水流飛竜！」

「悪戯、静電気の導き！」

水流飛竜を出しているところに静電気が流れ、手が痺れてしまう。

「くっ！この俺に攻撃を当てただと？」

「私がお前程度にやられるだけのはずがありません」

「認めん！全てが究極であるこの俺に攻撃を当てるなど、貴様程度の論外中の論外がやってよい事ではなあいっ！」

手加減しているとはいえ、こんなことがあるとは！

「まあいい。本来なら消滅決定なのだが、貴様には特別に更正の機会をやるう！」

「その頭の狂った発言を出来なくしてあげますよっ！邪心、悪名深き憎悪の塊！」

黒々しい何かが魑魅を囲み、どんどんと巨大化していくだど！？

「この悪の力で構成された物質は他の人から見えない。つまりお前を助ける仲間は来れないってわけです！」

ふ、ふう、この俺に対して勝った気では…その、愚かな奴だ！

「そ、その程度の玩具で俺を倒すだど？そんな事は絶対が完璧なほど完全に不可能だ！」

「なら、この攻撃に耐えられますかあ！？極悪技、絶対完璧完全な悪魔法砲！」

魑魅の周りについていた巨大な黒々しい何かが、こっちに全て放たれる！

「はあ、はあ！い、一応死なない程度に本気で撃ちましたが、吹き飛んだ衝撃で殺してしまったかもしれません。ま、まあ、あんな奴はそれがお似合いなんですけど」

「貴様程度が俺に勝てたつもりか？」

「は！そ、その声は！」

所詮は特殊能力のみしか脳のない弱者に俺を倒せるはずがない。

「聞こえていなかったようだからもう一度言ってやる！貴様程度が俺を倒すなど、何があるうと絶対が完璧なほど完全に不可能だあああっ！」

「ひえっ！し、しかも怪我一つ無いなんて！」

「お前程度が俺に怪我をさせるなど、九千不可思議世代掛かっても不可能だ！」

まあ、更正後に無傷の秘密を明かすのも良いだろう。

「さて、今から貴様は死ぬわけだが、言い残すことはあるか？」

「え？」

「よし分かった！その言葉は言い伝えておいてやろう！部分死、部分的抹殺！」

「きゃあっ！」

予想通りうるさい愚か者は喋らなくなったな。

いや、喋れないの方が正解だろう。

「とりあえず、こういうことか説明してね。出来る限り視聴者にわかりやすいように」

貴様は分かっているのだろうか？

「まあね」

早く次の作業に進みたいのだがな。

分かりやすく言うならば、俺の能力で愚か者が死んだまでだ。

「はいはい、それだと誤解を招くから詳しくね」

死んだと言っても肉体的に殺したわけではない。この通り心臓はちゃんと動いている。

「どうでもいいようだけど、胸の部分に手が当たってるよ」

そんな事はどうでもいい。

で、分かりやすく言うと愚か者の悪の精神のみを死なせたということだ。だが、この愚か者には悪の精神のみしかなかったため、今は抜け殻状態で、この愚か者になりたい者を募集中というわけだ！

「黒悟みたいなのや霊みたいなのが悪魑魅の体に移る事も可能だよ」

「そして俺がさっき死なせた部分を蘇らせる！ただあーし、悪の部分だけではさっきと同じようになるので、新たに善の精神も俺の能力で生み出し、悪の精神と合体させて愚かな抜け殻に詰め込む！」

「そうすることで普段の魑魅が二人になるんだよ」

だが、同一人物が二人だと紛らわしいな。

「よし、他にも姿と記憶以外は改善するか」

「姿はともかく記憶の部分を変えないの？」

ふん、記憶を変えたら俺の実力まで忘れてしまうではないか！

「変な事にはこだわるね」

そうだ！魅異、後でこいつの特殊能力を変えておけ！

「特殊能力も自分で生み出せるよね」

黙れ！この俺の命令に意見することを貴様に許した覚えはない！

「なら、私とその命令に従う必要は？」

俺が決めたんだから従うのは当然だあ！

「ま、明日までは私も暇だから問題ないよ。リクエストがあれば適度に応じるけど？」

俺の手下としてそれなりに相応しい能力で良いだろう。

「なら、最近数が少なめの助質系の感覚を操る能力でいい？」

痛みの感覚を大きくすれば、気絶させれば勝ちの特星では俺の勝率が上がるな。よし、その能力で問題ない。

「あ、あれ？」

「ようやく起きたか」

この俺を待たせるとは何様のつもりだ。

「あ、あなたは！」

「心配するな。一度言ったように貴様には更正のチャンスを譲ってやる」

「あ、はい」

状況を理解していないのに返事をするとは良い度胸だな。

「とにかく、今からお前には俺の下の下の下の下の下で働いてもらう！まあ、今日は特別に休暇をくれてやるがな」

「え？」

やはり状況把握が出来ていないようだが、口の悪さはどうにかなったようだな。

「でも、私は敵だったんですよ？もしかしたら、貴方を裏切るかもしれない！」

「貴様は覚えるという行為ができないようだな。何度目かは分かんが言っておく！貴様がどんな方法及び手段を用意して裏切ろうが、俺に勝つことは絶対が完璧なほど完全に不可能だあっ！」

さて、後はこいつの名前だ。

「さて、俺の部下になった時点で、愚か者という名は剥奪する！そして俺が新たに名前をつけてやろう。命名、新たなる名の誕生」

この技により俺がつける名を公式設定とする！

「よし、決めたぞ！お前の名は幼嫁^{ようか}だ！拒否したら自動的に愚か者という名に変更する！」

「あの、苗字は？」

「俺の下の下の下の下の下の部下のお前が、俺に意見するとは良い

度胸だな！」

「す、すみません！」

だが、苗字なしというのも地味だな。

「よし、フルネームで私八^{わたしはっ} 幼嫁に決定だあ！」

名簿欄に名前を書くだけで、世界中の雑魚ベーミみたいなのが誰だか分かるぞ！

「私八 幼嫁…あの、やっぱり苗字は結構です」

「拒否したら愚か者が公式設定になるが？」

「なら、愚か者で良いです」

「それ以前に貴様に拒否権は無いっ！」

「ええっ!？」

こんな事もあるうかと、拒否権を無くしておいたのだ！

「幼嫁に少女になれる技を追加していい？」

別に問題ないが、どうしてだ？

「なんとなく。少女状態の特殊能力は質系の魔法を操る能力に決定！」

「さて、今日のところは休暇をやろう。デニウスの居る場所を送るから、適当に自己紹介して休むがいい」

「あまり自己紹介をしたくないんですが、とりあえず分かりました」
ちなみに送るための方法は、俺が元々使える魔法で送るので幼嫁でも安心というわけだ。

「おっと、その前にこれを持っていくといい」

寝る時には必需品だからな。

「これは布団と毛布じゃないですか！でも、東武さんの分はあるんですか？」

「貴様！この俺が敵の陣地で堂々と睡眠をとったのか！」

「そ、それもそうですよね。でも、それならどうして持ってきてるんですか？」

細かいことを気にする部下だな。

「此処に来る前に勇者社の福引きで当てたものだ。俺が福引きの商品程度を使うわけがないだろう」

まあ、俺が当てた物を他の者が当てて、俺の品格が下に見られても困るから貰っておいたがな。

「それを幼嫁に使わせたら元も子もないと思うけど？」

べ、別に俺が捨てる物を部下が使っていても問題はないだろう！

「東武さん、ありがとうございます！」

「きき、げほっ！貴様の礼など必要ない！あと、俺を呼ぶ時には東武様と呼べ！」

ゲニウスにもそう呼ばせているのだから、平等に統一する必要がある。

「…はい、東武様！」

「気持ち悪い！やっぱり様付けはやめるんだ！」

統一は諦めるとするか。

「ちなみに俺が無傷だった理由は、俺の能力により自分を不老不死の状態にしていたからだ！…さて、送るぞ。住家への導き！」

幼嫁をゲニウスの居る場所へと転送する。

「ふう、俺は寝る」

「敵の陣地だと寝ないとか言っただけだっけ？」

寝込みを襲ったところでこの俺に勝てる敵など存在しない！

「言うと思った。なら、布団と毛布をあげた理由は？」

あんな物を使うくらいなら、地面に寝たほうがマシだ！

…少し寝心地はよさそうだったがな。

十六話 本部の悟ンジャー全員登場！

@魅異視点@

面白いねえ、実に面白いと思うよー。

「私も楽しませてもらうよ」

そろそろ相手も来る頃だろうからね。

「ささっと登場！あら、貴方は何とか社の社長じゃない」

私の対戦相手は泥棒のセーナだね。

「私は神離 魅異。勇者社の社長だよ」

「偽者決定！本物はもっと癖のある喋り方のはず！」

あれは気分で作ってるだけなんだけどね。

「まあ、偽者であろうが本物であろうが私に勝てるわけがないわ」

「私は面白ければそれでいいんだけどね」

確か羽双に負けてたはずだから、羽双より弱めの実力で頑張ろう。

「よかったね。羽双が悟ンジャーを断ってなければ、貴方と戦ってたかもしれないよ」

「私はそんな過去の事は全然気にしないの！危険技、急所狙いの毒針！」

大量の毒針を凄い速度で投げってくる。急所狙いというより乱れ撃ちだね。

時間を操る能力と普通の攻撃だけで問題ないかな。

「時送り、過ぎ去りし時間」

この技により、投げられた毒針だけの時間を先送りして、通り過ぎた状態にすることができよ。

「じ、時間を操る特殊能力！」

あ、やっぱり過去を気にしてるみたいだね。

「く！危機、全てを飲み込む大穴！」

私の下に大穴が現れる。

「私は浮けるよ」

「危険、地下からの溶岩噴火！」

「時止まり、急性時止まり病」

噴火させようとしてくるので、私の下の地面の時を止めて防ぐ。

「はい、時間切れ。時切り、時間の都合による中断」

「え？」

時間の都合によりセーナを特星に送り返したよ。

まあ、本当は時間の都合なんてどうでも良いんだけどね。

「せっかくだから明日の朝まで時間を進めようかな」

@悟視点@

「お、朝か」

朝から重苦しいと思ったら、印納さんが寝ぼけて布団の上から俺に乗っかっている。

「印納さん、朝ですよ。というか、重たいからさっさと退いてください」

いや、普通の人よりは軽いけどさ。

「お腹減ったー。食べ物くれないと退かないぞー」

「持ってません」

「じゃ、退かない」

殴りたいけど、今殴ったら食材にされそうだ。

「…人って食べれるよね？」

「食うなよっ！」

本気で食われそうだ。

「なら、悟は？」

「俺は人ですよっ！」

頭が痛い。朝からツツコミはしんどい。

この際だから、印納さんを放っておいて先に行こう。

「俺は用事があるから先に行きますよ」

「待った！この非力な戦力外の女の子を放っておいたら駄目よ！」

戦力的に俺より上のはずだろ。

「いや、本当に急いでるんですけど」

「先に私を食べ物のある場所に運びなさい」

運べって、自分で探せばいいと思うんだけど。

「運ぶってどうやって？」

「そうねえ。じゃあ、背中に乗ってあげる」

うーん、印納さんくらいの重さなら問題はないが。

「それって普通に恥かしくないですか？」

「あー、普段から恥かしいような性格だから大丈夫」

一応だけど自覚しているんだな。

「はあ、分かりました。敵の居場所に食べ物があるかもしれないので、そこまででよければ運びます」

「やったあー。あ、途中でやめたら槍を投げるからね！」

「本気でやめてください」

く必殺競技場く

おー、大きな競技場だな。

「遅い！この俺を待たせるとは何様のつもりだ！」

お、東武だ。

他にもエエナ、魍魎、魅異の三人が居るぞ！

「俺以外の四人ってお前たちだったのか」

魅異が居るのが一番不思議なんだが。

「此処に居るメンバーには共通点があって、私もその共通点に当てはまってるからね」

あ、魅異の喋り方が普通になってる。

「悟さん聞いてください！昨日の私の対戦相手が黒悟さんだったんですよ！」

「私の相手は春夏さんでしたよおっ！」

黒悟ってボケ役のことか？

春夏は確か別世界で戦ったやつだったよな。

「というわけで、貴様にこの場に居る共通点を教えてやろう！」

全員が非質系能力者ってのは違うよな。俺が質系の能力者だし。

「此処に居るメンバー全員が本部の悟ンジャーのメンバーなんだよ」

はい？魅異の言うことがよく分からないんだが。

「やはり貴様程度では理解できないようだから教えてやろう！俺が悟ンジャーパーフェクトリーダーだ！」

「私は悟ンジャー小少女色ですよっ！」

「私が悟ンジャーグレーです！」

「そして私は悟ンジャーシンリだよ」

ええっと、俺がブラックで東武がパーフェクトリーダー、エエナが小少女色で魑魅がグレーで魅異がシンリか。

いろいろ言いたいがあえて一つ言わせてくれ。

「お前達は何がしたい」

「要するに事件の解決部隊の結成だね。ちゃんと悟ンジャーの製作者にも許可を取ったよ」

「魅異の頼みじゃ断れないぜ！」

く、ボケ役も関係していたのか！

「貴様には報告されていないだろうが、今回は悟ンジャー結成以来の初仕事だ。東武ンジャーならばどんどん仕事が来ていただろうがな」

意外にも東武が結構やる気満々だな。

「本来なら五人で来ることはないんですが、今回のように五人必要な場合もありますよ」

「今回の場合は途中のボスが五人でしたからねえ」

それなら結成前に一声かけてくれよ。

「大体の事情は分かったが、パーフェクトリーダーと小少女色とシンリってのはなんだ？」

「あ、私の小少女色は雑魚ベーさんが考えた色で、私と雑魚ベーさんのどっちもが使える色ですよっ！ちなみに雑魚ベーさんは悟さんの宿敵なので、対になる白の色だと考えて問題ありません。元は雑魚ベーさんの純粋で健全な心を表す色として考え出されたんです」

ということは、雑魚ベーとエエナは同じ色なのか。

とにかく小少女色は白と考えろってことだな。

「俺のパーフェクトリーダー色はまさにこの俺に相応しい！全ての世界の頂点である俺を表すように、全ての色を意味するのだあ！」

えーっと、混ざってない全ての色ってことか？

「シンリは透明色だよ」

魅異の説明が一番分かりやすかったが、普通に透明色でよくないか？

「私達五人が基本となる悟ンジャーで、本部の悟ンジャーって言われてるんだよ。私達以外にも地方の悟ンジャーがいて、運がよければ助けてくれるんだよ」

「地方？」

「例えば秋方から船とかで別の大陸に行けば、悟ンジャーレインボ
ーが居たりするね」

俺たちよりもだいぶまともな色じゃないか？

「面白そうな遊びをしてるじゃないか。うーん、面白くないな」

と、急に第三者の声が！

「それ、アキステさん登場！こっちだこっち！」

競技場の真ん中から聞こえてきた。

「お前たちに一つ言わせてもらう！一対五は卑怯だ！」

詳しい自己紹介も無しでいきなり話を進めやがった。

「貴様！事件を起こした分際でこの俺に意見する気か！」

「あー、悪い。既に意見した後だから手遅れだ」

確かにそうだけど他に言う事はないのか？

「というわけで、そっちは一人を選び、その選ばれた奴と俺が勝負
するってルールはどうだ？ちなみに選ばれた人以外による場外から
の遠距離補助や攻撃は有りで」

「いいだろう！この俺がそのルールの使用を許可しよう！」

東武が勝手に決めちゃってるけどいいのかな？

「で、そっちは誰が来るんだ？」

「ならば、俺が一撃で灰にしてやろう！」

「待った、東武がいったら東武の勝ちは決まって面白くないよ」

魑魅、面白いかどうかで決めるのはどうかと思うぞ。

「ふむ、それもそうだな。雑魚を使って勝つほうが俺の戦力の高さが分かるというもの。そして戦力外に等しい者は一人だ」

なんか、俺に視線が集まってるんですけど！

「背中に誰かを担いでますしね」

魑魅の言葉で思い出したが、印納さんが俺の背中に乗ってるんだっ
た！

ってか、寝てるよ！

「印納さん、器用な寝かたをするんですねえ」

あれ、エエナは印納さんと知り合いなのか？

「お、主人公か。それなら特別に印納を担いだ状態で勝負して良いぞー」

「いや、そんな特別ルールは要らないから、俺の出場を拒否してく

れ」

勝負中に印納さんを起こしたら、食べられる気がする。

だが、ここで逃げたら主人公を辞めさせられそうなので勝負の場に向かう。

「喋り方が似ていて紛らわしいけどよろしくっ」

「事件の主犯なのにこの威厳のなさはなんなんだ」

「これが俺のカリスマだ！」

意味を理解しているのか？

「さて、特別ルール設定始動！」

アキステがそう叫ぶと、このステージを囲む結界的なものが出現した。

「この結界は人を通さず技を通す優れもので、この中にいる間は出血しないというお子様向けの状態になる！」

「怪我とかをしたらどうなるんだ？」

「出血はしないし、怪我の部分は黒い霧に覆われる！」

おー、切れたりするけど血は出ないのか。

「いや、俺って一般人だから血とかはちよつとさあ」

星を作れるやつのが一般的なのかを問いたい。

「当然ながら消滅とかは普通にするが、爆発や炎や雷の影響はギャグ風になるんだぞ！」

普通の考えのような普通じゃない考えのような。

「ま、どんな設定だろうが主人公は絶対に負けないけどな」

「絶対なんてあてにならない言葉の代表だぞ。ま、勝負すれば結果は分かる！異技、無敵回転！」

異技と言ったら魅異とかが使う凄い技じゃないか！

だが、アキステは回っているだけだな。

「名前で分かんと思うが、この技を使えばどんな攻撃も通用しない可能性がある！」

断定はしないんだな。

「なら、試してみるか。水圧圧縮砲！」

水圧圧縮砲で何発か攻撃してみるが、全て回避される。

「私達も場外から援護しましょう！善技、聖なる光の巨砲！」

「私は悟をコンテニューさせてあげるね」

魑魅の巨大光線がアキステに放たれるが、またしても回避される。そしてその光線は地面に当たって反射され、こっちに飛んでくる。

「つて、うおおっ！」

巨大光線を間一髪で回避。だが、結界に当たるとまた向きを変えて、結界内を飛び回っている。

よく見ると同じように、俺の水圧圧縮方も結界内を反射して飛びまわっていた。

「ふふふふ、この結界は内側からの攻撃を反射するんだ！だから外から遠距離攻撃で攻撃したら、その攻撃は消えるまで結界内を飛び続ける！」

「く、俺に当たる可能性があるから、仲間は強すぎる技で攻撃できないというわけか」

俺を氣遣う心を逆手にとるとは！

「ははははは！俺の攻撃を受けやすくするとはいい度胸だ！ゲニウス、来い！」

「はい、到着しましたー」

「アキステ！貴様がそれを望むならばリクエストに応じてやろう！」

と、東武？お前、まさかとは思うけど俺なんかお構いなしというわけじゃないよな？

「おい、俺がこの結界内に居るからな！」

「貴様など俺の知ったことではなあい！ゲニウス、エクサバーストの乱れ撃ちだ！」

「了解！」

俺の自己主張を完全に切り捨て、エクサバーストを結界内に乱れ撃ちしやがった！

「うおおおっ！味方にやられるー！」

「いやー、大変な事になったなー」

アキステは余裕で回りながら回避している。そして水圧圧縮砲を弾き飛ばした！

く、味方が最大の敵だなんて！

「動いていて当たらないのなら、動きを封じれば問題ありませんねえ。封印、動き封じのカム球」

エエナは動きを封じるカムをたくさん撃つが、その攻撃が当たらないんだという事に気づいていない。

「あ、しまった！」

俺の動きが封じられたところに、エクサバーストが！

「ぎゃあああっ！……あれ、無事だ」

一回凄まじいダメージを受けた気がしたが、体や服が完全に無傷である。

「エクサバーストを受けたから、私がコンテニューしてあげたんだよ。ちなみに印納さんには物理学無視法を使ってあるけどね」

その割にはすり抜け効果がないみたいだけど。

ってか、印納さんのことを忘れてたな。

「俺にも物理無視を使ってくれよ！」

「私がそんな要望に応じると思ってるの？」

いえいえ、全然思っておりませんとも。

「ふ、エクサバーストを回避できる程度で俺を攻略できたと思ったら大間違いだ！」

俺はついさっき直撃したぞ！

「エクサバーストの百倍凄い技を見せてやる！ゲニウス、エクサスタバーストだ！」

「任せてください！」

少しの溜めの後に、ゲニウスはエクサバーストよりも大きく強そうな攻撃を放つ。

「大きくて避けられないだろおっ！ぎゃほあんっ！」

再び、大ダメージの感覚に襲われた後に復活したが、百倍の威力ほどではないと思う。

「東武ー、この攻撃は本当に百倍の威力なのか？」

「俺は百倍のすごさとは言ったが、百倍の威力などと言った覚えはない！詳細を説明してやると、威力の十倍と攻撃範囲の十倍で百倍という訳だ！どうだ、エクサバーストを使える貴様でも、これには敵わないだろう！」

俺を狙って撃ったんじゃないだろうな？

「あ、あれを見てください！」

「おや、黒焦げの物体がありますねえ」

アキステの居た場所には黒焦げの物体があった。

「無理だろ！回転しても無理だろ！」

お、黒焦げになったアキステだ。

というか、よく黒焦げだけで助かったな。

ちなみにエクサバーストやエクサスターバーストは未だに飛び回ってる。ついでにゲニウスが次々撃ってるから増える。

「あー、面白くないな。うん、実に面白くない」

アキステが何かを言い出すが、楽しそうに言ってるので説得力がない。

「その主人公。特殊能力や特星がない世界に生まれた時のお前の夢はなんだ？ ぎゃああああっ！」

アキステが変なことを聞いてくるが、よそ見をしていた結果エクサスターバーストに当たった。

地球に居たときみたいな俺の夢？

「うーん、何かの射的選手になりたいかな。ぎゃうんんっ！」

今度は俺にエクサバーストとエクサスターバーストが同時に当たる。

「はあ、やっぱり面白くない。ぎゃぶふあっ！俺は将来の夢を聞いてるんだぞ！おわあああっ！…攻撃が激しくなってきたから話は後な」

自分から話しかけておいて何を言うか。

正直、シリアスな展開にはなってほしくないんだよね。この考えは他のやつらの影響だろうけど。

それにしても、エクサバーストが効かないなら、どうやって倒せというんだ？

「貴様達、この俺のエクサバーストを喰らっておきながら、暢気に会話をするとは許せん！」

「エクサバーストとエクサスターバーストを撃ったのは私ですよー」

確かに東武は上で指揮をしてるだけだよな。

「ああ、すまなかった。後で爽やかな果物でも奢ってやろう」

「いやあ、流石は東武様！」

ゲニウスって東武に物でつられてるだけじゃないか？

「先に言っておくが、幼嫁の部下入り祝いのついでだからな。さあ、まだまだ攻撃だ！」

「はいっ！」

よく見ると避けれる範囲の方が少なくなってるし！

「悟さーん！大丈夫ですかー！？」

「私は疲れたので少し休憩しますよおっ！」

おいおい、これってそのうち放置されるんじゃないだろうな。

「これはもう駄目だ。結界を解除する！」

アキステが結界を解除した瞬間、結界内の攻撃が外に散乱した。

「はい、結界を解除したからアキステの負けだねー」

「まあいいさ。負けた方が面白いし」

どんな感性だよ。

「さて、それじゃあ悟ンジャーの皆はもう帰って問題ないよ。この星は数時間後くらいに私が破壊しておくね」

ちなみにお前が送ってくれないと帰れないんだが。

「で、さっきの話の続きだが、将来の夢的なものを俺は尋ねたんだぞ」

「だから射的選手」

俺の視力と命中率はかなりのものだぞ。

「はあ、よく聞けよ。そんな現実が存在するようなものを将来の夢にしてどうなる？最近子供でも現実的な夢を持つ人が多いが、実に面白くない」

俺の夢は結構実現が難しいから、夢がある内容だと思うんだが。

「その思考の時点で甘い！第一、その世界に一人でもその職業の人が居たら夢でもなんでもない。その座を奪って自分がその職業になるのも不可能ではないからだ。だが、その時点で、その職業が夢というのはおかしいと思わないか？」

「さっさと結論を言え」

「要するにそんなものは目標で十分だ！金持ちになりたいとか、何

とかの職業になりたいとかは、実際になっっている人が居るんだから夢にするほどの事じゃない！」

熱く語っているところに言うのもなんだが、前置きが長すぎないか？

「じゃあ、アキステの夢はなんなんだ？」

「俺？俺は魔法的な何かを使いたい」

確かに現実的ではないな。

「あと、子供心を忘れないというのと、小学生の三年生か四年生になりたいってのもある。ちなみに五年生と六年生は中学生みたいな子供が多いから嫌だけだな」

「中学生が嫌いなのか？」

「そういうわけじゃないんだが、なんか純粋さや健全さや子供っぽさがあまりないんだよなあ」

純粋さや健全さや子供っぽさは、周りの人に求めてるんじゃないのか？

「ちなみに小学生になりたい理由は？」

「他の小学生と遊びたいから」

その相手が女子の場合は、雑魚ベーと気が合うんだろうなあ。

「と、とにかく小学生に夢がある子が少ないのは、言葉の意味の捉

え方という根本的な問題だ！夢という言葉が皆が軽く捉えるから、影響を受けて純粋な小学生が減ったんだ！」

「それで言いたいことはそれだけか？」

そうなら早く帰りたいんだが。

「要するにこのことを視聴者に伝える為に今回の事件を起こしたんだ」

：なんか、特星の事件の動機ってこんなのが多いよな。

「なら、お前の言いたいことは視聴者に伝わったはずだ。理解してもらえるかどうかは別だけどな」

「そうか。じゃあ、そろそろ帰るかな」

アキステはそう言って消え去った。

こうして迷惑な一つの事件は二日で解決した。

「あれ、そういえば俺ってどうやって帰ればいいんだ？もしかして、魅異達は先に帰ったのか!？」

いつの間にか印納さんも居ない！

その数時間後に大ダメージが俺を襲ったが、気がついたら俺の部屋に戻ってました。

「あー、平和だ」

アキステが現れてから数ヶ月が経ち、季節は夏に突入しようとしていた。

「やっぱり夏は明るいイメージがあるなあ」

怪談とかをやる人もいるが、冬にやるほうが雰囲気が出ると思う。

「悟さん」

お、魑魅がまた不法侵入してる。

「不法侵入するなよ」

「いや、それなら鍵くらいは閉めといてくださいよ」

俺の家はたまに出入り自由だからいいんだよ。

「それより気になる事があるんです」

お、前の事件から数ヶ月経ったし、次の事件でも発生したのか？

「なんだ？」

「事件の発生する時期が不自然だと思うんです」

んー、確かにだいたい数ヶ月に一度くらいで発生するよな。

「偶然でないのは当たり前だが、魅異あたりが気分で仕組んでるんじゃないのか？」

「魅異さんに聞いてみたんですが、確かにその通りだが自分の仕向けたことではないと言っているんです」

犯人がそう嘘を言う場合もあるが、魅異の場合はそれはないだろう。というか、何気に信頼されてるんだな！。

「でも、ヒント的なことも言ってくれましたよ。の状況の直接的な犯人は今は存在しないって」

「今は？」

過去で何かあった後遺症で事件が起ころるか？

「そういうことでしたが、気にせずに泳ぎにいきましようよ！ほら、新しく水着を買ったんですよ！」

「おー、似合いそうだと思うぞ」

魑魅が取り出した水着は黄色の生地に白の水玉模様で、スクール水着のような形状だ。

「いやあ、実は今の私のサイズよりも少し小さいんですけど、安かったから買っちゃったんですよ！」

なるほど、だから普通の水着より薄かったのか。

「だが、水泳には少し早いぞ」

「うーん、確かに少し早いかもしれませんがね。…そうだ、良いことを思いつきましたよ!」

く大技の風呂場く

「それえっ!」

「ザッバァーン!」

「ふう、悟さんも飛び込んだらどうですか?」

「明らかに危ないだろうが」

魑魅に連れて来られた場所はアミューリー神社のお風呂だった。普通よりは確かに広いが、三倍くらいなので泳ぐのは無理だろ。

「お前達も物好きだな。私なら海で泳ぐぞ」

「海はまだ早いと思うけどなあ。まあ、水着を着てみたかっただけだろうから許してやってくれ」

神社には雨双しか居なかったので、雨双に無理を言って許可をもらったんだ。

「なら、どうしてお前まで水着を着ているんだ？」

「いや、俺はついでだから気にするな」

実は泳ぐ気でいたなんて言えない。だって人の家のお風呂に行くと
は思わないだろ！

「悟さんもお風呂に浸かりましょうよー」

「あ、呼ばれてるから行ってくる！俺は魑魅に連れて来られただけ
であって、ついでにお風呂に入ろうとかそんなことは、別にそこま
で考えてるわけじゃないかならなー！」

「少し考えてるのか」

何か聞こえたが聞こえない真似をすれば問題ない！

此処の風呂は大きいから、一度くらいは入っておかないとな。場合
によっては寮から通うことにしよう。

「遅いですよー」

「悪い。それで水着の方は？」

「普通より少し締まりますが、それなりに快適ですよ」

安物なんだから少々の問題は仕方ないな。

「あ、そうだ。悟さん！」

「ん？」

魑魅が急に呼ぶので魑魅のほうを見てみると、何故だか両手を広げている。

「…………あれ、飛び込まないんですか？」

「どこに？」

「私の胸の中に！」

「飛び込めるほどじゃないだろ」

久しぶりに魑魅が暴走気味な気がする。

「うう、やっぱり悟さんは胸に左右される人なんですね」

「そこ、誤解を招く発言は控えろ。ちなみに小さい方が好みだ」

「本当ですか！？」

なんか急に元気になったな。

「よし、なら私でもがんばればいけるっ！」

とりあえず、何が基準なのかを教えてください。

「あ、好みは人それぞれなので気にする必要はありませんよ。ほら、私も胸の小さな女の子は可愛いと思いますから！」

俺と好みを合わせようとしているらしいが、面白い事を考えついてしまった。

「魍魎、それこそが恋だ。お前はどうかやら女子に恋をしたようだな」

「えええっ！そ、そうだったんですか？」

よし、話に食いついてきた！

「ああ。俺とお前は親友くらいの仲だが、その胸の小さな子とお前ならば恋人になるはずだ。ただでさえ、男性陣に変なのが多い特星に住んでるんだから、女性同士の付き合いとかは全然普通だと思うぞ」

というか、特星では本当にありえそうなことだしな。

「あ、有りだと思います！…でも、残念ながら私はそれに該当しません！」

まあ、冗談のつもりで言ったんだけどな。

「あの、悟さん」

「何だ？」

あー、適当に言ったことがばれたか？

「私達はもう親友になってたんですね！」

「へ？」

どうやら怒っているわけではないらしい。

「さっき悟さんが親友って言ったじゃないですか。いやー、普段の悟さんの様子からして、単なる友人程度にしか見られていないのかと思ってましたが、親友として認めてもらっていたことを知れて安心しました！」

「…うん」

それは俺に親友が多いから勘違いしたのだろう。

「それではこれからも親友として、よろしくお願いしますね！」

「ああ、よろしく」

「さて、それではそろそろ勝負しましょう」

なんか急だが勝負って？

「夏にやる勝負といったら、熱さの我慢勝負に決まっています！」

決まってるないし。

「大体判るがルールは？」

「一緒にお風呂に入り、熱湯を入れ続けます。それで先にお湯から出たら負けという勝負です」

「上等だ！この勝負は主人公として負けられないな！」

主人公とか関係ないけどな。

「では、いきますよー」

「いつでもこい！」

こうして始まった我慢勝負だったが、数十分後に俺も魑魅も雨双に救出され、氷で体中を冷やすのだった。火傷とかは特星だからしなかったけどな。

十七話 いつまでも変わらないで

@悟視点@

「うーん、やっぱり気分的に気になるな」

昨日の魑魅の言っていた一定の時期による事件の発生。これが意味するものはいったいなんだ？

「と、まじめに考えているんだが、なかなかシリアスな気分にならないなあ」

この世の常識は俺にギャグしか似合わないと言いたいのか！？

「ふんっ、俺だってやればできるのに」

うーん、やっぱり事件を解決して俺の評価を上げるのが無難だな。

うう、気が遠くて涙が出てきた！

「とりあえず、校長に相談しよう」

こういう時のための先生だよな。

く砂上の校長室く

「おや、悟君」

「あ、校長。ようやく見つけた」

現在俺は校長室にいるのだが、その校長室は公園の砂場にあった。

「さっき学校に行ったら校長室だけ売り地になってて驚いたぞ」

「ああ、とある理由で私が売り出してるんですよ。現在なら九億セ
ルですけど、悟君はいりませんか？」

九億で売れるわけがないと思うんだが。

「そうだ、今日は校長に聞いてもらいたいことがあるんだ！」

困った時の校長頼みだ！

「あ、その前に悟君の借金が千六百兆八千億なんです、返済でき
そうですか？」

やっぱりこの校長に頼った俺が駄目だった。

「ってか、前回は八兆くらいだったのに増えすぎじゃないか？」

「いや、どうせ返せないんだから気にしないでくださいよ。気分で
適当に言ってるだけですし」

なら、返すのはやめておこう。

「で、相談なんですけど、過去か未来に行く方法はあるか？」

「お、事件を終わらすために元を断つという考えですか」

あれ、校長も事件のことを知ってるのか。

「先に言っておきますが、私は校長です！とっても偉いんです！これでも特星の大抵のことは把握しているんですよ」

偉いけど貧乏なんだよなあ。

「それで方法ですが、単純に言えばあります」

「何処に？」

「私は教師ですから教えません。それに海草布団を早く作らないと寒いですからね」

教師だからこそ教えるべきだろ。

ってか、海草の布団で寝るつもりか！？

「しかし、方法は存在するので、探すのも手段の一つですね。小さいですが、足元に注意すれば気がつくはずですよ」

「あー、それなら探してみるか」

「夢中になり過ぎないように注意することですよー」

く過去を通り過ぎし秋方の都く

「足元と言っても何もないよなあ」

さっきからずっと目を凝らして足元を探しているが、全然見つからない。

「小さいらしいから気をつけないとな。……………ぶはっ！」

前を見ずに歩いていたら、何処かの建物にぶつかった。

「あれ、こんな建物いつの間に？」

どうやらマンションにぶつかったようだが、この辺りでは見かけない建物だ。

「って、あれ？」

この辺り自体が見かけない場所だな。

「まさか迷子か！？く、なんでこんなことに！」

「むにゅー、理由がわからないねえ」

ああ、希求の言うように原因がまったくわからない！

「迷子のプロの希求でもわからないのか。なら、これは大変な事件

じゃないか」

「うん、とにかく聞き込みをしようか？」

「ああ、そうしよう」

とりあえず、場所を確認しないと。

「でも、集合住宅では聞き込みがしにくいんだよなあ。あ、ところで希求」

「何、お兄ちゃん？」

「お前はいつの間に俺の横に居たんだ!？」

俺の気づかない間に横を歩くとは、何の目的だ！

「むにゅー、お兄ちゃんが迷い始める直前だよー」

どう考えても希求が原因だろ！

「とりあえず、場所とかはわからないのか？」

「場所はわかるよ。此处は未来の特星で、この町は秋方だよ」

あ、過去や未来に行く方法って希求の迷子だったのか！

「確かに希求は小さいけどな」

「むにゅー」

とりあえず、現代で俺が住んでる寮に行くか。

「なあ、現代での寮の場所は何処だ？…って、居ないし！」

く、希求が迷って何処かへ行ったから、現代人が俺だけになってしまった。

「ええい、こうなったら勘だけが頼りだ！」

町の人に頼るという手段はない！

というか、外に誰も歩いてない。

く一般の枠を超えた雷之の館く

「寮の場所はわからなかったが、俺に関する場所を見つけた！」

雷之の苗字を持つのは俺の家の関係者のはず！だって俺の家の血筋は全滅寸前だったからな。

「お邪魔しまーす」

ご自由にお入りくださいと書いてあったので、勝手に入る。

お、館なのに玄関とかもあるな。

「あれ、お客さんですか」

奥から出てきたのは半袖のコートを着た少年だった。俺より若いくらいで、中も半袖だな。

「何故に半袖コート？」

「ああ、コートを着るのは僕の家からの習慣なんですよ」

そういえば、俺もコートだった。

「俺の名前は雷之 悟。少し聞きたいことがあるんだが、今で大丈夫か？」

「はあ、またですか」

少年はため息をつき、呆れたようにこっちをみている。

「貴方が家の者を装ったとしても、この家のお金は渡しません！」

お、結構な金持ちということだな。

「僕は忙しいので帰ってもらえませんか？」

「ちょっとまった。お前の名前は？」

「はい？」

予想外のことを聞かれたような反応だな。

「俺が名乗ったんだから、お前も名乗るべきだろ。あ、ついでに日付も教えてくれ」

「あー、もしかして、普通にお店に用があるんですか？」

「店も開いてるのか？」

俺も現代で店屋でも開けば儲かるかな？

「あ、はい。最近地球から来た人にこの星について無料で教えてるんです」

「よし、今から俺は客だ。別に現在のこの星のことは知らないからな」

「そうですか。では、こちらへどうぞ」

それにしても広い場所だなー。部屋がたくさんあるぞ！

「あ、申し送れました。僕は雷之^{らいの}凍流^{こおる}という名で、一部では凍流川の主人公とか言われています」

「こーりゅー川？そんな川、この辺りに存在したか？」

「昔はなかったんですが、とある島にある神社の子が海の一部を凍らせて、この町と神社のある島を結ぶ、凍った橋を無理やり作ったんです」

その神社の子供と知り合いかもしれません。

というか、凍流は名前繋がりでそんな名前をつけただけじゃ？

「でも、そんなことしていいのか？」

「同じ神社に住む神様が許可を取ったという話ですし、問題はないと思いますよ」

それも知っている子です。

「で、主人公の部分の話を詳しく聞かせてもらいたいんだが」

「さあ？それは僕の家系に関することだと思いますけど」

ああ、それなら何の問題もないんだ。

「到着しました。って、あ」

おや、椅子の上で女の子が寝ているぞ。

「もう、何でこんな時に寝てるんですか！すみません、すぐに何処かへ移動させますので！」

「んー、朝ですか？」

あ、起きた。

「もう昼です！…それより、この人はお客さんですから、説明とかをしておいてください」

「え、私がですか？」

「僕は昼食の準備とか、掃除とかで忙しいんです。では、お願いしますよ」

「はい」

凍流は女の子に指令を出して部屋を出ていった。

というか、この女の子が少し可愛いんだが。

「えーっと、自己紹介しますね。私は此处でお手伝まぢいをしている町明あけ 咏えいです」

「俺は雷之 悟。何かいろいろ聞きたいんだが、まずは日付とかを教えてくださいませんか？」

「日付ですか？今は特星暦七百年の春です」

…意味のわからない単語が入ってたぞ。

「特星暦って？」

「特星の歴史を表すもので、二百年前に作られました。今日は七百年目を記念して、ほとんどの人が瞑宰京という特星の中心の町に行ってるんですよ。特星暦の誕生と同時に月日と週が無くなり、季節で呼ばれているんです」

要するに何年のどの季節かわからなくなったのか。

「あのー、貴方は何者なんですか？特星曆を知らないなんて、極度の引きこもりの人か七百年寝てる人くらいですよ」

「そっちの方が珍しいと思う。俺は過去人的な主人公だ」

「あー、主人公なら仕方ないですね」

さて、そろそろ本題に入るか。

「俺と同じ苗字と名前の人はいるか？」

「確か凍流さんの家計に居たと思いますが」

よし、これで全てを解決できる！

「その人は誰と結婚してるんだ？」

そう、子孫的な人が居るんだから、俺は結婚済みということ！相手を此処で調べても何の問題もない！

まあ、妹達の子孫の可能性もあるが。

「そこまでは私もわかりません。三世代前までならわかるんですが」

「えー」

く、俺の作戦は失敗だったか！

「ただ、現在も生存確認はされてます」

「おー、流石特星」

俺も自分の将来が楽しみだ。

「あ、そういえば、誰がどの特殊能力を使うかわかるか？」

「わかりますけど、今は特殊能力を使う人はほとんどいませんよ」

「ええ!？」

確かに現代でも減少傾向にあると聞いたが、まったく居なくなっただのか！

「皆最初は特殊能力を喜ぶんですが、日が経つにつれて使わないようになっていく場合が多いです。一部の人たちが、その状況を何とかしようとしてるみたいですけど」

おー、未来もそれなりに大変なんだな。

「それでどんな能力の人を調べたいんですか？」

「過去に対して影響を与える能力とかはあるか？」

「ああ、クーフウシャさんのことですね」

クーフウシャさんって誰だ？

「知り合いか？」

「あ、はい。さっき言った特殊能力復興者の一人です」

特殊能力復興者とは言っていないけどな。

「場所は？」

「瞑宰京に行ってるか、神社で遊んでるか、寺で休んでるかだと思いますよ」

行動パターン読まれるくらいだから、たいした奴じゃないだろうな。

「あ、ところで蜂蜜味の歯磨き粉はいりませんか？」

「歯磨き粉？」

「副業で歯磨き粉専門店をしてるんですよ。今は季節限定の激甘バニラ味と超黒砂糖味がお勧めですが、お一つどうですか？他にもこの館の本も凍流に秘密で販売中です」

どう考えても歯に悪影響を及ぼしそうだな。

ってか、本とか売ったら専門店にならないだろ。

「いや、もう少し使い道の多いものが良いんだが」

「そうですねー、同姓との縁を切ると言われるお菓子とかは？」

女子となら縁を切りたい奴が居るんだけどなあ。特に魅異とか。

「逆に同姓同士の縁を深めるものもありますよ」

「少なくとも俺が使うことはないしなあ。…いや、待てよ」

女子同士に食わせたら凄く良くないか？

「いくらだ？」

「えあ！？買うんですか！」

「お、お、俺が使うんじゃない！ただ、たまには俺が悪戯側の気分を味わいたいだけなんだ！」

そう、これはちょっとした主人公の悪戯なのだ。普段の苦勞に対する軽いお返しだ。まあ、大惨事になるということもないだろう。

…とか思うのは大惨事になるフラグだ。だが、それを自覚した時点ですのフラグは無いも同然！これで大惨事は回避できるっ！

「で、いくらだ？」

「えーと、千五百セルです」

「はいよ」

おまじない位の効果はあるかな？

さて、俺はあの後にあの館を出たが、少ししてから重大な事に気づ

いた。

「道を聞き忘れたあっ！」

そう、場所の名前はわかるが、そこに行くまでの道がわからないのだ。

というか、場所の名前と帰り道も忘れた。

「く、絶体絶命の大ピンチ！このままでは時間の無駄遣いじゃないか！」

よし、目を塞いで回転して、適当に止まった方向に行こう！

「それぞれえっ！主人公回り！」

まだだ、神経を集中させるんだ！

「：ここだあっ！」

適当な場所で止まり、そのまま前方へ全力ダッシュ。

「ぐへっ！」

だが、壁らしき場所に思いつきりぶつかった。

「あたたた、走る前に前方確認するべきだった」

とりあえず、何処に向かうかを決めないとな。

「確か瞑宰京か寺か神社だったな」

何処へ行くにしても海を渡る必要があるのがなあ。

「もし、仮に俺がクーフウシャと勝負することになったとしよう。その時の勝負場所が、人の大勢居る場所になる確率は皆無だ！」

だから瞑宰京に向かう必要はないということだ！

「となると、残るは寺か神社なわけだが、この二つの施設同士は近いから、どっちから行っても特に問題はないと思うぞ」

でも、その二つがある島にどうやって行こうかなあ。船に乗るにも場所がわからないし、送ってくれそうな人は居ないからなあ。

「あー、立ち止まってたら寒くなってきた！…あれ？」

今は晴れてるのに、妙に冷たさの混じった風のような気がする。

「潮風みたいだが、もうすぐ春なのにこの冷たさ。どう考えても解決策があるってパターンじゃないか。もしくは戦闘」

ま、行くしかないんだろうな。

く甘い氷の凍流川く

「おー、綺麗な氷の橋があるな。凍流も確かこの橋のことを言ってたなあ」

それにしても、何で凍流川って名前なんだろう？名前のせいで忘れかけてたが、此処は海だぞ。

「俺の中の特星七不思議に追加できそうだ」

まあ、気にせずに渡るか。

「あー、到着地が見えない」

急にやる気がなくなってきた。

「げ、濡れた」

橋は溶けてないが、海の水が高くて靴が濡れた。

「鮫とか出たら怖いなあ」

勝てるけどさ。

「暇だ」

退屈。

「……………」

言葉が出ません。

「…………よく考えたら、船でも時間掛かるのに歩いて着くのか？」

普通は無理だが、悟ンジャーブラック走りを使えば着けそうだ！

「よし、悟ンジャーブラック走りいっ！」

氷の上だから走りにくいが、速さはなかなかだ！

「つて、着くかつ！」

このノリツツコミのために、一時間も全力疾走してしまった。

「うう、倒れそうだ」

とうか、倒れた。

「あー、誰か看病してくれー」

あ、こんな時に眠くなってきた。

ってか、この氷が甘そうな気がしたんだが、全然甘くないし。

く、目が覚めた時には良い扱いを受けてやる！

「……………はあ」

いや、確かに欲張った自分が悪いさ。だから叩き起こされるくらいなら文句はない。

「でも、牢屋の中ってのは酷くないか？」

そう、今の俺は何処だか分からない牢屋の中に入れられている。まあ、綺麗な部屋の牢屋だからまだマシだ。

だが、気絶して起きたら牢屋の中なんてのは初めてだ。ってか、意外にも俺が牢屋に入った回数はこれが初めてだと思う。

「あ、目が覚めた？」

牢屋の外から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「お前は力を操る何とか！」

「春夏だよ！ むふふふ、私のことを知ってるって事は私を倒した後みたいだね！」

あれ、まるで倒されたかどうかを知らないような言い方だな。

「わかった！ お前は高確率で未来の春夏だな！」

「私は現代の私に決まってるよ！ 貴方が過去の…えっと、悟ンジャーブラックなの！」

「人の本名を忘れるなんて最低だな」

「でも力を操れるから最有力だよっ！」

実はというと俺も春夏の本名は忘れてたんだが、そのことに気づいてないようだ。

とりあえず、今の状況について聞いてみるか。

「で、俺はどうして牢屋に居るんだ？」

「ふふふ、貴方にやられた仕返しに、私がお仕置きをするために連れてきたんだよっ！」

「せめて復習とか拷問とかじゃないと怖くないんだが」

「そんな物騒なことはしないから安心して大丈夫！」

仕返しは物騒のうちには入らないらしい。

「で、どんな仕返しをするんだ？」

「私が牢屋の外から集中攻撃！」

「嫌だなー」

そんな一方的な苛めを受けてられるか！

「春夏、隣同士の牢屋の棒を持ってみてくれ」

「え？ うん」

「その後に握力と腕力を強くして、それを持ったまま大きく両手を横に広げてみる」

「それっ！」

俺の言うとおりに行動する春夏。

牢屋の棒の部分が曲がり、出られるようになった。

「そして目を閉じて百万秒くらい数えたら目を開けるんだ」

「えー、多いよお」

「大丈夫！ 力を操れる春夏なら最強だからできるはずだ！」

「…うん、それもそうだね！」

「あ、疲れるから寝転んでやったほうがいいぞ」

そうやってやると座布団にうつ伏せになり、数字を一から数え始めた。

数十秒くらいで声が小さくなり、百くらいで声が聞こえなくなった。恐らく寝てしまったのだろう。

「さて、何処に行こうかな」

どうやら俺の居る場所は地下のようだ。どうして牢屋は地下にあることが多いんだろう？

とにかく脱出だ！

（記紀弥寺）

「いやあ、さっきの場所がアミューリー神社の地下だったとは」

人に見つからないように地上に出たら、神社の裏の家につながっていた。ちなみに地下は集合住宅じゃないかと思えるくらい広く、更に人に見つからないようにしていたので脱出に時間が掛かった。

ちなみに春夏以外の人はなぜか居なかった。もちろん、目的であるクーフウシャとかいう人も居なかった。

「ということは、寺に居るに違いない！」

「そこ止まれいっ！」

「うおっ！」

急に誰かが現れたので驚いて一歩後ろに飛び退く。

「お前はキール！」

この寺で一番の駄目幽霊、キールだった。

「ふふふ、記紀弥様との勝負で貴方は疲れてるはず！私の勝利は目の前よ！」

「あ、記紀弥とは戦ってないんだが」

「そして主人公クラスの敵を倒した私は褒美に有休がもらえる！更にはこの寺の主に任命され、神酒に自慢できる！」

駄目だ、まったく聞いてない。

「ってか、何で幽霊状態で現れないんだ？」

「ほら、幽霊状態だとアンタに物理攻撃が当たらないからよ」

幽霊の攻撃に物理攻撃があるのは微妙だな。

「今日の調子は好調よ！だから今日は休みだけど相手してあげるわ！」

「キールが休日の仕事？お前、偽者か？」

「本物よ！霊創、自縛爆霊サーパスト！」

悪霊のような霊が飛んでくるので回避する。

「あ、自縛爆霊は追尾するわよ。それ、霊追加」

キールがもう数匹霊をだす。

数匹の霊の追尾攻撃はやばいつ！

「げ、足が動かない！？」

「自縛爆霊に触れたら動きが封じられ、その数秒後に霊は自縛するわ！」

「ドカカカアッ！」

「うおっと！」

霊の爆発後は体が動いたので何とか着地。

「悪霊、ホラー的怪奇現象！」

空中に斧やら剣やらの刃物が現れ、全てこっちに飛んでくる！

「なんの！主人公特権、一種九十九個の道具入手！」

それを俺は凄まじい動きで回避して、全てありがたくいただく。

「主人公の特権を利用するなんて卑怯よ！」

「待った。それ以上の文句を言えば、世界中のゲームの主人公とメーカーを敵にまわすことになるぞ」

「う、それは回避したいわ。私もそれなりにゲームするから」

お、現代のキールが相手であれば勝負したいな。

「隙あり！霊装備、霊魔力砲」

キールの両腕に霊が集まっていけど？

「この技は辺りの霊から力を吸収し、私の使える技に変換する必殺技。そして力を集める時間は三秒以内よ！」

それは良いんだが、隙ありとか叫ぶんならすぐに出せる技にするべきだろ。叫んだ意味がなくなるじゃないか。

「ってか、いい加減に反撃しないと。水圧圧縮砲！」

「よし、発射よ！」

俺の水圧圧縮砲とキールの霊魔力砲が同時くらいに撃たれる。

そして予想はしてたが水圧圧縮砲はかき消される。

「やっぱりか！いたっ！」

うん、あっちは力を集めてるから強いんだよ。

「そろそろ降参したら？絶好調の私に勝てるわけないわ！」

今日は何故だか調子悪いなあ。記紀弥と勝負してたら危なかったかもしれない。

「ふふふふ、苦戦しているようですねえ」

おや、この変態的な喋り方はもしかして！

「私ですよっ！」

「雑魚ベー！」

「貴方は神社の変態男！最近寺によく来てたみたいだけど、また何か用なの？」

「あ、そうなんですか？私は過去から来たので、現代の私のことはよくわかりませんねえ」

ってことは、俺の知ってる雑魚ベーか。

「あれ、何でお前が未来に？」

「希求さんとお話をしてたら迷い込んだんですよっ！」

恐らく、俺がこの未来に迷った後の事だろう。

「相手が一人増えたところでわたしの絶好調には敵わないわ！」

「残念ですが、私を倒せる存在は小学生の少女のみですよっ！」

あと主人公な。

「私も少女といえば少女よ。心はね」

「残念ですがそうでもありません。純粹さと健全さを失う危険信号は人間年齢の十歳から。その倍の年齢の貴方に、少女の資格などあ

りませんよおっ！貴方のような人が少女という言葉の、平均年齢を上げる原因になるんですからね！あと、最近は十代の年齢なら少女と思い込む人が居ますが、私的には実にくだらな意見だと思いませんねえ。小学生ですら少女らしくない子が存在するというのに、それ以上の人が少女？ふん、片腹痛いですよおっ！」

「お、スケベープログラムが発動したか」

説明しよう。スケベープログラムとは、雑魚ベーみたいなやつ専用の状態異常のようなものである。雑魚ベーの場合、少女などについて自分の意見を力説する。この状態異常の間は、何故だか発動者の能力が上がるが、場合によっては手がつけられなくなるので注意が必要だ。

ちなみに名づけたのはこの俺である。名前の割にスケベな内容はあんまりないけどな。

「隙が多いわよ！偽霊宝、世界一の霊手裏剣！」

キールの周りに霊が現れ、光る手裏剣を投げてくる。

「霊手裏剣は気分を悪化させるという金属で作られた、まさに世界に一つだけの伝説の手裏剣よ！これだけ投げれば、あなた達のやる気はほとんどなしになるわ！」

「でも、どう考えても銀の折り紙だぞ、この手裏剣」

第一、世界に一つの手裏剣を大量に持つてる時点でありえないしな。

確かにやる気は減ったけどな。

「こうなったら、超強力な私専用の技で決めてやるわ」

「なら、私も凄まじい技でいきましょうかねえ」

「なら、俺は見てるか」

どっちが勝つか見届けてやろう。

「秦刀と逝刀を装備しますねえ」

雑魚ベーは何処からか二本の刀を取り出す。あの二つの刀は曲刀で、雑魚ベーがカムを考え出すきっかけになった刀かもしれない。ちなみに結構良い質なので、高値で売れそうだ。

「さあ、覚悟！究極霊魔術、キール！」

「いきますよおっ！隠し必殺技、オーバーカム！」

二人が技名を言い終わると同時に大爆発が起こる。

「おー、凄いなあ」

二人の技の威力に適当に感心する。

そういえば、洗濯物を干し忘れてた。

「あれ、二人とも居ない？」

「こっちよこっち」

お、キールが何故か幽霊状態で登場。

「何で幽霊状態なんだ？」

「あの技使うと反動があってね、幽霊状態にならないと次の日に筋肉痛になるの」

確かにそれは仕方ないな。

「復活ですよっ！」

「あ、雑魚ベーが復活した」

「いやー、興奮しすぎて自ら蒸発しちゃいましたねえ。おかげで相手の技は避けましたけど」

「私だって避けたわよ。じゃ、私は疲れたから休んでくるわね」

キールはふらふら揺れながら何処かへ飛んでいく。

「キールさんはまだサボり足りないんですかねえ？」

「いや、今日はサボってなかっただろ」

俺をかなり苦戦させてたけどな。

「悟さん、キールさんの能力を覚えてますよねえ？」

「ん？サボっても気づかれない能力だっけ？」

「そうですね！そして、悟さんは能力の影響を激しく受けてますねえ！」

何が言いたいんだ？

「キールさんの技がどんな技か覚えてませんか？」

「んー、確か自縛爆霊が追いかけてきたり、悪霊が刃物を空中から飛ばしてきたり、幽霊に何か集めてもらって発射したり、霊が伝説の手裏剣を投げたりだな。…あ！」

よく考えてみる、これらの技にはあることが共通してるぞ！

「そう、最後の究極霊魔術以外の技は、他の幽霊に任せてたんですよっ！」

「攻撃をサボってたのか！」

く、全然気づかなかった！

「恐らく私は途中から来たので、能力の影響を受けなかったんですよねえ」

くそー、上手いこと騙されてた！

「まあ、落ち込まずに行きましょう！ところで、どうして悟さんはこんなところに居るんですか？」

「そういえば、説明してなかったな」

俺は雑魚べーに未来に來た理由を話しながら、最上階へと足を運ぶのだった。

十八話 未来の事情と現代の未来

@悟視点@

「恐らくここだな」

「そうでしょうねえ」

寺内を探し回った俺達は、一っだけ立ち入り禁止と書かれた部屋を見つけた。どうやら集会などで使われる大広間のようだ。そして障子越しに人影が見える。

「何で寺に大広間があるんだ？」

「ほら、お客とかをもてなすための部屋とかあるでしょう？ それじゃないでしょうかねえ？」

前から思ってたんだが、この寺はあまり寺らしくはないと思う。普通にお風呂とか台所があるし、逆に寺らしいところといえば外見くらいだ。

「その二人、私に用があるなら早く入ってきなよ」

「あ、気づかれましたねえ」

く、小声で話してたんだが気づかれたか。

気づかれちゃったので障子を開けて中に入ると、一人の少女が居た。

「ようこそ。貴方達は過去の悟さんに過去の雑魚ベーさんだね？」

「そうだが、どうして俺達が居る事に気づいた？聞こえるような声は出してなかったんだが」

もし、能力で聞かれたのなら、こいつはクーフウシャじゃないから逃げるか。

「逆に貴方達はどうしてこの部屋に私が居ると予想したのか？それを考えれば、答えなんかすぐに見つかるよ」

「それは障子に貴方の人影が映ってたからですよおっ！」

「あー、俺達の影も障子に映ってたのか」

それはさすがに気づかなかった！

「こんなところまで来たんだ、私に何か用でも？先に言っておくけど、私がクーフウシャだよ」

自分から名乗るとは、逃げさせる気がまったくないな。

「一定の時間ごとに発生する事件！これは全てお前の仕業だろ！」

「ふふふ、別に答えてあげてもいいけどさ、確証もないのに決め付けるのは酷くない？」

確かに酷いと思うだろうが、それはクーフウシャが犯人じゃない場合だ。

「普通に考えたら酷いよね」

「確かに凄く正論ですねえ」

「雑魚べー、敵の言葉に乗せられるんじゃない！」

本題から会話が逸れてるし。

「で、事件を起こしてるのはお前なのか？」

「うん、そうだよ」

ほら、犯人じゃないか！

「それで、俺に迷惑が掛かるからやめて欲しいんだが」

「嫌だよ。それは特星に重大な問題が起こる可能性があるからね」

おお、久々に良い展開になってきてるじゃないか！

「どうしてもって言うのなら、この私を倒すことだね！」

「待ってましたあ！主人公としてこの凄く良いシーンでは負けられないな！雑魚べー、相手は小学生か？」

「初めて見る方ですが、小学生ではありませんねえ」

なら、中学生ってところか。

「会話が長すぎだよっ！過去、フォーブトラウマ！」

「わ、なんですかぁ!?!」

相手の出した白い光が雑魚ベーを包み込む。

「…はっ! 悟さん、よくも私の幸せを奪いましたねえ!」

「は? 何言ってるんだ?」

「問答無用ですよおっ! とりゃあっ!」

雑魚ベーが凄い勢いで体当たりをしてくるので、それを何とか回避する。

「クーフウシャ! 一体、このアホに何をした!?!」

「ふふん、ちょっとしたトラウマを作り出しただけさ。彼の中ではトラウマが実際にあったことになってる」

「全然わからん!」

「つまり彼に与えたトラウマを、彼は実際に体験したのさ。もちろん、現実ではそのトラウマは起こってないけどね」

えー、要するに偽の記憶を植えつけたってどこか?

「雑魚ベー、俺は何をやったか説明してみろ」

「ふん! 忘れたとは言わせませんよ! 主人公の立場を利用して、世界中の小学生少女全員と、昨日結婚してたじゃないですか!」

「うわっ、予想以上に無茶な設定のトラウマだ」

ゲームとかの混乱状態も、所詮はこんなものなのかもしれないな。

「さあ、覚悟してくださいよおっ！必殺、ジャンピングキックですよおっ！」

「うおおっ！」

雑魚ベーの代表技、回転飛びつま先蹴りを走って避ける。

「さあ、これで最後だよ！古の大魔法、エルレイサー！」

クーフウシャがどこからか、カビが生えてそうな本を取り出す。すると、その本から俺達の方に巨大光線みたいなのが飛んでくる！

「きゃおおおうっ！悟さん、また私を盾にしますねえ！」

「くっ、あんまり防げてないんだからいいだろ！」

光線は眩しいが、雑魚ベーが多少の光を遮ってるので目は開けられる。だからといって何をするわけでもないのだが。

「さあ、早く諦めることだね」

「おいおい、技を俺に直撃させてないのによく言えるな」

「げほっ、悟さんも私を盾にしてるのによく言えますよねえ」

まあ、これは攻撃と防御の役割分担なんだから仕方ないってことで。

「だが、勢いで外に吹き飛ばされそうですねえ」

「いや、流石に吹き飛ばされはしないだろ。って、うおあっ！」

盾にしていた雑魚ベーが足を滑らしたらしく、俺達二人はバランスを崩して外に飛ばされた。

「おおおっ！流れ星を見つけましたよおっ！」

あたりはいつの間にか夜になっていた。寺の中を探すだけで夕方くらいまで掛かったからな。

「よし、まだ勝負は続いてるから、ここは作戦勝ちをしにいくか。いたあっ！」

「きやおうっ！」

寺の部屋の中のような場所に突っ込み、ようやく止まった。

この寺は入り組んでるから、クーフウシヤはあの部屋で待ってるだろう。

「雑魚ベー、正面からあの魔法に突っ込むのは危険だ」

「広範囲で威力も結構ありますからねえ」

別にエクサバーストで雑魚ベーごと消滅させるのも可能だが、相手が消滅して話が進まなくなるんだよねあ。雑魚ベーは復活するけど。

「で、今回は奇襲をかけようと思う」

「クーフウシャさんの後ろの壁を壊して、背後から仕掛けるとかですか？」

「いや、もう少し効果的な作戦だ。着いてきてくれ」

俺が雑魚ベーと来たのはクーフウシャの部屋の屋根の上だった。

「ここから奇襲を掛けるんですねえ？」

「いや、奇襲なんて主人公らしくないだろ！」

「…奇襲を掛けると言ったのは悟さんですけどねえ」

最初は奇襲を考えてたが、もっと良い作戦を考えたぜ！

「で、どんな作戦ですか？穴を開けて瓦礫を投げつけるとかですか？」

「うわー、酷い事考えるなあ。女子小学生以外にも優しさを持てよ」

「いえいえ、小学生の少女以外からは酷い扱いですからねえ」

女子小学生からも酷い扱いを受けてるけどな。

「俺の作戦はシンプルだが慎重性が要求される高度な作戦だ。その名も上から気絶させる作戦！」

「おお、確かにシンプルな作戦名ですねえ！」

俺って気分が名前に出ることがあるんだよねあ。

「内容までシンプルだ。屋根をクーフウシャの上に落として気絶させるだけ！」

「シンプルなのは納得できるんですが、私のほうが十分優しい作戦だと思いますよ」

「いや、人に物を投げるのはよくないぞ」

屋根を崩すなどいって人は滅多に居ないから、今は問題無しということにしておこう。

「どうやって崩すかは考えてないけどな！」

「え、それは作戦として駄目じゃないですか？」

「駄目じゃないです！たまには頭を使わないとボケるぞ！」

そういえば、俺も最近頭を使ってないなあ。まあ、ゲーム攻略という名の勉強をしてるし、ツツコミ役だから大丈夫だよな。

「はっ、頭を使うと同時に屋根を破壊する方法を考えました！」

げ、雑魚ベ―に先を越された！しかも、頭を使うと同時に屋根を破壊するだど？

「頭で屋根を壊せばいいんですよっ！」

「いや、駄目だろ」

ん、待てよ？

この寺には記紀弥の結界が張ってあるはず。その結界の効果が特殊能力での寺へのダメージをなくすものなら、魔法弾で壊すのは不可能！

というか、クーフウシャの魔法は柱とかにも当たってたはず！だが、柱は壊れてなかった！それはつまり特殊能力での寺の破壊が不可能ということ！エクサバーストは特殊能力ではないが、屋根の一部が消滅するだけで、クーフウシャの上に落とすのが無理になる。

「なるほど、頭で壊すのが一番効果的というわけだな」

「え、そうなんですか？」

「雑魚ベ―、寝転んだ状態で頭を壁に叩きつけるぞ！額の部分以外の部位に変えたりしながら、常に全力でいくんだ！」

「ええ、わかりましたよおっ！」

俺も雑魚ベ―も全力で頭で屋根の破壊を始める。

「とりゃあああああっ！」

「きゃおうっ！」

俺はやる気全開だが、雑魚ベーは謎の叫びを上げている。

凄く首が疲れてきたが、勢いだけは下げないようにする。

「あははははははあっ！」

雑魚ベーが叫んでいる気がするが、今の俺は辺りのものが全然気にならないぜ！」

「おや、上が騒がしいと思ったら貴方達だったんだね。…って、何やってるの？」

しかし、どのくらい瓦がひび割れ始めたんだか。確認したいが、確認したらまた頭を使う気になれなくなりそうだし、崩れるのを待つしかないな。

というか、痛さに慣れた！

「そーりゃあああっ！」

「う、痛々しいなあ。というか、私との勝負はどうなった？…おい、聞いてくれる？クーフウシャだよー」

「はははははははっ！」

「聞こえないのかな。しょうがない、記紀弥さんと呼んでくるよ」
やっぱり主人公らしい作戦は重要だよなー！

「主人公！主人公！主人公！主人公！主人公凄いぞー！」

「私は小学生の女子寮出身になりますよおっ！エエナさあーん！」

「……………なるほど、意味がわかりません。クーフウシャが来たら既に？」

「ああ、うん。こんな状態だったよ」

よし、主人公らしさが上がってる気がする！

「……………回転しながら頭を叩きつけるなんて、この二人はやはり只者ではありません！」

「あの、記紀弥さん？中断した勝負はどうするの？」

「…………勝負内容を変更します。クーフウシャもあたまの叩きつけに参加し、一番最初に目を覚ましたら価値にしましょう」

「え、参加？しかも、目を覚ましたらってことは気絶することは決定なの！？」

「…………ええ、そうです。この二人を元に戻せるのなら話は別ですが」

なんだか、凄く楽しくなってきた！これを新しい運動として追加しよう！

「ふふん、そんなの屋根から落とせばいいんだよ！古の大魔法、エルレイサー！」

ん、一瞬何かが光った気がしたが、その程度でペースを落とさせないぜ！

「あれ、何で吹き飛ばせないんだろ？」

「……………頑張ってください」

「いやいや、絶対に気が狂っちゃうよ！」

「…………大丈夫。彼らより後に頭を叩きつけるんだから、クーフウシヤのほうが有利なはずです」

頭叩きつけの大会ができれば、優勝してやるぞー！

「……………楽しもうと思えば自然と楽しくなりますし、頭叩きつけの大会というのがあるのですが、その大会で頭が狂ったという人はいませんでしたから」

「大会あるんだ！？そして、その大会に出ること自体が狂ってると思う。でも、そこまでのようなならやってみるよ。それえいっ！」

「…………私は頭叩きつけ大会の続きをテレビで見ないといけないので、先に部屋に戻りますね」

「あぁっ！何か意外にも楽しい！よし、私の実力を見せてあげるよー！」

「んー、よく寝た」

光が差し込む部屋の中は、明らかに俺の部屋とは違っていた。

「つて、どこだよ!？」

「……あ、起きましたか」

横を見るとそこには記紀弥が座っていた。

よく見ると、俺の寝ている布団以外にも二つの布団で誰かが寝ている。

「………では、悟さんの勝ちです」

「え、何が？」

「……最後に寝る前に何をやってたか覚えてますか？」

うーん、頭が痛いんだが。

「あ、そうだ！雑魚ベーのくだらない作戦をやったんだっ！」

「……くだらなくはありません。頭叩きつけ大会も実際に存在しますし、その良さは平凡な人には判らないだけです」

「え、存在するの？ つか、その大会を見てるのか？」

「……あの、見てるといえば見てるんですが、テレビで見る程度なんです。いつも見てるわけではありませんよ。一回見逃した事がありますから」

なるほど、凄くその番組が大好きなんだな。

「……それで、気絶して早く起きた人が勝ちということにして、クーフウシャを参加させたんです。ちなみに本物の大会では、時間内に好きなように頭を叩きつけて、その演技力と叩きつけた回数と激しさと試合後の表情や状態で得点が決まり、合計得点が多かった人が勝ちです。気絶したら失格となります」

大会の説明は正直どうでもいいんだけどなあ。

「……それで全員が一週間経ってもまだ続けてたので、今日の朝に瓦礫を投げつけて気絶させました」

人に物を投げるのはよくないぞー。

「……では、クーフウシャが過去を操ったわけを話しますね」

「あ、共犯？」

「……そうです。この世界の特殊能力の使用者が少ないのは知って

ますよね？」

うーん、そんな話をどこかで聞いた気がするなあ。

「あー、確か町明の咏に聞いたぞ」

「……………知ってます。咏も特殊能力の使用者増加系の一人です。そしてクーフウシャもその一人なんです」

「町明の咏は特殊能力復興者とかいってたぞ」

「……………名前は決めてませんからね」

とにかくクーフウシャもその一員だったって訳か。

「…………クーフウシャが過去に事件を起こしたのは、特殊能力の便利さを伝えるため。そして様々な人に事件解決の面白さを知ってもらうためです」

へー、良い話だと思うんだが、どうしても気になる部分があるぞ。

「あの、結局その事件には、特殊能力を普段から使う奴しか関わってないんだけど」

「…………へ？」

「解決は大抵が俺達だし、事件を起こすのは主に非質系の能力者だろ？一般人が関わる部分がまったくないんだが」

これだと事件解決の楽しさを一般人が知ることはないだろ。

「…………うん、この作戦にそんな欠点があったなんて！」

「途中で誰か気づかなかったのか？」

「……基本的にメンバーで私以外はドジっばいですから。私は用事
があつて気にする暇がありませんでした」

「用事って？」

「…もちろん頭叩きつけ大会の番組です。クーフウシャのせいで先
週のは見れなかったんですよ！」

記紀弥が一番ドジだなあ。

そして少し涙目気味の記紀弥がちよっと可愛い。雑魚ベーと同じ意
味ではなく、純粋な意味で可愛いと思う。

「ふー、よく眠れましたねえ。何故だか頭が痛いですが」

お、雑魚ベーが起きた。

「あ、悟さんに記紀弥さんじゃないですか。寝てるのはクーフウシ
ヤさんですか？それにしても、涙目の記紀弥さんは可愛いですねえ。
もちろん純粋で健全で安全な意味ですよおっ！」

え、純粋で健全で安全な意味で？

確かに雑魚ベーとは違う意味だが、俺のは健全じゃない危険な意味
ってことか！？

「…………涙目なのを褒められるのは少し複雑な気分です。あれ、悟さんはどうかなさったんですか？」

「あ、いや別に」

正直、心の傷が大きいけどな。

「…………とりあえず、勝負に負けたので、しばらくは過去には手出しをしません。あと、過去にお詫びの品を送らせていただいてもいいでしょうか？」

「ああ、無料でもらえるんだから大歓迎だ！」

出来れば食べ物とかがいいな。

「ところで私達はこうして屋根を頭で崩そうと考えたんですかねえ？」

「そういえばそうだな。普通に考えたら無理だと気づくはずだが、何か気分でそうなったんだな」

「…………悟さんにはボケ役の黒悟さんが居ますよね。ツツコミは悟さんでボケは黒悟さんが本来の担当なのですが、常に本体を操作するのが悟さんのため、本体にボケ役としての成分が溜まっていきます。普段の悟さんがボケたりして少しは成分を発散してるようですが、それでも溜まる割合が多いのです。そして成分が程よく溜まった為に混乱したのです」

えーと、つまり俺のボケる回数を増やすか、ボケ役に体を動かさせて

やるかである事態を回避できるってことか？

「よくあの程度で済んだよな」

お、ボケ役との会話空間に突入したぞ。

「俺は常に頭を叩きつけたい以上の衝動があるんだぞ。特に魅異とか」

「それを行動に移す時点で、どっちの悟も不甲斐ないけどね」

げ、魅異まで会話に入ってきた！

「おおおつ、魅異！俺との話し合いに来てくれたのか！？」

「気分だよ。今回の事件解決の賞品をあげようと思ってね」

ほお、賞品ねえ。どのくらいの価値のものなんだ？

「物じゃないけど、利用価値は高いだろうね。で、その賞品こそが店の呼び出し権利だよ」

店の呼び出し？

「そう。戦闘中でも移動中でもお店を呼び出し、お買い物ができるという便利な技だよ。家でも使えるけど、引きこもらないように注意することだね」

主人公の俺がそんな生活をするわけないだろう。

「呼び出す時には、適当にそれらしきことを言えばいいよ。意味なく呼んだ場合は行かないけどね。じゃ、私は帰るよ」

よし、店を呼ぶときは主人公らしい工夫してみよう！

「うーん、雨双さんとアミューリーさんが心配してるでしょうし、そろそろ帰りましょうか」

「そうだな。じゃ、もう事件を起こさないでくれよー」

「……大丈夫、私達が手を加えなくても、事件は起こるようですから」

えー、俺は呪われてるじゃないか？

とにかく事件の現況は断った。だが、未来の記紀弥の言うように、数ヵ月後にちよつとした事件が起こるのだった。

@雑魚ベー視点@

「うーん、最近の私って印象薄いんですかねえ？」

未来旅行から数ヵ月後、雨双さんとアミューリーさんは友達の家に行ってるようです。こういう時は独り言が楽しいですよおっ！

しかし、本当に印象が薄くなった気がしますねえ。

「仮にも私は悟さんの宿敵！そのはずなのに盾扱いされてますからねえ」

ちなみに私も二人の友達の家に行きたかったのですが、雨双さんに却下されてしまいました。私を他の少女にとられたくなかったんでしょうねえ。

「く、この状況をどうにかせねば！」

よし！仮にも私は魔王ですし、世界征服でも始めましょうかねえ！

「ふふふ、こんな時のために浮遊要塞を作っておいて正解でしたねえ。しかも、一つではなくいくつも！」

これさえあれば、主人公の座も私のものですよおっ！

「まず、秋方周辺の町を消し去り、少女の目に優しい草原と山と桜に変えてしましましょう！」

この際ですし、春景色を作る形の世界征服にしましょう！

「そして事件解決後には皆でお花見！ああ、そこまで想像しただけで、楽しそうで涙が出てきましたよおっ！」

「おーい、何泣いてるんだ？」

「うおっ、悟さん！」

くっ、私の世界征服を先読みするとは、流石は私の宿敵！

「あれ、いつもの二人は？」

「二人は友達の家にお出かけ中ですよおっ！私は邪魔をしないように留守番を引き受けたんです」

別に私が断られたわけじゃありません。

「ふーん。で、雑魚ベーは何をしてるんだ？」

「ふっふっふ、聞いて驚かないでくださいよ？なんと、世界征服の準備中なんですよおっ！」

まさかの私が世界征服、こんな事を信じられるわけがありません！

「あー、エイプリルフルだから騙そうとしてるんだろ？もう少しくらいは良い嘘にしろよー。というか何度も騙されてたまるか」

「え？あ、いや、真実ですよ」

信じられるわけがありません！と思ったら、本当に信じてもらえませんでした！

ってか、悟さんは何度か騙されたようですねえ。

「エイプリルフルだからってあんまり嘘つくと大変なことになるぞ」

「経験とかあるんですか？」

「ああ、地球に居た時に死にかけて、それ以来トラウマ気味なんだ」
エイプリルフルで死にかけるって、どういう生活してたんですか？

「俺がエイプリルフルの日に射的番組に出たときの話なんだが、番組の関係者に弾無しだと言われて、狩用の銃を貸してもらったんだ。でも、その銃には弾が本当は入ってたんだ。で、それで遊んでたら転んで、その衝撃で銃弾が発射され、俺の肩と番組の誰かの足を貫通したんだ」

「うわあ、管理してる関係者の人、駄目すぎるでしょ」

「生放送じゃなかったものの、その事故が原因で視聴率が落ちたとか。ニュースでもその事故の特集をやってたからなあ。当然だが、その関係者への非難が凄かったぞ」

そりゃそうでしょうねえ。

「それで肩はどうなったんですか？」

「…ふふふ、残念だが雑魚べー、今の話は嘘だぜ！」

「なっ、嘘ですか!？」

はっ、今日はエイプリルフル! さっきの話は私を騙すための嘘だったんですねえ!

「いやあ、我ながら良い出来の作り話だ! 雑魚べーの嘘よりも三倍は上をいく!」

「いえ、私の話は嘘じゃありませんし。というか、さっきの嘘の話の仕返しを含め、私の計画を知ったからには覚悟してくださいよおっ！」

「おー、勝負をするか。でも、お前が相手なら一撃でいけるぞ」

ふっふっふ、悟さんの攻撃程度で気絶する私ではありません！

「いきますよおっ！必殺、ジャンピングキックですよおっ！」

「エクサバースト！」

は？

「えええええっ！？」

驚きの喚声を上げながら、私は特星にもかかわらず消滅させられるのした。

いや、それって人に使って良い代物じゃないですよねえ？それを戸惑いもなく撃つなんて酷い、酷すぎますよおっ！

「ほら、一撃だ。お前にエクサバーストを使ったのは悪いが、お前なら大丈夫だと信頼した上での行動だ。お礼に同姓同士の縁を深める菓子やるからさ」

同姓同士の縁なんて私はどーでもいいですよ。

ん、待ってくださいよお。

「そのお菓子、ぜひ譲ってください!」

「お、復活した。ってか、欲しいのか?言っとくけど、値段の割に同姓同士の交流が多くなるだけだと言ってたぞ」

「ということは、既に誰かで実験済みなんですねえ。もしかしたら、自分で飲んだんですかねえ?

「それでも構いませんよおっ!」

「ほれ、味は齒磨き粉の苺味だから注意しろよ」

クッキーのようですが、齒磨き粉の苺味のクッキーってどんなのでしょうか?

で、肝心の使い方ですが、私はエエナさんになれるので、それで女の子との縁を深めようというわけですよおっ!

「さて、次は誰を騙すかなー」

悟さんは機嫌良さそうに帰っていききましたねえ。

「さて、私はこのお貸しをエエナさんになって食べますよおっ!」
ふふふ、必要以上に多く回っておりますよー。

「ずるっ」

「ふえ?ごはっ!」

回りすぎたせいで足を滑らせ、お菓子を全て玄関の手前に落としてしまいました。

「あ、危なかったあ。玄関に落ちてたら食べられませんでしたからねえ」

一つのクッキーがとても重要なのですよおっ！

まあ、袋に入ってるから落ちても問題ありませんがねえ。

「あれ？」

さっきまで玄関前にあったお菓子が、いつの間にか玄関に落ちてますねえ。

ってか、悟さんがドアを開けっ放しにしていたようで、玄関のドアが全開になってます。

「ん？ おお！」

な、なんと、クッキーが勝手に動いてます！

よく見ると、蟻さんが包み袋ごとクッキーを運んでいます。

「春らしい光景ですが、私のクッキーを持ってかせませんよおっ！」

しかし、蟻さん達は私が叫んだせいで、蟻とは思えない速さでクッキーを運んでいた。

「ちょっと待ってくださいよおっ！」

あ、よく考えたら蟻の穴にクッキーは入らない！蟻程度が私からクッキーを横取りなんて不可能ですよおっ！

「つて、穴が大きすぎでしょ！」

蟻達は蟻の穴とは言えぬくらい大きな穴に逃げていった。拳より少し小さいくらいの穴なので、手を入れて取り返すのは無理がありますねえ。

「く、私のクッキーをとるとは！」

高熱の熱湯でも流し込もうかと思いましたが、流星に可哀想なのでやめました。

「はあ、この怒りも世界征服にぶつけましょうかねえ」

こうして、士気が下がりつつも特星の世界征服に取り掛かるのでした。

十九話 ついに動き出す魔王達

@悟視点@

現在は春と夏の境目らしき六月。

いきなりだが、男性諸君は自分が少女になっていたらどうする？　そう、俺は何故だか少女になっちゃってたのだ。

「この程度のことはよくあることだからいいんだが」

現在は鏡を見て考え中。かなりの確立で小学生の高学年だろう。

…あと五年くらい後ってところか。

「く、顔は俺の好みなんだけどなあ。年下過ぎるせいで対象外だ」

今後の成長に期待するか。

「って、特星だから成長しないし！」

「しかも自分に恋って珍しいからな」

あれ、ボケ役が声変わった？

「俺も少女になったみたいなんだよ。魅異は男にもなれるから、俺には何の問題もないんだけどさ」

それはそれで凄まじい恋心だな。

「恋じゃなくて愛だぜ！」

それにしても可愛いなあ。成長後の見込みは十分にあるのに成長しないのが惜しい。

「悟さん！ 私達の知り合いが大変な状況になっています！」

「え、魍魅？」

少女化した魍魅が勝手に入ってくる。

「あ、悟さんですよね？」

「んー、ああ」

「洗面所で鏡を見ているとは珍しいですね」

おいおい、これでも事件がないときの朝は顔とか洗ってるんだぞ。

「ってか、魍魅もなかなかだな」

「え？ なにがですか？」

実際の成長後を知っていることもあるが、成長後の外見は結構俺の好みに近いだろう。

「おー、それは現在の魍魅に対して、多少は好意があるということか？」

え！…まあ、正直外見は好みだったりするんだけどさ。

「おお！それなら付き合え！」

いや、性格がそこまで好みじゃないんだ。嫌うような性格でもないけどな。

「そうかー？その辺の金や物が目当ての女に比べたら、かなりいい方だと思うぞ？そもそも身の回りの世話をしてくれそうで、逆にいい性格と言えるだろ。しかも、向こうも好意があるという保険付きだ」

そうなんだけど、最初から仲が良すぎても面白みに欠けるような。

「はあ、贅沢もその辺にしておけ。この世には出会いすらないやつや、人と付き合える生活が出来てないやつが居るんだ。それ以上欲張ると機会を逃すし、未だに魅異と付き合いえない俺が恨むぞ」

特星にもそんな人とか居たか？

「お前の周りのやつは男女問わずにそうだろ」

ああ、そういえばそうだった！

「やれやれ、恋愛をかき消す特殊能力でも持ってるのか？」

そんなのは聞いたことがない。

「悟さーん、さっきは何を褒めたんですか？」

「ん？ああ、外見をちょっとな」

外見といっても元の状態のことだけだな。

「あー！やっぱり悟さんもロリコンなんですね！」

「ええ！何でそうなる！？」

「だって悟さん、ずいぶん前にもそれらしきことを言ってたじゃないですか！…言ってましたよね？」

残念ながら俺の記憶にはない。

「記憶にない」

「あれー、聞いたような気がしたんですが。悟さんが覚えてないのなら気のせいですね！」

…俺って魑魅に信頼されてるんだなー。

「よし、今度寺にでも一緒に行くか？」

寺を選んだ理由は他に遊べそうなどころがなかったからだ。別にサービスシーンとかに期待しているわけではない。

「え、どうしてですか？」

「んー、普通の意味でのデートだ」

「え、ええっ！？…あ、普通の意味ですか。友好関係の向上は確か

に大事ですからね」

お、デートの受け入れは今後のイベントフラグじゃないか？

「はい！ここで状況説明をするよ」

「おお、魅異！デートしようぜ！」

「今回も断るよ」

ちなみに実際は俺には聞こえていないけどな。

「今回は悟が恋愛の意味でのデートで魍魎を誘ったんだけど、普通のデートとか言うから魍魎は友情的なデートだと思っちゃってるね」

「別にツツコミ役は恋愛に鈍感でもないのにな」

今のところは友情デートでも問題はないと思うけどなあ。

「でも、魍魎は恋愛なデートじゃないと思って少し残念そうだね」

「今回はツツコミ役の失態だな」

うっ、確かにそうだな。

「まあ、これが今回の勘違いでした」

「ちなみにさっきもツツコミ役が言ってたが、これは実際にツツコ

ミ役には聞こえてないぜ!」

「それに寺の廊下を一人で滑ったら怪しいだろ!」

「いや、二人でも怪しいと思いますけど」

靴下で滑るなら、画鋏とかに注意しないとな。

「それで何が大変なんだ?」

「あ、忘れました!」

確か俺の知り合いが大変とか言ってたが、少女化は俺の知り合いだけが被害者なのか?

「ここに来るまでに寄った場所は?」

「えっと、勇者社です!…あ、思い出しました! 悟さんの知り合いの方が全員女子になってたんです! しかも、元々が女子小学生の人が何人か居ないらしくて」

うーん、普通に考えたら犯人は雑魚ベーだろうが、そんなフラグ的なこととかあったか?

「とにかく勇者社へ向かうぞ」

「わかりました! 少女化した人たちも何人か居るはずですから、有力な情報があるといいですね」

（勇者社）

俺達は真っ先に社長室に向かったが、少女化した几骨さんしかいなかった。社長室に来るまでに何人かの見慣れない少女も居たが。

ちなみに魑魅には情報集めを頼んであるのでここには居ない。

「あれ、魅異は？」

「社長は用事があるので出かけました。事件解決に向かったわけではありませんが」

まあ、魅異はどっちかという問題を起こすほうだからな。

「事件の発生源は予想済みだと思いますが、雑魚ベーさんだと思われます」

「ああ、やっぱり」

俺に関係のある人だけが被害にあってるということは、解決しに来いということか？

「そういうわけなので解決に向かってください」

「ええ。…ところで几骨さん、さっきから読唇術を使ってないみたいです。調子でも悪いんですか？」

「あれ、特殊能力が使えないことを知りませんでしたか？」

え、特殊能力が使えないのか！？

「空気圧圧縮砲！」

銃で壁に向かって技を使うが、魔法弾が出てこない。

「うわ、本当に使えない！」

「少女化したのが原因だと思われます。なので、誰かを連れて行く場合は元々が小学生の方か、能力がなくても強い人をお勧めします」

まあ、元々が小学生のやつは行方不明だけだな。

「あと、攻め込むのでしたら、そのメンバーに私を加えてもらえませんか？」

「え、珍しい。どうしてですか？」

「いえ、気になることがあります」

几骨さんが加わってまで気にすることってなんだ？

「一応、候補には入れておきます」

「ありがとうございます」

とりあえず社長室を出て、情報収集を開始する。

「お、悟じゃないか！」

「え、誰だ？」

「納だ！ いやー、お前も少女化してたんだな」

社長室前で会ったのは少女化した納だった。

「少女化してるのに、俺だとよくわかったな」

「悟の場合は冬以外は大抵半袖コートを着てるからな。というか、子供サイズのも持ってたことが驚きだ！」

半袖コートは未来で流行りそうな気がするからな。

「別にいつもコートを着てるわけじゃないぞ。家に居る時は長袖や半袖の服を着てるからな」

「えー、それだと別人に見えるぞ」

そんなに俺はコートが似合うのか？

「納、今回の事件はどう思う？」

納はアシステ騒動の時に犯人を見事に凶鑑内から当てたし、その勘を頼ってみよう。

「うーん、居なくなった少女達は雑魚ベーさんの見方じゃないか？少女達が敵だったら、すぐにでも事件解決するだろ」

確かに雑魚ベ―は普通に戦えば小学生より弱いからな。

「ところで事件解決するなら、俺も混ぜてくれないか？特殊能力はなぜか使えないが、罨の見破りとかなら得意だぜ！」

確かに勘が鋭いから、特殊能力がなくても十分心強いな。

俺的には見方を全員連れてくのもありだと思っただよなあ。

「今はメンバーよりも雑魚ベ―の目的の方が問題だ。何を企んでるのか全然わからないからな」

「雑魚ベ―さんは魔王なんだろ？それなら世界征服とか特星統一とかじゃないか？平和は俺が作る的な意味で！」

「雑魚ベ―は行動と思考が単純だからありえる。なら、勇者社の人たちを全員連れていくのは問題あるな。念のために秋方町を守る役が何人か必要だし」

連れて行くのは二人くらいがいいな。

「とりあえず他の人の話も聞くか」

「そうか。攻め込む役には俺を選んでくれよ！」

「ああ、無理かもしれないけどな」

その後に魍魎と東武と校長と羽双とキールと何故か居た印納さんを、メンバーの候補に入れることになった。全員が少女化していたが。

「うーん、誰を入れるべきだろうか？」

「ゲームで例えるなら、羽双と東武とキールと印納と几骨が戦闘系で、魍魎と納と校長とキールと几骨がサポート系、特別イベント系が魍魎だな」

更にゲームで例えるなら、羽双と印納さんを選べば簡単すぎると思うんだ。俺的には戦闘と補助のできるキールと几骨さんだな。

「魍魎はいいのか？」

魍魎を選んだ時のイベントは大体予想が出来るし、物語の本筋に触れそうな几骨さんでいい。

「二人とも極端には強くないから、ゲームバランスも保たれるしな」

ゲームで考えていいのかと言う人も居るだろうが、特星ではそれが基本なのだ。

（アミューリー神社）

勇者社の瞬間移動の機能を使い、神社のある島の勇者社に移動。そ

の後歩いて神社まで来た。

「そういえば寺の記紀弥や神酒もないのか？」

「ええ、私が朝に帰ったら二人が居ないし、寺の幽霊が少女になって驚いたわ！問題を起こす可能性も考えて、ほとんどを気絶させたのよ！」

「キールさんにしてはいい判断ですね」

「ふふん、私の判断は凄いからね！」

キールも考えれば出来るんだな！。

キールは特殊能力とは別に幽霊化や自縛爆霊を使えるから戦闘では便利だ。几骨さんはワワという雑魚ベーのカムと同等の技を使える上、戦闘もサポートも上手なので心強い。

社長秘書って万能の能力を持ってるんじゃないか？

「お邪魔しまーす」

「お邪魔します」

「突撃ー！」

神社の近くの小屋に入るが、特に誰かが居るという様子はない。

「恐らく別の場所に移動したのでしょう。私は手がかりを探します」

几骨さんは先に部屋などを調べている。

「よし、つまみ食いするわよ！」

「あ、俺も」

問題を起こしてるんだから、つまみ食いされても文句はないだろ。

「冷蔵庫開けてー」

「実体化すればいいだろ」

冷蔵庫を開けるが、中は生ものとかがほとんどである。

「お、チーズ発見！」

「よし、食べるわよ！」

食うときは実体化するのか。

「あれ、でも幽霊状態でも何か食えるんじゃないかったか？」

「ああ、あれは幽霊専用の箸とかじゃないと無理なの。食べ物を幽霊でも食べれるように変換できるとか記紀弥様が言ってた気がするわ」

へー、幽霊文化では変わったものがあるなあ。

「雑魚ベーさんたちの場所が判りましたよ。って、何をしているんですか？」

「悟がつまみ食いしてるのよ」

「あ、逃げたなキール！」

つまみ食いを言い出したのはキールなのに！

「なるほど。相手の食料を少しでも減らす作戦ですか」

「そうなのよ！発案者は私だけだねー！」

いや、その通りなんだけどさ。だけど納得できないのは何故？

「で、場所が判りました。この島から遠く離れた場所の海底に基地があるようです」

「海底って、これまたファンタジックな」

水圧とかは大丈夫なのか？

「海底ってことは、敵は潜水艦にでも乗ってるの？」

「いえ、さっき言いましたが基地があるようです」

「墓地？」

「漢字的には惜しいですけど違います」

お、饅頭が戸棚にある。

「どのような方法で海底に行くかが問題になってきます」

「あっ」

問題点を指摘しつつ、素早く饅頭を食べる几骨さん。

「毒は無いようですね」

「あ、毒見でしたか」

「おお、饅頭！私もいただきー！」

実体化したキールもそれを食べた。

「う、ううっ！」

すると急にキールが苦しみだした！

「な、なんだ！？」

「これは毒の可能性もあります。悟さんは救急箱と胃薬を探してきてください」

え、毒って救急箱や胃薬で治るっけ？

「うぐぐうー！」

「と、とりあえず探してくる！」

救急箱はどこかで見かけたが、胃薬はどこにあるんだ？

「お、救急箱！」

中を確認するが胃薬らしきものは見当たらない。

「あ、居ましたよ」

おや、几骨さんがやってきた。その後ろにはキールも居た。

「ごめん。喉に詰まったただけだったわ」

「あ、そうなのか？ いやー、無事ならよかった」

胃薬が見つからなくて焦ってたんだ。

「さて、それではいきましょうか」

「そうそう！ いつまでも居るのはよくないからねー！」

まあ、確かにそうだけどさ。

「そういえば饅頭は？」

「几骨が全部食ぶうっ！」

キールが言いかけたが、几骨が殴ってキャンセルした。幽霊状態のキールを何故殴れたんだ？

「あの後に念の為に私が毒見をしたのですが、何の変哲もない饅頭でした。賞味期限が近かったので捨てましたが」

「もったいない。ところで何でキールを殴れたんだ？」

「さっきの攻撃ですか？あれはワワで手の部分を覆ってたからです」

忘れている人のために説明しておくが、ワワとは雑魚ベーの出すカムと同類の技である。カムを几骨さんが使う場合はワワという名前になるだけだが。原理などは一切不明。脇役だけが使えるのかもな。

「能力は使えないのですが、なぜだか悟さんも殴りたくなってきました」

「え、女の勘ってやつ！？そんな理不尽な理由で殴られてたまるか！」

思考を読まれたのかと驚いたが、今は能力が使えないんだったな。

「それで海底に行く方法ですが、秋方高校の広大波動砲で水を吹き飛ばすのがよいかと」

「何それ？」

「数千度の巨大な波動を撃つことが出来る波動砲です。願いが叶わないから、流れ星を消滅させるとか言って、校長さんが買ってましたよ。五千万セルで絶賛販売中です」

校長はそんなものを高校に取り付けてるのか。

「ちょっと待った！流れ星を消滅させる威力なら、特星まで消し飛ばさない！？」

「大丈夫です。特星ですから」

「そうそう。消し飛んでも次の日には元通りだろ」

とにかく行き先は決まった！

〽秋方高校〽

「……………来ましたね」

秋方高校に來ると、記紀弥が校門の前で待っていた。しかも幽霊状態で。

「あ、記紀弥様だー」

「待ってください。小学生の方は居ない筈では？」

確かに几骨さんのいうように小学生は行方不明のはず。

「…………今日の私は敵です。もし、私に勝てたなら事件の真相の一部を教えましょう。しかし、貴方達は能力がありません。私に勝つのは難しいと思いますけどどうします？」

「それなら勝負は諦めて先に進むか」

「…………え？あの、私に勝たないと犯人が判りませんよ」

いや、雑魚ベーだろ。

「犯人はあの変態でしょ」

「……ど、どうしてそのことを知ってるのですか？まさかスパイの幽霊でもいたのでしょうか？」

「普通に考えればすぐに判ることです」

え、俺はすぐに判らなかったぞ！

「…………えっと、勝ったら真相全てでどうですか？」

「話が進めば普通に判ることです」

いや、何の説明もないまま終わることもあるぞ。

「とにかく俺達に戦う気はないから」

「……ま、待ってください。なら、私に勝てば東武さんの故郷の世界を差し上げます！」

記紀弥にそれを譲る権利はないだろ。

「私は正直興味ありません」

「私も面倒なことは嫌だ」

「……そんな」

二人とも興味がないのか。

「俺は興味あるんだけど、本当にそんなことが可能なのか？」

「……ええ、可能です！小巻さんがその世界のお姫様だったので、そのまま譲ってもらえば問題ありません！」

「でも、親とかが居るんじゃないか？」

「……確か親達は行方不明だと聞きました。あと、自分勝手な大臣が居るらしいのですが、悪人らしいので魅異さんに頼んで更に別の世界へ送ってもらいましょう」

何気に全て人任せだなー。

「よし、二人とも力を合わせるぞ！って、あれ？」

几骨さんとキールが居ないぞ！

「あ、高校の三階で几骨さんとキールが手を振ってる。…先に行きやがった！」

「……私としたことが、話に夢中で気づきませんでした」

おー、同士が目の前に一人。

「……残ったのは悟さんだけです。一対一で正々堂々の勝負ですね」

「ああー、うん」

俺は能力が封じられてるけどな。

「……あと、ここには私の作った結界の範囲内です」

「結界？」

「……ゲームでいうフィールドの効果みたいなものです。今回の結界はギャグの力を使えば不利になるという効果です」

ふふふ、実は俺ってシリアスな男なんだぞ。

「喰らえ！ 霊にも通じる悟ンジャーブラック蹴りー！」

気分的に霊に通じそうなキックを試みるが、記紀弥をすり抜ける。

「ガッッ！」

そして校門に小指から思いっきり当たる。ちなみにサンダルです。

「うおおっ！ ちょっと痛い！ いや、やっぱり凄く痛い！」

「…それ！」

「うあっ！」

「ガンッ！」

ぶつけた足を心配している間に、もう片方の足を記紀弥が引っ張る。そのせいでバランスを崩して校門に顔から倒れこむ。

「……決まりました」

あれー、何で記紀弥は幽霊状態で俺に触れたんだ？

「幽霊は物に触れるのか!？」

「……いえ、私は物に触れません。さっきの引っ張りは秘密の霊力的な力です」

言ってる時点で秘密になってないと思うんだが。

というか、幽霊に触れない俺は攻撃手段が無いんだが。

「……悟さんにはシリアスは無理だと思うのですが」

「いやいや、俺のシリアス度は凄いぞー。本気を出せばシリアス効果で世界を支配できる!」

「……その発言がギャグだと思うのですが」

うう、ツツコミ役なのに!

本当にこの状況を打破する方法はないのか？

「うーん、少女状態だから悟ンジャーブラックにもなれないし」

「……時間切れです。脱走霊、悪の自縛爆霊体当たり」

俺が考えてる間に大量の霊が俺のほうへ向かって飛んでくる！

「あ、そうだ。主人公の特権、いつでも便利なお店！」

技名を叫ぶと同時にお店が出現した。

「ちょっと待っててくれ！少ししたら戻る！」

「…………あ、ちょっと！」

記紀弥に待ってるように言ってから店に入る。

「いらっしやいませー」

店に入るとフードで身を隠した男らしき店員が一人居た。

中は非常に狭く、カウンターと椅子くらいしかない。後は店員の後ろにある扉だけだな。

「小学生じゃないのか？…なるほどな」

ここで主人公の俺は新事実に気づいた！そう、この男は小学生少女になっていないのだ！

「今回の事件の黒幕はお前だな！」

「ええ！？何でそうなるんですか！」

「主人公の勘と予想」

「くだらない理由で決めないでください！…私は通称ナレーターのナレ君。このお店の店員をやっています」

くだらないは言い過ぎだ。ちよっと落ち込みかけたぞ。

「俺は雷之 悟。知ってると思うけど主人公だ」

「それでどんな物が希望ですか？」

「自分では選べないのか？」

「はい。万引き防止のためです」

それって俺が信用されてないのか？

「あー、とりあえずシリアスな俺に似合う武器はあるか？」

「そもそも貴方がシリアスなこと自体がギャグですからねー。ちよつと待っててください」

凄く酷いことを言われた気がするんだが！

「これなんてどうです？使えば自爆して涙ありのストーリーになる自爆装置ですけど」

「自爆とか無理だし、ギャグだろそれ！」

「悟さんのできるシリアスの展開はこの程度が限度だと思いますが」

ものすごく腹が立つのだが、自爆以上の感動ストーリーが思いつかないから言い返せない！

「でも自爆はなあ。…ん？」

自分のセンスに呆れていると奥の部屋に腕輪のようなものが見えた。

「それも武器か？」

「ん？ああ、これですか。これは変身とかができる人専用の武器で、なんか凄いかもしれませんが」

「よし、買う。金は百億年後くらいに俺が覚えてたら払うから」

忘れてたら払わないがな。

「ありがとうございますー」

はー、高い買い物だった。値段なんて知らないけど。

「……ようやく来ましたか」

「ああ。って、何これ？」

記紀弥の周りには何十重にも結界が張られていた。

「か、買い物中に結界を作るなんて卑怯だぞ！」

「……勝負中に買い物に行くのもどうかと思いますけど」

「それはあれだ。大人は卑怯だから仕方ないんだ！子供には話せないような深い事情があるんだ！」

例えば勝負に負けそうだったからとか。

「…………前に話したかどうかは覚えていませんが、私は小学生の年齢ですけど大学生です」

あ、そうだったのか。

「なら、俺より大人な記紀弥は卑怯で子供に話せない事情を持つてるのか」

「…………どうしてそうなるんですか？」

そんなこと聞かれても知らないよ！

「とにかく、悟ンジャーブラックの力を見せてやる！必殺、木の枝投げ！」

腕輪をつけた後にその辺の木の枝を記紀弥の結界に投げていく。

「…………あれ、ギャグ封じの結界が効いてない？」

木の枝は記紀弥の結界に当たっていく。

「ふっふっふ、よく判らないけど俺の力を思い知ったか！奥義、悟ンジャー召還！」

俺の隣に真っ黒な空間が現れ、そこから悟ンジャーの一人が召還さ

れる。

「あれ、急に何が起こったんですかねえ？」

そこに召還されたのは雑魚ベーだった。雑魚ベーは小学生姿ではないようだ。

「……………」

「……………」

流石の俺と記紀弥も言葉が出なかった。

「って、貴方は小学生で少女ですけど悟さんですか？記紀弥さんと対戦をしているようですが」

っと、動揺している場合じゃない！

「いやいや、そんな人は知らない！俺はあれだ。ファンタジックじゃない普通の世界の高校生だったんだけど、何故だかこんなところに迷っちゃってさ」

「……………はい？」

うん、我ながら良い言い訳だ。

「……………あの、その人は確かに高校生ではあるんですけど」

「ゲーム返却」

俺は記紀弥に、喋ったらゲームを返してもらうぞ、という意味を込めてボソッと呟く。

「……別世界にある普通の高校生です」

よし、上手く成功した！

「そうなんだよー。ここに来た途端に女子小学生になってて凄く驚いたぞ。犯人を見つけたら女子小学生と一生関われなくしてやろうと思ってるんだ」

「そ、そうでしたか。誰がこんな悪戯をしたんですかねえ？ いやあ、私には全然判りませんねえ！」

うわー、平然と嘘をついてる。雑魚ベーって酷いやつだなー。

「嘘をついた挙句にゲーム返却で敵を買収するお前のほうが酷いだろ」

ボケ役が現れた。

いや、悪いことを二回すれば良いことになるから大丈夫だ。数学の掛け算で習っただろ？

「悪いこと二回は足し算だ」

……あ、そういえばそうだな。

「じゃ、帰るぜー」

さて、そろそろ中に入らせてもらうか。

「いやー、何だかとても疲れてきたなー。俺は確かに別世界に住む普通の高校生なんだが、実は俺の町で流行の、疲れてるときに会ったことのある貴族に天罰が下る病にかかっているんだ」

「………悟さん、流石の雑魚ベーさんもその嘘には騙されないと思います」

うおっ、記紀弥が普通に名前を言っちゃってるよ！

「何を言ってるんだ記紀弥！お、私の名前はそんなに主人公っぽくないじゃないか！ほら、私はあれだ、むねむやま胸無山 ありや有谷だ。ほら、紙に漢字で書いたから」

この名前に特に深い意味はない。その場で何故だか思いついたものだ。

「おお、ネタにされそうな名前ですねえ」

けっこうシリアスの名前をつけたつもりだったんだが。

「……名前の由来は山無し谷ありの胸ですか？流石の私もマイナスではありませんが」

山無し谷有りの胸か。名づけるとするなら逆乳ってどこか。

「よし、この事件が終われば逆乳の人でも探すか」

「なるほど、山無し谷有りの子の名称ですか。なら、私も逆乳の小

学生探しでもしますかねえ。ってか、その名づけ方はやっぱり悟さんじゃないんですかねえ？」

「…はい、そのとおりです」

ぎゃあぁっ！最後の最後で記紀弥に裏切られた！

「記紀弥！もうゲームは貸さんぞー！」

「……………今後、ゲームを貸さなければ夜中に大量の幽霊達が貴方の部屋へ行くでしょう。そして、忘れられない光景を見ますよ」

うおっ、今度は脅しに掛かってきた！

「ふ、ふんっ！俺がそんなことで従うか！第一、何をするって言うんだ？」

「…………幽霊達によって貴方のゲームのデータが一つずつ消されていくでしょう。しかも、動けば自縛爆霊によって私の借りたいゲーム以外は爆発します」

「申し訳ございませんでした！」

半分以上のゲームはクリアしたものののだが、ゲームへの思い入れと資金不足のときの売却品がなくなることの不安に負け、俺は頭を下げるのだった。

「…ふふっ、冗談ですので安心してください。それでは早速借りに行ってきますね」

冗談と言っておきながらも、ゲームを借りに記紀弥は高校を去るのであった。

「えー、それじゃあ俺は今から高校の兵器でお前の基地を消滅させるから、それまでに基地に戻っておいてくれ」

「わかりましたよおっ！」

普通に基地に戻っていく雑魚べー。ツツコミ役が一人もいないと、状況がおかしいのに気にせず話が進むんだな。

そんな状況はボケ役は言った。

「いや、お前はツツコミ役だろ！」

あ、そうだった！

二十話 ラスボス風味の物語

@悟視点@

「く、ここが最上階か？」

俺はキールと几骨さんが待っている最上階に着いた。ちなみにここに来る途中、階段を走って登ってたら二回落ちた。しかも両方頭からだぞ！

「正面に部屋が一つか」

ラスボス前とかってこんなかんじだよな。

「この部屋の中には一体何があるのだろうか？」

花屋さんか花の種屋さんがいいなあ。

「どうしてその選択肢が出たんだ！ってか、どっちも花屋で買えるだろ！」

「おや、ボケ役じゃないか」

では、いきなりボケ役に問題です！棘のある美しい花といえど何？

「ふふふ、そんなの簡単だ。答えは薔薇だろ？」

「ふっ、やはり引っかけたな！」

「何？」

「答えはサボテンに決まってるだろ！それ以外は一切認めん！」

サボテン以外は認めないから答えは薔薇ではないっ！

「うお、酷い！第一、何で薔薇は駄目なんだ！？」

「そんなの俺が漢字で書けないからに決まってるじゃないかー」

書いても認めるつもりはないけどな！

「おいおい、サボテンは漢字で書けるのか？」

「え、サボテンって花なの！？」

「漢字以前の問題！？…いやいや、花だからサボテンが答えなんだろう！？」

「いやー、なんだかサボテンの棘の付け根に美学を感じたからさあ。
…はっ、まさかこれが恋！？」

「美学で答えを決めてどうする！それ以前に何故付け根に美学を感じる！？」

「なんか棘の先は尖っててあれだけど、棘の付け根はなんか美学的じゃないか？」

あと、納豆は粘々の部分から食べる派だ。

「棘の先のあれって分からないし、棘の付け根は美学的じゃないし、そもそも納豆は全体的に粘粘だーっ！」

おお、ボケ役ってツツコミスキルが高いな。

「ツツコミスキルってなんだよ！？それならツツコミ役だってツツコミの役なのにボケスキルが高いだろ！」

ははは、何を言ってるんだ？俺は常にツツコミスキル満載だぞー。

「さて、サボテンの棘の付け根でも買ってくるかー」

「付け根以前に棘だけですら売ってないだろ！あー、もう、俺帰る！」

お、声が聞こえなくなったし、ボケ役は帰ったようだ。

「サボテンの花言葉ってなんだっけ？イバラの道？」

よし、花屋さんにでも聞いてみよう。

自動ドアじゃないから、店の人に気づかれないように忍び足で入るか。

「そりゃあぁっ！」

店のドアを全力で開け放ち、忍び足で入ろうとする。

「がんっ！」

「ぐっふぁ！」

しかし勢いよく開いたドアは一度開ききり、そのまま跳ね返って俺に直撃した。

「こ、こんな罠を仕掛けるとは。この花屋には期待できる！」

それにしても高等部がやけに痛むな。まあ、頭から階段に落ちたから当然か。思考が変にならなかったただけでもよしとしよう。

「大丈夫ですか？」

「ほら、私以外にも犠牲者が！」

中からキールと几骨さんが出てきた。キールは幽霊状態の癖にドアの罠に掛かったようだ。普通すり抜けるんじゃないか？

「それより花屋さんは？あと、サボテンの花言葉はイバラ道？」

「イバラ道は薔薇の花言葉の一つよ。サボテンの花言葉は全身棘マツサージとか棘の付け根に恋だったわ」

「どちらも特星特有の花言葉ですけどね」

へー、他にもいろいろありそうだな。

「ちなみに花屋は昨日閉店したみたいですよ」

「なっ、閉店したのか！」

お、俺が不甲斐ないばかりにこんなことに！

「それ以前に何でこんなところに花屋があるの？」

「それはあれだ。梅干を作るためだろ。梅干風呂で梅の花を見ながら梅酒を飲みたいやつがいる筈だ！」

「無駄に贅沢ですね」

ってことは、ブドウ風呂とブドウの花見とブドウ酒の組み合わせもあるのか！

「そりゃあっ！再び参上ですよおっ！」

どうでもいい話をしていたら、雑魚ベーが階段を駆け上がってきた。

「あら、変態じゃない。あわててどうしたのさ？」

「うううっ、さっき秘密基地に電話したんですが、誰も出なかったんですよっ！実は小学生少女を集めて特星侵略をしようとしてたんです！でも、まさか全員がいなくなるなんて！」

「人々を女子小学生にするだけで特星侵略をするつもりだったんですか？」

「あー、そうですね。成功しないのは知ってるんですが、蟻にクッキーを取られてノリで世界侵略を開始しちゃったんですよえ」

あー、小さな出来事が原因で、大きな出来事を起こすことってあるよなあ。

「大丈夫だ、雑魚べー。俺も先週くらいに納と海で砂の城を作る勝負してたんだが、納のほうが大きい城だったから、納が作ってた砂の城に飛び込んで壊したんだ」

「私も神酒にサボってたのを怒られたから、仕返しに数日前に出席表の神酒の部分を全部休みに書き換えたわ！その後に半泣きで斬りかかってきたけどね」

「何とか大人気ないですね。というか、雑魚べーさんの話とお二人の話ではスケールが違いすぎます」

え、砂の城を壊されるのって世界侵略より大変な出来事だろ。

「そういえば、どうすれば元の姿に戻れるの？」

キールが結構大事なことを言い出す。小学生姿だと特殊能力が使えないし、犯人がいるなら元の姿に戻らないとどうにもならないよなあ。

「私が降伏してから十時間後くらいに元に戻るらしいですよっ！」

「降伏してから十時間とかどういう仕組みだ？」

「少女化は魅異さんの担当なので、私に聞かれても困るんですよねえ」

あー、魅異の仕業か。

「また社長はそんなことをやってるんですか」

印納さんは呆れている様子。

「それならそろそろ解散にしない？ 私は早寝する性質なんだけど」

「まだ夕方だけだな。まあ、特にやることはないから解散でいいか」

探すのは明日にして、今日はゆっくり休もう。

で、一晚寝たら元に戻ってた。

「ふぁー、あ、やっと元に戻ったんですね」

「お、雑魚べー。勝手に泊まってたのか」

宿賃くらいは払って欲しいなあ。

「って、枕が涎で恐ろしく濡れてるじゃないか！」

「少女達と滑り台で遊ぶ夢を見ましたからねえ。ちなみに異常に多いときは五リットルくらいの涎を垂らすこともありますよおっ！」

行方不明の女子小学生を心配してたから、女子小学生が夢に出たんだな。

ってか、五リットルは涎の量じゃないだろっ！

「あー、ところでどうやって敵の場所に行くつもりだ？」

「ふふふふ、それは大丈夫ですよっ！特星侵略用に浮遊要塞をいくつか用意しておきましたからねえ！」

そんなのにつき込むくらいなら俺に寄付したほうが良いぞー。

（浮遊要塞）

とりあえず、俺達は浮遊要塞で空を飛んでいるところである。

「ふっふっふ、浮遊要塞の感想はどうですか！？」

「いや、なんというか、よくこのガラクタの集まりが飛んだなあ」

雑魚ベーが浮遊要塞と言ってるこれは、外見から見るとただの金属製のゴミの山にしか見えない。どうやってくっついてるんだ？

「ガラクタから作ったのは事実ですが、この要塞はガラクタではありませんよおっ！」

「缶詰のゴミとかも混じってた気がするが」

「私は再利用を心がけているのです！水洗いしたから大丈夫なはずですよえ」

錆びてないだろうな。

ちなみにこの要塞の中の壁や床や天井はダンボールで作られている。

「何でダンボールなんだ？」

「壁とかのことですか？ いやー、アミューリーさんの作った磁力エンジンを使っているので、鉄とかだと変形しちゃうんですよねえ」

だからってダンボールはないだろ。まあ、紙製ってロマンがあるけどさ。

「で、何処に向かってるんだ？」

「さあ？ そもそも敵の場所が判りませんからねえ」

わからない場所に行こうとするなよー。

「あ、やっと見つけたー！」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「あれ、希求？」

「おおっ！ 希求さーん！」

後ろにいたのは希求だった。

雑魚ベーが抱きつきにいったが避けられた。

「と、ところで他の人たちはどうしたんですか？」

「むにゅー、秘密基地に居た全員が捕まってるんだよねえ」

…秘密基地に居た全員がつかまってる？

「雑魚ベー、秘密基地には衣宵や小巻も居たのか？」

「ええ。知り合いの小学生はほぼ全員が居ましたよおっ！」

おいおい、犯人は印納さんや羽双より強いんじゃないか？

「場所はわかりませんかねえ？」

「むにゅー、私は迷って此処に来ちゃったからねえ」

というより、現在地が何処なんだろうか？

ダンボールに取り付けられた画面を見る。

あれ、エラー画面が移ってるぞ。ちょっと前までは地図と現在地が表示されてたはずだが。

「雑魚ベー、この画面にエラーが出てるんだが」

「あれ、おかしいですねえ。特星のほとんどの場所は表示される筈なんです」

希求のせいで特星以外に迷ったんじゃないか？

「悟さん、外を見てきてくれませんかねえ？」

「んー、わかった」

ダンボール通路から外の見える場所に出る。

「うお、なんだこれ！」

外は辺りが真っ暗だった。

いや、自分の手が普通の明るさで見えるから、どっちかというと真っ黒か。

全方向の奥行きが真っ暗の中に一つの物体が浮いていた。

「おー、島か」

とか言ってる間にも島との距離は一気に縮まる。

「バアアアアン！」

浮遊要塞はそのまま島に突撃した。

「むにゅー、死ぬかと思ったよー」

「まったくですねえ」

浮遊要塞は島に突っ込んだせいで大破してしまった。

「ま、まあ、良いじゃないか。ほら、怪我がないから特星だつてことも断定できるぞ」

「あ、そうそう。この島で迷ったんだよ！」

希求が迷ったってことはここにボスが居るのか。

「島の大体真ん中近くに大きな家があるし、あそこに主犯が居るのかな」

「うわ、村ですかあの家はっ！貴族や王族でもあの家は大きすぎますよおっ！」

俺が言ってる大きな家は本当に大きかった。村といえるくらいの面積が一つの屋根の下にある。

柱が気の毒だな。

「むにゅー、あの家は広かったなあ。柱が隅の四本だけなんだよ」

本当にどういう造りなんだろう？

〈創造話の雷之屋敷〉

「うわ、広いな」

思わず声が出る。

奥行きが見えないという凄まじい広さだ。しかも全面畳という凄さ。

「でも、少女達がいませんねえ」

「むにゅー、おかしいなあ。この屋敷に皆が居たはずなんだけど」

まあ、見えない位置に居るのかもしれないな。

「おお、私の予想以上の状況じゃないか！」

「うおっ！」

後ろから声が聞こえたので振り返ると、一人の女性が立っていた。俺よりちよっと年上くらいかな？胸はそれなりで、将来の見込みはありだ。

あと、後ろにあるはずの壁は無く、広い部屋がずっと続いていた。

「誰ですかねえ？」

「まあいい、少し早いで紹介しておくか。私の名は雷之 天利！雷之家の導き手であり、悟や希求の真の母親だ！」

真の母親以前に偽がないけどな。

「俺の母親ねえ。大分前に登場をチラつかせて今更登場とは、ゲームとかのラスボスみたいじゃないか！」

「ふふふん、実にその通りだ！そう、私こそが悟の物語の元凶でありラスボスなんだぞ！まあ、詳しいことは後々話してやろう！」

そういうと天利はどこかへ消えた。

倒した後に無駄話を聞くのも嫌だなあ。

「やあ、やっと来たようだね諸君！」

そのとき上から男の声が聞こえる。

上を見ると、天井の蛍光灯に変な男がぶら下がっていた。年は雑魚ベーと同じくらいだろうか。

「うわあ、変態そうな男ですねえ」

雑魚ベーに言われるのだからよっぽどだな。

「むにゅー、夏前にコートを着てるなんて変な人だね」

「いや、それは断じて変じゃない！主人公の衣装だから仕方ないんだ！」

はっ、ということは天井の変態も主人公！？

変な奴だからコートということはないだろう。それだと俺も変だと

いう結論になるからな。

「いやいや、甘いぞ君達っ！このコートの中を見ろ！」

男がコートを脱ぎ捨てる。すると中には別のコートが着られていた！奴は二重コートか！

だが、所詮はその程度か。

「お前こそ俺をバカにするな！俺は四重コートだぞ！」

俺は自分の着ている四つのコートを脱ぎ捨て、シャツだけの状態になる。

「どうだ、参ったか！」

「はあ、私が四つ以内しかコートを着ない？そんなことはありえん！」

男は着ているコートをどんどん脱いでいく。

く、最初のは様子見だったというわけか！

「女性の衣装に十二単というものがあるだろう？だから私は倍の二十四コートだ！」

男は二十四枚のコートを全て脱ぎ捨て上半身裸になる。

よく見ると、コート男はやけに体がやせている。下手したら顔のほうが大きく見えそうだ。

「あの、どうして直接コートを着てるんですか？普通は服の上に着るものですよねぇ？」

「それは常に負担を減らす努力をしているからだよ。二十四コートを身に着ける動きを封じられ、水分という生命活動に必要なものを多くとられてしまう！」

おお、それは恐ろしいな！

「要するに重くて汗が出やすいだけだよ」

「いやー、そうなんだよね。わざわざ判りにくくしたんだから直さないでほしいよ」

「はーい」

希求とあの男の言ってることが正しければ、俺は相手の言葉に騙されたのか！？

「よくも騙したなー！」

「え、騙されたの？やーい、あほコート！」

「二十四コートを着込んでる奴に言われたくない！」

それに主人公の俺はいざという時はとても勇ましい筈だ！

「はいはい、コート同士で争わないでください。…さて、やけに細い体の貴方は何者ですかねぇ？」

く、コート同士でも俺の方が正常だ！

「もう予想完了の人も居るだろう。うん、私が雷之 皇神だよ。先に言っておくが、私は天利とは違って常識人だから安心していいよ」

「よし、安心だな！」

「むにゅー、久々の常識人だねえ」

俺達が安心している間に皇神がコートを着なおしていく。

「ちょっと二人とも！六月にコート二十四枚も着てるような人が常識人というのはおかしいですよおっ！」

うわ、雑魚ベーに正論を言われてしまった！

「うむむ、確かに！私は常識人じゃないのかもしれないね！」

「貴方は反発するべきですよおっ！」

あれ、何故だかツツコミをやる気分になれないぞ？

そういえば昨日も一時的にボケたい気分になった気がする。どうしてだろうか？

「うーん、なるほど。…雑魚ベー、君はどうやらやる気が低くても調子が保てるようだね」

「え、どうして私のあだ名を？」

あれ、本名じゃなかったっけ？

「君の名前は一応有名なんだよ。それこそ主人公の悟以上にね」

へー、それはすごいなあ。

「おー、そうですか！…あ、ところでさっき言ったやる気が低いとかは何のことですかねえ？」

「ん？ ああ、私の能力だよ。本来の能力は雰囲気操る能力なんだけど、応用しすぎてやる気を操る能力みたいに使うことが多いよ。しかも非質系だぞ！ うらやましいだろー！」

非質系って女性の割合が多い気がする。

「それで今回の事件はあなた達の仕業ですね？ 少女達を誘拐するなんて許しませんよおっ！」

「あー、その犯人は教えないよ」

戦闘で勝ったら教えてやるパターンか。

「ふふふ、ならば私が勝ったら教えてもらいますよおっ！」

「やだ。面倒。帰る」

「逃がしませんよおっ！ 必殺、ジャンピングキック！」

「おっと！」

雑魚ベーがジャンピングキックをするが外れる。ちなみに避けられたのではない。

あー、暇だ。希求はもう寝ちゃっている。

「こらー！飛び出したら危ないじゃないか！もうちょっとで当たりそうだったぞ！十億セルくらいの慰謝料払えー！」

「狙ってるんですよっ！ってか、当たってないのに慰謝料請求しないでくださいっ！」

「やーい、大人らしく素直に支払いなよー！じゃ、私は逃げさせてもらう！」

「子供ですか、貴方は！よーし、絶対に倒しますよっ！」

二人はどこかへと走り去っていった。

言い争いのレベルが低いなあ。

「あれ、ちょっとはやる気が出てきたのか？」

うん、さっきまでは喋る気すら出なかったが、今は普通の気分だ。

「待ってくださいよおっ！」

「敵を待つわけないだろう！私は逃げ切るよっ！」

あれ、前に走っていった二人が後ろから走ってきた。そしてそのま

ま前に走り抜けていく。

「部屋がループしてるのか？」

「ふふふ、よく気づいたな！」

あ、天利がいつの間にか希求の傍に立っている。

「希求危ないっ！って、寝てたんだった」

「別に危害は加えないぞ。私の能力を披露するだけだ」

天利みたいに敵に能力を教える人ってハンデのつもりなのかな？

「今から希求は他の女の子達の場所で数時間寝てしまう」

天利がそう言った瞬間、なんと希求が消え去った！

「おー、拍手拍手！」

とりあえず拍手で褒め称える。

「妹が消されたのに余裕だな。…あ、さっきのは判りやすいように口で言っちゃったんだからな！その気になれば無言で冥土送りにだってできたんだぞ！」

人を遠くに送り届ける能力か？

「私の能力は物語を操る能力。私はほとんどのものを操ることができる。細かくは無理だけど」

物語を操る能力ねえ。聞くまでもなく非質系だよなあ。

「私が今から面白い話をしてやるぞ！聞きたいだろ？」

「いや、別に」

面白い話とかに興味はないからなあ。

「そうだろうな。…面白い話に興味はあるか？」

「興味？興味はあるな」

…あれ？興味がないはずなのに興味があるって言っちゃったぞ！

俺は面白い話に興味なんかないぞ！

「ちょ、ちょっと待て！」

「うーん、本心から興味があるようには聞こえないぞ。本心から思うのか？」

「当然だ！」

何故だかさっきまでは興味がなかったが、普通は興味があるに決まってるじゃないか！

「うん、効き目ばっちりだ！元に戻すか」

あ、興味が普通くらいになった。

「さっきから何かが変な気がするな」

「それは当然だ！私の能力でさっきのような受け答えをする物語を創ったんだぞ」

本心まで変えられるのは確かに凄いな。

「気が変わった。話を聞かせてくれ」

「よし、まかせてくれ！まず、私の当初の目的は兄妹に恋愛経験をさせることだ！だが、悟の相手と妹達の相手を探す手間を省き、難易度の高い恋愛経験させる方法は、兄妹での恋愛意外に方法はなかった！で、兄妹で恋愛作戦を決行したのだ！」

なるほど、妹達との微妙な恋愛フラグはそのせいかな。

「それで決行日は？」

「特星が作られるより前だから、悟が保育園だったか小学生くらいのはずだぞ！」

その時点で妹達は生まれてたのか？

「校長を知っているだろう？彼が特星を作ったのも私が能力で作るように仕向けたんだぞっ！」

特星を作ることも仕組んでただと？

「なら、特殊能力とかはどうなんだ？物語を操る能力もお前が作っ

たのか？」

「お前じゃなくて天利と呼べ！私は母だぞ！」

呼び捨てはいいのかよ。

「この能力は校長の拾った薬の一つで覚えたものだ。言っておくが、超レアだぞ」

校長と同じく食べ物とか買えなかったのか？

「で、大体は私の計画通りに物語は進んで現在に至るわけだ」

「大体？」

「ああ、大体だ！…悟の友人に魅異がいるだろう？彼女は私の作る物語の中の一つの役割を任せてたんだが、何故だか私の物語どおりの行動をしないのだ！」

魅異に強制させるのは無理だろうなあ。能力とかそもそも通じないだろ。

「それと少し前に問題を起こしたアキステ。やつも最近来たくせに私の能力が通じない！それでいい加減に疲れたからもう止めるつもりだ！」

「あれ、勝負前に解決か？」

「いや、それでは私の苦労が無駄になる。だから最後はラスボスらしく相打ちくらいで悟を倒してみせるさっ！」

俺が被害受けるくらいなら無駄で良いじゃないかつ！

「まあいいか。親であろうとラスボス程度が負けイベント以外で主人公に勝てると思うなよ！」

「主人公の勝つ物語などこの私が作り直してやるっ！」

でも、どうやって勝てばいいんだ！？

二十一話 お引越して次の場所へ

@悟視点@

ラスボスを名乗る母親と戦うことになった。

ラスボスが主人公に勝つことは俺が許さないぞ！

「水圧圧縮砲！」

とりあえずは通常攻撃用の魔法弾を連発で撃つ。

「おっと、私を撃つとは何様だ！」

「主人公様だ！」

水圧圧縮砲は全て避けられる。

身体能力もそれなりに凄いじゃないか！

「ふふふ、今すぐ悟の特殊能力は封じられる！」

天利がそう叫んだ途端、俺の水圧圧縮砲の発射が止まる。

「げ、そんなのありか！」

「所詮は特殊能力か！そんなものに頼っても私は倒せないんだぞ！」

「お前のも特殊能力だろ！」

「なら、私の物語を操る能力は特殊能力ではない！」

うわー、正直どうでもいい。

「これで問題なしだ！」

それで満足なら別に良いけどさ。

「時間制限もプレゼントだ！今から十分後に私が負けていない場合、自動的に悟の敗北となる！」

「ええ！？せ、せめて三ヶ月くらいにしてくれ！」

「今すぐ悟に向かって数百本の槍が降る！そして一割くらい当たる！」

天利が言い終わると同時に槍が降り注ぐ！

「いったん逃げる！」

「逃げてても一割は絶対当たるのだー！まあ、九割は絶対に外れるけど」

痛っ！槍が当たってる！特星じゃなけりや確実に刺さる！

「く、日光反射用雑魚ベীগード！」

俺はここに居ない筈の雑魚ベーを持ち上げる。

槍は上から降るんだからこれであたらない！

「え、な、なんで悟さんが私を持ち上げてるんですか！？って、なんか非常に多くの槍が降り注いでますよおっ！」

どうやら九割の槍が雑魚ベーによって防がれているようだが、残りの一割は奇妙に動き回って横から俺に突っ込んでくる！

「仲間か。ま、主人公には仲良く旅する仲間も必要だろう！」

「雑魚ベーは仲間だが、必要ではないし仲が良い訳でもないからな！」

俺は正常だが雑魚ベーは問題だらけだ。

「そうですよおっ！悟さんは事件があるたびにその辺の少女を銃で攻撃してるんですよおっ！私はスキンシップがほとんどですけどねえ」

「そ、それは毎回深い事情があつてのことだ。それに少女が敵に多いんだから仕方ないだろ」

「スキンシップも攻撃も有害だと思うのだが」

俺の場合は正当防衛だろ。大体の場合が小学生のほうが特殊能力とか強いし。

「さあ、後九分だぞ！悟と雑魚ベーに向かって今すぐ雷が落ち続ける！」

天利が言い終わる前に俺は行動していた。

「雑魚ベータサイドショット！」

適当に技名を叫ぶと同時に雑魚ベータを天利に投げつける。

ちなみに当たる割合を言わなかったらしく、俺には当たらなかった。

「ドゴン！」

「ぎゃああっ！」

「うわっ！」

雑魚ベータが天利に当たる直前に雑魚ベータ狙いの雷が落ち、それに天利も巻き込まれて一緒に感電した。

「く、ううつ。流石の私でも雷はキツイぞ」

「お、早くも降参か？」

「ラスボスなんだから私には第二形態があるのだ！私は魔王の一部の力を手に入れる！」

何故だかラスボスっぽくない台詞だなあ。

「おい、起きろ雑魚ベータ」

「ふえ？はっ、私としたことが寝てしまっていたようですねえ！で、ラスボスの方は倒し終わりましたか？」

「ふふ、安心するがいい。私はまだまだ余裕だ！」

第二形態状態の天利が叫ぶ。第二形態といっても何の変哲もないが。

「それなら私が倒しますよおっ！必殺、ジャンピングキックですよおっ！」

「返り討ちにしてやるぞ！必殺、上空への旅立ち蹴り！」

ジャンピングキックをする雑魚ベーを天利が蹴り上げる。雑魚ベーは天井にぶつかり下に跳ね返る。

「へ？うわああっ！」

そしてそのまま油断していたっぽい天利に直撃する。

「…はっはっは！やっぱり主人公である俺の作戦に間違いはなかった！」

そう、俺は雑魚ベーがジャンピングキックをすればこうなることを予想していたのだ！

うん、そうに違いない！

「くう、ここまで考えていたとは！流石は私の息子だ！」

「あの一、実際は私の功績なんですが」

親子の戦いなんだし、今回くらいは俺の手柄でいいじゃないか！

「しかし、魔王の力を借りても勝てないなんて二人とも凄いな」といふか今のはどう考えても自滅だよなあ。

「あれ、そんなことをしてたんですねえ。まあ、現役の魔王である私に勝てるわけがありませんよおっ！」

：あー、そういえば前にそんなことを言ってたなあ。

ってことは、天利は本当に弱体化してたんじゃないか？ 雑魚ベーの力の一部を手に入れてたわけだし。

「ところで二人はどうしてこんなところに来たのだ？」

「あ、そうでした！ 少女達を貴方が誘拐したんですねえ！」

そういえばここに来た理由って誘拐事件があったからだよな。

「誘拐じゃないのだぞ！ ただ、私は正義の少女樂園を味わおうと思っただけなのだ！」

また意味の判らない単語が出てきた。

「そ、それって一部で噂の正義の少女樂園ですか！？」

「そのとおり！ 特星で四人くらいしか知らないという正義の少女樂園のことだ！」

俺達だけで三人じゃないか！ 一部過ぎるだろ！

「あー、ちなみに俺達以外で誰が知ってるんだ？」

「魅異さんですねえ」

あー、納得。

「とにかくだ！知ってる男なら誰もが憧れる正義の少女楽園を女の私も体験したいのだー！」

「この時点で知ってる男は俺と雑魚べーだけじゃないか！しかも俺は憧れてないし！」

「なら、私の能力で憧れさせてやろうか？」

「…やめてくれ」

本気でやられる可能性があるから怖い。

「正義の少女楽園は主人公役の少女を相手に、悪役の私達が勝負を挑む劇なんですよおっ！その際に悪役の私達は必ずやらなければならない！なりません！魅異さんが運営しているのでどんな手を使っても勝てないでしょうけどねえ」

「悪役は強力な技は使えないし、まず勝つのが無理なんだぞ」

それってただの悪役いじめじゃないか？

「でも、本物は滅多に開かれないから、私が勝手に少女を集めて正義の少女楽園を再現しようとしたんだ！結構楽しい劇だったからな

！
」

しかも参加したことあるのかよ。

「というわけで本来は一对一の正義の少女樂園だが、私は数十人以上の少女を相手にしてくるぞ！」

「あ、私も行きますよおっ！」

「ふふふ、この人数差だから覚悟しておくのだぞ！私と雑魚べーは今すぐ少女達の居る部屋に移動し、正義の少女樂園を数日の間体験する！」

数日間もやられ続けるつもりなのか？

「うー、なんてことだ」

ラスボス事件から数日後のある日、我が家に一通の俺の通う会社から手紙が来たのだった。

その内容は例の少女誘拐が特星本部に俺も共犯だと勘違いされているため、会社が目をつけられないように別の場所へ転勤とのこと。高校生を転勤させるなよ。

ちなみに特星本部は瞑宰京にある民営会社で、特星を管理するつもりだったらしいとか学校で習った気がする。今は資格が取れるだけ

の会社だ。

ちなみに特星における国営の企業は校長の学校くらいしか知らないな。

「えー、ん？…引越し先がアミューリー神社だって!？」

「そのようですね、悟君」

いつの間にか校長が不法侵入していた。

「一部の人たちの間では悟君一家が少女を誘拐したと噂になってます。しかし、私は天利君や皇神君を信じています」

実際は天利が犯人なんだけどなあ。

「あ、ところで俺も信じてるのか？」

「…………ええ、教師としては当然信じていますとも!」

遠まわしに言ってる気がするんだが。

「悟君なら私への借金の千五百兆セルを返してくれると信じています!」

「そっちの方かよ! ってか、なぜか減ってるし!…俺が少女誘拐の容疑者じゃないということは信じてますか？」

「いえ、まったく。私は悟君が犯人の方に一セル賭けてますから!」

い、一セル程度で裏切るなー！

しかも自信満々で言いきってるから文句を言いにくい！

「それではまた会いましょう。次に会うときにはまた借金が増えているでしょうけど。あ、荷物は運んでおきますね」

「ああ。もう二度と会わないことを願う」

荷物配達を校長に任せ、俺は家を出た。

挨拶にその辺でも歩いてくるか。

「おや、悟さんじゃないですか！」

道を歩いていると雑魚ベーに声をかけられる。

「おお、雑魚ベー。今回は俺を神社に住ませるのを推奨したんだってな。正直、ありがとうな」

「いえいえ、あそこの神社は広いですので気にしないでくださいよおっ！…それに悟さんは少女を誘拐するほどの少女好きになったらいいですからねえ！」

「ほー、本気にしてたのか」

「いえっ、してませんってば！ほんの冗談ですよっ！」

まあ、雑魚ベ―は真実を知ってるからな。

「あー、ところで正義の少女樂園はどうだった？」

数日やられ続けるっつてことはつい最近までやられてたのか？

「ああ、天利さんと一緒に雨双さんに一撃でやられましたねえ。ちよっと前まで凍ってたんですよっ！」

数日間も凍った状態だったのか！

「雨双さんとアミユリーさんは既に神社に戻ってるはずですよ」

「あれ、前にエエナって子も居なかったっけ？」

「えー！ああ、えー。エエナさんですよねえ。確か行方不明なんですよっ！」

行方不明？まさか天利に連れ去られたんじゃないか？

「あ、でも事件ではないと思いますけどねえ」

「え、なんでだ？」

「そうですねえ。その、例の少女テレパシーが私にそう伝えているんですよっ！」

少女テレパシーなんて高校の例題にすら出された覚えはないぞ。

まあ、雑魚ベーが焦らないってことは大丈夫なのだろう。

「それじゃあ船で島に行ってくる。ところで雑魚ベーはどうやって秋方町と神社を渡ってるんだ？」

かなり時間が掛かることを考えると、雑魚ベーが毎回船で来ているとは思えないんだが。

「移動ですか？前は船でしたねえ。今は高速型浮遊要塞か潜水型浮遊要塞のどちらかですねえ」

「まだ浮遊要塞を持ってるのか」

潜水型浮遊要塞って潜水か浮遊かどっちかにしろよ。いや、水で浮くから一応両方なのか？

「予備は小型の要塞を含めて百機くらいはありますからねえ」

あの神社に百機も保管できるのか？

「よし、それじゃあ今からそれに乗ってこう！船代が減って助かるし！」

「ええっ！今から昼食を食べに行くんですけど！」

「神社で食べばいいだろ」

雑魚ベーに連れて来られた場所にあったのは巨大ダンボールだった。大きさは俺の家が数個分くらい。

「…これは飛ぶのか？」

「ええ！見かけはダンボールですが実際は金属なんですよっ！」

触ってみると確かに硬い。

今までの浮遊要塞とは違い、機会や金属の寄せ集めではないようだ。

「中には客室や運転室もあるんですよっ！磁力エンジンですから必要以上に速いですしねえ。じゃあ先に乗ってますよおっ！」

「おっと、ちょっと待ってください！」

乗ろうと思ったら急に魍魎が飛び出してきた。

「おー、魍魎じゃないか」

「そのとおり、私です！第二期のヒロインなのに天利に扱いが酷いので抗議にきましたっ！」

「あ、ヒロインだったんですか。私はすっかり忘れてましたねえ」

正直、俺も忘れてた。

「まあまあ、第三期もあるんだから熱くなるなって」

「でも、第一期のヒロインの方だって第二期で一切出ていませんでしたよ！」

キャラが増えるとよくあることだ。

「というか、こんな会話をしているストーリー的に問題ないんですかねえ？」

「別に俺達は主人公とか自覚してる設定だし、こういう会話が特徴の物語だからいいだろ。それにこの第二期編も仮になる予定らしいし、どうせ仮だからいいやと思ってるんだろうさ」

本編がまともに書かれるかはわからんが。

「こういうことは後書きで話すのが基本ですけどねえ」

「作者が後書きとかやりたくないんだろ」

「とりあえず現実的な話は終わってください」

魑魅が来なければ普通に終わってたんだがなあ。

「えー、それです！天利さんの能力で動いてただけなんてオチは認めません！第三期では絶対に恋愛イベントを起こしてやりますから覚悟してください！」

それだけ言って魑魅は何処かへ走っていく。

「魑魅の言ってることも現実的だぞ」

「そうですよねえ」

そもそも『変な星でツツコミ生活!？』でまともに恋愛話が出るわけがないだろ。どうあがいてもギャグになるぞ。

「それではいきましょうか」

「ああ、第三期に向けて旅立とう!」

「…最後まで現実的ですねえ」

こうして俺は雑魚ベーの住む島へと移ることとなった。

はたして魑魅の恋愛計画は成功するのだろうか? 答えを言うまでもなく成功しないのだろうか。

そして次に俺達に立ちはだかるのはどんな敵か? 小学生的な敵は確実に出るだろう。

そして俺は何事にも巻き込まれずに居られるのだろうか?

…物語が成り立たなくなるからそれはないな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5309g/>

変な星で仮にツッコミ生活！？第二期編

2011年2月1日19時13分発行